

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第37集

平尾野添横穴群

平成2・3年度菊川内田住宅団地造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第37集

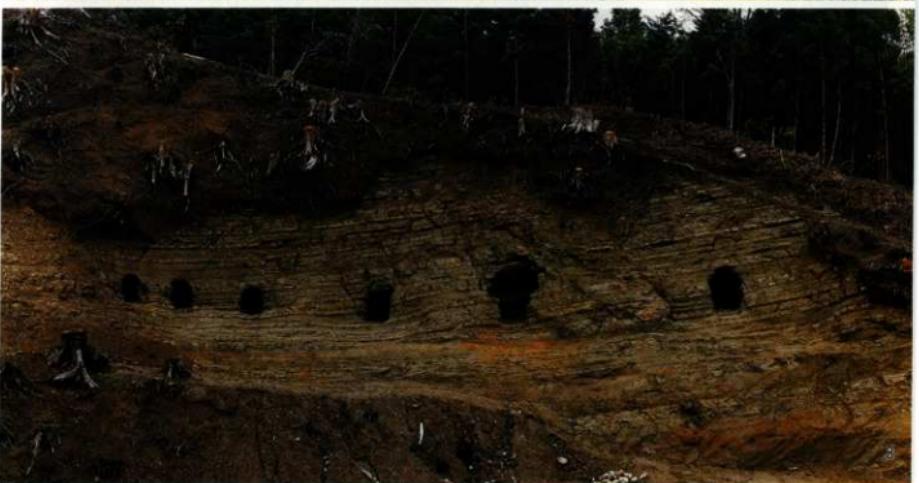
平尾野添横穴群

平成2・3年度菊川内田住宅団地造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

- カラー図版 I 1. A 地区全景
2. B 地区 a・b 群全景
3. B 地区 c 群全景



- カラー図版 2 1. B - b - 1 号横穴出土土器
2. B - c - 4 号横穴出土土器
3. 出土装身具



1

2



3

序

小笠郡菊川町平尾野添横穴群の調査は、県営菊川内田住宅団地造成に伴う緊急調査として県公営企業管理者企業局から委託を受け、平成3年1月から4月まで現地調査を行ない、17基の横穴を検出・調査した。本書はその調査報告書である。

菊川流域は県内でも有数の横穴分布地として知られる。当横穴群も周知の遺跡として2基の横穴の存在が知られていたが、事前の確認調査および実際の発掘調査により基數は大幅に増加し、17基となった。横穴はその性質上、長い年月の間にその封鎖が崩壊し、開口してしまうものが多く、遺物は持ち去られ、後世の再利用・再加工も受けやすい。したがってその存在は比較的古くから知られていることが常であるが、考古学的にはその価値を著しく減じているものも少なくない。横穴の存在は早くから問題にされ、さまざまに論じられてきたにもかかわらず、組織的・学術的な発掘調査が行なわれた例は県内でも少なく、近年になってようやく増加してきているようである。ただ、上記のような遺構の状況から、その調査の成果は限定されることも多く、今回の調査でもいくつかの横穴はそのような状況であったが、多くは表土に厚く覆われ、発掘作業による表土除去の結果、新たに発見されたものもあった。したがって、一群の横穴群全体を調査し、比較的遺構・遺物の残存状況が良好であった今回の調査の機会は誠に貴重なものであったと言えよう。

17基の横穴群は大きく2つの地区、3群に分けられ、その築造年代は7世紀前半から後半で、一部は8世紀前半にくだる。ほぼ100年間の存続期間を持つ横穴群である。横穴の規模、平面形、埋葬施設など、検討に値するバラエティを備えている。出土遺物は200点ほどの中須恵器が中心で、いずれも保存状態が良好であり、当地域の須恵器編年を考える上でも重要な資料となろう。

調査ならびに本書の作成にあたっては、静岡県公営企業管理者企業局・菊川町教育委員会・静岡県教育委員会をはじめとする関係機関各位に多大な援助・協力を得ている。この場をかりて深くお礼申し上げる次第である。また調査を暖かく見守っていただいた地元の方々、寒さにめげず発掘にあたった作業員の方々、地道な資料整理にあたった研究所の職員、整理作業員の方々、多くの助言・指導をいただいた方々にも、この機会にお礼申し上げたい。

1992年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

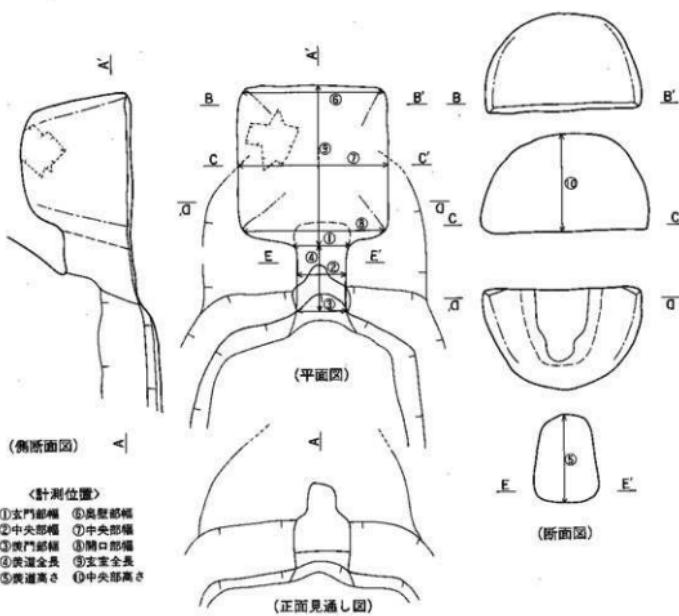
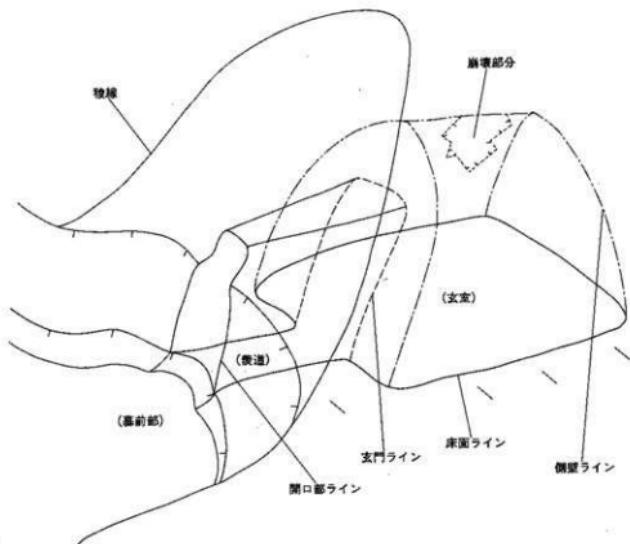
例　　言

1. 本書は静岡県小笠郡菊川町中内田に所在する平尾野添横穴群の調査報告書である。
2. 調査は、平成2年度から平成3年度にかけて、菊川内田住宅団地造成事業に伴う発掘調査業務として、静岡県公営企業管理者企業局からの委託を受け、調査指導機関は静岡県教育委員会、調査実施機関は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 現地発掘調査は、平成3年1月から平成3年4月まで行なった。整理作業は、現地発掘調査と並行して現地で若干の基礎的作業を行ない、平成3年度に遺物実測・図版作成等、本格的整理作業を実施した。
4. 調査体制は次のとおりである。
平成2年度 研究所長斎藤忠 常務理事亀山千鶴男 調査研究部長山下晃 調査研究所次長兼調査研究一課長平野吾郎 調査研究員杉澤正敏・内藤朝雄・小柴秀樹
県教委文化課指導主事及川司
- 平成3年度 研究所長斎藤忠 常務理事鈴木勲 調査研究部長山下晃 調査研究所次長兼調査研究一課長平野吾郎 調査研究員小柴秀樹・鈴木正悟
5. 本書の執筆は、主に調査研究員小柴秀樹が行った。なお、第3章第2節における各項の装身具について嘱託技術員伊藤律子が執筆したほか、第4章第3節の玉類に関する記述は伊藤が協力した。
6. 本書の遺物撮影は、椿華堂（椿本真紀子）に委託した。
7. 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

凡　　例

本書の記述・図示については以下の基準に従っている。

1. 横穴の各部名称は右模式図に示したところに従っている。
2. 横穴の各部計測位置は右図に示したとおりである。計測値については、すべて横穴実測図に基づいており、cm単位で表記した。
3. 横穴の主軸は、原則的には床面において奥壁部と玄門部の中点を結ぶ線で設定した。主軸方位は主軸線の真北からの傾きで示している。
4. 插図のうち横穴実測図については縮尺1/50、土器実測図については縮尺1/3で統一し、その他の遺物については、装身具・玉類は等倍、鉄製品については1/2で図示した。
5. 横穴実測図のうち、羨門・玄門・稜線等の線は右模式図に示した線を用い、平面図・断面図・正面見通し図に共通して使用した。
6. 横穴実測図中の遺物に付された番号は、遺物実測図の番号に対応する。ただし、鉄製品についてはF、装身具についてはAをそれぞれの番号の前に付して区別している。



〈計測位置〉
 ①玄門部幅 ②中央部幅
 ③鼻門部幅 ④前口部幅
 ⑤後道全長 ⑥玄窓全長
 ⑦後道高さ ⑧中央部高さ

横穴計測模式図

目 次

序

例言・凡例

第1章 位置と環境

第1節 自然的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経過	10
第2節 調査の方法と経過	10

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構の概観	15
第2節 遺構と遺物	

1. A地区 1) A-1号横穴	16
------------------------	----

2) A-2号横穴	18
-----------------	----

3) A-3号横穴	21
-----------------	----

2. B地区a・b群 1) B-a-1号横穴	25
------------------------------	----

2) B-a-2号横穴	28
-------------------	----

3) B-b-1号横穴	31
-------------------	----

4) B-b-2号横穴	37
-------------------	----

5) B-b-3号横穴	40
-------------------	----

6) B-b-4号横穴	44
-------------------	----

7) B-b-5号横穴	49
-------------------	----

8) B-b-6号横穴	52
-------------------	----

3. B地区c群 1) B-c-1号横穴	58
----------------------------	----

2) B-c-2号横穴	60
-------------------	----

3) B-c-3号横穴	61
-------------------	----

4) B-c-4号横穴	66
-------------------	----

5) B-c-5号横穴	70
-------------------	----

6) B-c-6号横穴	74
-------------------	----

第4章 まとめ

第1節 出土土器の分類と年代観	81
第2節 横穴の築造年代と追葬	89
第3節 出土装身具について	92

挿図目次

第1図	周辺遺跡図	2
第2図	東遠地域の横穴群と後期群集墳の分布	5・6
第3図	周辺地形図	11
第4図	B地区全体図	13・14
第5図	A地区全体図	15
第6図	A-1号横穴実測図	17
第7図	A-2号横穴実測図	19
第8図	A-3号横穴実測図	22
第9図	出土土器実測図(1) A-2 A-3	24
第10図	B-a-1号横穴実測図	26
第11図	B-a-2号横穴実測図	29
第12図	出土土器実測図(2) B-a-1 B-a-2	30
第13図	B-b-1号横穴実測図	32
第14図	B-b-1号横穴土器出土状況	33
第15図	出土土器実測図(3) B-b-1	34
第16図	出土鉄製品実測図(1)	36
第17図	B-b-2号横穴実測図	38
第18図	B-b-3号横穴実測図	41
第19図	出土土器実測図(4) B-b-2 B-b-3	42
第20図	B-b-4号横穴実測図	45
第21図	出土土器実測図(5) B-b-4	47
第22図	B-b-5号横穴実測図	50
第23図	B-b-6号横穴実測図	53
第24図	出土土器実測図(6) B-b-5 B-b-6	54
第25図	出土鉄製品実測図(2)	56
第26図	出土装身具実測図(1)	57
第27図	B-c-1号横穴・B-c-2号横穴実測図	59
第28図	B-c-3号横穴実測図	62
第29図	B-c-3号横穴土器出土状況	63
第30図	出土土器実測図(7) B-c-1 B-c-2 B-c-3	64
第31図	B-c-4号横穴実測図	65
第32図	B-c-4号横穴壁面工具痕実測図	66
第33図	出土土器実測図(8) B-c-4	68
第34図	B-c-5号横穴実測図	71
第35図	出土土器実測図(9) B-c-5	73
第36図	B-c-6号横穴実測図	75
第37図	出土土器実測図(10) B-c-6	77
第38図	出土装身具実測図(2)	78

第39図	出土鉄製品実測図（3）	79
第40図	各横穴出土須恵器蓋環の分類	85・86
第41図	平尾野添横穴群出土丸玉・ガラス玉・ガラス小玉計測値の分布	92
第42図	耳環の蛍光X線分析（B-b-6号横穴出土1-35の内部分析）	95

挿表目次

周辺遺跡図地名表	3
東遠地域横穴群・後期群集墳分布図地名表	7
第9図出土土器実測図（1）法量表	24
第12図出土土器実測図（2）法量表	30
第15図出土土器実測図（3）法量表	35
第19図出土土器実測図（4）法量表	43
第21図出土土器実測図（5）法量表	48
第24図出土土器実測図（6）法量表	55
第26図出土装身具実測図（1）法量表	58
第30図出土土器実測図（7）法量表	64
第33図出土土器実測図（8）法量表	69
第35図出土土器実測図（9）法量表	74
第37図出土土器実測図（10）法量表	77
第38図出土装身具実測図（2）法量表	78
出土須恵器蓋环分類表	82・83
坂尻遺跡須恵器分類との対応表	88
須恵器蓋环からみた各横穴の築造年代と追葬	89

写真図版目次

- カラー図版 1 1. A地区全景 2. B地区 a・b群全景 3. B地区 c群全景
- カラー図版 2 1. B-b-1号横穴出土土器 2. B-c-4号横穴出土土器 3. 出土装身具
- 図版 1 1. B地区調査前全景 2. B地区全景
- 図版 2 1. A-1号横穴正面 2. A-1号横穴墓前部 3. A-1号横穴石棺
- 図版 3 1. A-2号横穴正面 2. A-1号横穴右側壁窓状掘り込み
3. A-2号横穴左側壁窓状掘り込み 4. A-2号横穴墓前部
5. A-2号横穴玄室床面
- 図版 4 1. A-3号横穴正面 2. A-3号横穴墓前部 3. A-3号横穴封鎖石（正面）
4. A-3号横穴封鎖石（内部から）
- 図版 5 1. A-3号横穴右側壁玄門付近の壁面 2. A-3号横穴土器出土状況
3. B-a-1号横穴正面 4. B-a-1号横穴玄室内
- 図版 6 1. B-a-1号横穴天井部の稜線 2. B-a-1号横穴完掘正面
3. B-a-2号横穴完掘正面 4. B-a-2号横穴正面
5. B-a-2号横穴封鎖石（内部より）
- 図版 7 1. B-b-1号横穴とB-b-2号横穴
2. B-b-1号横穴とB-b-2号横穴完掘状況
- 図版 8 1. B-b-1号横穴封鎖石（2次） 2. B-b-1号横穴封鎖石（1次）
3. B-b-1号横穴床面 4. B-b-1号横穴土器出土状況
5. B-b-1号横穴土器出土状況 6. B-b-2号横穴床面疊床
7. B-b-2号横穴鉄製品出土状況 8. B-b-2号横穴封鎖石
- 図版 9 1. B-b-3号横穴正面 2. B-b-3号横穴玄室床面
3. B-b-3号横穴封鎖石（正面） 4. B-b-3号横穴封鎖石（内部より）
- 図版 10 1. B-b-3号横穴右側壁壁面 2. B-b-4号横穴全景
3. B-b-4号横穴正面
- 図版 11 1. B-b-4号横穴床面 2. B-b-4号横穴壁溝
3. B-b-4号横穴完掘状況 4. B-b-5号横穴全景
- 図版 12 1. B-b-5号横穴完掘状況 2. B-b-5号横穴疊床
3. B-b-5号横穴封鎖石（正面） 4. B-b-5号横穴封鎖石（内部より）
5. B-b-5号横穴土器出土状況 6. B-b-5号横穴土器出土状況
7. B-b-5号横穴耳環・鉄製品出土状況 8. B-b-5号横穴鉄製品出土状況
- 図版 13 1. B-b-6号横穴正面 2. B-b-6号横穴棺座
3. B-b-6号横穴封鎖石（内部より） 4. B-b-6号横穴封鎖石（正面）
- 図版 14 1. B-b-6号横穴耳環出土状況 2. B-b-6号横穴土器出土状況
3. B-c-1号横穴とB-c-2号横穴 4. B-c-1号横穴内部
5. B-c-2号横穴内部
- 図版 15 1. B-c-1号横穴・B-c-2号横穴とB-c-3号横穴
2. B-c-3号横穴正面 3. B-c-3号横穴内部疊床

- 図版16 1. B-c-3号横穴土器出土状況 2. B-c-3号横穴土器出土状況
3. B-c-4号横穴正面 4. B-c-4号横穴封鎖石（正面）
- 図版17 1. B-c-4号横穴墓前部 2. B-c-4号横穴封鎖石（内部より）
3. B-c-4号横穴玄室内切り石散乱状況 4. B-c-4号横穴玄門上部の壁面
- 図版18 1. B-c-5号横穴正面 2. B-c-5号横穴封鎖石（正面）
3. B-c-5号横穴封鎖石（内部より） 4. B-c-5号横穴床面
5. B-c-6号横穴正面
- 図版19 1. B-c-6号横穴土器出土状況 2. B-c-6号横穴棺座石
3. B-c-6号横穴封鎖石（正面） 4. B-c-6号横穴封鎖石（内部より）
5. B-c-6号横穴天井部 6. B-c-6号横穴右側壁壁面
- 図版20 1. B-b-3号横穴右側壁工具痕 2. B-c-6号横穴右側壁工具痕
3. B-c-6号横穴右側壁工具痕 4. B-a-1号横穴右側壁工具痕
5. B-c-4号横穴右側壁工具痕 6. B-c-4号横穴天井部工具痕
7. B-c-6号横穴右側壁工具痕 8. B-c-6号横穴天井部工具痕
- 図版21 出土土器（1）須恵器合子状环蓋
- 図版22 出土土器（2）須恵器合子状环蓋
- 図版23 出土土器（3）須恵器合子状环蓋・坏身
- 図版24 出土土器（4）須恵器合子状环身
- 図版25 出土土器（5）須恵器合子状环身
- 図版26 出土土器（6）須恵器合子状环身
- 図版27 出土土器（7）須恵器合子状环身・つまみ付环蓋（かえり付）
- 図版28 出土土器（8）須恵器つまみ付环蓋（かえり付）
- 図版29 出土土器（9）須恵器つまみ付环蓋（かえり付）・有蓋無台环身
- 図版30 出土土器（10）須恵器有蓋無台环身・つまみ付环蓋・高台付环身
- 図版31 出土土器（11）須恵器高台付环身
- 図版32 出土土器（12）須恵器高台付环身・蓋・短頸壺・短頸壺・錠・高环
- 図版33 出土土器（13）須恵器高环・翫
- 図版34 出土土器（14）須恵器平瓶
- 図版35 出土土器（15）須恵器平瓶・提瓶
- 図版36 出土土器（16）須恵器短頸壺・長頸壺・横瓶
- 図版37 出土土器（17）土師器・山茶塊・B-b-4号横穴出土土器
- 図版38 出土鉄製品（1）刀・刀子等
- 図版39 1. 出土鉄製品（2）鉄鎌 2. 出土装身具

第1章 位置と環境

第1節 自然的環境

東遠地方の代表的河川である菊川は、掛川市東北部の栗ヶ岳に端を発し、小笠地方を貫流して東西の山地から流れ出す中小支流を合流しながら南下して遠州灘に注ぎ、下流に広い沖積平野を形成する。この平野を囲む東西および北の山地は、北側が南アルプスから連なる山塊群の南端をなし、東側は牧の原台地、西側は小笠山塊の東側丘陵である。北側の山塊は満水層と呼ばれる泥岩層、東西の山塊は堀之内層と呼ばれる砂岩と泥岩の互層が主体をなし、いずれも第三紀鮮新世層に属し、軟質で河川等による浸食をうけやすく、山塊の標高を低いものとしている。菊川に面した河岸段丘上には段丘疊層が厚く堆積している。平野部は河川堆積によるシルト層の下に厚い粘土層が堆積しており、下流部が広い渦を形成していたことがうかがわれる。

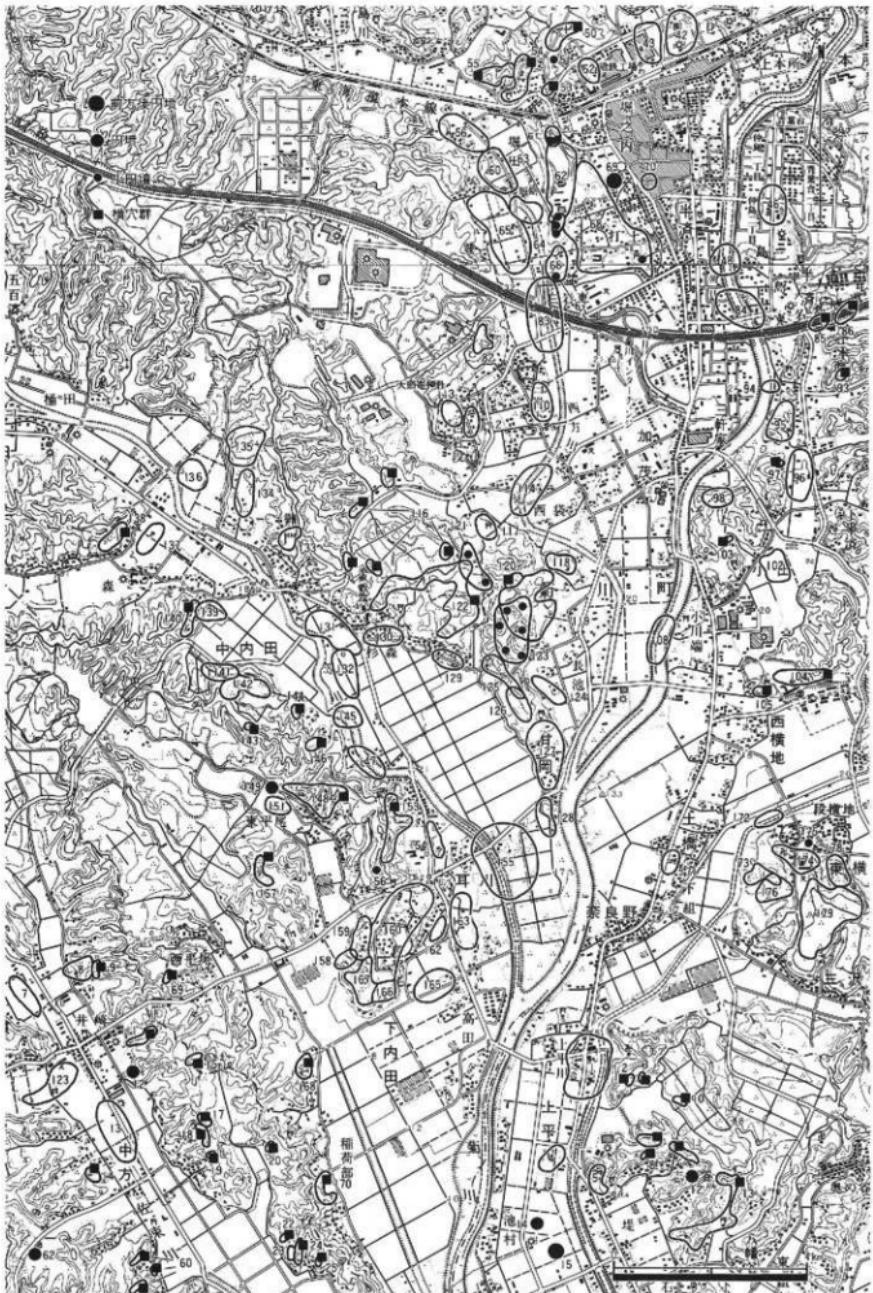
平尾野添横穴群は、小笠郡菊川町中内田に所在し、東名高速菊川インターの南南西3km、東海道線菊川駅の南南西4kmに位置する。菊川の西岸、小笠山塊に連なる丘陵の東南部1支陵に當まれ、菊川に注ぐ小支流稻荷部川がつくる東平尾の南北に細長い谷に面している。横穴のある斜面はこの谷からさらに西に向かって切り込んだ小さな支谷の奥部に2箇所（A地区・B地区）存在している。周辺の山塊は、前述の堀之内層と、その間に南北方向に走る畠田・五百済凝灰岩層からなり、菊川に面する支陵の先端部上層には段丘疊層が発達している。堀之内層は前述のように砂岩と泥岩が繰り返し規則正しく積み重なり、断面縞状を呈する。これは深海堆積層が隆起したものと考えられ、隆起運動に伴い全体が西南西方向に10°~20°ほど傾斜する層をなしている。周辺の横穴群は、いずれもこの堀之内層を掘削してつくられ、この層の性質が横穴の形態にも影響を与えていよう。今回の平尾野添横穴群では泥岩の間に挟まる砂岩層が特に軟らかくほとんど砂層と化し、なおかつ層全体が斜行しているため、床面を平らにすることが困難で、泥岩と砂層との間の段々が残ってしまっている。また天井部が、間層の砂層から泥岩が剥落する例も多い。

第2節 歴史的環境

平尾野添横穴群の當まれた時期は、古墳時代後期後半から奈良時代前半、6世紀末ないし7世紀初頭から8世紀前葉にかけてである。そこで、特に古墳時代後期後半の状況を中心に、菊川流域（ここでは菊川下流およびその支流による沖積平野およびそれを囲む山塊を言う。以下同様である。）、さらに東遠地方全体の歴史的環境を概観してみたい。

1) 弥生時代～古墳時代後期の歴史的環境

まず古墳時代後期にいたるまでの菊川流域の歴史的環境を、周辺の遺跡分布から簡単にみておこう。菊川流域に住む人々が、沖積平野の開発をてがけていくのはおそらく弥生時代中期であろう。弥生時代中期初頭の遺跡としては支流丹野川流域に嶺田遺跡が成立し、西方川流域に白岩遺跡が成立する。白岩遺跡では、大規模な用水路などの遺構に伴って大量の木製品・土器が検出された。中期初頭の嶺田式土器も出土しているが、その中心は中期後半から後期にかけての遺物で、特に中期後半の土器群は良好な資料として「白岩式」と型式名が付けられている。この白岩遺跡を始めとして中期後半から後期には、菊川流域、特に菊川町を中心とする中流域の沖積平野には濃密に遺跡が分布し、開発の進行の結果、この時期当地域が文化的な中心地であったことがうかがわれる。特に後期後半から古墳時代初頭にかけて、



第1図 周辺遺跡図

〈周辺遺跡図地名表〉

菊川町

番号	遺跡名	時代	種別
42	東武砂遺跡	古代	散布地
43	八斗田遺跡	古代	散布地
46	中島遺跡	縄文、弥生、古墳	散布地
48	梅左衛門遺跡	古墳、平安、鎌倉	散布地
50	藤ヶ谷古穴群	古墳（後）	横穴
51	天白浦古墳	古墳	古墳
52	八斗田遺跡	奈良	散布地
53	西宮遺跡六群	古墳（後）	横穴
54	大洞ヶ谷古穴群	古墳（後）	横穴
55	山本横穴群	古墳（後）	横穴
56	堀田遺跡	古代、中世	散布地
60	御前遺跡（豆尻Ⅱ）	弥生、古代	集落
61	高田ヶ原南遺跡	古墳	古墳
62	高田ヶ原北遺跡	縄文、弥生、古墳	集落
63	高田ヶ原南古墳群	古墳	古墳
64	豆尻遺跡	弥生、古墳、古代	散布地
65	栗林遺跡	弥生、古墳、古代	集落
66	八幡遺跡	弥生、古墳	集落
67	八幡古墳	古墳	古墳
68	打上・荒鳥遺跡	縄文・鎌倉	散布地
69	大徳寺古墳	古墳	古墳
70	前田遺跡	弥生	散布地
71	鹿島古墳	古墳（後）	古墳
82	井成山遺跡	弥生、古墳	散布地
83	白岩遺跡	縄文・鎌倉	集落
84	島遺跡	縄文、弥生	散布地
85	下本所A横穴群	古墳（後）	横穴
86	下本所B横穴群	古墳（後）	横穴
93	ウチワナ横穴群	古墳（後）	横穴
94	新井遺跡	古墳	散布地
95	四ツ枝遺跡	弥生、平安、鎌倉	散布地
96	下田遺跡	古墳	散布地
97	下田横穴群	古墳（後）	横穴
98	小出遺跡	縄文、弥生	散布地
102	一の坪遺跡	古代、中世	余里
103	小出横穴群	古墳（後）	横穴
104	藤谷A横穴群	古墳（後）	横穴
105	藤谷B横穴群	古墳（後）	横穴
108	小川端I遺跡	弥生、古墳	散布地
110	白岩下II遺跡	弥生、古代	散布地
112	白岩右III遺跡	弥生	散布地
113	白岩段IV遺跡	弥生	散布地
114	西脇遺跡	弥生、古墳、奈良	散布地
116	山田横穴群	古墳（後）	横穴
117	市ヶ原遺跡	縄文、弥生、古墳	散布地
118	長池北遺跡	弥生	散布地
119	長池遺跡	縄文、弥生、古墳	集落
120	長池横穴群	古墳（後）	横穴
121	杉森古墳群	古墳	古墳
122	杉森横穴群	古墳（後）	横穴
123	炎池古墳群	古墳	古墳
124	炎池南遺跡	縄文、奈良、平安	散布地
125	原山遺跡	弥生	散布地
126	助九郎遺跡	弥生	散布地
127	月岡Ⅰ遺跡	弥生、古墳、中世	城壁
128	月岡Ⅱ遺跡	弥生	散布地
129	朝実遺跡	古代	散布地
130	辻ノ坪遺跡	古代、中世	散布地
131	御門の前遺跡	弥生～中世	集落
132	東ノ坪（政所）遺跡	弥生～中世	集落
133	御門I遺跡	弥生	散布地
134	喜鹿ヶ谷遺跡	弥生、古代	散布地
135	御門II遺跡	弥生	散布地
136	辻ノ坪遺跡	古代	余里
137	柳坪遺跡	奈良	散布地
138	栗原横穴群	古墳（後）	横穴
139	森前遺跡	弥生、古墳、奈良	集落
140	森前横穴群	古墳（後）	横穴
141	森前外屋敷遺跡	弥生～鎌倉	集落

番号	遺跡名	時代	種別
142	正眼寺原遺跡	古代、中世	散布地
143	政所F横穴群	古墳（後）	横穴
144	政所A横穴群	古墳（後）	横穴
145	内田御屋敷遺跡	弥生	集落
146	観音山1号横穴	古墳（後）	横穴
147	政所遺跡	弥生、古墳	散布地
148	東平尾横穴群	古墳（後）	横穴
149	水洗1号墳	古墳	古墳
151	水洗遺跡	弥生	散布地
153	政所横穴群	古墳（後）	横穴
154	御嶽北遺跡	弥生、古代、中世	散布地
155	耳川遺跡	縄文～古墳、鎌倉	集落
156	平尾八幡山古墳	古墳	古墳
157	平尾野瀬横穴群	古墳（後）	横穴
158	松山遺跡	弥生、古墳	散布地
159	段平尾IV遺跡	弥生、古墳、古代	散布地
160	段平尾II遺跡	弥生、古墳	散布地
162	段坪I遺跡	弥生、古墳	散布地
163	古川遺跡	弥生～平安	集落
165	段坪II遺跡	弥生、古墳、古代	散布地
166	段平尾I遺跡	弥生	散布地
167	段平尾I遺跡	縄文、弥生	散布地
168	福荷部横穴群	古墳（後）	横穴
169	桔木ヶ谷横穴群	古墳（後）	横穴
170	稻ヶ谷横穴群	古墳（後）	横穴
171	土煙遺跡	古墳	散布地
172	椎ヶ下遺跡	弥生～平安	集落
173	東櫛毛西原遺跡	縄文、弥生、古墳	集落
174	御屋敷段遺跡	縄文、弥生、古代	散布地
175	段横地古墳	古墳	古墳
176	久保ノ谷遺跡	縄文、弥生、古墳	集落
178	段屋敷遺跡	弥生、古墳	散布地
179	三沢西原遺跡	旧石器～古墳	集落

小笠町

番号	遺跡名	時代	種別
1	上平川遺跡	弥生、古墳	集落
2	大鷹横穴B群	古墳（後）	横穴
3	大鷹横穴A群	古墳（後）	横穴
4	塙遺跡	古墳（前）	集落
5	城山下遺跡	古墳（後）	散布地
8	志味堂横穴群	古墳（後）	横穴
9	大庭横穴C群	古墳（後）	横穴
10	宇野横穴群	古墳（後）	横穴
11	志鹿ヶ谷横穴群	古墳（後）	横穴
12	瑞奈寺古墳	古墳	古墳
13	八幡ヶ谷横穴群	古墳（後）	横穴
14	上平川大坪2号墳	古墳	古墳
15	上平川大鷹古墳	古墳（前）	古墳

大東町

番号	遺跡名	時代	種別
7	高須遺跡	弥生、古墳	散布地
8	天王前遺跡	古墳（後）	散布地
9	天王谷横穴群	古墳（後）	横穴
11	鳥見ヶ谷横穴群	古墳（後）	横穴
12	金比羅山古墳	古墳	古墳
13	中方道遺跡	弥生、古墳、中世	散布地
14	山崎横穴群	古墳（後）	横穴
16	山田ヶ谷B横穴群	古墳（後）	横穴
17	山田ヶ谷A横穴群	古墳（後）	横穴
18	中方B横穴群	古墳（後）	横穴
19	中方A横穴群	古墳（後）	横穴
20	松ヶ谷横穴	古墳（後）	横穴
22	清ヶ谷横穴群	古墳（後）	横穴
23	城山遺跡	古墳、古代	散布地
24	八ヶ谷横穴群	古墳（後）	横穴
25	穴口横穴群	古墳（後）	横穴
50	玉伴横穴群	古墳（後）	横穴
62	丸山古墳	古墳（後）	古墳
123	中方北遺跡	弥生、古墳、中世	散布地

※遺跡番号は「静岡県文化財図地名表」(昭和64年3月発行)に準じている。

この地域を中心に天竜川以東に分布する土器は「菊川式」の型式名を与えられている。また後期後半には平野部を見おろす丘陵上にも赤谷遺跡のような大規模な集落跡が成立する。嶺田遺跡付近を南限として下流域平野部には有力な弥生時代の遺跡がみられず、開発が遅れたことを示しているが、これはおそらく菊川河口に形成された後背湿地が長く残ったことによるものであろう。

このような弥生時代中期から後期にかけての開発を基盤として、古墳時代にも連続して開発・発展が進行したと考えられる。菊川流域の前方後円墳としては、まず小笠町上平川の沖積地に築かれた上平川大塚古墳があげられる。全長20m程度と小型であるが、副葬品の内容からみて4世紀後半で築かれた古式古墳と考えられ、その副葬品の中に山城椿井大塚山古墳出土鏡と同範の三角縁神獣鏡を持っていることが注目される。平野を見おろす丹野川南岸の丘陵上には、全長49mの舟久保古墳があり、この地域としては最大の古墳である。古墳時代中期前半に属するものとされている。この他に、丹野川と牛渕川の合流点付近の自然堤に築かれた全長20mほどの帆立貝式前方後円墳である朝日神社古墳、菊川駅南西の丘陵上に位置する大徳寺古墳があり、現在5基の前方後円墳が知られている。これらは互いに近接せず、しかも上平川大塚古墳>舟久保古墳>大徳寺古墳>朝日神社古墳の順に築かれたと考えられるため、これらが菊川流域の平野部を一元的に支配した首長の系譜を示すものと考えられる。椿井大塚山古墳との同範鏡の存在は、この地域の首長が早くから畿内政権とのつながりを持ち、それを背景として当地域の政治的統一を果たしていたものと考えられる。

朝日神社古墳の築造年代は5世紀末から6世紀初頭と考えられ、それ以後この地域に、横穴式石室を伴う際だった古墳は出現していない。それからやや時間をおいて、6世紀後半頃からいわゆる後期群集墳の時期となるが、この地域では周知の通り墳丘と横穴式石室を伴う古墳群はほとんど皆無に近く、その代わりに横穴群が圧倒的な分布をみせるようになるのである。

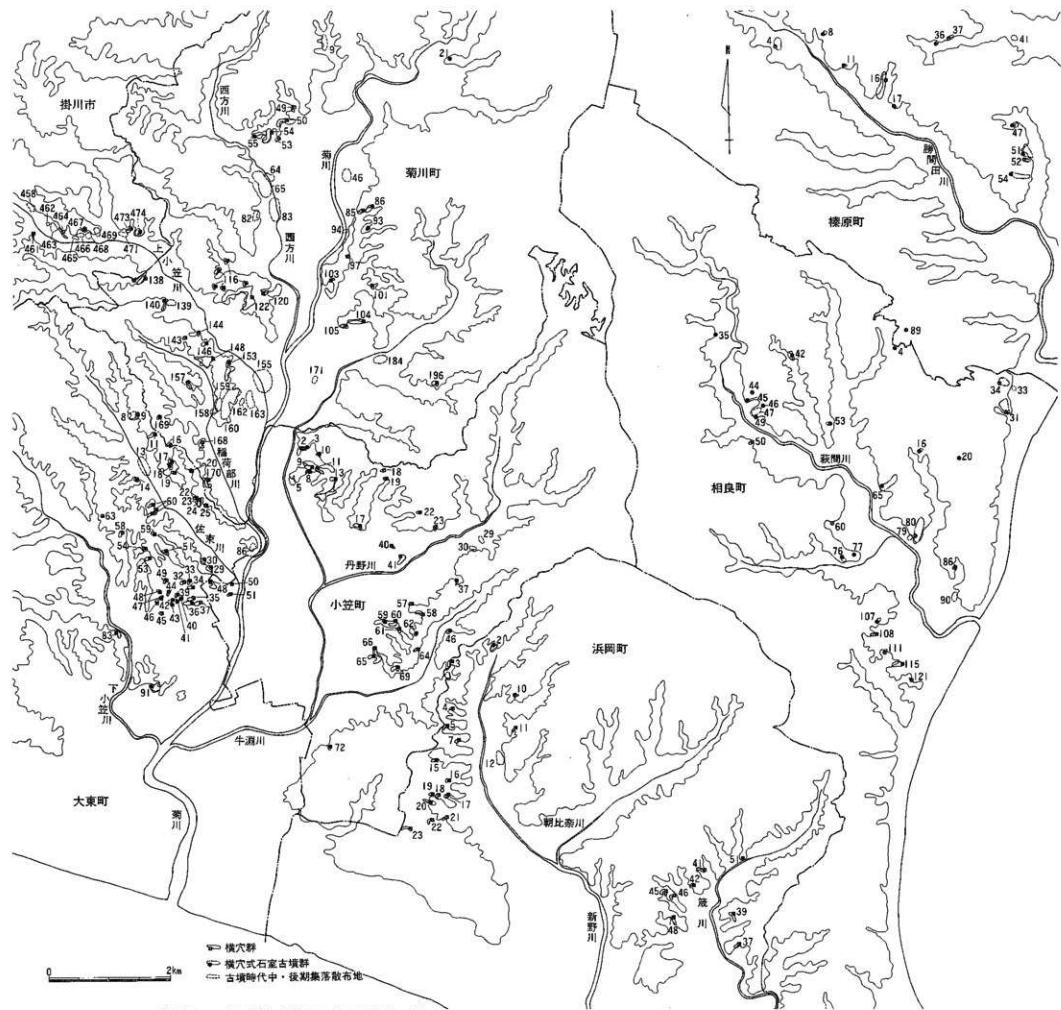
2) 菊川流域の横穴群の分布

当地域の横穴群の分布の特徴について、平野吾郎氏は『遠江の横穴群』(1983、静岡県教育委員会)の中で、これを以下の7つのグループに分けている。

- I ……菊川駅北側の丘陵。山本横穴群・大淵ケ谷横穴群など。大淵ケ谷横穴群にIII期中葉に属すると思われる須恵器があり、6世紀後半には築造が始まったと考えられる。
- II ……上内田・中内田地区。杉森横穴群・政所横穴群・東平尾横穴群など。杉森横穴群の資料から、III期中葉、6世紀後半に築造が開始されたと考えられる。
- III ……佐東川流域。岩滑ハツ谷横穴群・山脇横穴群など。岩滑松ヶ谷・清水ヶ谷横穴群の出土遺物から、III期中葉、6世紀後半には築造が始まっている。
- IV ……下小笠川流域。毛森山横穴群・田ヶ谷横穴群など。毛森山横穴群の出土資料によれば、III期中葉、6世紀後半には築造が開始されている。
- V ……横地地区。下本所横穴群・横地藤谷横穴群など。
- VI ……丹野川流域。八幡ケ谷横穴群・春日山横穴群など。春日山横穴群の資料等から、6世紀後半に築造が始まっている。
- VII ……高橋川流域。新通り横穴群・寺の谷横穴群など。柵田横穴群出土資料によれば、6世紀後半に築造が開始されている。

* II群はさらに上小笠川流域と稻荷部川流域の2群に分け得る。

分布の特徴としては、I群が最も密度が高く、一地域に密集的に存在するのに対して、他の地域では比較的小規模な横穴群が各支谷ごとに分布し、広範囲に広がっている。ただII群における杉森、IV群における毛森山など各群ごとに中心的な分布を示す地域が存在している。V群ではそのような中心的横穴群の存在が認められず、小規模横穴群が散在する。これらの各群では、いずれも6世紀後半に横穴の築



第2図 東遠地域の横穴群と後期群集墳の分布

〈東遠地域横穴群・後期群集墳分布図地名表〉

菊川町

番号	遺跡名
9	奥ノ池遺跡
21	上ノ段遺跡
48	中島遺跡
49	丙ノ谷横穴群
50	猪ヶ谷横穴群
53	西宮横穴群
54	大瀬ヶ谷横穴群
55	山本横穴群
64	豆尻遺跡
65	栗林遺跡
82	井成山遺跡
83	白岩遺跡
85	下本所A横穴群
86	下本所B横穴群
93	ウチワツヤ横穴群
94	新井道路
97	下田横穴群
101	澤田横穴群
103	小出横穴群
104	藤谷A横穴群
105	藤谷B横穴群
116	山田横穴群
120	長池横穴群
122	杉森横穴群
138	東京横穴群
139	森前遺跡
140	森前横穴群
143	政所F横穴群
144	政所A横穴群
146	毛森山1号横穴
148	東平尾横穴群
153	政所横穴群
155	亘川遺跡
157	平風屋原横穴群
158	塙山遺跡
159	段平尾IV遺跡
160	段平尾II遺跡
162	段坪I遺跡
163	古川遺跡
168	鶴荷御横穴群
169	柏木ヶ谷横穴群
170	猪ヶ谷横穴群
171	土橋遺跡
184	田中遺跡
196	武衛原横穴群
小笠町	
2	大鹿横穴B群
3	大鹿横穴A群
5	城山下遺跡
8	志岐堂横穴群
9	大鹿横穴C群
10	宇野横穴群
11	志櫻ヶ谷横穴群
13	八幡ヶ谷横穴群
17	柳草横穴群
18	鬼ノ谷横穴群
19	鬼の谷横穴群
22	殿ヶ谷横穴群
23	鬼の谷横穴群
29	市場B遺跡
30	市場A遺跡
37	宮下横穴群
40	春日山横穴群
41	鬼火横穴群
46	新井横穴群
48	大石横穴群
50	舞ヶヶ谷横穴群
51	興勝寺横穴群
57	地藏堂横穴群
58	寺の谷横穴群

番号	遺跡名
59	虚空藏堂横穴群
60	虚空藏横穴群
61	池ヶ谷横穴群
62	五丁地横穴群
64	池ヶ谷横穴群
65	高根山横穴E群
66	高根山横穴群
69	平朝横穴群
72	内村横穴群

番号	遺跡名
23	猿田ヶ谷横穴群
37	鶴ヶ谷横穴群
39	名波(小堤谷)横穴群
41	宮代ヶ谷横穴群
42	おこし横穴群
45	鶴田谷横穴群
46	中田西ノ谷横穴群
48	深見横穴群

番号	遺跡名
4	松原古墳
16	柄谷古墳群
20	柄沢I号墳
31	細田山古墳群
33	高畠古墳
34	坂ノ谷原古墳群
35	寺前古墳
42	蛭ヶ谷横穴群
44	金谷古墳
45	石原古墳
46	山原古墳
47	峰ノ段古墳
49	峰ノ段古墳
50	大奇横穴群
53	西町古墳群
60	松原古墳
65	細田山古墳群
76	西原古墳群
77	相沢古墳
79	北安寺遺跡
80	柳田山遺跡
86	鷹老山横穴群
90	江湖田遺跡
107	寺下古墳群
108	圓鏡横穴群
111	山本古墳群
115	馬見横穴群・古墳群
121	小堀山横穴群

番号	遺跡名
4	続原古墳群
5	智生古墳群
11	桃ヶ谷古墳群
16	大ヶ谷横穴群
17	曾戸山古墳群
36	中ノ沢古墳群
37	鳥山古墳群
41	宮下遺跡
51	さいのこの谷古墳群
52	山田山古墳群
54	数ヶ谷古墳群
89	追跡古墳

番号	遺跡名
458	向新田遺跡
461	和田衝古墳群
462	久保遺跡
463	原遺跡
464	原横穴群
465	西尾敷遺跡
466	金谷遺跡
467	金谷横穴群
468	大神社遺跡
469	段遺跡
471	小林田遺跡
473	小林横穴群
474	楓田横穴群
475	岩穴横穴群
478	田島横穴群

※番号は「静岡県文化財地図・地名表」(昭和63年発行)に準じている。

造が開始されており、7世紀中葉頃を盛期としている。さらに平野氏はこの各群を、律令期の城飼郡の郷名に対応させている。すなわちⅠ=荒木郷、Ⅱ=加良古郷、Ⅲ=佐束郷、Ⅳ=上方郷、Ⅴ=加美郷、Ⅵ=川上郷、Ⅶ=高橋郷に対比させることが可能であり、横穴の分布の粗密は、各地域の開発の状況を反映していると考えられる。

このグループ分けはおもに菊川各支流がつくる谷筋を基準として行なったものである。平尾尾添横穴群はこのⅡ群に属するが、中心的な分布域である杉森横穴群の属する上小笠川の谷筋ではなく、稻荷部川がつくる谷筋に属している。この谷には他に東平尾横穴群が属し、3群37基の横穴が確認されており、これを中心的横穴群とすれば、この谷筋を上小笠川流域と分割して別のひとつのグループと考えてもよいであろう。このような谷筋（支流域）をひとつのグループとしてみることが妥当とするならば、これらのまとまりが、集落単位を示しているのか、あるいは「氏族」的なまとまりを示しているのか、その点がひとつの課題となろう。

前述のように、これら横穴群の分布に対して、高塚を伴う横穴式石室墳はほとんど認められない。菊川流域で横穴式石室墳であることが確認されているのは菊川町上ノ段古墳であるが、この古墳はⅠ群の横穴群の東北東、さらに菊川を上流に遡ったところにあり、横穴群の分布域とは大きくはずれている。『静岡県史 資料編2』(1990)によれば、Ⅱ群の地域に属する長池古墳群が横穴式石室墳であると確認された。菊川流域の横穴群分布域において横穴式石室墳は、現在のところこれのみである。

3) 東遠地域の横穴群の分布

第2図は菊川流域以東の東遠地域の横穴群と横穴式石室を伴う後期群集墳の分布を示した図である(後期群集墳については『静岡県文化財地名表』(静岡県教育委員会 1988)の遺構・遺物欄に「横穴式石室」と記載のあるものである)。古墳時代中・後期の集落・散布地(出土遺物に須恵器を含む遺跡)も併載している。菊川流域が横穴群の分布が特に濃密な地域であることが分かるが、それ以外にも浜岡町新野川流域・駿河流域、相良町萩間川流域、榛原町勝間田川流域に横穴群の分布が見られる。

新野川流域……上流域西岸に集中し、横穴群の規模は小さく、全体の横穴数も少ない。支流朝比奈川流域の谷筋には横穴群が存在しない。また横穴式石室を伴う群集墳も全域に渡って認められない。このようなありかたは、新野川流域の開発の重点を示しているよう。築造年代は6世紀代に遡るものではなく、7世紀前半が中心と考えられる。

駿河流域……横穴群の規模は小さく、密度も希薄である。築造年代は6世紀後半から始まり、7世紀前半が盛期である。横穴式石室を伴う群集墳は認められない。

萩間川流域……小規模な横穴群が上流から下流までの広い範囲に散在する。小堤山横穴群の出土資料によれば、築造年代は6世紀後半まで遡る。この地域では横穴群のほかに横穴式石室を伴う群集墳が点在しており、上記2地域と相遇をみせる。

勝間田川流域……横穴群は大ヶ谷横穴群のみが知られる。4群40基の横穴が存在し、比較的密集度が高い。出土遺物によれば6世紀後半代の築造と考えられる。この地域の墓制はこれ以外は横穴式石室を伴う群集墳となっている。

この4つの川の流域の横穴群分布状況をみると、東へ行くにしたがって横穴群の分布が希薄になり、かわって横穴式石室墳が分布するようになることが分かる。萩間川・勝間田川流域のように横穴群と横穴式石室墳群が併存する現象は、例えば、太田川上流域の森町飯田・睦実丘陵や、袋井市小笠沢川上流山本山横穴群・古墳群などで見られる。しかしここではそれらと異なり、同一丘陵上や同一支谷に面して接近して築かれているのではなく、横穴群と横穴式石室墳群が比較的分散して存在し、同一丘陵・支谷に並存しない。したがってここでは袋井市山本山横穴群で推定されたように、ある集団が横穴式石室墓制から横穴墓制へと転換したということは想定できず、むしろ異なる墓制をもった異なる集団が埋葬地の地

域的な住み分けを行なったと考えられる。とすれば東遠地域のこのような横穴群の分布は、横穴を墓制とする集団が、菊川流域を中心として分布し、東に向かって拡散している状況を示していると言えよう。

4) 中遠地域との比較

袋井・掛川平野における横穴群と横穴式石室墳の分布状況については、平野吾郎氏が「原野谷川流域の古墳群について」(『古代探叢』滝口宏先生古希記念考古学論文集 1980)で論究され、それに基づいて袋井市の「坂尻遺跡」(静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992)報告書でも若干まとめている。それによれば、この地域の横穴群と横穴式石室墳は、横穴群の分布が顯著な地域、横穴式石室墳の分布が顯著な地域、横穴群と横穴式石室墳が併存する地域に分けることができ、並存する場合、多くは時間的に横穴式石室墳から横穴へと移行したと考えられる。そして横穴の初現は掛川市山麓山横穴・宇洞ヶ谷横穴に求めることができ、その時期はほぼ6世紀中葉である。分布がもっとも濃密なのは逆川下流域南岸のこの2横穴から高御所地区にかけて、おそらくこの地区から始まった横穴墓制(外来系の勢力によるものと推定される)が周辺へ影響力を拡散していく過程で、從来墓制を継承する横穴式石室を伴う高塚墳との間に上記のような分布状況を生じたのであろう。

このような横穴群と横穴式石室古墳群の分布状況は、東遠地域でも同様な状況をみせ、例えば菊川流域に数少ない横穴式石室墳である菊川町上ノ段古墳は横穴群と離れて孤立して存在していること、また菊川流域から東へ離れるほど横穴群が希薄になり、かわりに横穴式石室古墳群が卓越していくことなどは中遠地域に見られる現象と相通するものであろう。この場合横穴の分布の中心はやはり菊川流域であろうが、宇洞ヶ谷横穴や山麓山横穴などの6世紀中葉に遡るような単独横穴はみられず、東遠地域全体で6世紀後半にはほぼ同時に横穴がつくられ始めるという点で、中遠地域の逆川下流域南岸地区的状況とは異なっている。また中遠地域の横穴群の特色として從来注目されていることのひとつに、玄室断面尖頭型の横穴の存在があげられる。菊川流域を中心とする東遠地域の横穴は、平尾野添横穴群でもそうであったように玄室断面がドーム型を呈するものが主流であるが、中遠地域では、特に6世紀末から7世紀初頭頃以降玄室の横断面が二等辺三角形に近い形態を呈するものが多く分布するのである。このような相違は、横穴を墓制とする集団がたとえ外来系の集団だとしても、決して單一ではなかったことを示している。律令期の佐益郡(掛川市・袋井市域、後に西側を山名郡として分立)と城飼郡の郡域の設定にそれが関連する可能性もある。

この中遠地域の横穴群の分布と、東遠地域の分布とをつなぐ地域として注目されるのは、上小笠川流域の菊川町中内田から掛川市上内田・板沢地区である。菊川町中内田地区は先の菊川流域の分布ではII群に属し、杉森横穴群・政所横穴群・東平尾横穴群など、I群につぐ密集状況を示している。ここから上小笠川を遡る谷筋は現在でも菊川から掛川に抜ける幹線道路であるが、ここでは菊川流域の他の横穴群グループとは違い、谷の奥部まで深く横穴群分布が入り込み、掛川市上内田、板沢地区まで横穴群の分布が見られる。掛川市上内田の和田横穴群には12基、桶田横穴群には11基と比較的規模の大きい横穴群も見られる。もちろん横穴式石室墳は存在しない。この谷筋の最奥部から低い峰ひとつ越えると掛川市南郷で、ここから前述の高御所地区にかけて平野部に面した山塊に点々と横穴群が存在する。

このような分布状況をみると、中遠地域と東遠地域、特に菊川流域とは決して隔絶するものでなく、一連の地域として理解すべきであると思われる。したがって、横穴墓制の採用が別々の経過を経たものとは考えにくい。結局、両地域の横穴群分布状況を考えあわせれば、東遠地域も含めてこの地域全体における横穴墓制の採用は6世紀中葉、逆川下流域から始まり、6世紀後半には掛川市域から菊川町を経て榛原町にいたる広い範囲でほぼ同時に、また同様の条件のもとで、横穴墓制が採用されたと考えられる。前述した玄室形態や埋葬施設の相違(石棺、礫床、棺座など)などは、こうした一連の動きの中のパラエティとしてとらえるべきであろう。

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

静岡県公営企業管理者企業局による菊川町内田住宅団地造成事業の工事計画地内の丘陵にはすでに周知の遺跡として平尾野添横穴群が存在することが分かっていた。工事計画によれば付近の丘陵は削平され、横穴も消滅する可能性が高いため、工事に先立って遺跡の調査を行ない、記録による保存をはかる必要が生じた。

企業局と県教育委員会・菊川町教育委員会との間で協議を行ない、まず從来2基の横穴のみ、その存在が確認されていた当横穴群および工事計画地内にさらに他の遺構が存在するかどうか、確認調査を行なった。確認調査は菊川町教育委員会によって平成2年4月2日から10日にかけて実施され、工事によって大きく削平される丘陵頂上箇所についてはトレーナーを設定して一部掘削調査、丘陵斜面の横穴の確認については踏査によって探査を行なった。その結果、トレーナー調査では6箇所のトレーナーいずれにおいても遺構・遺物は検出されず、丘陵尾根部・頂上部には遺跡が存在しないことが確認された。しかし谷部に面した丘陵斜面では、從来知られていた2基以外に、その南東にあたる小支谷に7基存在することが踏査によって新たに確認された。さらに谷の入り口付近の小支谷にも横穴が存在する可能性があると判断された。草木の生い茂るなかでの確認調査であることを考慮すれば、さらに多くの横穴が存在することも予想されたため、存在が確認あるいは推測された3つの支谷については発掘調査を行なう必要があるとされた。

この結果に基づき、再び関係機関の協議を行ない、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に発掘調査の実施が依頼された。

第2節 調査の方法と経過

1. 現地調査

調査は上記の3箇所の小支谷について樹木伐採・表土除去を行なうこととし、谷の奥部からA地区・B地区・C地区と名付けた。平成2年12月より各地区の樹木伐採・現地プレハブの設置等の準備を行ない、平成3年1月5日より現地発掘作業を開始、まず調査前の地形測量を業者に委託して実施した後、B地区から人力により表土除去作業に入った。

B地区は事前調査によれば小支谷の奥側の上段に6基、支谷入口側の下段に1基確認されており、少なくとも2グループの横穴が存在していると思われた。また上段の奥から2基は他の4基とやや高さが異なるように見えたためさらに2群に分け、奥からB-a群・B-b群とし、入口側の下段をB-c群と呼称した。表土除去はB-a・b群から始め、特にa群部分は表土が非常に厚いため重機を用いて除去した。その結果、B-b群でさらに2基の横穴の存在が明らかになったが、B-a群では谷の奥まで表土除去を行なったが新たに横穴は確認されなかった。横穴の番号は1単位群の表土除去が終了して基數が確定した段階で付けることとし、B地区上段では奥側からB-a-1・2号、B-b-1～6号とした。a群とb群は、表土除去が終了して精査してみると高さや開口の方向および横穴の構造に大きな差がなく、結局1つの単位群として考えられるが、遺物の検討が進むまで名称の変更は保留した。表土除去に統一して遺構の精査を開始したが、斜行する岩盤が比較的弱く、B-b-4号などは雨により夜中に天井の一部が崩落したため精査を中止し、天井部の除去を行なった。



第3図 周辺地形図

1月下旬にはB-a・b群の遺構精査と並行してB-c群の表土除去を開始した。B-c群では確認調査では1基のみ確認されていたが、重機による表土除去を行なった結果、厚い土砂の下にさらに5基の横穴が確認され、遺構精査に入った。

1月末にはC地区の表土除去を重機により行ない、遺構確認作業に入ったが、支谷の奥部斜面を広く表土除去したにもかかわらず、横穴は発見されなかった。

2月に入るとA地区の表土除去を開始した。この地区は小支谷の奥部尾根付近の非常に高い位置にあるため重機を用いることができず、すべて人力により除去を行なった。当初から横穴が2基開口しており、それ以外には存在を予測していなかったが、2基の南側の厚い土砂を除去したところ保存の良好な1基が検出された。横穴の番号は北側からA-1～3とした。

2月中旬には、墓道の有無を確認するため、B地区支谷入り口部分の斜面を人力により表土除去を行なったが、それに類する遺構は検出されなかった。

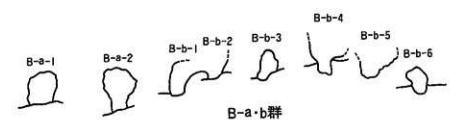
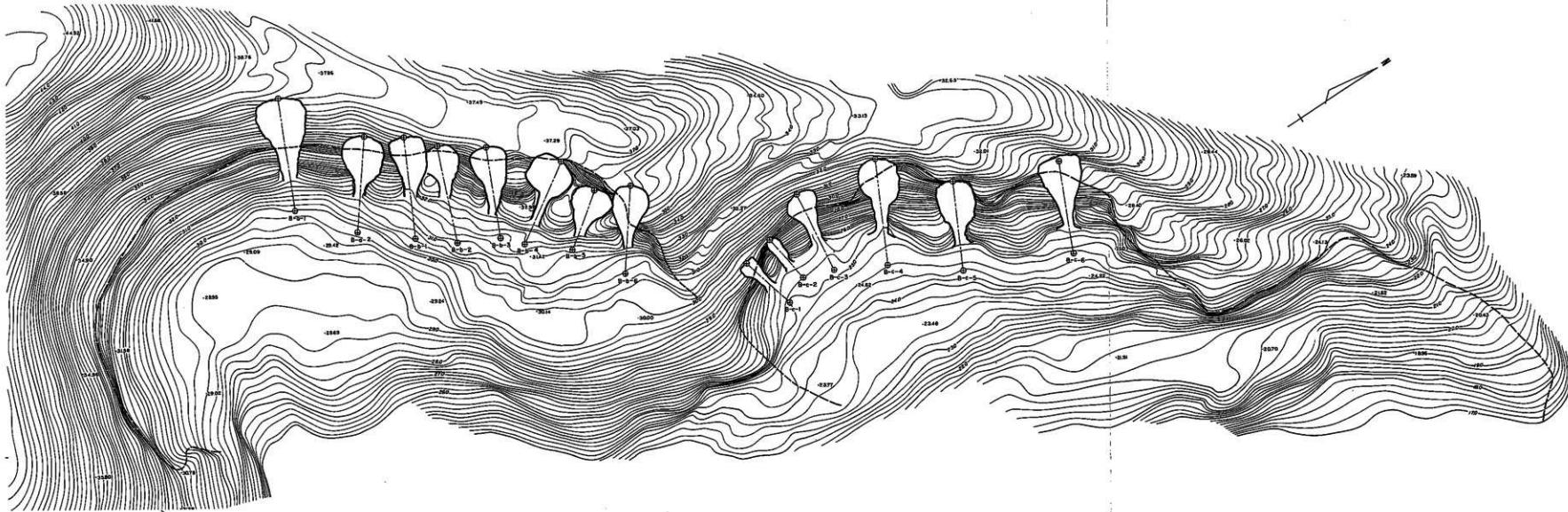
精査は玄室内から進め、封鎖石まですべて精査終了したものから全景と封鎖石・内部遺物の部分写真撮影を行なった。写真撮影は6×7版の中型カメラと35mmカメラを使用して調査員が撮影を行なった。

2月中旬から写真撮影の終了したものから順次実測作業を開始した。実測の主軸線は奥壁と玄門部の中点を結ぶ線に水糸を設定し、奥壁に設定した点を起点として縮尺1/20で実測を行なった。まず遺物・封鎖石等について平面図および封鎖石の正面見通し図をとった後、遺物の取り上げ・封鎖石の解体を行ないながら横断面図・縦断面図を作成した。その後実測の基準点は残しながら再度床面を精査し、完掘状態にして写真撮影を行ない、最終的な実測作業にはいった。完掘後の実測は平面図・縦断面図・横断面図・正面見通し図を作成することとし、基本的に横断面は奥壁付近（奥壁見通し）・玄室中央部・玄室開口部付近（玄門・羨門見通し）・羨道部の4箇所について作成した。また縦断面図は奥壁に向かって左側の側壁を見通すようにしたが、左側壁の残存状態が悪い場合には右側壁を選んでいる。この精査・実測作業に非常に時間がかかり、3月には終了せず、平成3年度にはいって4月末まで継続した。3月下旬には業者に委託して完掘後の地形測量を行なった。実測に並行して壁面の観察・写真撮影・拓本等を行ない、一部は壁面加工痕の実測も行なった。また精査時に出た排土の洗浄を行ない、玉類等の小型遺物の検出に努めた。4月末から5月上旬にかけて現地資材・プレハブの撤去を行ない、現地作業を終了した。

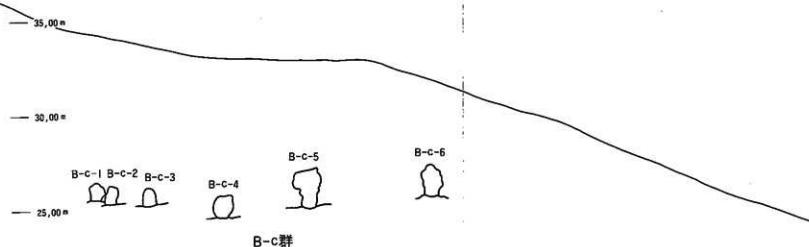
2. 整理作業

資料整理作業は平成3年度5月から開始した。まず現地実測図・写真等の整理を行なった後、遺構については遺構カードを作成して各遺構の検討を行ない、それに基づいて遺構実測図の作成および全体図の作成を行った。遺物については、洗浄・登録などは現地すでに終えており、土器の注記・接合から始め、順次実測作業を進めた。実測がすべて終了した段階で実測図番号を付け、遺物カードを作成して整理した。玉類・金属製品も同様に進め、金属製品については実測と並行して精取りを行ない、当研究所の下川原事務所で保存処理を行なった。

本書では遺構については1/50の縮尺で示し、遺物のうち土器については1/3、玉類などの装身具については等倍、鉄製品については1/2の縮尺で図示している。文中の遺物の表記については、例えば出土土器実測図(1)の1であれば1-1のように表す。遺構平面図の遺物に付された番号はこれと対応するが、この場合土器以外の遺物についてはこの番号の前に装身具はA、鉄製品はFを付けて区別している。遺物写真との対応は各実測図ごとに掲載した法量表に写真番号を(図版1の1であれば1-1と表記)記載している。



B-a・b群



B-c群

0 10m

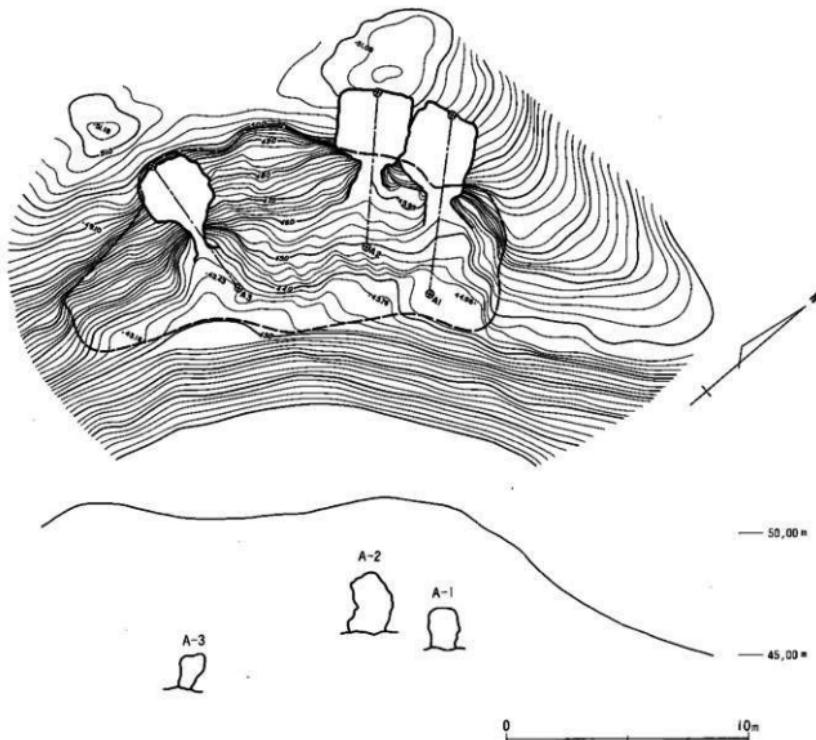
第4図 B地区全体図

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構の概観

前述のように今回調査された横穴群は2つの小支谷に分かれて大きく3つの単位群に区分される。A地区では3基の横穴が存在し、北側のA-1号・A-2号横穴は当初から開口しており、後世の加工の痕が著しい上に遺物もほとんど残っていない。この2基はほぼ高さを等しくし、構造等にも共通点が多い。A-1号横穴では、はめ込み式の石棺が用いられていることに特徴がある。南側のA-3号横穴は樹木伐採後、やや斜面に窪みがみられたため表土除去を行なったところ発見されたもので、内部の壁に一部自然の崩落がおこっていたものの、封鎖石を含め比較的保存状態がよく、遺物の点数も多い。それらの遺物および方形に近い平面形をもつ横穴の形態などから、A地区的横穴はB地区に比べてやや古い段階のもので、6世紀後半代につくられたものと考えられる。

B地区では小支谷奥側のa・b群と、入口側で1段低いc群との2つに分けられる。a・b群では8



第5図 A地区全体図

基の横穴が検出されたが、そのうち6基はすでに開口しており、埋葬時の状態をよく残すものは少なかった。4基は天井・壁が大きく崩壊しており、そのためにかえって遺物や床面施設の残存が良好であった。全体的に平面形はほんやりとした円形あるいは楕円形に近いものが多く、断面ドーム型で側壁・天井の区別も明瞭でないものが多い。B-b-1号・b-2号・b-4号・b-5号横穴には埋葬部分の床面に小砾が散かれていた。またb-6号横穴では玄室奥壁寄りに長方形の切り石を用いた棺座が設けられていた。A-1号横穴の石棺、a・b群の砾床、そしてこの切り石による棺座と、今回調査された横穴群の中に3つの異なった埋葬方法がみられるることは、どのような背景によるものか興味深い問題である。

B-c群では、c-5号横穴のみが当初から開口しており、他は調査開始後に検出されたもので、比較的残りのよいものが多い。B-c-1号・c-2号横穴は非常に規模が小さく、人が膝をまるめてようやく入ることができるほどのものである。他の横穴とは性格を異にすると考えざるを得ない。c-3号横穴は砾床の保存状態がよく、遺物もよく残っていた。c-4号横穴も保存が良好だが、切り石が割れて散乱しており、もとはb-6号横穴と同様に切り石による棺座があったものと思われる。c-4号とc-5号横穴の墓前には、封鎖石と思われる砾とともに須恵器の破片が散乱しており、盗掘があったことをうかがわせている。

B地区a・b群とc群の出土土器は6世紀末から8世紀にかけてのもので、中心は7世紀中葉から後半である。A地区的グループより土器・横穴の形態からみて、新しいと考えられる。一部平安時代から中世にかけて再利用されたようで、山茶塚も出土している。

以下、各横穴および出土土器について、実測図面を併載しながら詳述する。なお、須恵器蓋環の分類については第4章第1節を参照されたい。

第2節 遺構と遺物

1. A地区

1) A-1号横穴（第6図、図版2）

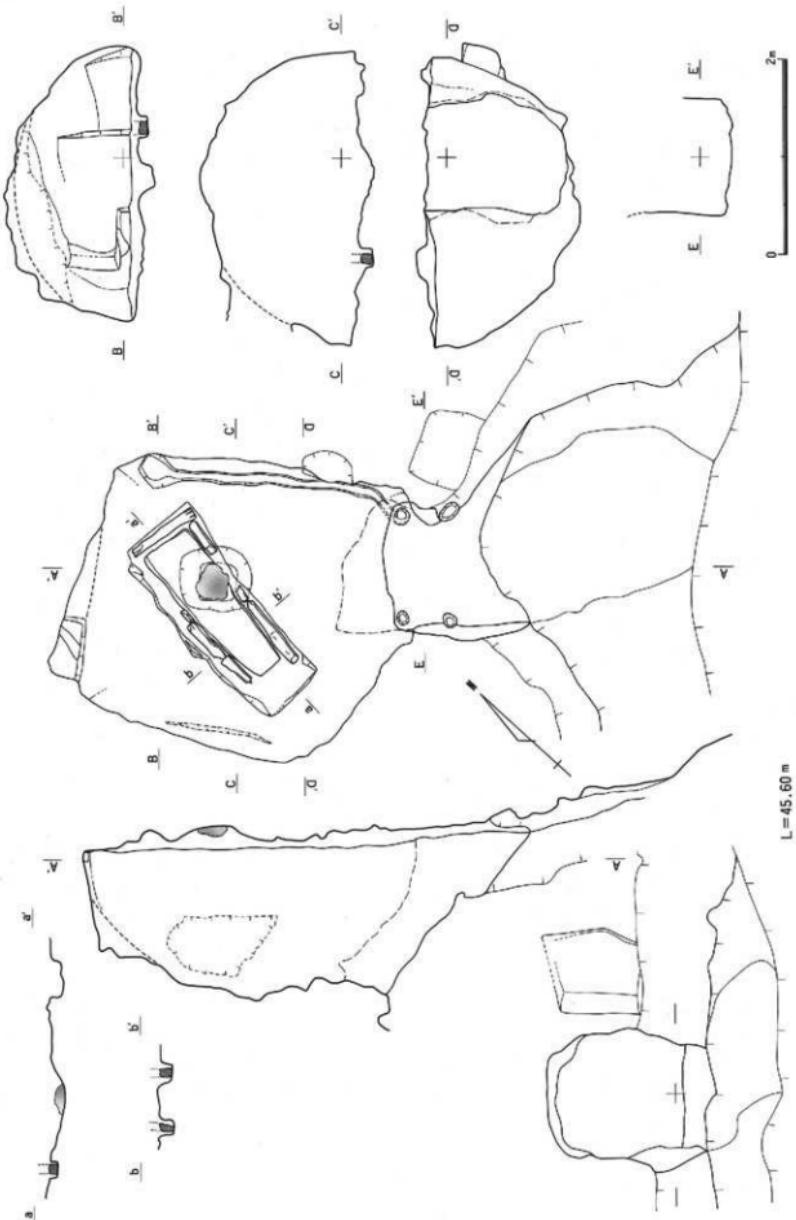
①保存状態

調査開始前から開口しており、周知の遺跡となっていた1基である。自由に入り出しができたため、後世に種々の目的に使用されたらしく（地元ではこれを「ばくち穴」と称している）、後世の造作による掘り込み等が多い。遺物・封鎖施設等は皆無に等しい。ただ床面にはめ込み式の石棺の下部がかろうじて残っている。天井部左奥側が剥落しており、左側壁上部はA-2号横穴との間に穴が開いてしまっている。また羨道部上半も失われている。

②玄室

平面形は隅丸の正方形に近いが、開口部に向かってわずかに開き、開口部側の一辺は外側に広がっているため、ややいびつな台形を呈する。右壁に平行するラインを主軸とすると、方位はN-35°30'-Wである。開口部が右寄りに位置するため、全体的に主軸から北側に傾いている。玄室全長は、右側壁に並行するラインで測ると3.13mである。またこのラインに直交させて幅を測ると奥壁部幅2.37m、中央部幅2.96m、開口部幅2.85mである。断面形はドーム型を呈し、中央部高さは1.62mを測る。

床面は岩盤の斜行に伴って形成される段を除けばほぼ平坦で、わずかに奥壁から開口部に向かって傾斜している。傾斜角は4°である。右側壁に沿って幅10cm、深さ5cmの壁溝があるが、断面長方形で比較的しっかりしており、後世につくられた可能性が高い。奥壁は崩落が起こった後を後世に整形して掘り込んでいるようで、左側に小さなテラスが設けられている。本来は比較的直線的で、左右両側壁との境も明確であったものと思われる。天井部との境は明確ではない。右側壁玄門寄りにろうそく立て等の機能



第6図 A-1号横穴実測図

を持っていたと思われる後世の出窓状の掘り込みがある。

埋葬施設としては、床面に検出された石棺がある。上部は失われ、下部構造がわずかに残っており、それも後世の炉跡により一部破壊されている。床面の岩盤に長方形に溝を掘り込み、それによって削り出された中央部を床板として溝に側板石をはめ込む形式の組み合せ式石棺である。全長2.25m、幅は74~93cmで、やや北側が開く。削り出された床板は長さ1.67m、幅34~51cm、側板をはめ込む溝の深さは12~15cmで側板の厚さは10cmほどである。側板も岩盤と同じ石材を用いている。石棺の主軸方位はN-7°30'~Eで、ほぼ南北正方位を向いているため、横穴の主軸方向を無視して、玄室の対角線方向に位置している。

③羨道部

上半が失われているため、断面形・高さは不明である。玄室の規模に対して短く、全長1.22mで、玄門を出るとすぐ外に広がるような平面形を持つ。主軸に対して羨門はやや右方向を向いていたと思われる。封鎖石等は残っておらず、封鎖施設は不明である。玄門付近に径10cmほどの円形の孔が4箇所設けられているが、おそらくは後世の造作であろう。

④掘削方法・工具

壁面に観察される工具痕は2種類である。一つは幅8mmほどの細い工具痕で、溝の断面は半円形を呈し、先端は丸い。もう一つは幅1.5cmほどで断面形は一辺が丸くなる正方形を呈する整状工具の刺突痕である。やはり先端は丸い。細い工具痕はほぼ全面に丁寧に施されているが、後世の掘り込みと思われる部分にもあるため、後世のものと考えられる。整状工具による刺突痕は右側壁および天井部に数ヶ所みられるにすぎないが、おそらくこれが本来の工具痕であろう。後世の整形や風化のため本来の調整痕はまったく不明である。

⑤墓前部

羨門の前面約2mは扁型に広がる緩斜面（岩盤の斜行による段が大きいため階段状になる）となる。両側を稜線で区切られるこの幅2~3mほどの部分が墓前域と考えられる。その前面は自然の急斜面である。羨門右袖部に後世の窓状の掘り込みがある。用途は不明である。

⑥遺物

a) 出土状態

後世の使用による攪乱が激しいため、遺物は持ち去られてまったく残っていない。わずかに鉄製品の破片が2点だけ検出されているが、後世のものである可能性が高い。

b) 鉄製品

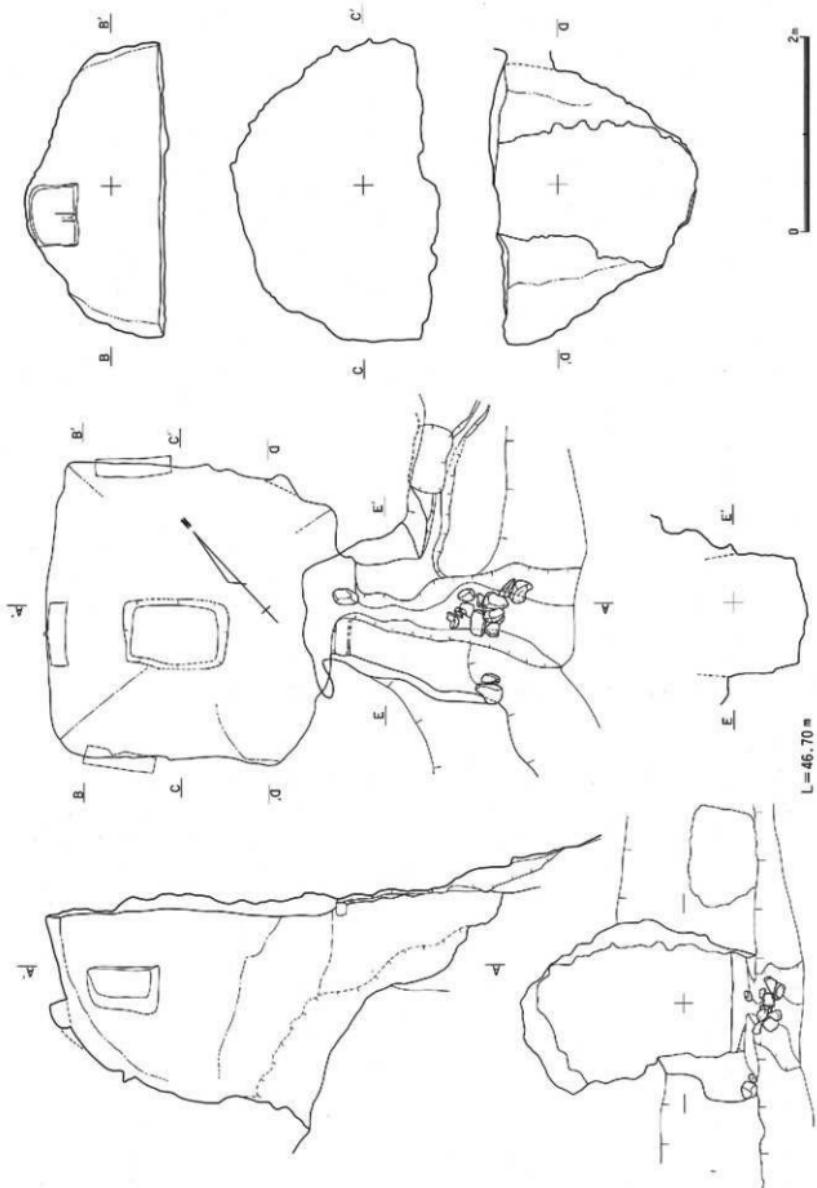
第16図1-3・1-4に示した小片2点のみの出土である。1-3は現存長10.2cm、長三角形の刃部は平背平造で、長さ8.1cm、幅2.5cm、背幅4mmである。1-4は現存長8.1cmの鋒部分で、平背平造で刃部は直線的、背幅4mmである。いずれも何らかの刃物の刃部と思われるが、その実体は明らかではない。遺構の状況からみて、後世のものである可能性が高い。

⑦築造年代・墓葬

遺物が出土していないため、築造年代は不明であるが、A地区の他の2つの横穴が6世紀後半の築造と考えられ、規模や平面形態などからもそれらと差異がないことから、おそらく同時期の築造と考えよいと思われる。位置的にはA-2号横穴に近接し、しかもそれより低く設定され、A-3号よりは高い位置にあるため、A-3号に先行し、A-2号について築造されたのではないか。追葬の有無についてはまったく手がかりがない。

2) A-2号横穴（第7図、図版3）

①保存状態



第7図 A-2号横穴測定図

これもA-1号横穴と同様に調査前から開口しており、周知の遺跡とされていた1基である。やはり後世に利用されたらしく、後世の造作の跡が著しい。遺物はほとんどない。封鎖石と思われる河原石が墓前部に若干落ちている。羨道部の上部は崩落のため失われている。

②玄室

平面形はほぼ正方形を呈するが、やや左辺が短いため開口部側は若干いびつになっている。玄室全長3.02m、奥壁部幅2.90m、中央部幅3.00m、開口部幅2.84mを測り、主軸方位はN-46°-Wである。断面形はドーム型で、開口部付近では三角形を呈するが、これは天井部の崩落による。中央部での高さは1.95mである。

床面は斜行する岩盤に伴う段ができるがほぼ平坦で、開口部に向かってわずかに傾斜している。傾斜角は4°である。中央部や左寄りに隅丸の長方形の掘り窪みがあり、後世に炉として使用されたものと思われる。奥壁は、下半は比較的直線的で、左右両壁との境は明瞭であるが、上半は天井部に向かって緩やかに内湾し、天井部や両側壁と区別し難い。中央部や左寄りに後世の出窓状の掘り込みが施されている。左右両側壁のやや奥壁寄りにも同様のものが設けられている。右側壁開口部よりの下部には崩落のためA-1号横穴との間に穴が開いてしまっている。天井部は中央に径5cmほどの孔が掘られている。用途は不明であるが、何かをつるしたものと考えられる。おそらくこれも後世の造作であろう。

埋葬施設等は不明である。少なくともA-1号横穴にみられたようなはめ込み式の石棺のような施設があった形跡はない。

③羨道部

上部が崩壊している上に羨門右袖の斜面も大きく崩落しているようだ、羨道部本来の姿はだいぶ失われているが、左側から推定すれば全長1.23m、玄門部幅1.00m、中央部幅1.25mで、羨門部幅は1.5mほどであろうか。羨門部に向かってやや開いている。断面形は分からぬ。羨道中央に、玄門部幅30cmから羨門部では幅85cmに広がっていく浅い溝状の窪みがある。封鎖施設は不明だが、羨門付近に径10~25cmの河原石が十数個散乱しており、これがもと封鎖石であったものと思われる。玄門部左側には幅18cmで断面長方形の溝が主軸に直交する方向に切られているが、おそらく後世に別の目的で使用された際に戸袋として設けられたものであろう。

④掘削方法・工具

壁面に残された工具痕には、幅2.2cmで先端が方形、断面が板状の鑿痕と、幅9mmで先端が隅丸、断面長方形の細い工具痕がある。いずれも後世の掘り込みと思われる部分にも見られるため、本来の調整痕ではないと考えられる。前者は一部天井部や右側壁に見られるものの、奥壁・右側壁の出窓状掘り込みに集中してみられ、この掘り込みが前者の工具で施されたことを示している。後者の細い工具痕は左側壁を中心にはほぼ全面にみられる。左側壁の出窓状掘り込みには太い鑿痕ではなく、細い工具で整形されている。

⑤墓前部

羨門前面1mほどは緩斜面で、その前は自然の急斜面となる。緩斜面の右側は崩落しているためわからないが、左側は稜線でA-3号横穴と区切られているため、一応墓前域をなしていると考えられる。羨道部にみられた浅い溝状の窪みはこの緩斜面から前面の急斜面まで達している。右袖の崩落部分には後世の出窓状の掘り込みが施されている。その下部は水槽状に掘り窪められており、それに伴う溝状構造も見られる。

⑥遺物

a) 出土状態

後世の擾乱が激しく、遺物はほとんど持ち去られている。わずかに玄室・墓前部の覆土中に土器破片・鉄製品破片・耳環が検出されている。

b) 土器

須恵器坏身破片が2点、墓前部覆土中から検出されている。第9図1-1は底部が丸く、深みがある器形で、たちあがりは短く直線的に内傾する。受け部は狭い。体部下半から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りが施されている。1-2は口縁部破片であるが、おそらく同様の器形を呈すると思われる。立ち上がりはより短く、端部はやや外反する。

c) 装身具

玄室内の覆土から第26図1-1の耳環（当横穴群で出土した金環はほとんどが銅芯金貼環である。ここでは総括して「耳環」と称する）が1点出土している。外径31.4mmを計る。金箔は剥落しているが銅芯の保存状態は極めて良い。本横穴群はもとより、周辺の横穴群から出土した耳環の中でも大型品に属するものである。

d) 鉄製品

玄室内の覆土から第16図1-1・1-2に示した包丁状の刀物の破片が検出されている。1-1は刃部の根元部分で、現存長16.8cm、平背平造で刃闊部分で幅4.0cm、背幅4mmである。1-2は中茎であろう。現存長7.8cm、幅1.3cm、厚さ3.5mmである。径4mmの目釘穴が施されている。遺構の状況からみて後世のものである可能性が高い。

⑦築造年代・追葬

出土した环身は当横穴における分類でB類に属し、遠江考古学研究会による編年（以下、遠考研編年と略称する）のⅢ期後半、7世紀前半代の築造と考えられる。追葬については不明である。

3) A-3号横穴（第8図、図版4・5）

①保存状態

調査開始後に新たに発見された横穴である。厚い表土に覆われ、その存在はまったく予想していなかつたが、A-2号横穴の左側や下方に斜面が若干窪んでいる部分がみられたため、人力によって表土を除去したところ検出された。したがって全体的に保存状態がよく、封鎖石は羨道の半分以上の高さで残り、内部の遺物の残りもよかつた。墓前域も明確である。ただ玄室右側壁から天井部にかけて自然の崩落が大きく、形がやや崩れている。

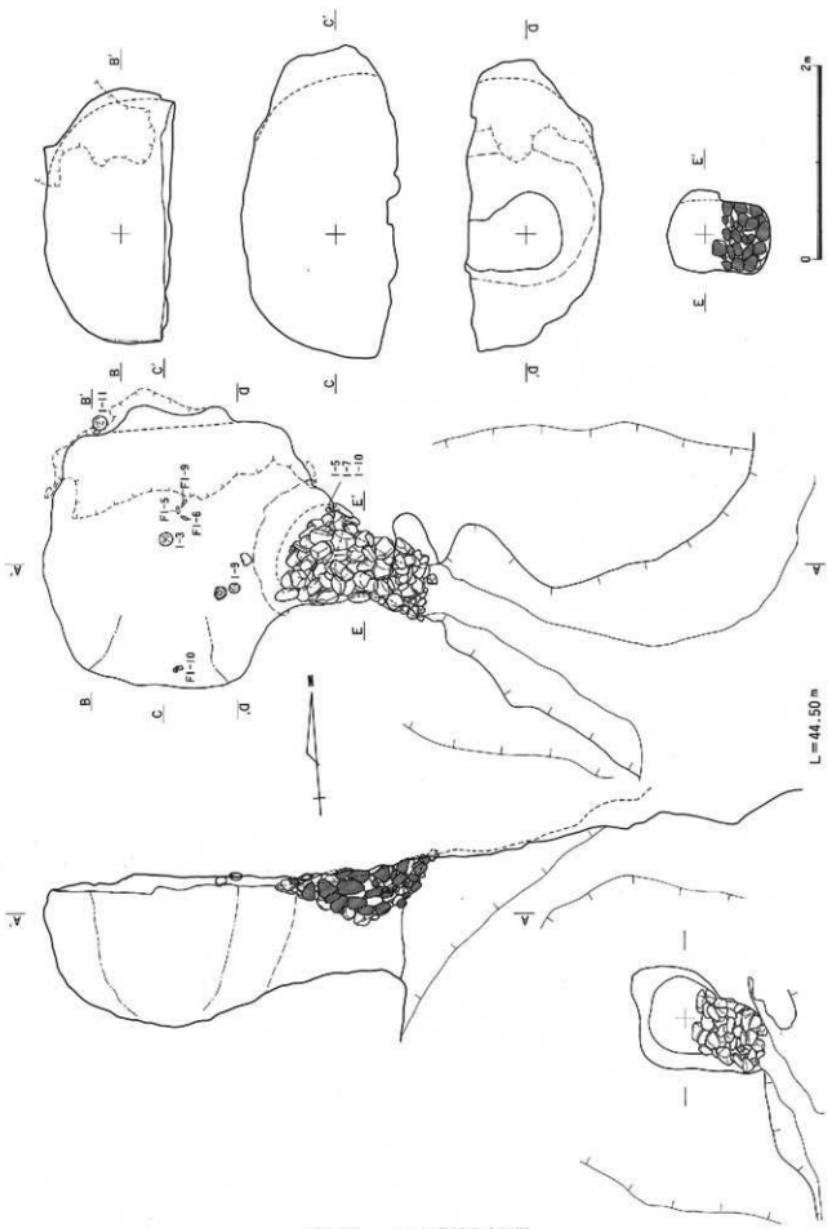
②玄室

平面形は隅丸の正方形を意識しているようだが、羨道部が主軸から左側に傾いて設定されているため、開口部がいびつななり、全体的には右辺が長い台形を呈している。全長2.55m、奥壁部幅2.37m、中央部幅2.65m（右側壁崩落のため推定）、開口部幅2.63mを測る。玄室の主軸方位はN-86°-Wである。断面形はドーム型で、中央部の高さが1.52mと幅に比較してやや天井が低い印象がある。

床面は斜行する岩盤層によって生ずる段が大きはっきりしないが、全体としてはほぼ平坦で、わずかに玄門に向かって傾斜している。傾斜角は3°である。壁溝等の施設は奥壁にそれらしきものも観察されたが、不明瞭であるため断言できない。奥壁は右側が崩落している。左側壁との間の接線は、下半は比較的分かるが、上部は天井部に向かって緩やかに内湾するため不明瞭となる。天井部との境は分からぬ。天井部は浅いドーム型だが、頂部には平らな部分が認められる。ただ意識的につくられたというよりは岩盤層に沿って自然に平らな部分ができてしまったと考えた方がよからう。特に疎床等の埋葬施設は認められない。

③羨道部

主軸から左側に傾いた方向に向かって開いている。墓前域も同じ方向に向いており、羨道部および墓前域の主軸方位はN-68°30'-Wである。羨道部全長は1.53m、玄門部幅1.44m、中央部幅0.60m、羨門部



第8図 A-3号横穴実測図

幅0.58mで、羨門に向かって次第に狭くなる。断面形は縦長の楕円形を呈し、高さは中央部で1.06mである。羨道の床面の傾斜角は玄室床面よりやや大きく、8.5°である。

封鎖石は残存している高さが60cmで、今回調査された横穴の中で最も残りがよい。径10~25cmの比較的偏平な河原石を積み重ねたもので、現状では4段分ほどの重なりが確認されたが、内側の封鎖石の下からも遺物が検出されるため、若干内側に崩壊していることが分かる。

④ 墓前部・工具

幅1.7cm、先端が隅丸方形、断面形は正方形の一辺が丸くなる整状工具痕が全体に顕著に見られる。そのほか丸くなってしまっている刺突痕も多いが、幅等からみておそらく同じ工具の裏側を用いたか、あるいは風化してしまったものであろう。天井部から放射状に壁に向かって掘削されており、壁面では右上から左下へと打ちおろされている様子が観察できる。1回の削りの長さは長いもので17cmほどである。

調整痕は玄門部右側によく残っており、左側壁にも若干観察される。それによれば工具は先端が弧状の刃線を持つ幅7cmほどのもので、細かい運動で連続的に削り取っている。調整は一応全体に施されていたと思われるが、玄門付近の丁寧さに比べて側壁・奥壁は部分的にしか認められず、調整が粗くなっている。

⑤ 墓前部

羨門前面2.50mの間は山の稜線が両側に迫り、細長い墓道を形成している。中央部の幅1.28mで、外側の開く部分の幅が2.63mとラッパ状の平面形を呈する。主軸方向は羨道と共に、床の傾斜角も羨道部と同様である。この部分は山の斜面をしっかりと掘り込んでつくられており、明確な墓前域と言うことができるが、特に遺物は検出されていない。

⑥ 遺物

a) 出土状態

玄室内床面上に完形品の土器や鉄製品が散在していた。図示した土器のうち1-4~1-8・1-10は玄室側の封鎖石の下部から出土したもので、封鎖石が玄室内に崩壊したことを見ている。1-12の土師器甕は墓前部の覆土から出土したものである。これらが本来の位置を維持していたかどうかは明らかではない。

b) 土器

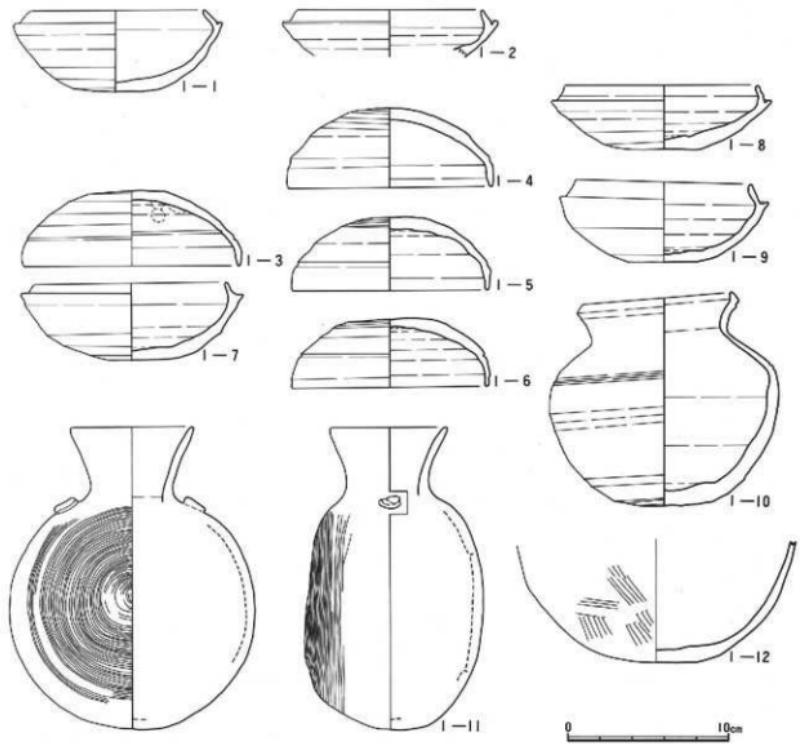
第9図1-3~1-12に図示している。1-12は土師器で他はすべて須恵器である。1-3の環蓋は口径13.2cm、天井部に丸味があり、全体にやや偏平な半球状を呈する。天井部中央から天井部下半まで丁寧に回転ヘラ削りを施し、天井部中央を平らに仕上げている。口縁部は短く、内湾する。1-4~1-6は口径12cm台で、1-4・1-5は器高が高く、天井部は丸く半球状を呈する。天井部上半に回転ヘラ削りを施す。口縁部は短く直線的に下がる。1-6はやや浅く、天井部中央をヘラ削りによって平らに仕上げている。口縁部はやや長く、内湾気味に開く。环蓋はいずれも口縁部と天井部の境に浅い沈線を施している。

1-7・1-8の环身は最大径が14cm弱と大きく、1-7は底部が丸く半球状で、立ち上がりは短く内傾する。1-8は底部を平らに仕上げ、器高も低く偏平である。立ち上がりは短く、内傾するが、端部はわずかに外反する。1-9は最大径13cmで、口径に比べ深く丸味がある。いずれも体部下半から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りを施している。

1-10は広口壺で、底部に回転ヘラ削りを施し、口縁部は端部を断面三角形に仕上げる。体部上部に2条の沈線を持つ。1-11の提瓶は体部両面をカキ目調整し、口縁部は単純にやや外反しながらハの字状に開くものである。1-12の土師器甕は底部破片で、丸底だが、やや平坦面を持ち、全体に粗いハケ目が施されている。

c) 鉄製品

第16図1-5~1-10に示している。1-5・1-6は刀子の刀身鋒部、1-7は刀身根元から茎にかけての部分で



第9図 出土土器実測図 (1) A-2 (1-2) A-3 (3~12)

第9図出土土器実測図 (1) 法量表

(単位: cm)

No	遺構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	A-2号横穴	須恵器	环身	10.6/13.0	5.0		灰色	1/2	23-9
2	A-2号横穴	須恵器	环身	11.4/13.6			青灰色	口縁1/3	
3	A-3号横穴	須恵器	环蓋	13.2	4.8		灰白色	完形	21-1
4	A-3号横穴	須恵器	环蓋	12.6	4.9		灰色	ほぼ完形	21-2
5	A-3号横穴	須恵器	环蓋	12.0	4.7		灰白色	口縁4/5と体部	21-3
6	A-3号横穴	須恵器	环蓋	12.0	4.2		灰色	ほぼ完形	21-4
7	A-3号横穴	須恵器	环身	11.7/13.8	4.8		灰白色	2/3	23-10
8	A-3号横穴	須恵器	环身	12.0/13.7	4.0		灰色	ほぼ完形	23-11
9	A-3号横穴	須恵器	环身	10.8/13.0	5.1		灰白色	ほぼ完形	23-12
10	A-3号横穴	須恵器	広口蓋	9.2	18.2		灰色	口縁3/4と体部	36-1
11	A-3号横穴	須恵器	提瓶	7.4	18.6		暗青灰色	ほぼ完形	35-3,4
12	A-3号横穴	土師器	甕				黄橙色	底部のみ	

あろう。刀身はともに平背平造である。1-7は図の右側を刀身とし、平背平造り、刃部は使用のためかすり減って内側に湾曲している。茎との間にはわずかな間を持つ。茎部に木質が付着している。1-10は鐵である。現存長9.0cm、鎌身長5.6cm、鎌身幅2.9cm、厚さ1.9mmで、範被長2.4cm、幅1.0cm、厚さ5.6mmである。後藤守一氏による分類で、類柳葉範被平造三角形式にならうか。1-8は鐵の範被と茎部分であろう。1-9は刀子の茎と刀身の一部である。茎長5.5cm、1辺8mmの正方形の断面を呈し、木質が付着している。刀身は平背平造である。

⑦築造年代・追葬

出土した蓋坏は、当横穴群における分類でA類・B類に属し、B類の時点を築造年代とすれば遼考研編年III期後半、7世紀前半代と考えられる。他の器種もその時期に含まれると思われ、追葬はなかったと考えられる。

2. B地区 a・b群

1) B-a-1号横穴(第10図、図版5・6)

①保存状態

調査開始前から開口しており、事前調査で確認された横穴である。天井部を含め内部の崩落もほとんどなく、良好な保存状態であった。ただ封鎖石の残りはあまりよくなく、土器等の遺物も少ない。

②玄室

平面形はやや横長の隅丸方形を意識しているように思えるが、両側壁が羨道部に向かって狭まり、そのままだらだらと羨道に連続している。とっくり型に近い。したがって玄室と羨道部との境は平面形では不明瞭で、玄門は天井部との境で判断できる。全長2.63m、奥壁部幅2.76m、中央部幅2.90m、開口部幅2.41mを測る。断面形はドーム型で、中央部の高さ2.00mと天井は比較的高い。主軸方位はN-67°-Wである。

床面は斜行する岩盤層を平らにしたために生ずる段々がついてしまっているが、全体としては平坦で、奥壁から開口部に向かって緩やかに傾斜している。傾斜角は4.5°である。壁溝等の施設は設けられていない。

奥壁は、床面に近い部分は比較的直線的で両側壁との区別がつきやすいが、天井部に向かって緩やかに内湾していくため、天井部との境は分からぬ。この横穴で特徴的なのは、天井頂部から床面四隅にかけて幅10cmほどの浅い沈線状の稜線が走ることで、立体的な形状としてはテント状を呈する。このような明瞭な稜線は他の横穴では見られない。

棺座・礫床等の特別な埋葬施設は残っていないが、玄室奥壁寄り右手側に勾玉・白玉等が出土していることから、遺体は奥壁に向かって右側に頭を向けられたと推測される。

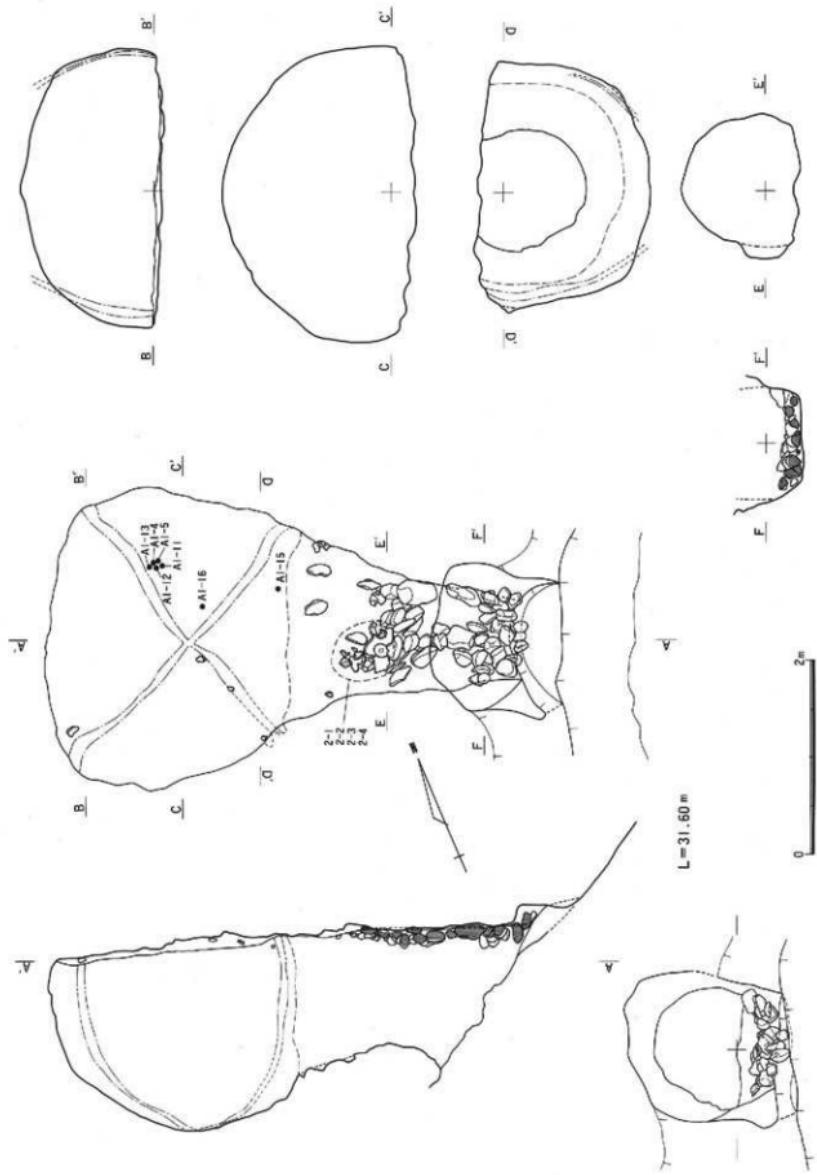
③羨道部

平面的には玄室両側壁から連続的に羨道部に向かうため、羨門に向けて次第に狭くなる。全長2.28m、玄門部幅1.92m、中央部幅1.24m、羨門部幅0.82mで、床面の傾斜角は玄室と同様である。断面形はアーチ型を呈し、中央部の高さは1.16mである。

封鎖石は、径15~30cmの河原石を用いたもので、羨門から奥2.3mの範囲に散乱している状態で検出された。本来の位置にあるものは羨門から1mほどの範囲にあるものと思われるが、1段分しか残っていない。その内側に散乱する石は、その間に土器等の遺物が挟まれていることからみて、外から内側に向かって崩されたものと考えることができる。

④掘削方法・工具

幅1.5cmで先端が丸い鑿状工具痕がほぼ全面に残されている。刺突によって生ずる溝の断面が半円形の



第10図 B-a-1号横穴実測図

ものと方形のものの2種類が認められるが、幅等から考えて同一の工具の異なる面を使用したものと考えられる。工具の断面形はおそらく正方形の一辺が弧状を呈するようなものであろう。鑿痕は壁では右上から左下へ、天井部では天頂部から外へ放射状に打たれている。これとは別に右側壁玄門寄りに幅1cmと細く、先端が方形を呈する工具痕が明瞭に認められる。

壁面調整痕もほぼ全面に認められるが、天井部から右側壁にかけてが残りがよい。調整は幅10~12cmで先端が隅丸方形となる幅広の工具で、細かい運動により連続的に削り取っている。稜線の部分もおそらくはこの工具によるものであろう。稜線を境に調整方向を変えている様子がうかがわれる。

⑤墓前部

羨門部で段差15cmほどの段をなして扇型の小さなテラスをつくっているが、当初からあったものか、岩盤の崩落によるものか判断し難い。その前面は段差約90cmほどの段をなし、幅80~90cmの緩斜面（b群の方へ連続しており、墓道の可能性もある）があり、さらに自然の急斜面へと連続する。

⑥遺物

a) 出土状態

土器・装身具・鉄製品が出土しているが、特に装身具が豊富である。土器の多くは玄門付近に崩壊した封鎖石の上や間に検出され、おそらく本来の位置から後世の盗掘等の際にかき出されたものと思われる。玉類の多くも埋土中から検出されたもので元の位置を知ることができないが、出土位置が分かるものは玄室奥壁寄りの右手側に集中し、これらは遺体の位置から考えても本来の位置からあまり動いていないと考えられる。

b) 土器

第12図2-1~2-4に図示した。いずれも玄門付近の封鎖石とともに検出されたものである。2-1は瀬戸・美濃窯産の茶碗で、外面に大輪の花と枝、底部内面に五弁花を手描きしている。18世紀後半から19世紀初頭のものと考えられる。

2-2・2-3は須恵器平瓶である。2-2の体部は全体的に丸みがあり、肩部から体部にかけての屈曲も弱い。肩部に円形の貼付文を1個配する。底部は未調整である。口頭部はやや外反して開く。2-3は体部破片で、比較的偏平な器形を呈し、肩部から体部にかけて大きく屈曲する。体部下半から底部中央まで回転ヘラ削りを施し、底部中央は平らに仕上げている。2-4は脚付長頸瓶の体部である。肩部から体部にかけて3条の沈線を施し、体部には櫛刺突文を施している。

c) 装身具

出土した玉の種類、数とともに最も多く、ガラス玉7、ガラス小玉1、勾玉5、切子玉1、管玉1が検出されている。第26図1-2~1-7・1-9のガラス玉は外径（最大値）5.8~8.0mmで、色調はスカイブルーないしぶルブルーである。このうち1-2~1-6についてはガラス玉の製作技法が明確に観察できる。1-2~1-5は管切法、1-6は巻付法によるものである。1-6を除き、孔のある両面が平坦になっているのはこれら製作技法の違いによるところが大きい。1-8のガラス小玉はガラス玉に比べ径がひとまわり小さいが、これもスカイブルーを呈する。

1-10~1-14は瑪瑙製の勾玉である。最大長は21.0~31.1mm、重量は1-12が3.7gとやや小振りである以外、法量的に大きな差はなくほとんど揃っている。形態的見ると、1-10は「C」字形の曲線で均整のとれた形をしているが、1-11~1-14は背部に丸みをもっているが腹部は「C」字形~「コ」字形に近い特徴がある。頭部を大きく残し、尾端を細く尖らせている。断面はいずれも両側面の幅が狭い橢円形になっている。仕上げ調整の点では背部、腹部の調整・研磨が丁寧であるのに対し、側面には剥離痕や面取りが残り研磨の粗さが目立つ。穿孔形態はどの勾玉も共通しており、片側面（右方向、左方向）から穿孔を始め、穿孔が進んだところで他面側に抉りをいれて貫通させている。この穿孔方法はB-a-1号横

穴の勾玉に限らず他の勾玉、管玉、切子玉にも見られる。1-11～1-12の勾玉は4・5のガラス玉とともに玄室内中央から北寄りの床面に集中して検出されている。

1-15は水晶製の切子玉で横穴玄門付近から出土した。比較的の稜のはっきりした縦・横六角形の六面体を呈する。孔は端部面の広い方から片側穿孔され、下端面から僅かに抉られて完結している。1-16の管玉もおよそ片側穿孔されたものであろう。濃い深緑色を呈するが材質は良質な輝緑凝灰岩かと思われる。穿孔口を一部欠損するものの、ほぼ完形品であり、表面は光沢をもつほど磨かれている。管玉は玄室内のほぼ中央で検出しているが、今回の調査ではこの1点のみである。

d) 鉄製品

小破片であるが、第16図1-11と1-12に示した。1-11は小型刀子の鋒部分であろうか。幅6.5mmと狭く、背幅3mmの平背平造である。1-12は1-11と外見上よく似ているが、断面形状をみると根元側は方形をなしており、後藤守一氏分類による片開片刃箭式の鐵と考えられる。現存長5.1cm、鐵身長3.7cm、幅7.8mm、厚さ2mmである。

⑦ 製造年代・追葬

蓋環の出土がなく、製造年代を判断し難いが、2-4の長頸瓶や平瓶から、少なくとも遠考研編年IV期には営まれていたと考えられる。

2) B-a-2号横穴（第11図、図版6）

① 保存状態

調査開始前から開口しており、事前調査によって存在が確認されていた横穴である。玄室は天井部の剥落を除けばほぼ良好に残っているが、羨道部から玄室開口部にかけて上部が崩落している。

② 玄室

ほぼ円形に近いが、奥壁・右側壁に若干直線的な部分も見られ、意識としては隅丸方形ベースにあつたものと思われる。両側壁が狭まりながらだらだらと羨道部に連続しているため玄門位置は不明瞭である。全長2.64m、奥壁部幅2.00m、中央部幅2.61m、開口部幅1.97mを測り、主軸方位はN-54°-Wである。断面形はドーム型を呈し、中央部の高さは1.42mである。

床面は斜行する岩盤層による段々を除けばほぼ平坦で、わずかに奥壁から開口部にかけて傾斜している。傾斜角は4.5°である。壁溝や特別な埋葬施設は認められない。奥壁は中央部にやや直線的な部分が認められるものの、両側壁・天井部との境は判断し難い。

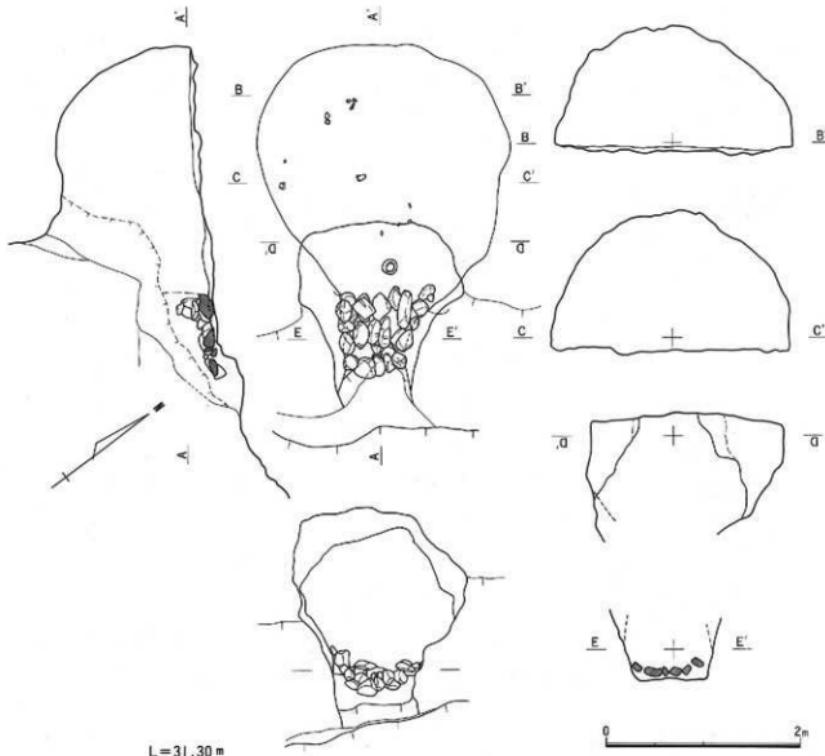
③ 羨道部

上部が崩壊しているため、断面形や高さは不明である。玄門部幅1.01m、中央部幅0.64m、羨門部幅0.75mを測る。左側は直線的で玄室左側壁との区別を比較的明瞭に判断できるが、右側は弧を描いて玄室右側壁に連続するため玄門位置は不明瞭である。

封鎖石の残りはあまりよくなく、ほぼ1段分しか残っていない。羨門から奥95cmの範囲に長径30cm、短径15cmほどの長楕円形の河原石を、長軸を横穴主軸に平行させて3列に並べている様子がうかがわれ、石積みの1段目の状況をよく保っている。

④ 剥削方法・工具

壁面は全体的に風化が激しく、整痕・調整痕の残りはよくない。整痕としては幅2cmほどで先端が丸い刺突痕が奥壁・両側壁にほぼ全体的に認められるが、幅1cmでやはり先端が丸い細い工具の削り痕も左側壁の一部に見られる。調整痕もわずかずつではあるが壁部にほぼ全体的に観察される。右側壁上部に比較的残りのよい部分があり、それによれば幅6cmで先端が弧状の刃線を持つ幅広の工具を用いて細かい連続的な運動により削り取っている。整痕・調整痕とも方向は右上から左下へ打ち込んでいる。



第11図 B-a-2号横穴実測図

⑤墓前部

狭門部に内側に湾曲した段差20cmほどの小さなテラスをつくるが、本来的なものか岩盤層の崩落によるものか判断し難い。狭門前面は段差50cmほどの段をなして幅60cmほどの緩傾斜（a-1号横穴・b-1号横穴に連続し、あるいは墓道をなすか）につながり、さらに自然の岩盤の急傾斜に連続していく。

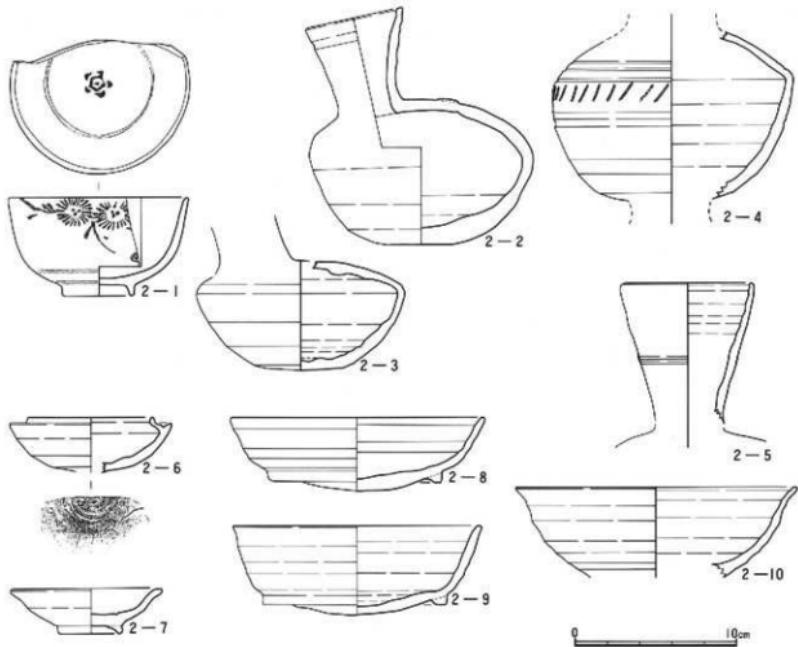
⑥遺物

a) 出土状態

土器・鉄製品・耳環を出土している。いずれも玄室内の覆土および排土中から検出されている。2-7の山茶塊小塊は覆土上部からの出土である。

b) 土器

第12図2-5～2-10に図示した。2-6は須恵器环身である。最大径10cmと小さく、底部は丸味を持つが比較的偏平である。体部下半から回転ヘラ削りされ、底部にヘラ記号「+」がある。立ち上がりは短く、著しく内傾し、端部は外反して上を向く。



第12図 出土土器実測図 (2) B-a-1 (1~4) B-a-2 (5~10)

第12図出土土器実測図 (2) 法量表

(単位: cm)

No.	遺構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	B-a-1号横穴	近世陶	茶碗	11.0	6.1	4.1	乳白色	2/3	
2	B-a-1号横穴	須恵器	平瓶	5.8	14.7		灰白色	ほぼ完形	34-1
3	B-a-1号横穴	須恵器	平瓶				灰白色	底体部1/2	
4	B-a-1号横穴	須恵器	脚付長頸壺				灰白色	体部2/3	
5	B-a-2号横穴	須恵器	長頸瓶	8.0			緑灰色	口縁1/2	
6	B-a-2号横穴	須恵器	环身	7.4/10.0	3.4		青灰色	1/2	24-1
7	B-a-2号横穴	山茶塚	小塊	9.0	2.8	3.8	灰白色	完形	37-1
8	B-a-2号横穴	須恵器	环身	15.4	4.5	10.2	灰色	ほぼ完形	30-12
9	B-a-2号横穴	須恵器	环身	15.2	5.5	11.3	灰白色	完形	31-1
10	B-a-2号横穴	須恵器	环身	17.4			明緑灰色	1/2	

2-8・2-9は高台付环身で、ともに底部が丸く、高台より下に出るタイプである。底部には回転ヘラ削りを施す。2-8は器高が低く、口縁部は直線的に外に開く。2-9はやや深く、口縁端部はわずかに外反する。2-10は口径17.4cmと大型で、口縁端部を外反させ、底部を欠くが無蓋の無台环身と考えられる。

2-5は長頸壺の口頸部と思われる。単純にハの字状に開くもので、中央部に2条の浅い沈線が施される。口縁端部内面にも浅い沈線がある。

2-7は山茶焼の小塊である。底部に回転糸切り痕を残し、断面三角形の高台を貼り付ける。口縁端部は外反させて外に引き出す。12世紀後半のものと考えられる。

c) 裝身具

第26図1-17の耳環が排土中から1点検出されたのみである。金箔は剥落しており銅芯も表面が剝離してはいるが保存状態は良い。外径28.8mmと本横穴群のなかでは中型品に属する。

d) 鉄製品

第16図1-13～1-15に図示した。1-13は直刀の破片である。刃部の磨耗が激しいが平背平造で幅2.7cm、背幅4.5mmである。1-14はおそらく刀の鍔であろう。幅10.4mm、厚さ2mmを測る。1-15は刀子である。刀身上部を欠くが、鉢部は残る。刀身は平背平造で幅14.6mm、背幅4.3mm、なだらかに茎に連続する背関を有し、刃闇はない。茎は端部に向かって次第に幅・厚さとも細くなり、端部は丸くしている。

⑦築造年代・追葬

出土した須恵器蓋坏類は、当横穴群の分類でE-1類が1点、あとはI類の坏身である。したがって遠考研編年IV期前半、7世紀中葉に築造され、V期前葉、8世紀前葉に追葬がなされたと考えられる。しかし出土資料が少なく、明確には断定できない。12世紀後半に再利用されている。

3) B-b-1号横穴（第13図 図版7・8）

①保存状態

調査開始前から開口しており、事前調査の段階で確認されていた。B-b-2号横穴と接近してつくられており、接する部分を中心に崩壊が進んでいる。このため羨道部の上部と玄室天井部の1/3までは崩落して失われており、床面の土砂の堆積が非常に厚く、遺物の残りは良好であった。左側壁の一部も剥落し、B-b-2号横穴に接する右側壁上部は失われている。

②玄室

平面形は隅丸方形を意識しているが、B-b-2号横穴との関係で歪みが生じている。玄室の主軸方向を奥壁に直交し右側壁に沿ったラインに設定すると、羨道部の中心線はこの主軸線より約10°右に傾いた方向になる。これはB-b-2号横穴を避けるため玄室を左に傾けて掘削した結果と思われる。このため玄室左側壁は玄門に向かって狭まり、玄門でわずかに屈曲して羨道部に連続する。右側壁では一端開口部で内側に屈曲した後そのままだらだらと羨道部につながるため、玄門の位置が不明瞭となっている。玄室全長2.48m、奥壁部幅1.92m、中央部幅2.14m、開口部幅1.70mである。主軸方位はN-63°-Wである。断面形はドーム型を呈し、中央部での高さは1.27mを測る。

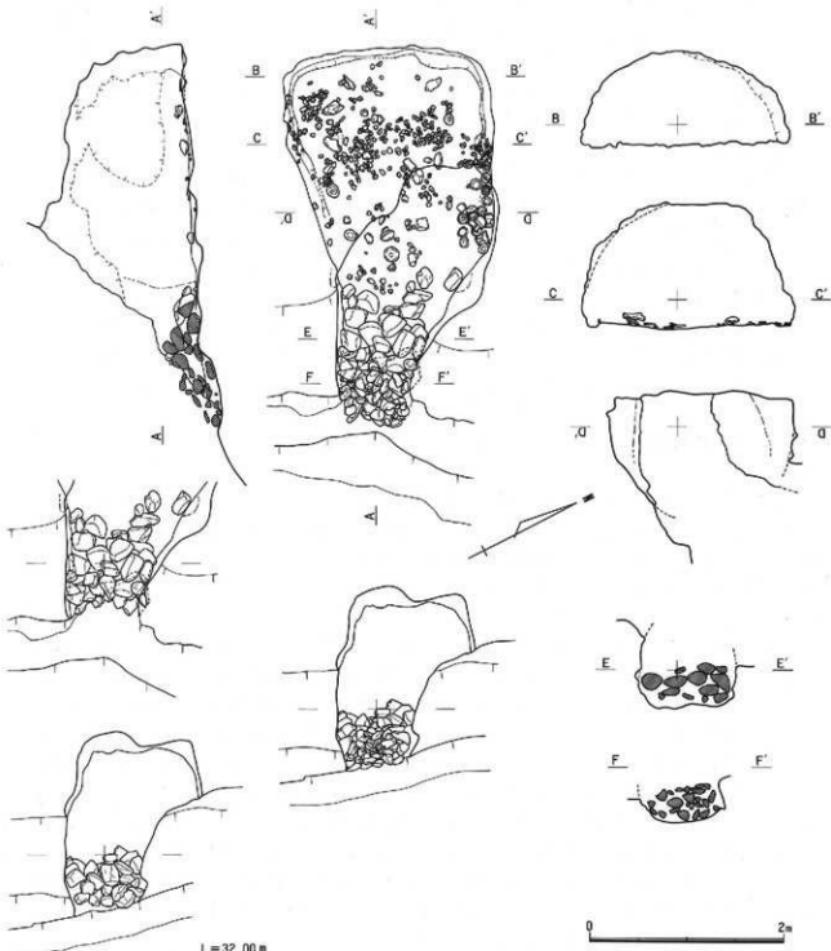
床面は斜行する岩盤層によって生ずる段々があるが、全体的には平坦で奥壁から開口部に向けてわずかに傾斜している。傾斜角は3°である。奥壁から左右両側壁にかけて幅6~10cmで、深さは5cmほどの壁溝がめぐっている。奥壁は、床面近くでは比較的直線的で、左右両側壁との境も判断できるが、天井に向かって緩やかに内湾していく、天井部との境は明瞭ではない。

埋葬施設は砾床であるが、やや床面全体に散乱する印象がある。それでも奥壁寄りに南北方向約2m、東西方向約1mの範囲で集中する範囲があり、元の位置を推定させる。砾は径2~3cmの河原石である。床面にはこれらの小砾とは別に径10~15cmの大きな河原石が7個散在している。位置や大きさからみると封鎖石とは考えにくいことから、元は棺座として用いられていた可能性があると思われる。

③羨道部

玄室主軸に沿った方向で計測すると、全長1.15m、玄門部幅1.20m、中央部幅0.84m、羨門部幅0.72mである。羨門に向かって狭まる平面形をとる。断面形は不明である。

封鎖石は比較的残りがよく、羨門から奥1.3mの範囲に高さ40cmまで残っていた。羨門から50cmの範囲

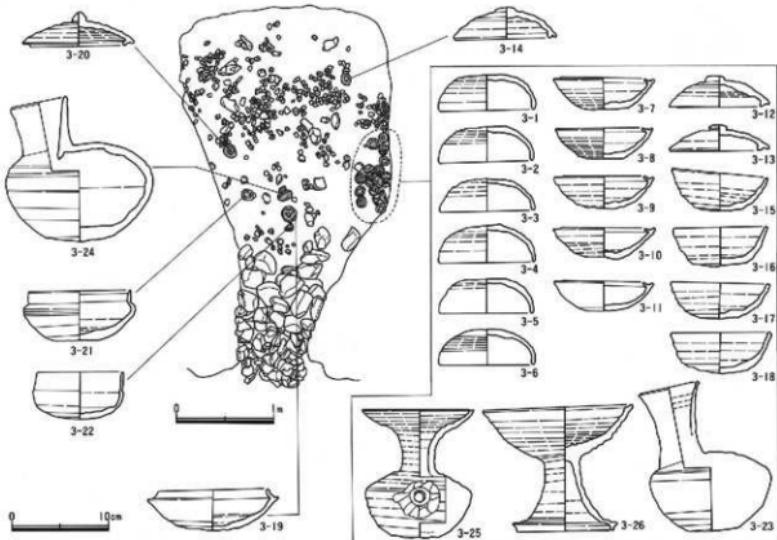


第13図 H-b-1号横穴実測図

までは径8~15cmほどの河原石を使用しているのに対して、その奥の石積みは径20~30cmと大きく、明瞭に区別される。おそらく手前の石積みは追葬の際の2次的な封鎖石であろうと思われる。奥の石積みは3段分ほど残っているが、数個の石が内側に崩れている様子がうかがわれる。

④ 剥削方法・工具

全体的に壁面の風化が激しく、工具痕の残りは非常に悪い。奥壁および右側壁に若干刺突痕が認められ、幅2~3cmのものと幅1.5cmほどのものとがあるが、果たして異なる工具によるものかは判断し難い。



第14図 B-b-1号横穴土器出土状況

調整についてはほとんど分からぬ。

⑤墓前部

羨門部に段差10cmほど下がって扇型の小さなテラスがつくられるが、当初からあったものかはわからぬ。その前面は幅30~50cmほどの狭い平坦面（斜行する岩盤層に沿って崩落したために生じたものであろう）、段差40cmほどの急傾斜、幅1mほどの緩傾斜（B-a-1号横穴まで通じ、墓道の可能性がある）、自然の急傾斜へと連続していく。

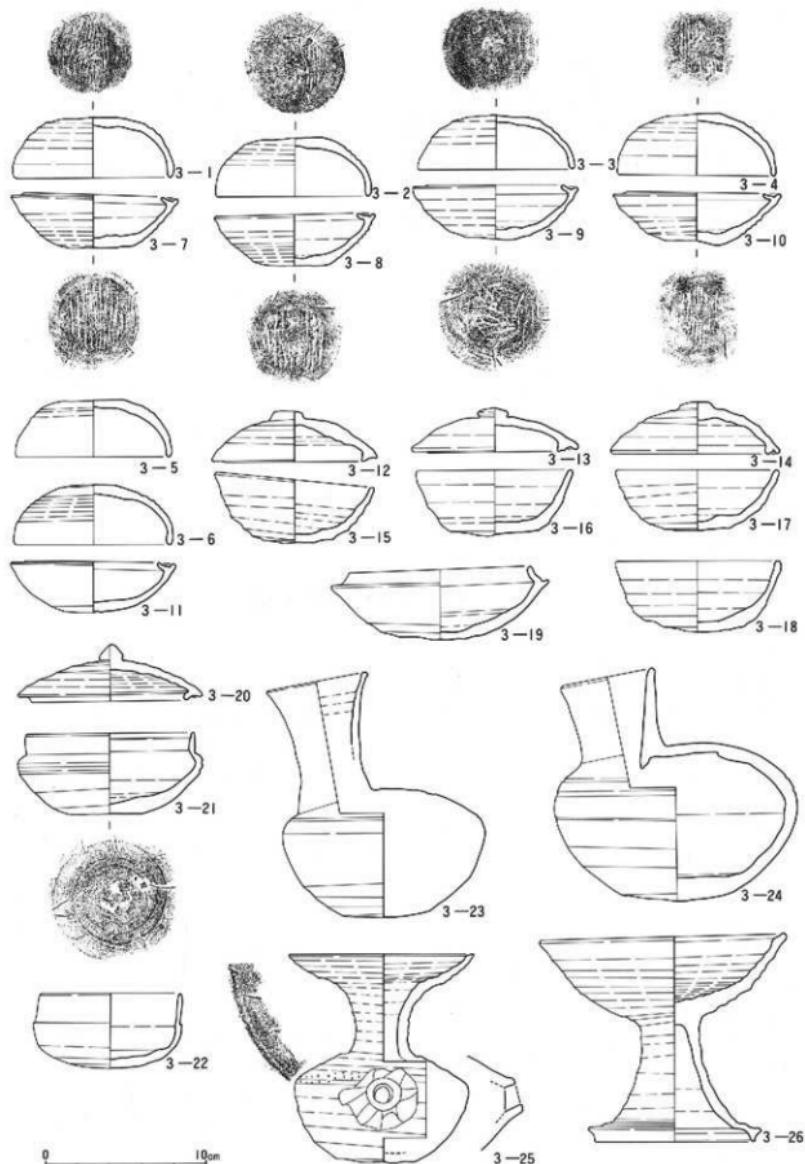
⑥遺物

a) 出土状態

遺物は良好に残る。大半は須恵器で、完形品かほぼ完形品で26点を数える。鉄製品は若干あり、装身具としてはガラス小玉が排土の洗浄により1個だけ検出されている。須恵器は右側壁玄門寄りに20個体、片づけられたように集積し、そのほかは玄室内に散在している。第14図にその状態を図示した。鉄製品は玄室奥壁よりの縁の間に散らばっていた。

b) 土器

第15図に図示した。すべて須恵器である。3-1~3-6の環蓋は、口径9.3~9.7cmでほとんど同型である。全体に丸味があり半球形を呈するが、天井部が比較的平坦でやや偏平である。口縁部はやや内湾気味となる。3-1~3-5は天井部中央をヘラ切りのあと軽くなでつけ、中央部に板等を押し付けたような平行タタキ目状の痕を残している。少なくとも数回施され、一部は格子目をなす。ただし内面にアチ具痕は見られず、あるいは半乾きのうちに板等に置いた痕であろうか。とすれば数回置き換えていることになる。3-6の天井部はヘラ切り未調整である。3-7~3-11の环身は最大径10.0~10.5cmで、上記の蓋と対をなすも



第15図 出土土器実測図 (3) B-b-1

第15回出土土器実測図(3) 法量表

(単位:cm)

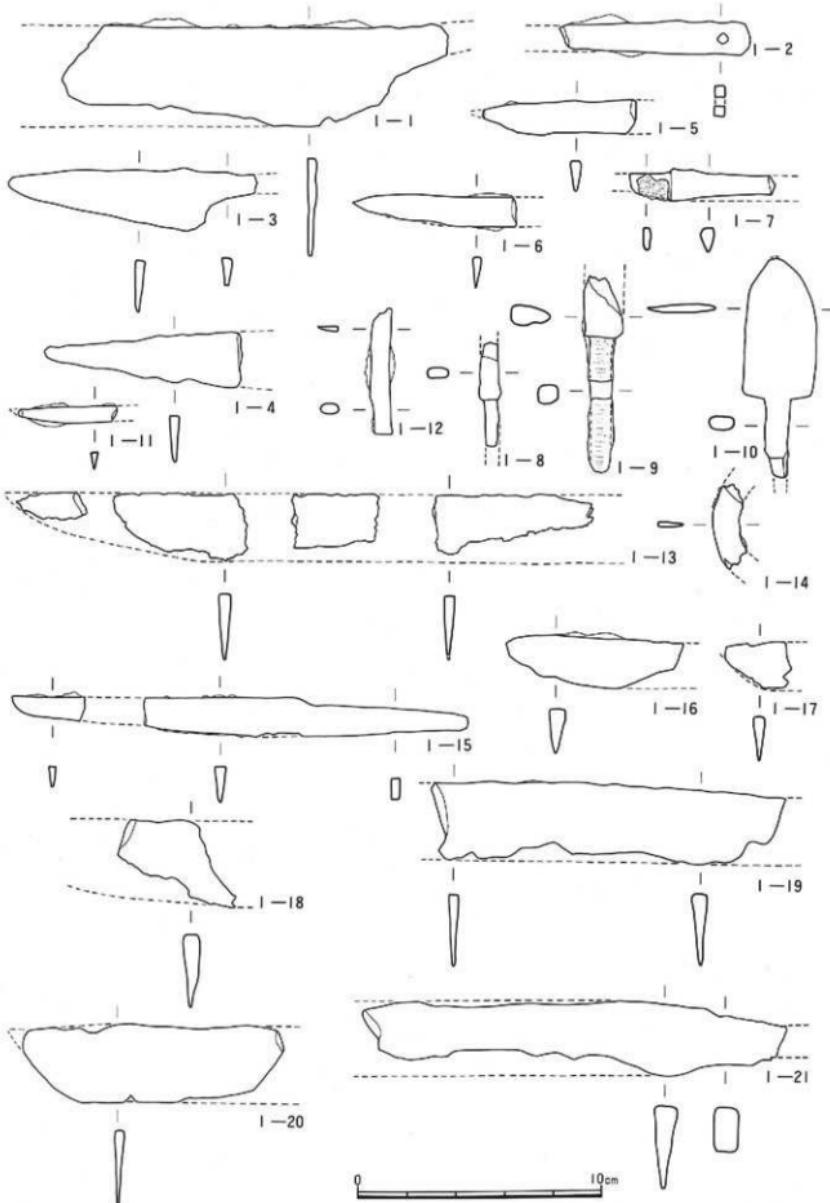
No.	遺構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	9.6	3.8		青灰色	完形	21-5
2	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	9.3	3.6		暗青灰色	完形	21-6
3	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	9.5	3.4		暗青灰色	完形	21-7
4	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	9.7	3.8		暗青灰色	完形	21-8
5	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	9.5	3.5		暗青灰色	完形	21-9
6	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	9.5	3.7		暗青灰色	完形	21-10
7	B-b-1号横穴	須恵器	环身	8.5/10.4	3.4		暗青灰色	完形	24-2
8	B-b-1号横穴	須恵器	环身	8.3/10.0	3.3		暗青灰色	完形	24-3
9	B-b-1号横穴	須恵器	环身	8.3/10.2	3.4		暗青灰色	完形	24-4
10	B-b-1号横穴	須恵器	环身	8.4/10.5	3.35		暗青灰色	完形	24-5
11	B-b-1号横穴	須恵器	环身	8.2/10.3	3.1		暗青灰色	完形	24-6
12	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	8.6/10.2	3.15		青灰色	完形	27-11
13	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	8.1/10.3	2.7		灰白色	完形	27-12
14	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	8.8/10.6	3.2		灰色	完形	28-1
15	B-b-1号横穴	須恵器	环身	9.8	4.3		灰色	完形	29-4
16	B-b-1号横穴	須恵器	环身	9.6	4.1		灰色	完形	29-5
17	B-b-1号横穴	須恵器	环身	9.8	3.8		灰色	完形	29-6
18	B-b-1号横穴	須恵器	环身	10.2	4.4		灰白色	ほぼ完形	29-7
19	B-b-1号横穴	須恵器	环身	11.1/13.5	4.3		灰白色	完形	24-7
20	B-b-1号横穴	須恵器	环蓋	9.6/11.4	3.5		青灰色	完形	28.2
21	B-b-1号横穴	須恵器	短頸壺	10.3	5.0		灰色	完形	32-5
22	B-b-1号横穴	須恵器	短頸壺	8.6	4.7		灰色	ほぼ完形	32-6
23	B-b-1号横穴	須恵器	平瓶	6.0	15.2		灰色	完形	34-2
24	B-b-1号横穴	須恵器	平瓶	5.6	14.4		灰白色	ほぼ完形	34-3
25	B-b-1号横穴	須恵器	起	11.0	12.8		灰白色	完形	33-6
26	B-b-1号横穴	須恵器	高環	15.0	12.8	9.8	灰白色	完形	33-1

のである。底部は丸味があるが、器高が低くやや偏平である。立ち上がりは短く、著しく内傾し、受け部とほぼ同じ高さにしかならない。3-7~3-10の底部調整は3-1~3-5の蓋天井部と同様の状況を示し、3-11はヘラ切り未調整である。これらの蓋环は、いずれも黒灰色に近い暗青灰色で、胎土も同一である。調整法からみても、一括して同一の窯で生産された可能性が高い。

3-12~3-14は天井部中央につまみを有し、口縁部内面にかえりの付く环蓋である。最大径10.2~10.6cmでほとんど同型だが、やや3-13の器高が低い。3-12~3-14のつまみは偏平なボタン状、3-13は宝珠状だが偏平である。かえりはごく短く断面三角形を呈し、口縁端部からわずかに下に出る程度である。3-15~3-18は上記の蓋と組み合せとなる环身である。口径10cm前後の無台环身で、3-16は底部の平坦面がやや広く箱型に近いが、それ以外は底部が丸く、口径に比べて深みがあり半球形を呈する。口縁部は比較的直線的に外に開く。器厚は厚い。体部下端から底部中央まで回転ヘラ削りが施される。3-20の蓋は最大径11.4cmと3-12~3-14よりやや大きく、乳頭状のつまみを有し、かえりは口縁端部よりやや下に出る。

3-19の环身は最大径13.5cmと大きく、底部は丸いが全体的には偏平な器形を呈する。立ち上がりは短く外反しながら内傾する。体部下半には回転ヘラ削りを施すが、底部は未調整である。底部内面に仕上げナデを残している。

3-21は短頸壺あるいは短頸壺とすべきか。比較的浅く偏平な体部に短い口縁部が直立する。口縁端部内面には浅い段がある。体部上半には2条の明瞭な沈線がある。底部にはヘラ記号「-」がある。3-22は短頸壺で、半球形の体部から明瞭な稜を経て比較的長い口縁部が直立する。いずれも体部下半から底



第16図 出土鉄製品実測図 (1) A-1 A-2 B-3 B-a-1 B-a-2 B-b-1

部中央まで丁寧に回転ヘラ削りを施している。

3-23・3-24は平瓶である。丸味のある体部を持ち、肩部と体部の境に沈線を施す。体部下半から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りを行なっている。3-23の口縁部は器厚が薄く、長く外反しながら伸びるので対して、3-24のそれは器厚が厚く、短く直線的にハの字状に開くものである。3-25は注口部が突出する足で、肩部と体部の境に櫛刺突文を施し、体部下半から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りを行なっている。口縁部はわずかに内湾しながら大きく開き、端部は上部を面取りして断面三角形に仕上げている。3-26の高杯は、口縁端部をわずかに外傾させて内傾面を面取りし、脚部端部は鋭く折り曲げ断面三角形に仕上げている。

c) 装身具

排水土中から第26図1-18の微小なガラス小玉が1点検出された。外径3.5×3.7mm、孔径1.0mmと非常に小さいが丁寧に整形されている。

d) 鉄製品

図示し得るものは第16図1-16~1-20に示した。いずれも平背平造の直刀の破片と考えられる。1-16・1-17は刀身鋒部と思われるが、幅2cm前後とやや細く、刀子あるいは短刀であろうか。1-18~1-20は刀身の一部、1-21は刀身から茎にかけての部分である。1-21の刀身刃部は磨耗あるいは腐食により大きく内側に湾曲している。背闊・刃闊ともなだらかに茎に向かって狭まるので、茎は断面方形で幅1.8cm、厚さ1.0cmである。

⑦ 築造年代・追葬

出土した須恵器蓋坏類は、当横穴群の分類でB-3類が1点、あとはE-3a類、F-2類、F-3類である。このうちB-3類の3-19は遠考研編年Ⅲ期後半に属するが、第14図の出土状態から分かるように、3-24の平瓶などとともに右袖部の集積から離れてしかも床面から浮いた状態で検出されたこと、B-b-2号の坏身4-1・4-2と良く似ていることなどから、壇の壁面が崩壊しているB-b-2号横穴からの混入と判断できよう。とすれば、B-b-1号横穴の築造年代は、右袖部の集積する土器から、遠考研編年Ⅳ期後半、7世紀中葉から後葉と考えられる。追葬は須恵器からは判断できないが、土器が片づけられている状況からみて、副葬品を持たない追葬が存在したと考えられる。

4) B-b-2号横穴（第17図 図版7・8）

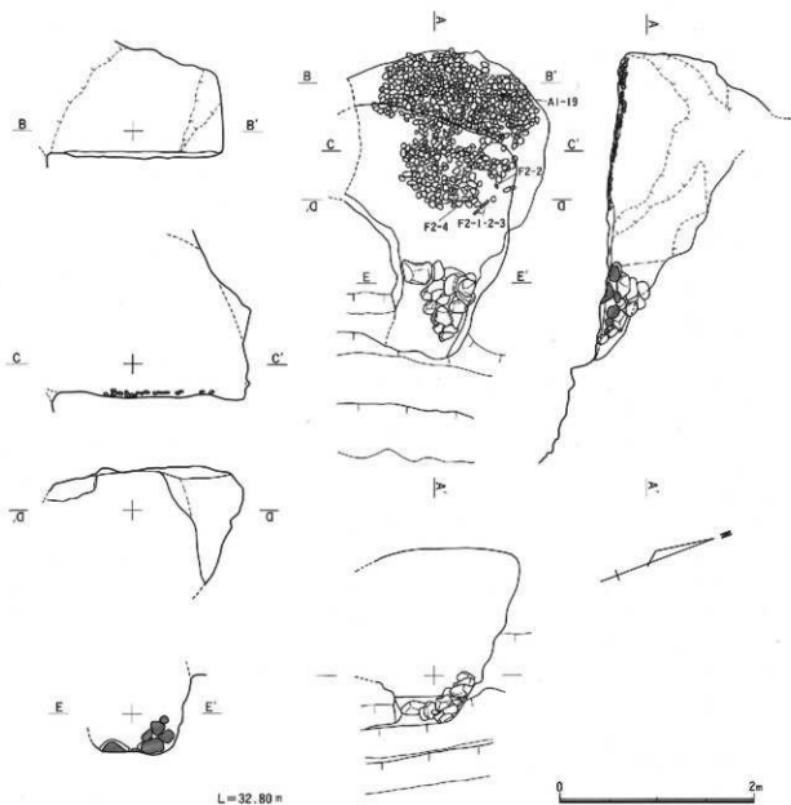
① 保存状態

調査開始前から開口しており、事前調査でその存在が確認されていた横穴である。崩落が激しく、羨道部・天井部・左側壁はほとんど失われており、左側はB-b-1号横穴につながっている。右側壁も大きく剥落している。遺物・封鎖石の残りもありよくない。

② 玄室

平面形は若干横長の楕円形を呈しているが、右側壁にわずかに直線的な部分も認められる。調査時に設定した玄室主軸方向に対して羨道部は19°30'左に傾いた方向に向かって開いている。このため特に右側では玄門位置が不明瞭となっている。右側壁の直線的な部分と羨道部の主軸はほぼ平行するため、あるいは本来の主軸はこのラインで設定され、左側が広がる片袖式を呈していたのかもしれない。玄室の全長2.08m、奥壁部幅推定1.80m、中央部幅推定2.20m、開口部幅1.52mを測る。調査時設定の主軸方位はN-70°-Wである。断面形は天井部が失われているため不明であるが、奥壁残存部上部の様子からドーム型と思われる。

床面には岩盤層の細かい段々があるが、全体的には平坦で、奥壁から開口部にかけて傾斜角4.5°を持って傾斜している。壁溝等の施設は伴わない。奥壁は1.05mの高さまで残っているが、全体に曲線的で、右



第17図 B-b-2号横穴実測図

側壁・天井部との境は不明瞭である。

埋葬施設としては径5cmほどの河原石を敷き詰めた疊床が良好に残っていた。疊床は幅1.60m、奥壁から1.55mの範囲に隅丸の三角形を呈し、特に奥壁から75cmの範囲には長方形に隙間なく丁寧に敷かれており、この部分に遺体が安置されたのであろう。右側壁寄りに耳環が検出されており、北側に頭が置かれたことをうかがわせている。

③羨道部

崩壊が激しく、特に左側では20cmほどの高さしか残っていない。羨道部中心線で計測すると全長1.02m、玄門部幅0.88m、中央部幅0.69m、羨門部幅0.64mを測る。封鎖石は右側に接する部分だけ3段分ほど残っている。羨門から75cmの範囲に径15~20cmの河原石を使って積み上げている。

④掘削方法・工具

壁面の残存が少なく、風化も激しいため、工具痕の残りは非常に悪い。わずかに奥壁に若干の刺突痕が認められるのみである。刺突痕は幅2cmほどで先端は丸いが、風化により不明瞭になっている。調整痕はまったくわからない。

⑤墓前部

羨門部は段差30cmほどの段をなし、幅50cmほどの緩傾斜につながる。これはB-b-1号横穴に連続するが、斜行する岩盤の崩落によって生じたものと思われる。その前面は段差40cmの急傾斜、幅90~100cmの緩傾斜へと連続する。この緩傾斜はB-a-1号まで連続しており、墓道の可能性もある。

⑥遺物

a) 出土状態

須恵器と鉄製品に加えて、耳環が1点出土している。須恵器はいずれも玄室右側壁玄門寄りの床上覆土から検出されたものである。鉄製品は疊床の手前右隅にまとまっていた。耳環は疊の間に検出された。

b) 土器

第19図4-1~4-8に図示した。いずれも須恵器である。4-1・4-2の壺身は最大径13cmほどで、底部に丸味はあるが平坦面が広く器高が低いためやや浅く偏平な器形を呈する。立ち上がりは外反しながら内傾し、4-1の端部は鋭くおさめている。体部下半から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りが施され、底部内面に仕上げナデが残る。4-3~4-5は最大径12cmほどで底部が丸く深みがある。立ち上がりは短くやや外反しながら内傾する。4-3と4-4は体部下端から底部中央まで回転ヘラ削りを施し、底部中央を平らに上げている。4-3の底部内面には指頭痕が残る。4-5はヘラ削りを行なわず、軽くなつて底部を平らにしている。底部にヘラ記号「-」がある。4-6は最大径11cmほどで器径に比べて器高4.9cmと非常に高く、底部は深く丸味を持つ。立ち上がりは短く、内傾し、外反はわずかである。体部下端から底部まで回転ヘラ削りを行なうが、底部中央をわずかに削り残している。底部内面に指頭痕が残る。

4-7は全体に偏平で口縁端部は水平に伸び、かえりは口縁端部から大きく内側に付く。かえりは比較的長めで、やや外反しながら内傾している。天井部中央に乳頭状のつまみが付く。天井部は回転ヘラ削りを行い、つまみの周囲には櫛刺突文が施される。壺類の蓋と考えられる。4-8は短頸壺あるいは短頸缶で、半球形の体部を持ち、口縁部は外反し、端部内面にわずかな段を持つ。底部内面と肩部に自然釉がかかっている。

c) 装身具

第26図1-19の耳環が1点、玄室内西壁ぎわ床面から出土した。銅芯が露出し、ややくずれかけている。外径29.0mmで、B-b-2号横穴から出土した耳環とほぼ同サイズである。

d) 鉄製品

第25図2-1~2-4に示している。2-1は直刀である。刀身上部を欠損するが、峰部破片は残っている、全長は不明であるが、刀身30cmに満たない程度とみられるため、短刀とすべきであろう。平背平造で、刃部の磨耗が激しいが、幅2.5cmほどで背幅6mmである。背闊・刃闊ともなだらかに茎に連続し、茎は刃部側にやや弯曲している。茎幅1.5cm、厚さ6mmである。2-1も同様の直刀の一部であろう。2-3は2-1につく鍔である。断面橢円形で、幅1.05cm、厚さ5mmを測る。2-4は厚さ1mm、幅1.5cmの板状金具を弧状に曲げたものであるが、内面に木質の付着が見られ、おそらく刀子などの着柄金具と思われる。

⑦築造年代・追葬

出土した須恵器蓋壺類は、当横穴群における分類でB-3類・C類・D-1類に分類される。遠考研編年III期後半からIV期前半にあたるが、B-3類・C類を蓄積とみてD-1類の時期に築造されたと考えれば、IV期前半、7世紀中葉の築造と考えられる。追葬はない。

5) B-b-3号横穴（第18図 図版9・10）

①保存状態

事前調査では確認されず、調査開始後、樹木伐採と斜面の表土除去を行なっていく過程で発見された横穴である。玄室内は天井にやや剥落がある他は比較的保存が良好だが、遺物は散乱しており、荒らされたような状態である。羨道部は前面がやや崩落しており、全体に短くなっている。

②玄室

奥壁と右側壁を見ると平面形としては隅丸の方形を意識しているようであるが、左側壁は湾曲し、両側壁からだらだらと羨道部に連続している。天井部からの連続をみても玄門位置は不明瞭で、羨道部と玄室の区別がつけにくい。羨道部は玄室主軸線に対して18°左に傾いた方向に向かって開いており、全体の形状は口の曲がった三角プラスコ型を呈している。玄室全長2.35m、奥壁部幅1.85m、中央部幅2.14m、開口部幅1.47mである。玄室の主軸方位はN-67°Wである。断面形はドーム型で、中央部の高さは1.56mを測る。

床面は斜行する岩盤層による細かい段々があるがほぼ平坦である。開口部に15cmほどの段差が存在するが、これは岩盤層の間隔に入る砂層を発掘の際に掘りすぎてしまったものと考えられる。わずかに羨道部にかけて傾斜しており、傾斜角は2°である。壁溝等の施設は認められない。奥壁は緩やかな弧状を呈し、両側壁との境は不明瞭である。床面から約1mの高さまでは比較的垂直に立ち上がり、そこから天井部に大きく湾曲している。

特に棺座・疊床等の埋葬施設は設けられておらず、遺物も後世の盗掘のためか散乱してしまっている。

③羨道部

羨門上部が崩壊しているが、後部をみると断面形はアーチ型で、高さは1.30mを測る。羨道中心線で計測すると全長1.77m、玄門部幅1.20m、中央部幅0.80m、羨門部幅0.42mで、羨門に向かって急速に狭まっている。

封鎖石は羨門から1.55mの範囲に35cmの高さで2段分ほど残っている。このうち羨門から50cmの範囲は径10~15cmの比較的小型の河原石を用いて雑然と積まれており、2次的な封鎖石と考えられる。また後方30cmの範囲も雑然としている上に石の下に遺物が挟まっていることから、中央部の石が内側に崩されたものと思われる。中央部分は長径25cm、短径15cmほどの河原石を選んで長軸を羨道主軸に平行させて3列に並べている様子がうかがわれ、これが本来の封鎖石であろう。

④掘削方法・工具

天井部は剥落しているため分からぬが、全体的に壁面の工具痕は良好に残っている。鑿状工具の痕には幅2cmほどの丸い刺突痕と、幅1.5cmの断面長方形を呈する削痕とが認められる。特に右側壁に先端形状・幅等がよく分かる痕を明瞭に残しており、それによれば、後者には先端形状が方形のものと丸いものとがある。先端方形の工具の削痕には2本の細い条痕があり、刃こぼれしている様子がうかがわれる。同じ幅1.5cmの削痕でも先端の丸いものにはこのような条痕は認められない。調整工具としては、幅10cmほどで先端が弧状を呈する幅広の工具を用いて、細かい動きで連続的に削り取っている。いずれの工具痕も基本的には右上から左下へ打ちおろしている。

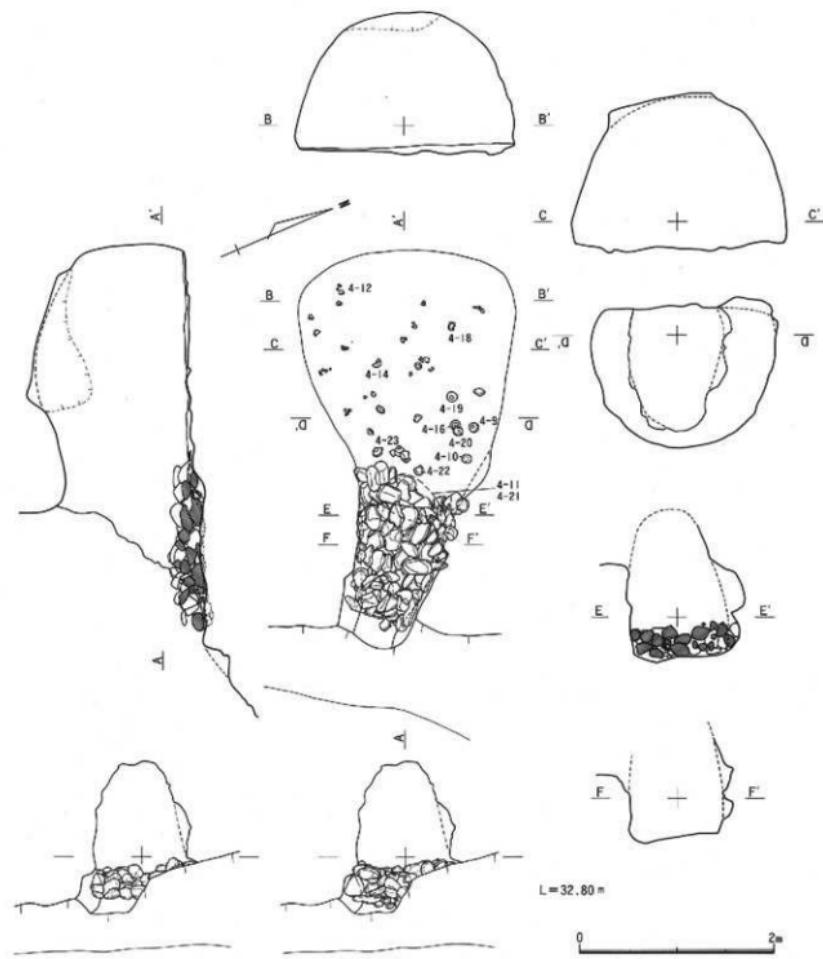
⑤墓前部

羨門前は60cmほどの段差をもつ急傾斜で下がり、その前はB-a-1号横穴まで連続して墓道の可能性がある緩斜面となり、さらに自然の急斜面へと連続する。

⑥遺物

a) 出土状態

須恵器は完形かそれに近いものが多く、玄室玄門寄りに散乱する。4-11・4-21などは玄室側に崩壊し

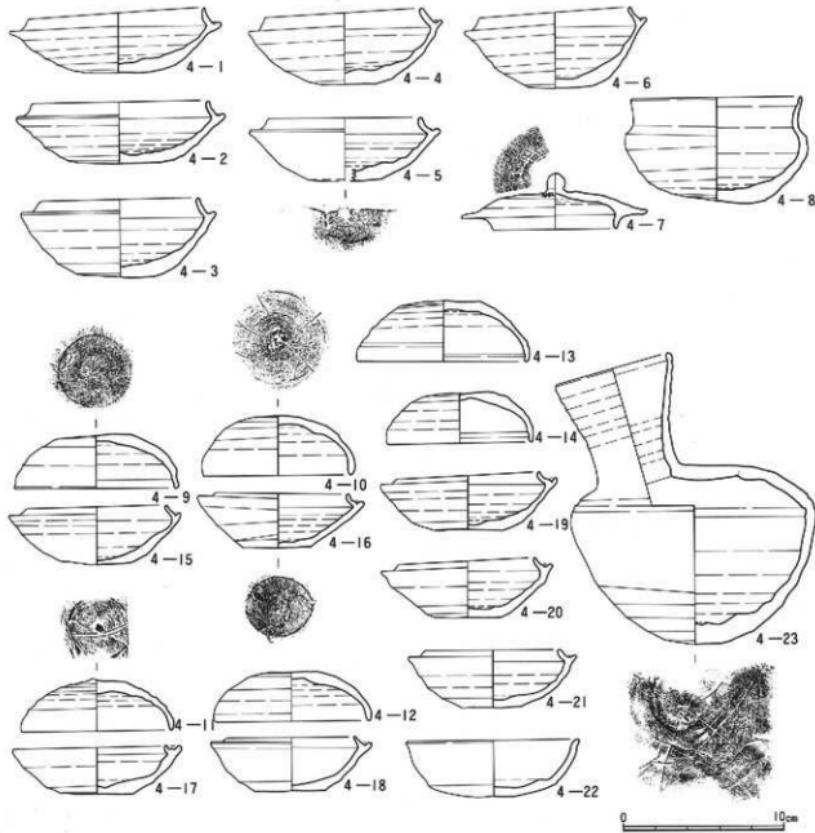


第18図 B-b-3号横穴実測図

た封鎖石の下に検出された。これらはいずれも原位置を維持したものではあるまい。鉄製品は小破片が若干あり、その他に勾玉が2点、玄室内の覆土から検出されている。

b) 土器

第19図4-9~4-23に示している。4-9~4-12と4-14の環蓋は口径8.9~10.0cmで、天井部は丸味があり、やや偏平な半球形を呈する。天井部上半を回転ヘラ削りし、中央部を平らにする。中央にわずかに削り残しがある。口縁部は内湾気味となるが、4-9は端部がわずかに外反する。4-9・4-10・4-11には天井部



第19図 出土土器実測図 (4) B-b-2 (1~8) B-b-3 (9~23)

にヘラ記号「-」がある。4-13は、器形は上記蓋と差異はないが、口径10.6cmとやや大きく、その分偏平な印象となる。口縁部はわずかに内湾し、天井部との境に浅い沈線が認められる。天井部中央に削り残しがあり、そこに平行タタキ目状の痕が残されている。

4-15~4-18と4-20・4-21の环身は、最大径10.0~10.6cmで、4-13以外の蓋と組み合せとなるものである。ほぼ同じ器形を呈するが、体部が直線的に開く4-16・4-20、丸味があり半球形を呈する4-21、底部の平坦面が広く浅く偏平な4-17などがある。体部下半から底部中央まで回転ヘラ削りが施され、底部中央を平らに仕上げる。中心部に削り残しが見られる。立ち上がりは大きく内傾し、端部を外反させるが、4-18は外反せず端部を強くなじで、断面三角形に仕上げている。4-17は立ち上がりが著しく短く、端部がわずかに上に向くのみで、受け部とほぼ同じ高さである。4-19もほぼ同じ器形を呈するが、最大径10.9cmとやや大きい。4-13の蓋とはぴったりとは組み合ない。底部は丸く、中央部まで丁寧に回転ヘラ削りし

第19回出土土器実測図(4) 法量表

(単位:cm)

No	遺構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	B-b-2号横穴	須恵器	壺身	10.9/13.1	4.1		明緑灰色	1/2	24-8
2	B-b-2号横穴	須恵器	壺身	10.8/13.0	3.9		明青灰色	完形	24-9
3	B-b-2号横穴	須恵器	壺身	9.6/12.1	4.5		暗灰色	口縁一部と体部	24-10
4	B-b-2号横穴	須恵器	壺身	9.7/12.1	4.4		灰白色	ほぼ完形	24-11
5	B-b-2号横穴	須恵器	壺身	9.4/11.9	3.9		暗灰色	1/4	24-12
6	B-b-2号横穴	須恵器	壺身	9.3/11.3	4.9		暗灰色	完形	25-1
7	B-b-2号横穴	須恵器	蓋	7.6/11.5	3.5		灰色	ほぼ完形	32-3
8	B-b-2号横穴	須恵器	短頸壺	10.5	6.6		明青灰色	完形	32-7
9	B-b-3号横穴	須恵器	壺蓋	10.0	3.5		灰色	完形	29-8
10	B-b-3号横穴	須恵器	壺蓋	9.0	3.7		明緑灰色	完形	21-11
11	B-b-3号横穴	須恵器	壺蓋	9.2	3.2		暗青灰色	1/2	21-12
12	B-b-3号横穴	須恵器	壺蓋	9.4	3.0		灰色	2/3	22-1
13	B-b-3号横穴	須恵器	壺蓋	10.6	3.8		灰色	口縁1/2と体部	22-2
14	B-b-3号横穴	須恵器	壺蓋	8.9	3.1		青灰色	完形	22-3
15	B-b-3号横穴	須恵器	壺身	8.6/10.3	3.6		灰色	ほぼ完形	25-2
16	B-b-3号横穴	須恵器	壺身	8.1/10.3	3.4		灰色	完形	25-3
17	B-b-3号横穴	須恵器	壺身	8.6/10.5	2.9		灰色	口縁3/4と体部	25-4
18	B-b-3号横穴	須恵器	壺身	7.8/10.0	3.3		灰色	ほぼ完形	25-5
19	B-b-3号横穴	須恵器	壺身	8.7/10.9	3.4		灰色	完形	25-6
20	B-b-3号横穴	須恵器	壺身	8.4/10.6	3.7		灰色	完形	25-7
21	B-b-3号横穴	須恵器	壺身	8.3/10.4	3.55		灰色	ほぼ完形	25-8
22	B-b-3号横穴	須恵器	壺身	10.5	3.5		灰白色	ほぼ完形	29-9
23	B-b-3号横穴	須恵器	平瓶	7.2	17.8		灰色	口縁3/4と体部	34-4

ている。

4-22はかえり付きの蓋が付く壺身である。底部が広く比較的偏平で、口縁部は内湾しながら開き、端部はわずかに外反する。底部と体部の境に稜が認められる。底部は幅広の回転ヘラ削りが1周し、ヘラの最後が体部まで抉っているままになっている。底部中央には平行タキ目あるいはハケ目状の痕が認められる。

4-23の平瓶は、肩部は比較的平坦だが、体部は深みがあり底部は丸い。肩部と体部の境には2条の浅い沈線がある。体部下半から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号「+」が描かれている。口頭部は長く、中央部から上が外反して開き、端部はわずかに内傾する。

c) 装身具

玄室覆土中から第26図1-20・1-21の瑪瑙製の勾玉2点が検出されている。法量・形態ともにB-a-1号横穴から出土した勾玉とほとんど同じものである。1-20は「コ」字形を呈し、1-21は「C」字形に近い。2点とも尾端が尖っている。1-20は完全な片側穿孔で貫通孔は孔径約1mmと狭い。

d) 鉄製品

小破片が多く、図示できるものは第25図2-5・2-6に図示している。いずれも断面方形で、鐵の籠被あるいは茎と考えられる。

⑦ 築造年代・追葬

出土した須恵器蓋壺類は、当横穴群の分類でD-2類・E-1類・F-4類に属する。遠考研編年では前2者はⅣ期前半、後者はⅣ期後半にあたる。したがって築造年代は7世紀中葉、7世紀後葉に1回追葬があったと考えられる。ただし、追葬と考えられる蓋壺が1点だけであることには問題が残る。

6) B-b-4号横穴 (第20図 図版10・11)

①保存状態

調査開始前から開口しており、事前調査によってその存在が知られた横穴である。斜面の崩壊が激しく、天井部、右側壁、羨道部上部は失われている。調査開始後しばらくして上方斜面がさらに崩壊してしまったため、上部を完全に除去して調査を進めた。奥壁、左側壁の上部も崩落している。早くから崩壊して土砂が厚く堆積していたためか、かえって遺物の残存状態は良好である。

②玄室

奥壁中点と玄門中点を結ぶ直線で全体の主軸を設定しているが、奥壁に直交するラインを玄室の主軸と考えれば、全体の主軸から16°右に傾いた方向を設定できる。この方向から見ると玄室の平面形は、右側壁がやや丸くなっているが、横長の隅丸長方形で、その右下が羨道部に向かって開口している。この玄室主軸方向で計測すると全長2.23m、奥壁部幅2.00m、中央部幅2.73m、開口部幅2.24mを測る。全体の主軸方位はN-35°W、玄室主軸方位はN-19°Wである。断面形は不明だが、奥壁や左側壁の様子からドーム型であろうと考えられる。

床面は斜行する岩盤層に伴う段々はあるものの、全体的にはほぼ平坦で、羨道部に向かって緩やかに傾斜している。傾斜角は2°である。左側壁から奥壁にかけて低いテラス状の部分があるが、特別な施設であるとは思われない。また左側壁寄りがやや窪んでいるが、これは調査時に岩盤層間層の砂層を掘りすぎたものであろう。奥壁右半から右側壁、羨道部右側を経て玄門まで壁溝がめぐっている。奥壁部で幅20cm、深さ10cm、右側壁部で幅10cm、深さ6~7cmを測る。右側壁開口部寄りでは大きく広がってしまうが、これも調査時の掘り過ぎの可能性がある。羨道部では幅6cm、深さ5cmで断面形が方形のしっかりした溝となっている。奥壁は高さ1.14m残存しているが、両側壁との境は崩落しているためよく分からぬ。中央部は比較的直線的であるが、天井部に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がる。

埋葬施設は躰床である。径2~3cmの河原石を敷き詰めたものであるが、全体的に散乱している上に奥壁寄りが空白となっており、本来の位置から動かされている可能性がある。その間に径20~30cmの河原石が6個散らばっており、棺座として用いられた可能性もあるが、封鎖石の一部が内部に転がつたものとも考えられ、断言はできない。

③羨道部

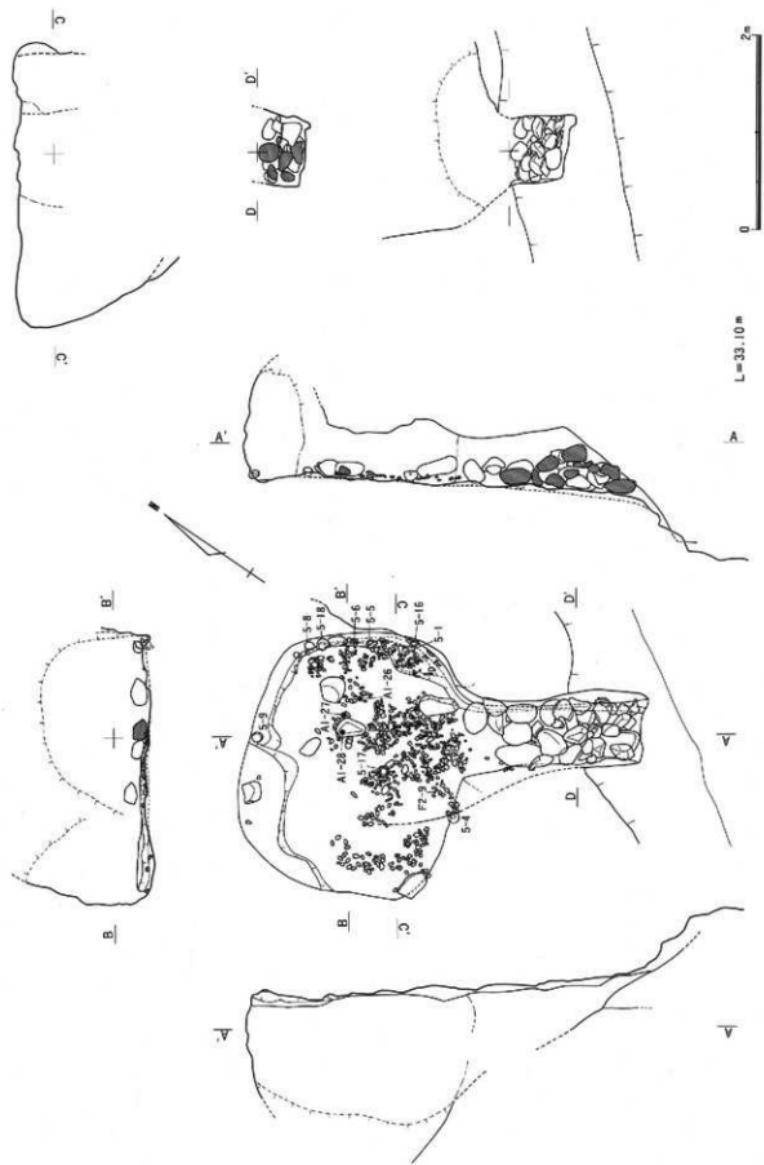
上部が失われており断面形は不明である。全長1.86m、玄門部幅0.80m、中央部幅0.60m、羨門部幅0.63mで、比較的細長い羨道である。玄室よりやや傾斜が大きく、傾斜角は5°である。封鎖石はやや内側に崩れているが、羨門から1.5mの範囲に残り、中央部で高さ46cm、2段分残存している。石は長径30~40cm、短径20cmの大型のものと径15~20cmほどのものとの2種類がある。おもに前者が下1段分にあって石の長軸を羨道部主軸に平行させて置かれているよう、後者はその上に比較的雑然と積まれている印象を受ける。おそらく前者の封鎖石がいったん崩された後で後者の石が積まれたものと思われる。

④掘削方法・工具

壁の崩壊と風化が激しく、工具痕は非常に残りが悪い。よくみると幅1.5cmで先端が丸い整状工具痕と幅2cmの丸い刺突痕が奥壁および左側壁に認められる。左側壁玄門付近では調整工具痕もわずかに観察される。不明瞭であるが、幅8cmほどの幅広の工具と思われる。

⑤墓前部

羨門から50cmの段差を経て幅1mほどの緩斜面となる。この緩斜面は、ここからB-a-1号横穴まで連続しており、墓道の可能性がある。その前面には40cmほどの段差を経て、B-b-5号横穴前につながる扇型の緩斜面があり、自然の急傾斜に連続する。この扇型の緩斜面のB-b-5号横穴との間に須恵器破片が散らばっており、当初どちらの横穴に属するものか分からなかったが、遺物の検討によりB-



第20図 8-b-4号横穴実測図

b - 4 号横穴のものと判断した。

⑥遺物

a) 出土状態

須恵器・装身具・鉄製品とも比較的豊富に残存している。須恵器は右側壁に沿って完形品が多く集積し(5-1・5-5・5-6・5-8・5-16・5-18)、破片は縫の間に散在している。またB-b-5号横穴との間の墓前部で検出された須恵器破片は、玄室の破片と接合するものもあり、当横穴のものと判断される(5-20以下に図示)。鉄製品・玉類は縫の間に散乱している。耳環が1点出土しており、写真も残っているがその後紛失した。

b) 土器

第21図5-1~5-19は玄室内出土土器で、いずれも須恵器である。5-1・5-2の壺蓋は、口径10.6~10.7cmでほぼ同型、天井部が丸く半球形を呈する。天井部上半に回転ヘラ削りを施し、中央部にヘラ記号「-」がある。天井部と口縁部との境に浅い沈線があり、口縁端部は丸く仕上げている。口縁端部内面にも沈線が認められる。

5-3・5-4の壺身は最大径11.5cm前後で、上記の蓋と対をなすと思われる。5-3は底部の平坦面が狭く深みがあるが、5-4はやや器高が低く、偏平である。とともに体部下端から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りが施され、底部にヘラ記号「-」を付ける。立ち上がりは短く、外反しながら大きく内傾するが、5-4は立ち上がりの器厚が特に薄く、受け部との間は沈線状に深くなる。5-5・5-6は最大径12cm以上でやや大きく、5-5は深みを持つが、底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りされて平らに仕上げている。立ち上がりは短く、やや外反しながら内傾する。

5-10~5-12はつまみの付くかえり付き蓋である。5-10・5-12は最大径12cmほどで、5-11は13cmほどを測る。5-10は上部をぐくが、比較的器高が高く、かえりは他の2点よりは長く、端部は外反して下を向き、口縁端部よりやや下に出る。5-11も天井部に丸味があり、中央が窪む偏平なつまみが付く。かえりは著しく短く、断面三角形で、口縁端部とほぼ同じレベルにとどまる。5-12は器高が低く偏平な器形で、偏平な宝珠状つまみが付く。かえりは短く、著しく内傾し、口縁端部からわずかに下に出る程度である。

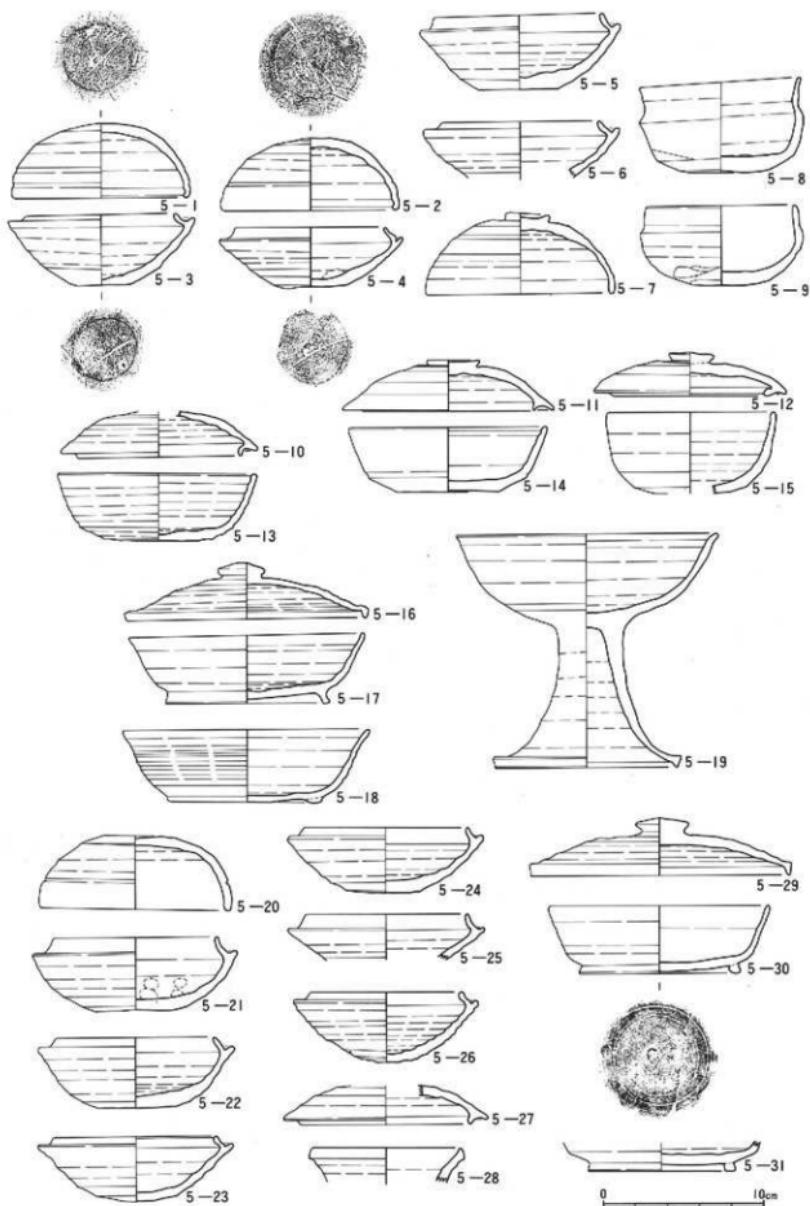
5-13~5-15は上記の蓋がそれぞれ付く壺身と考えられる。5-13・5-14はほぼ同様の器形で、底部の平坦面が広く、5-13は口縁部や内湾気味、5-14は直線的に開く。体部と底部との境には稜線が認められ、沈線が施される。底部は回転ヘラ削りによって平らに仕上げられ、5-13にはヘラ記号「-」がある。5-15は小破片で器形はあまり明確ではないが、口径のわりに器高が高く、全体に半球形を呈する。底部に回転ヘラ削りが施される。

5-16はかえりが消失した壺蓋で、径15cmほどを測る。口縁部をやや水平に引き出し、偏平な器形を呈する。天井部上半を同心円状にヘラ削りし、宝珠状つまみを付ける。口縁端部を内側に折り曲げ、受け部をつくっている。

5-17・5-18は高台の付く壺身である。5-17はやや丸底気味で、口縁部は比較的直線的に開く。高台は高く、ハの字状に開いている。5-18は平底に著しく低い高台が付く。体部は若干張り出し、口縁部はやや外反する。体部外面のノタ目が強い。

5-7は器高が高く、半球形を呈する。天井部大半を回転ヘラ削りし、中央が窪む偏平なつまみが付く。口縁部はやや内湾気味に下がる。高壺蓋と思われる。5-8・5-9は短頸堵で、やや偏平な半球形の体部を持ち、5-8は比較的長い口縁部が外反して伸び、5-9の口縁部は短く直立する。5-8は体部下端から底部にかけて回転ヘラ削りを施し、5-9は底部を手持ちヘラ削りによって調整している。5-19の高壺は、脚部端部を鏡く折り曲げて断面三角形に仕上げ、口縁端部をやや外反させるものである。

5-20~5-31は墓前部に散乱していた土器である。5-20の壺蓋は5-1・5-2と同類であるが、口縁端部内



第21図 出土土器実測図 (5) B-b-4

第21回出土土器実測図(5) 法量表

(単位: cm)

No.	造構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	B-b-4号横穴	須恵器	环蓋	10.7	4.5		青灰色	口縁5/6と体部	22-4
2	B-b-4号横穴	須恵器	环蓋	10.6	4.5		灰色	3/4	22 5
3	B-b-4号横穴	須恵器	环身	9.2/11.6	4.3		灰白色	2/3	25-9
4	B-b-4号横穴	須恵器	环身	9.3/11.5	3.7		暗青灰色	ほぼ完形	25-10
5	B-b-4号横穴	須恵器	环身	10.4/12.4	4.6		暗緑灰色	ほぼ完形	25-11
6	B-b-4号横穴	須恵器	环身	9.8/12.2			暗緑灰色	口縁1/2	25-12
7	B-b-4号横穴	須恵器	高环蓋	11.3	5.0		灰色	1/3	28-3
8	B-b-4号横穴	須恵器	短頸培	9.8	5.7		灰色	完形	32-8
9	B-b-4号横穴	須恵器	短頸培	9.1	8.5		灰白色	完形	32-4
10	B-b-4号横穴	須恵器	环蓋	10.0/12.2			灰色	口縁1/2	28-4
11	B-b-4号横穴	須恵器	环蓋	10.6/13.1	3.2		灰白色	1/2	28 5
12	B-b-4号横穴	須恵器	环蓋	9.5/12.0	2.7		浅黄色	口縁5/6と体部	28-6
13	B-b-4号横穴	須恵器	环身	12.2	4.2		灰色	口縁1/2体部2/3	31-2
14	B-b-4号横穴	須恵器	环身	12.2	4.0		灰色	口縁1/2底部1/4	31-3
15	B-b-4号横穴	須恵器	环身	10.3	5.0		灰白色	口縁1/8	
16	B-b-4号横穴	須恵器	环蓋	14.7	3.5		灰白色	完形	30-5
17	B-b-4号横穴	須恵器	环身	14.4	4.3	10.1	青灰色	2/3	31-4
18	B-b-4号横穴	須恵器	环身	15.1	4.6	9.4	灰色	1/2	31-5
19	B-b-4号横穴	須恵器	高环	16.1	14.3	11.1	灰白色	环部1/2脚部2/3	33-2
20	B-b-4号墓前	須恵器	环蓋	11.6	4.7		灰色	口縁3/4と体部	22-6
21	B-b-4号墓前	須恵器	环身	10.0/12.8	4.5		灰白色	2/3	26-1
22	B-b-4号墓前	須恵器	环身	9.7/12.2	4.4		緑灰色	ほぼ完形	26-2
23	B-b-4号墓前	須恵器	环身	10.1/12.2	4.0		灰白色	口縁1/4底部1/2	26-3
24	B-b-4号墓前	須恵器	环身	10.0/12.0	4.0		灰白色	3/5	26-4
25	B-b-4号墓前	須恵器	环身	10.0/12.2			黄灰色	口縁1/3	
26	B-b-4号墓前	須恵器	环身	9.3/11.4	4.3		灰色	口縁2/3と体部	26-5
27	B-b-4号墓前	須恵器	环蓋	10.5/12.6			黄灰色	口縁1/4	
28	B-b-4号墓前	須恵器	瓶	9.1			灰白色	口縁3/4	
29	B-b-4号墓前	須恵器	环蓋	15.9	3.5		灰白色	1/5	
30	B-b-4号墓前	須恵器	环身	13.5	4.25	10.0	灰白色	2/3	31-6
31	B-b-4号墓前	須恵器	鏡か			9.1	灰色	底部のみ	

面の沈線はない。5-21は最大径が13cmほどで、玄室内に同類が見られない。底部の平坦面がやや広く体部下端から底部中央まで回転ヘラ削りが施される。立ち上がりは短く、外反しながら内傾する。底部内面に指痕が残る。5-22は5-5・5-6に近い最大径を示すが、体部に丸味があつて深く、立ち上がりはあまり外反しない。底部にヘラ記号「=」がある。5-23～5-25も5-5・5-6に、また5-26は5-3に、最大径からみれば類型が求められるが、より底部が丸く仕上げられている。5-27の蓋は5-11とほぼ同型である。5-28は瓶類の口縁部であろう。5-29は口径16cmほどと大きく、弓張り状を呈し口縁部を水平に引き出さない。受け部は断面三角形でやや内傾する。5-30は平底の底部に断面四角形の高台が付く。高台はやや外に開き、外縁を接地面とする。底部を回転ヘラ削りしてヘラ記号「=」を付ける。5-31は鏡の底部と考えられる。

c) 装身具

第26図1-22～1-29の計8点の丸玉が出土している。このうち1-26～1-28は玄室内中央からやや北寄りの床面に散らばった状態で検出された。1-22～1-29はすべて丸玉の形態を持つものである。石材は肉眼で見る限り5種類ある。1-22・1-23は不純物の混じったような材質の黒色の丸玉である。穿孔部分に小

平坦面を持つが、稜は磨かれ丸味を帯びている。1-24・1-29は表面に白い微粒が見える黒色の丸玉である。1-24は1-22・1-23と同様に穿孔面は平坦である。1-29は側面に膨らみを持ち、ほとんど球形に近い。1-25はこのなかで唯一ガラス製の玉である。透明度の低い緑色をしている。側面が膨らみ、径が厚さよりも大きい。1-26・1-27は淡褐色の不純物が混入した緑がかった色調の丸玉である。1-26はほかの丸玉よりやや大きめであるが、形態的には1-26・1-27とともに前出の丸玉と変わらない。1-28は褐色でひとまわり小さい。形態は同じものであるが、石材は他に類似したものがない。

d) 鉄製品

第25図2-7～2-14に図示している。2-9は刀子の刀身と茎の一部である。刀身は現存長で6cmほどと非常に短く、刃部が磨耗により内側に内湾している。先端も磨耗により短くなってしまったのであろう。平背平造で幅1.1cm、背幅4.5mmである。関はなく、茎にそのまま連続する。茎は断面方形で幅1.0cm、厚さ5.5mm、木質の付着が顕著である。2-10は図の右側を刀身とする刀子である。ほぼ2-9と同様の大きさで、刃部の磨耗が著しく、幅9mmほどになってしまっている。平背平造である。関は背側・刃側ともわずかな屈曲を経てなだらかに茎に連続するものであったと思われる。関部分には緊縛したような痕が認められる。茎は幅9.6mm、厚さ4mmで、木質が付着している。2-7は断面三角形を呈し、幅1cmと細身だが、やはり小型刀子の刀身であろう。2-8は厚さ1mm、刀子の着柄金具であろうか。2-11は直刀の刀身部分で、幅3.9cm、背幅5.5mmの平背平造である。2-12は2-8を大型にしたようなもので、刀の鞘口金具と考えられる。2-14は現存長6.9cm、鎌身長4.9cm、鎌身幅3.4cm、厚さ7.8mm、後藤守一氏分類による広鋒両丸造三角形式の鎌である。2-13も鎌の籠被から茎の破片であろう。

⑦築造年代・追葬

墓前部出土の須恵器も含めると、出土した須恵器蓋坏類は当横穴群の分類でB-2類、C類、D-1類の1群とF-3類・F-4類・G-1類の1群、それにI類の3群が存在する。それぞれ遠考研究ではIII期後半～IV期前半、IV期後半、V期前半にあたる。したがって、7世紀中葉の築造、7世紀後葉と8世紀前葉に追葬が行なわれたと考えられる。

1) B-b-5号横穴（第22図 図版11・12）

①保存状態

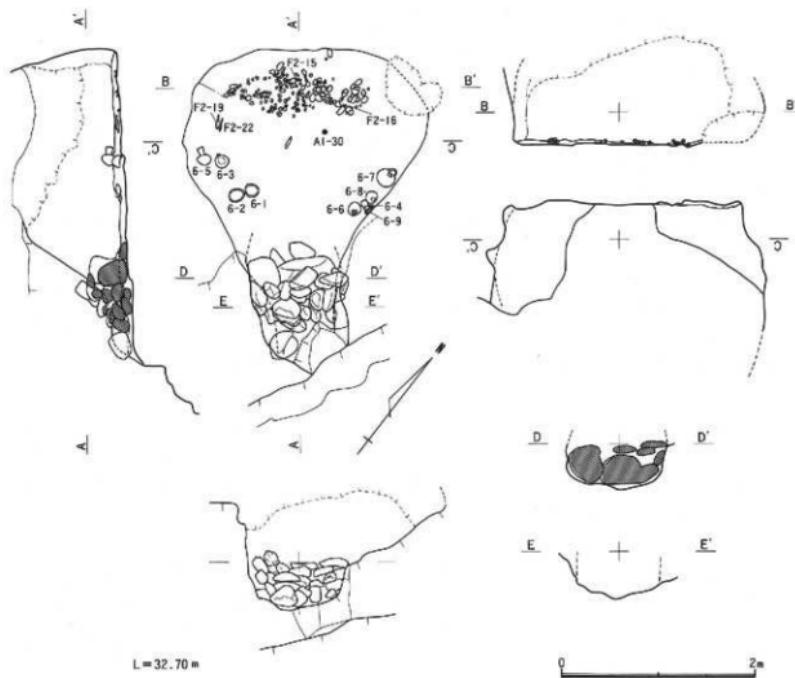
調査開始前から開口しており、事前調査によって確認された横穴である。崩壊が激しく、天井部および右側壁・左側壁の上部はいずれも失われている。羨道部も上部が存在しない。奥壁も上部は剥落している。右側壁奥壁寄りにはB-b-6号横穴との間に穴があいてしまっている。遺物の残りは比較的よい。

②玄室

両側壁からだらだらと羨道部に連続するため玄門位置が不明瞭で羨道部と玄室の区別が判然とせず、全体の形状はほぼ三角フラスク型を呈する。一応両側壁の湾曲が羨門に向かって主軸ラインに沿う方向に変わる点を玄門と考えて玄室と羨道部を区別すると、玄室全長は2.36m、奥壁部幅1.88m、中央部幅2.47m、開口部幅1.57mを測り、平面形は横長の楕円形の前面が開いているような形状である。主軸方位はN-38°-Wである。断面形、高さは不明だが、おそらくドーム型であろう。

床面は斜行岩盤層による細かい段々を除けばほぼ平坦で、わずかに奥壁から羨道部に向かって傾斜している。傾斜角は3°である。壁溝等の施設は存在しない。奥壁は高さ1.10mまで残存する。中央部は比較的直線的だが、両側壁に向かって緩やかに湾曲し、両側壁との境は不明瞭である。天井部に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がる。

床面奥壁寄りに砾床が残る。主軸に直交する方向に長さ1.50m、幅50cmの範囲に径2~5cmの河原石が比



第22図 B-b-5号横穴実測図

較的密集して分布するが、疊床としてはやや規模が小さい。

③羨道部

前述のように両側壁の湾曲変換点を玄門位置とすると羨道部全長0.80m、玄門部幅0.85m、羨門部幅0.60mを測る。羨門に向かってやや狭まり、羨門付近では両側壁は平行する。断面形は不明である。封鎖石は羨門から1.2mの範囲に中央の高さ67cmまで残存する。内側に径40~60cmの大石が置かれ、その前面に径15~30cmの石が積まれている(一番前の1個はおそらく崩れたものであろう)。前面のものが2次的な石積みであるかどうかは判断できない。

④掘削方法・工具

全体に壁面の崩落、風化が激しく、工具痕の残りは非常に悪い。わずかに奥壁に数ヶ所の刺突痕が見られるが、風化しており、本来の幅等は分からぬ。左側壁の羨道寄りにかすかに調整痕らしいものも見られるが、工具の単位等はやはり観察できない。

⑤墓前部

羨門から段差70cmほどの急傾斜を経て、幅2.2mの扇型の緩斜面となる。この緩斜面のB-b-4号横穴寄りに須恵器破片が多数出土しているが、遺物を検討すると、B-b-5号横穴のものではなく、B-b-4号横穴のものである可能性が高い。その前面は自然の岩盤斜面となる。

⑥遺物

a) 出土状態

須恵器は完形かそれに近いもので、玄室右袖部(6-4・6-6~6-9)、左袖部(6-1~6-3・6-5)にそれぞれまとまっている。耳環・鉄製品は疊床の周間に散在し、玄室内の堆土からも鉄製品・ガラス小玉が検出されている。

b) 土器

第24図6-1~6-8に図示した。6-1・6-2の环身は、体部に丸味があり、体部下端から底部中央まで同心円状に2回転、ヘラ削りを施し、底部を平らに仕上げている。底部にはヘラ記号「+」がある。立ち上がりはきわめて短く、著しく内傾し、6-2は受け部端よりやや低いほどである。6-1底部内面には同心円状のアテ具痕が見られる。6-3は蓋付きの無台环身と思われるが、底部の平坦面が広く、箱型に近い形状を呈する。口縁端部はやや内傾し、内側に沈線が施される。底部の周囲は回転ヘラ削りが施されるが中央部を削り残し、そこに格子タタキ目状の痕が付いている。底部内面にも小さく1回転、工具による削りの痕が見え、底部外面の格子状痕はその際に板などにのせて付いたものであろうか。

6-6~6-8は平瓶で、三者三様の形状を示す。6-6は体部が比較的偏平で、口頸部は細長く、外反しながら伸びる。6-7は比較的大型で、体部は深く底部は丸い。口頸部は直線的でやや外に開き、中央位に2条の沈線が施される。6-8も体部が深く全体に球形に近い。口頸部は短く、わずかに外反し、ほぼ直立する。中央位に2条の沈線を施す。口縁端部内面にかすかな段を持つ。

6-5は脚を持たない長頸瓶で、口頸部はやや外に開きながら直線的に伸び、口縁端部でわずかに内湾する。中央位に2条の沈線がある。肩部と体部の境にも2条の沈線を施し、体部下半から底部中央まで回転ヘラ削りを行なっている。

6-4は提瓶、6-9は足のそれぞれミニチュアである。6-4は体部の一面をラセン状にヘラ削りしてカキ目調整のように見せている。口縁部は単純にハの字状に開き、端部はやや内傾する。6-9はやや偏平な球形胴に注口部を単純に穿孔する。体部中央に2条の沈線で区画をつくり、そこに櫛刺突文を連続して施している。口頸部は大きく開き、口縁部はやや内傾する。頸部と口縁部の境は棱を持たず、沈線が施される。

c) 装身具

第26図1-30の耳環1点と1-31のガラス玉、1-32・1-33のガラス小玉2点がある。1-30の耳環は玄室内のほぼ中央床面から単独で出土した。径は21.5mmを測り、断面は楕円形を呈する。やや腐食が進み、銅芯部分の表面も剥がれ落ちている。当横穴群のなかでは小型品のうちに属する。1-31は約1/2を折損する緑色のガラス玉である。半折してはいるが、法量・形態ともB-b-4号横穴から出土した緑色のガラス玉(1-25)と同じものである。1-25でははっきりしなかった製作技法であるが、1-31は半折しているため、ルーペによってそれが観察できた。ガラス玉中央(孔)に集中する気泡から、1-31は巻付法によって作られたものであることが分かる。同一製作地と考えれば1-25もこの技法による製品であろう。1-32・1-33のガラス小玉は、色調も計量的にB-b-1号横穴出土ガラス小玉(1-18)と類似している。これららの製作技法は、上記の観察方法によれば管切法である。

d) 鉄製品

比較的豊富に残存しており、第25図2-15~2-27に図示した。2-15・2-15は直刀の锷である。2-15は長径8cm、短径5cm前後の楕円形を呈するものと推定され、幅18mm、厚さ1.5mmを測る。内径は、長径3.7cm、短径1.3cmほどになろうか。2-16はやや小さく、外径で長径6cm、短径4.5cmほどであろう。厚さは5.1mmとやや厚い。2-18は平背平造の刀子で、刀身の上部破片と根元から茎部分の破片が残存している。刀身幅1.1cm、背幅2.1mm、茎幅0.8cm、厚さ2.3mmである。茎には木質が付着している。2-17は刀子の着柄金具で

あろう。2-19～2-28は鐵である。2-19は鎌身に欠損が見られるが鎧被以下はほぼ完形である。残存長14.6cm、鎌身長推定で5.2cmほど、幅は腸抉部分で3.0cm、厚さ3mmである。鎧被は長く6.3cm、幅9mm、厚さ3.5mm、茎は長さ4.6cm、鎧被寄りで幅5mm、厚さ4.2mm、先端に向かって細くなる。茎部分には木質が付着している。後藤守一氏分類で、鎧被広鋒平造腸抉三角形式に属する。2-20～2-22はいずれも鎧被から茎にかけての破片で、2-20は茎がほぼ完形である。鎧被幅7.8mm、厚さ4mm、茎は端部に向かって細くなるもので長さ5.6cm、鎧被側は4mm四方の正方形断面を呈する。2-21は鎧被が残存長で8.5cmと長い。いずれも茎部分には木質が付着している。2-23は腸抉式の鎌身と鎧被である。2-24～2-26は茎、2-27は鎧被の一部であろうか。2-28は曲がっているが、片刃箭式の鎌身であると考えられる。

⑦築造年代・墓葬

出土した須恵器蓋坏類は、当横穴の分類でD-3類・G-1類にあたり、ともに遼考研編年IV期後半、7世紀後葉のものと考えられる。しかし、右袖部に集積した須恵器群は、蓋坏を含まないがその出土状態からみても前者の蓋坏類以前のものと考えられ、築造年代はさらに遅ろう。具体的な年代は明瞭に示すことはできない。

8) B-b-5号横穴(第23図 図版13・14)

①保存状態

調査開始後、樹木伐採と表土除去を行う過程で新たに発見された横穴である。羨道部上半が斜面の崩壊により失われている。左側壁と天井部左側が崩落してB-b-5号横穴との間に穴があいてしまっている。左側壁も剝離が激しい。そのほかは比較的保存が良好であるが、遺物はあまり多くない。

②玄室

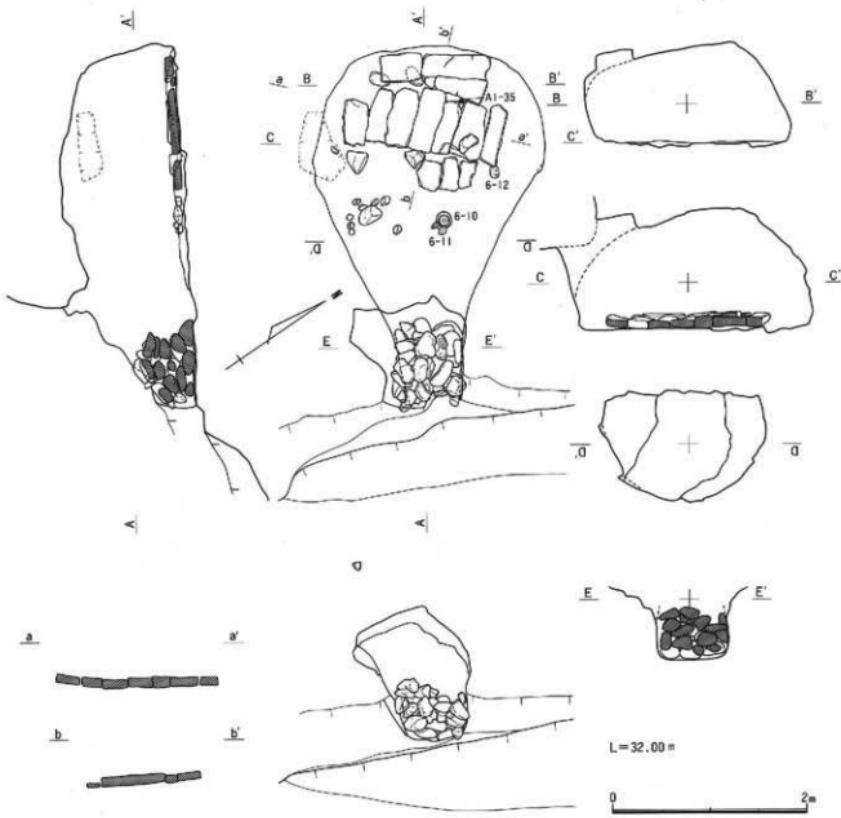
玄室両側壁から羨道部へだらだらと連続していくため、玄室と羨道部の区別は明瞭ではなく、全体の形状は三角フラスク型あるいは徳利型を呈する。玄門位置は明瞭でないが、両側壁の湾曲が羨門に向かって次第に主軸ラインに沿うような方向に変わっていく変換点を玄門部と考えると、玄室全長2.53m、奥壁部幅1.83m、中央部幅2.35m、開口部幅1.57mを測る。玄室の平面形は横長の橢円形の前面が開いたような形状である。主軸方位はN-56°-Wである。断面形はやや低いドーム型で、中央部の高さは1.27mである。

床面は斜行する岩盤層による段々があるが全体としてはほぼ平坦で、羨道部に向かってわずかに傾斜している。傾斜角は3°である。後述の棺座が置かれる部分とその前面との間にわずかに溝のようなものが認められるが、明瞭に構造として認識できるものではない。そのほかに壁溝等の施設はない。奥壁は全体に湾曲して両側壁・天井部との境は不明瞭である。

奥壁から1.5mの範囲に板状の切り石が敷き詰められており、棺座と考えられる。切り石は全部で13枚を数え、大小あるが、基本形は55～65cm×20～25cmの長方形で、厚さは8～10cmである。石材は周囲の岩盤層から切り出されたものである。中央の7枚は石の長軸を横穴主軸から13°右に傾けた方向に平行させて南北方向に整然と並べられており、棺座の主軸方位はN-48°-Eである。切り石の上および周囲には径20cmほどの河原石が5個散乱しており、これも棺を据えることに関係するものであろう。奥壁側の2個の河原石は切り石の下にあって、上の切り石が周囲と同じレベルで水平になるように支えている。右手側の切り石の間に耳環があることから、北側を頭にしていると推定される。

③羨道部

前述の点を玄門部とすると、羨道部全長1.20m、玄門部幅1.08m、中央部幅0.65m、羨門部幅0.50mを測り、羨門に向かって狭まる。上部が斜面の崩壊によって失われているため断面形・高さは不明である。封鎖石は羨門から90cmの範囲に高さ65cmと比較的よく残り、5段分ほど確認される。径15～30cmの河原



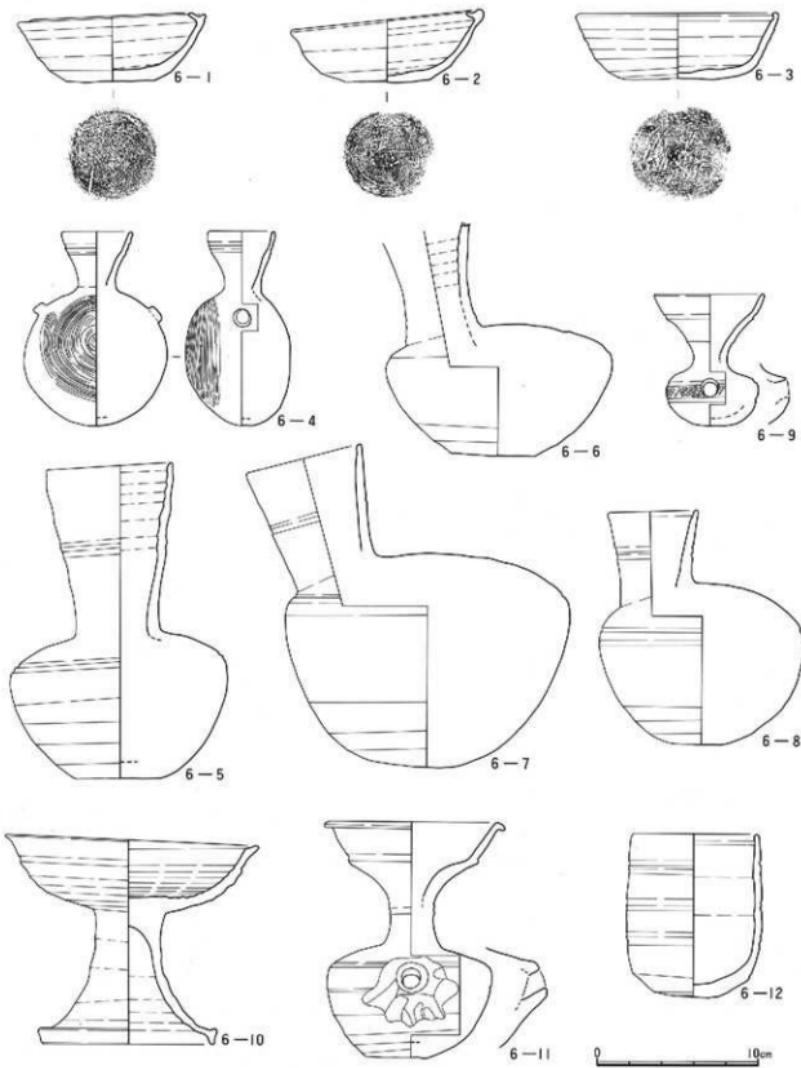
第23図 B-b-6号横穴実測図

石を用い、比較的雑然と積み上げている。

④掘削方法・工具

崩落した左側壁および天井部左側以外では比較的工具痕をよく残している。整状工具痕は天井部および右側壁表道寄りに明瞭に残る部分があり、それによれば幅1.5cm、先端部が弧状の刃を持つ工具である。削痕断面が方形のものと弧状のものがあるが、おそらくは同じ工具の表裏を用いたものであろう。刺突痕には先が丸く径の大きなものも認められるが、これは岩盤層の間層に入る砂層部分に顕著であり、おそらくは同じ工具を用いた刺突痕が風化により広がってしまったものと考えられる。

調整工具痕は右側壁上部や奥壁の一部に明瞭に残る。幅6cmで先端部が直線の刃となる幅広の工具を用いて細かい運動により連続的に削り取っている。整状工具痕、調整工具痕ともに側壁では右上から左下へ打ち込まれている。



第24図 出土土器実測図 (6) B-b-5 (1~8) B-b-6 (10~12)

第24回出土土器実測図(6) 法量表

(単位:cm)

No.	遺構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	B-b-5号横穴	須恵器	壺身	9.7/11.9	4.5		明緑灰色	完形	26-6
2	B-b-5号横穴	須恵器	壺身	9.7/12.0	4.5		明青灰色	完形	26-7
3	B-b-5号横穴	須恵器	壺身	12.0	4.1		灰白色	完形	29-11
4	B-b-5号横穴	須恵器	提瓶	4.2	12.0		暗青灰色	完形	35-5
5	B-b-5号横穴	須恵器	長頸瓶	7.7	19.5	5.4	灰色	完形	36-3
6	B-b-5号横穴	須恵器	平瓶				灰白色	口縁部欠	34-5
7	B-b-5号横穴	須恵器	平瓶	7.2	19.1		灰色	完形	34-6
8	B-b-5号横穴	須恵器	平瓶	5.4	14.4		灰色	完形	35-1
9	B-b-5号横穴	須恵器	甌	6.65	8.1		暗青灰色	ほぼ完形	33-7
10	B-b-6号横穴	須恵器	高壺	15.6	13.0	10.5	灰白色	完形	33-3
11	B-b-6号横穴	須恵器	甌	10.2	14.6		灰色	ほぼ完形	33-8
12	B-b-6号横穴	須恵器	盤	7.8	10.1		暗青灰色	ほぼ完形	32-9

⑤墓前部

羨門から65cmの段差を経て幅80cmほどの緩斜面となり、1点であるが須恵器破片を検出している。その前面は自然の岩盤層の急斜面となる。

⑥遺物

a) 出土状態

土器は完形の須恵器が3点、棺座の手前に出土したのみである。多くは盗掘により持ち去られたのであろう。鉄製品は見当たらず、耳環が2点、1点は棺座石の間に、1点は排土の洗浄から検出された。

b) 土器

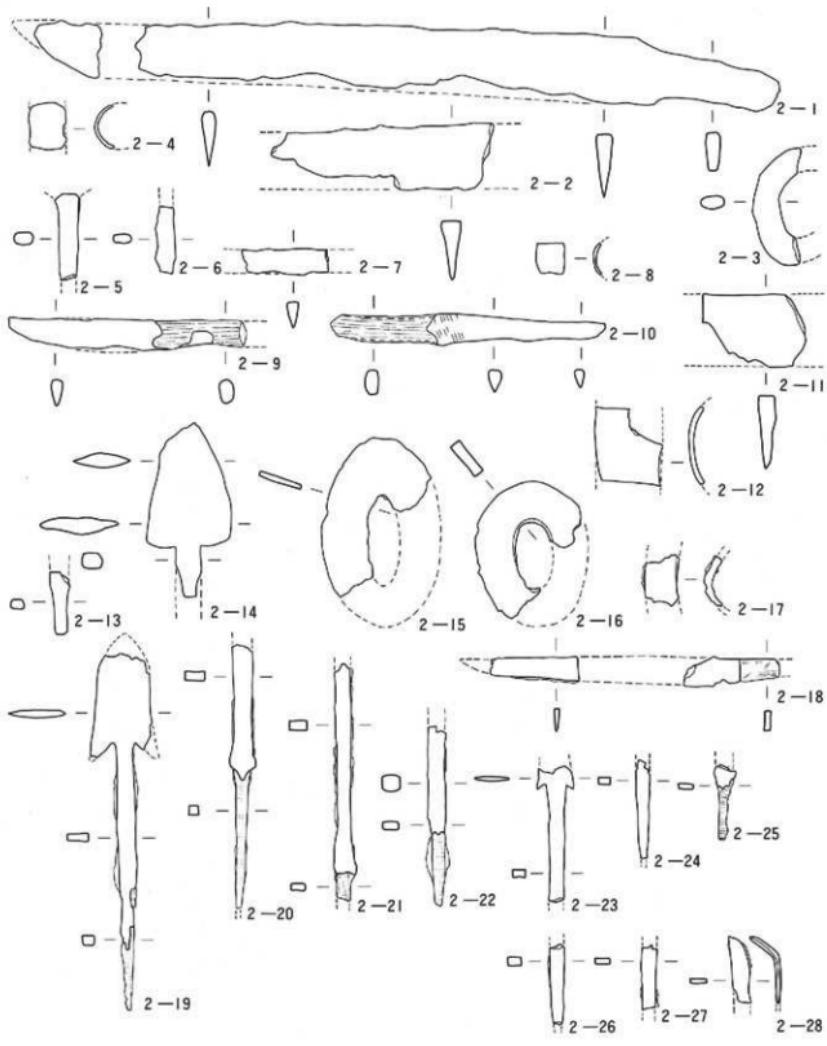
第24図6-10～6-12の3点である。6-10は無蓋の短脚高壺で、口縁部は端部をやや外に引き出し、内傾面をつくる。脚部は裾広がりで、端部は鋭く折り曲げ、断面三角形に仕上げている。6-11の甌は注口部を突出させるもので、頸部は細く上部で大きく開き、頸部上端で沈線を伴って屈曲し、二重口縁状を呈する。口縁部は直線的に開き、端部を外に折り曲げている。肩部と体部の境に2条の沈線があり、体部下半から底部中央まで回転ヘラ削りを施し底部を平坦に仕上げる。6-12はコップ状の盤である。底部中央まで回転ヘラ削りして、中央に狭い平坦面をつくる。体部は直線的に直立し、2条ずつ3箇所に沈線がはいる。口縁部はわずかに内傾し、端部内面には浅い沈線が施される。

c) 装身具

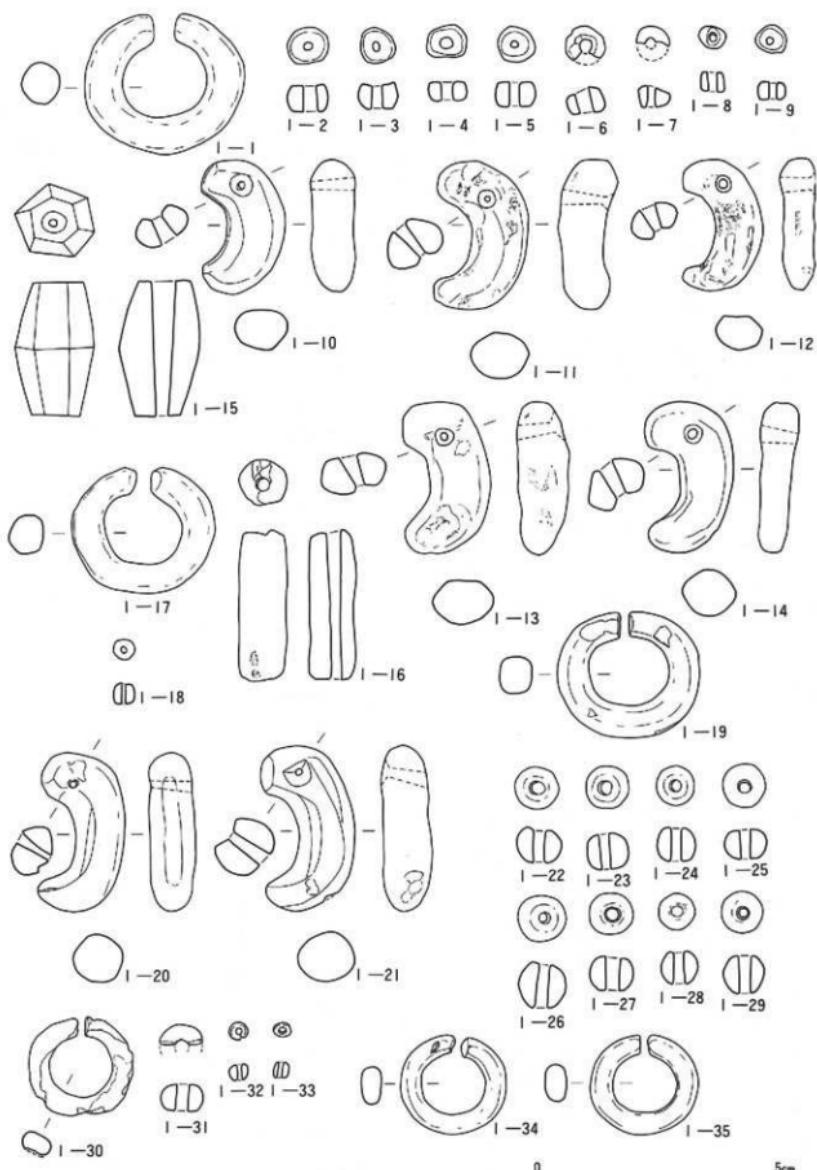
第26図1-34・1-35の耳環が2点出土している。今回の調査で発見された耳環のなかで最も保存状態が良好であり、原形をよくとどめている。金箔は輝きを失わず、まさに「金環」と呼ぶにふさわしい逸品である(蛍光X線による成分分析によれば金よりも銀の含有率が高いようである)。径が21.6～7mmと法量もほとんど同一に近い。断面は楕円形である。法量・形態ともB-b-5号横穴出土の耳環とほぼ同サイズであり、いずれも小型品に属する。1-35は玄室中央からやや北寄り、棺座の切り石の間から出土し、1-34は排土の中から検出されたものである。法量の計測値からみても、この2点はセット関係になるものであろう。

⑦築造年代・追葬

須恵器蓋环類を含まないが、6-10の高壺、6-11の甌などは遠考研編年IV期前半を中心とするものと思われ、甌の口縁部からみてB-b-1号横穴の甌(3-25)にやや先行するものと考えられる。築造年代もこの時期に求めることができよう。



第25図 出土鉄製品実測図 (2) B-b-2 B-b-3 B-b-4 B-b-5



第26図 出土装身具実測図 (1) A-2 B-a-1 B-a-2 B-b-1 B-b-2
B-b-3 B-b-4 B-b-5 B-b-6

第26回出土装身具実測図(1)法量表

(単位:mm)

番号	遺構	名称	外径	長さ	厚さ	断面径	穿孔径	重さ
1	A-1号横穴	耳環	31.4			7.1		22.5g
2	B-a-1号横穴	ガラス玉	7.3×8.2		5.5		2.2	
3	B-a-1号横穴	ガラス玉	6.9×7.6		5.25		1.8	
4	B-a-1号横穴	ガラス玉	7.3×7.9		3.6		2.0	
5	B-a-1号横穴	ガラス玉	6.6×7.8		5.0		1.7	
6	B-a-1号横穴	ガラス玉	8.0		5.5			
7	B-a-1号横穴	ガラス玉	6.3		4.5			
8	B-a-1号横穴	ガラス小玉	4.7×4.9		4.3		1.5	
9	B-a-1号横穴	ガラス玉	5.7×5.8		3.35		1.2	
10	B-a-1号横穴	勾玉		27.1	7.2			5.2g
11	B-a-1号横穴	勾玉		29.6	9.3			6.8g
12	B-a-1号横穴	勾玉		27.0	6.2			3.7g
13	B-a-1号横穴	勾玉		31.1	8.8			6.9g
14	B-a-1号横穴	勾玉		30.5	8.2			6.5g
15	B-a-1号横穴	切子玉	15.9	27.3				8.8g
16	B-a-1号横穴	管玉	9.5	29.3				5.1g
17	B-a-2号横穴	耳環	28.8			6.5×7.6		14.4g
18	B-b-1号横穴	ガラス小玉	3.5×3.7		3.4		1.0	
19	B-b-2号横穴	耳環	29.0			6.3×7.5		17.5g
20	B-b-3号横穴	勾玉		32.3	9.3			6.4g
21	B-b-3号横穴	勾玉		33.81	9.8			7.9g
22	B-b-4号横穴	丸玉	8.75×9.08		6.9			2.85
23	B-b-4号横穴	丸玉	8.8		7.3			2.9
24	B-b-4号横穴	丸玉	8.9×8.81		7.63			2.3
25	B-b-4号横穴	ガラス玉	9.05×8.95		6.21			2.3
26	B-b-4号横穴	丸玉	9.57×9.65		9.0			2.3
27	B-b-4号横穴	丸玉	8.71×9.22		7.25			2.9
28	B-b-4号横穴	丸玉	7.45		6.7			2.05
29	B-b-4号横穴	丸玉	8.10×8.12		7.3			2.08
30	B-b-5号横穴	耳環	21.5			4.1×5.5		4.2g
31	B-b-5号横穴	ガラス玉	(8.3)		5.75			
32	B-b-5号横穴	ガラス小玉	3.45×3.42		3.25		1.1	
33	B-b-5号横穴	ガラス小玉	2.4×2.95		3.01		1.4	
34	B-b-6号横穴	耳環	21.6			4.0×7.1		7.8g
35	B-b-6号横穴	耳環	21.7			4.2×7.0		7.5g

3. B地区c群

1) B-c-1号横穴(第27図、図版14)

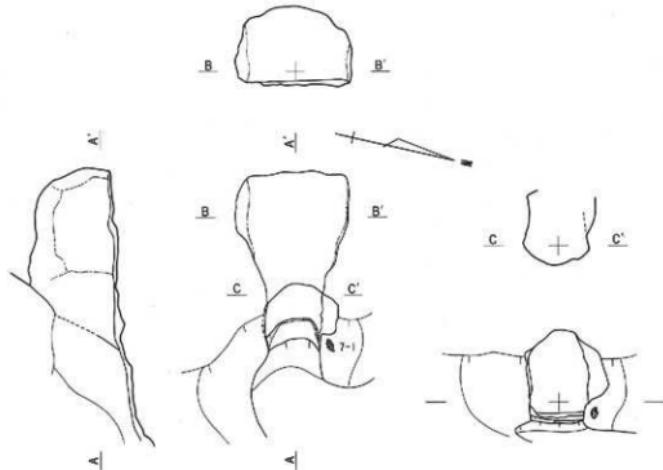
①保存状態

調査開始後に新たに発見された横穴である。この付近は表土が厚く堆積し、表面の窪み等の痕跡が見られず、当初横穴の存在は予想していなかったが、確認のため重機により岩盤層直前まで表土を除去し、精査を行なったところ検出された。斜面の崩壊により羨道部上部が若干失われているほかは保存状態は良好である。遺物は須恵器1点のみである。

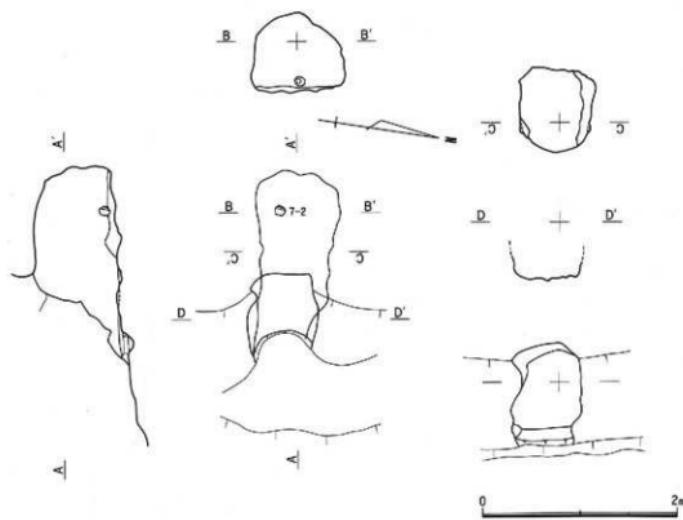
②玄室

玄室全長1.05m、奥壁部幅1.03m、中央部幅1.15m、開口部幅1.00mである。玄室主体部の平面形は55cm×110cmの横長の長方形を呈し、両側壁が内側に屈曲して羨道部に連続する。断面形はドーム型で、中央部の高さは0.82mである。主軸方位はN-77°-Eである。他の横穴に比べて、B-c-2号横穴と並んで非常に規模が小さい。人がひざをまるめてようやくはいることができるくらいの大きさである。

床面は斜行する岩盤層にともなう段々を除けばほぼ平坦で、奥壁から羨道部に向かって傾斜角3°をもつてわずかに傾斜する。壁溝等の施設は認められない。奥壁は比較的直線的で、両側壁との境も明瞭であるが、上部は緩やかに内湾し、天井部との境は明瞭ではない。礫床等の特別な埋葬施設もない。



L = 25.75 m



L = 26.00 m

第27図 B-c-1号横穴・B-c-2号横穴実測図

③羨道部

全長0.83m、玄門部幅0.68m、中央部幅0.57m、羨門部幅0.53mを測り、若干羨門に向かって狭まるがほぼ両側壁が平行する平面形である。上部前面は崩壊しているが、玄門付近でみると断面形はアーチ型、高さ0.90mと玄室よりやや高い。封鎖石は存在せず、封鎖施設は不明である。

④掘削方法・工具

天井部・奥壁・右側壁に整状工具による刺突痕・削痕がよく残っているが、天井部・奥壁は岩盤層の間層にはいる砂層を掘り込んでいるため風化が激しく、工具の幅等は明確ではない。右側壁下部の岩盤層に残る痕が比較的明瞭で、それによれば工具幅1.5cmで先端部は弧状の刃部を持つ。削痕断面は方形のものと弧状のものとがあるがおそらくは同じ工具の表裏を用いたものであろう。一部に刃こぼれのあとが認められる。調整痕はほとんど見られない。砂層部分が多いため風化してしまった可能性もあるが、おそらく調整をしていないのではないかと思われる。

⑤墓前部

羨門に15cmほどの段差があり、そこから1mほどはほぼ平坦で、左側に山の稜線が迫っている。右側斜面も若干稜線によって区切られているように見えるため、この部分が狭い墓前域をなしていると考えられる。右側斜面にはりついたように須恵器壺蓋が出土している。この前面はc-c-2号横穴・c-c-3号横穴まで含む幅4mほどの広い扇型の緩斜面となり、自然の岩盤層の急斜面に連続する。

⑥遺物

a) 出土状態

遺物はほとんどなく、わずかに須恵器壺蓋が1点、開口部右側に出土しただけである。

b) 土器

第30図7-1は、天井部中央を平らにヘラ削りし、宝珠状つまみを付ける。口縁部を水平に引き出すためやや偏平となる。口縁端部を下方に折り曲げ受け部をつくる。受け部は断面三角形で、わずかに外傾気味である。

⑦築造年代・追葬

出土した須恵器壺蓋は当横穴群の分類でI類、遼考研編年V期前半に含まれる。築造年代は、8世紀前葉であろう。横穴の縮小化がそれを裏付ける。

2) B-c-2号横穴（第27図、図版14）

①保存状態

調査開始後、表土除去を行ってから新たに発見された横穴である。前述のように表土が厚く堆積しており、表面では横穴の存在は予想されなかった。羨門上部が斜面の崩壊により失われている。玄室内の上半分が岩盤層間層の砂層になっているため風化が激しく、壁面の残りが悪い。

②玄室・羨道部

B-c-1号横穴とはほぼ同等の小規模横穴である。ここでは玄室と羨道部の区別がほとんどつけられず、強いて言えば右側壁が羨門に向かって内側に屈曲する点を玄門位置に考えることができよう。全体の形状は羨門部でやや口がすぼまっている単純な袋状の平面形を呈し、奥部では若干方形をつくろうという意識がうかがわれる。全長1.30m、奥壁部幅0.80m、中央部幅0.76m、右側壁が屈曲する部分の幅が0.72m、羨門部幅0.58mを測る。断面形はドーム型で、中央部の高さは0.82mである。主軸方位はN-E $81^{\circ}30'$ -Eである。

床面は、斜行岩盤層の段々を除外すればほぼ平坦で、奥壁から羨門に向かって傾斜している。傾斜角は5°である。壁溝や疊床などの特別な施設はない。奥壁は全体に緩やかに内湾し、天井部・側壁との区別

が不明瞭である。

封鎖石は存在せず、封鎖施設は不明である。

③掘削方法・工具

全体に風化が激しく、工具痕は明瞭ではなく、特に上半の砂層部分はほとんど分からぬ。下半の岩盤部分でも明瞭なものは少ないが、わずかに右側壁に幅が分かる整状工具痕が認められる。幅1.5cmの削痕で、1回の削りの長さは最大で11cmである。削痕断面や先端部の形状は不明瞭だが、おそらくB-c-1号横穴で使用されたものと同様の工具であろう。調整痕はほとんど認められない。風化してしまった可能性もあるが、おそらくは調整をしていないものと考えられる。

④墓前部

羨門から前面1mほどはほぼ平坦で、そこから約3mはB-c-1号横穴からB-c-3号横穴まで含む広い緩斜面である。前者の平坦部分と緩斜面とは稜線で区切られるなどの明瞭な区別はなく、B-c-2号横穴单独の墓前域は持たないと考えられる。緩斜面前面は自然の岩盤層の急斜面となる。

⑤遺物

a) 出土状態

遺物はほとんどなく、須恵器短頸壺の完形品が1点、玄室内から出土したのみである。

b) 土器

第30図7-2の短頸壺は、蓋をつけたまま焼成したらしく、口縁部およびその周囲に自然釉がかからない範囲を残している。体部下半から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りを施し、底部は平らに仕上げている。口縁部は短く、単純に直立する。

⑥築造年代・追葬

横穴の規模・形態からみてB-c-1号横穴とほぼ同時期と考えてよからう。出土した短頸壺は浜松市半田山A小支群A4号墳の例を見ても、おそらく遠考研編年V期前葉の土器に伴うものであろう。

3) B-c-3号横穴 (第28図、図版15・16)

①保存状態

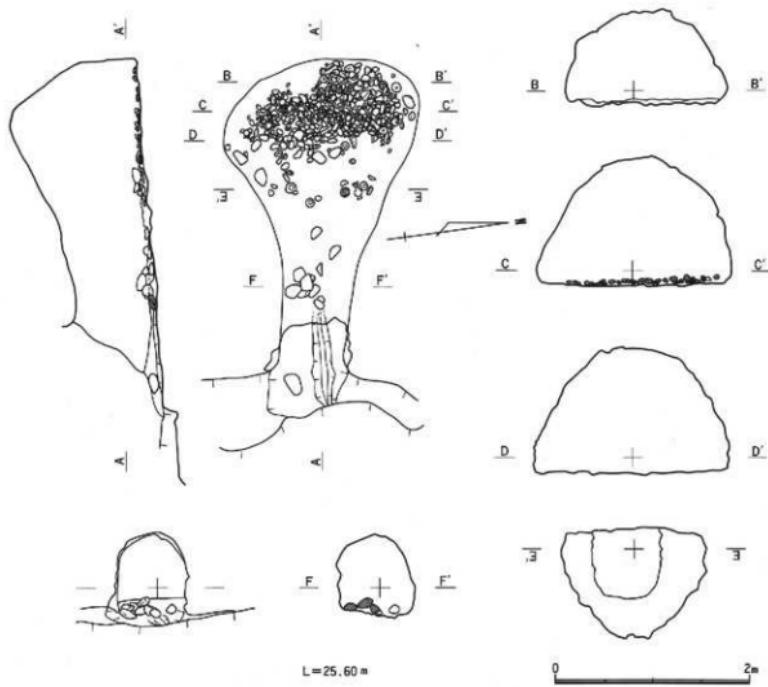
表土が厚く堆積し、調査開始後に新たに発見された横穴である。羨道部を含めてほぼ完全にもとの形状をとどめている。遺物や礫床および壁面の工具痕などの残りも良好である。ただ封鎖石はあまり残っていない。

②玄室

両側壁から大きな屈曲を見せず羨道部に連続しているため、玄門位置が不明瞭で玄室と羨道部の区別がつけにくい。ただ縦断面では玄室天井部と羨道との境を比較的明瞭にとらえることができ、そこを玄門位置とすれば、玄室全長1.56m、奥壁部幅1.55m、中央部幅1.96m、開口部幅1.37mを測る。平面形は横長の楕円形の前面が聞く形状を呈する。断面形はドーム型であるが三角形に近く「おにぎり」型で、中央部の高さは1.35mである。羨道部に比較して玄室の天井は高く、縦断面でも三角形を呈し、全体の立体形は円錐状になる。主軸方位はN-82°-Wである。

床面は斜行岩盤層の細かな段を除けばほぼ平坦で、奥壁から羨門に向かって緩やかに傾斜している。傾斜角は4°30'である。壁溝等の施設は認められない。奥壁は全体に緩やかに内湾し、両側壁・天井部との区別はつけられない。

奥壁寄りに礫床が良好に残存している。奥壁から1.00m、幅1.80mの範囲に河原石を敷き詰めているが、礫には径5cmほどのやや大きめのものと、径2~3cmの小礫との2種類が認められる。また周囲に径10~15cmほどの石が数個散在しているが、棺座として用いられていたか、封鎖石が転がってしまったものか判断



第28図 B-c-3号横穴実測図

し難い。

③ 美道部

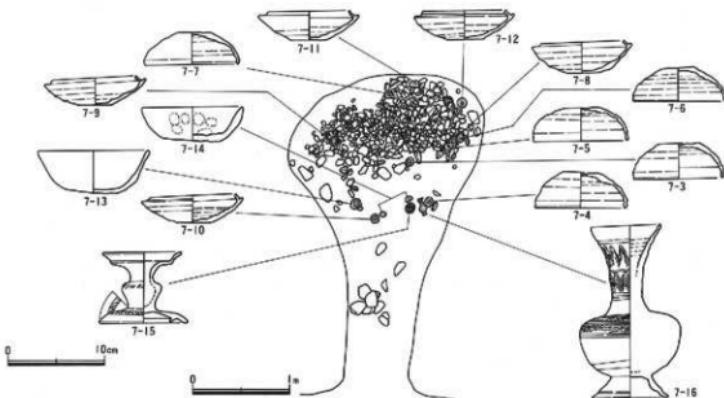
全長1.60m、玄門部幅1.18m、中央部幅0.74m、羨門部幅0.68mを測る。羨門に向かって狭まるが、主要な部分はほぼ両側壁が平行する平面形をしている。断面形はアーチ型で、高さは0.85mである。封鎖石はほとんど崩されており、羨道中央部付近に数個の石がかたまっている他は羨門前に1個、玄室内に数個散在している。石は径10~20cmの河原石を用いている。羨門付近に幅15~20cm、深さ3cmほどの浅い溝状遺構が認められるが、本来のものであるかは明らかではない。

④ 摂剤方法・工具

壁面全体に鑿状工具による刺突痕が非常によく残っている。刺突痕は天井部では天頂から放射状に、側壁奥壁では右上から左下へ打ちおろされている。幅1.7cmのものと幅1.4cmのものとの2種類が認められ、ともに厚さは0.9cmで断面は長方形を呈し、先端は弧状の刃部を持つ。そのほかに断面が丸いものもあるが、これは岩盤層間層の砂層に多く認められ、おそらくは同じ鑿痕が風化してしまったものであろう。壁面の調整をしたような形跡は認められない。鑿状工具による粗打ちだけで完成としたのであろうと考えられる。

⑤ 蓄前部

羨門前30cmで小さな段差があるが、斜行岩盤層によるものと思われる。前面約3mはB-c-1号横穴・



第29図 B-c-3号横穴土器出土状況

B-c-2号横穴と共有する広い緩斜面である。B-c-4号横穴との間は稜線によって区切られている。緩斜面前面は自然の岩盤層の急斜面となる。

⑥遺物

a) 出土状態

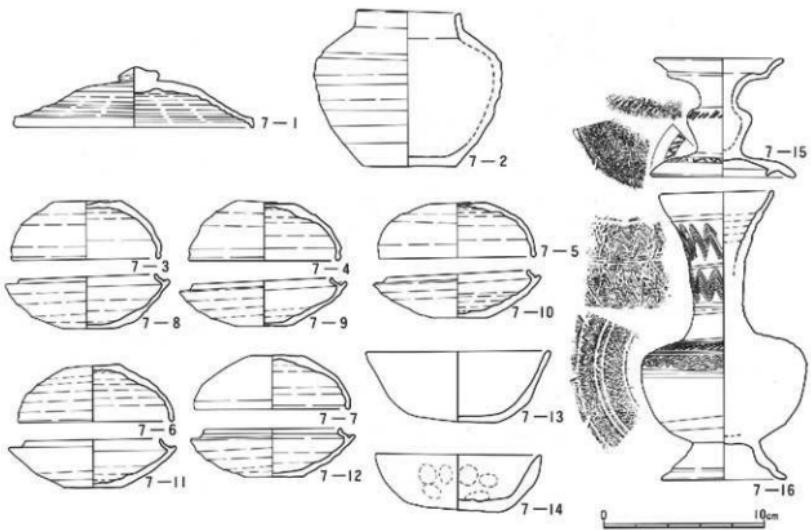
全体に遺物の残りは良好であるが、大半は土器で、鉄製品は排土の洗浄から小破片が1点、玉類はまったく検出されなかった。土器は砾床の手前に1群のまとまり(7-4・7-10・7-13-7-16)があり、他は砾床の周囲に配置されている。おそらくもとの位置からあまり動いていないと思われ、埋葬時の副葬品の位置を示すものとして重要である。須恵器が大半だが、当横穴群としては希少な土師器が2点出土している。

b) 土器

第30図7-3~7-16に図示している。ほとんど完形品である。7-3~7-7の須恵器環蓋は、口径9.0~9.4cmでほぼ同型、比較的器高が高く、天井部に丸味があり半球形を呈する。7-5は特に丸味が強い。口縁端部外面に浅い沈線がはいる。7-8~7-12は最大径10.2~10.4cmでほぼ同型、上記の蓋と組み合せとなるものである。器高が低く、浅く偏平な器形である。立ち上がりは短く、大きく内傾し、端部は外反する。これらの蓋環の天井部および底部はヘラ切りのまま平らに残し、そこを軽くなでつけて調整している。

7-15・7-16はミニチュア瓶型の飾りをつまみとするかえり付き蓋と、それと対になる脚付き長頸瓶である。蓋上部のミニチュア足は注口部を欠き、二重口縁状の大きく開く口頭部を持ち、肩部と体部の境に柳刺突文が施される。蓋の天井部にも柳刺突文がある。かえりは口縁端部から大きく内側に入り、ごく短く断面三角形を呈する。瓶は体部下半から底部にかけてヘラ削りを施し、脚部は高く、ハの字状に開き、1回屈曲する。肩部には沈線によって区切られた区画に柳刺突による格子目文があぐり、体部上部には柳描き波状文が施される。口頭部は細長く、外反しながら伸び、口縁部はわずかに内湾する。沈線によって上下2区画に区切られ、それぞれ柳描き波状文で飾っている。いずれも非常に丁寧なつくりである。

7-13・7-14は土師器環身である。ともに平底で、口縁部は比較的直線的に外に開くものである。7-13は口径もやや大きく深い。いずれも表面剥離が激しく、調整等の詳細は不明である。



第30図 出土器実測図(7) B-c-1 (1) B-c-2 (2) B-c-3 (3)

第30図出土器実測図(7) 法量表

(単位: cm)

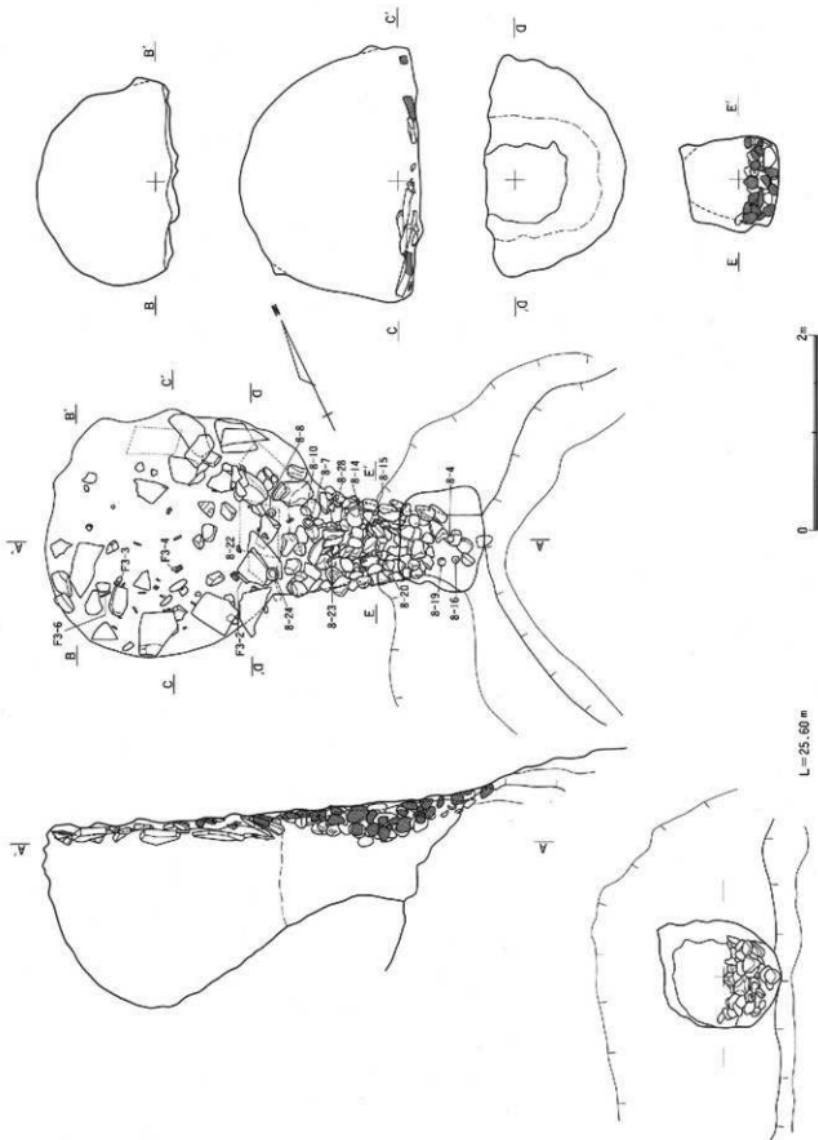
No.	遺構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	B-c-1号横穴	須恵器	環蓋	14.6	3.7		灰白色	2/3	30-6
2	B-c-2号横穴	須恵器	短頸壺	6.2	9.6	5.8	灰白色	完形	36-2
3	B-c-3号横穴	須恵器	環蓋	9.0	3.6		灰白色	完形	22-7
4	B-c-3号横穴	須恵器	環蓋	9.2	3.7		灰白色	完形	22.8
5	B-c-3号横穴	須恵器	環蓋	9.5	3.4		灰白色	完形	22-9
6	B-c-3号横穴	須恵器	環蓋	9.4	3.5		灰色	完形	22-10
7	B-c-3号横穴	須恵器	環蓋	9.4	3.3		灰色	完形	22-11
8	B-c-3号横穴	須恵器	环身	8.3/10.2	3.5		灰色	完形	26-8
9	B-c-3号横穴	須恵器	环身	8.6/10.4	2.8		青灰色	完形	26-9
10	B-c-3号横穴	須恵器	环身	8.7/10.4	2.75		青灰色	完形	26-10
11	B-c-3号横穴	須恵器	环身	8.4/10.4	3.0		灰色	完形	26-11
12	B-c-3号横穴	須恵器	环身	8.3/10.2	3.0		灰色	完形	26-12
13	B-c-3号横穴	土師器	环身	11.2	4.4		橙色	ほぼ完形	37-2
14	B-c-3号横穴	土師器	环身	10.1	3.5		浅黄橙色	1/2	37-3
15	B-c-3号横穴	須恵器	蓋	5.6/9.1	7.35		灰色	完形	36-5
16	B-c-3号横穴	須恵器	長頸壺	7.0	17.8	7.8	灰色	ほぼ完形	36-6

c) 鉄製品

第39図3-1の小破片1点のみである。残存長4.2cm、鐵の籠被から茎にかけての破片であろう。

⑦築造年代・追葬

出土した須恵器蓋は、当横穴の分類ではすべてE-3b類に属し、蓋付長頸壺、土師器もこれに伴うものであろう。遠考研編年ではIV期前半、7世紀中葉の築造であると考えられる。出土状態をみても埋葬時の状況を残していると考えられ、追葬は行なわれていないであろう。



第31図 B-c-4号横穴実測図

4) B-c-4号横穴 (第31図、図版16・17)

①保存状態

表土除去後に新たに発見された横穴である。羨道部左側面上部が若干崩れている他は壁面も含めて非常に良好に保存されている。封鎖石も崩れてはいるがよく残っており、遺物の残存も非常に良好である。

②玄室

平面形は、左側壁から奥壁にかけてほぼ円形を呈するが、右側壁と奥壁はやや直線的な部分も残しており、わずかに方形を意識しているように思われる。右側壁は左側壁よりやや長く、そのため玄門が若干傾く。玄室全長2.54m、奥壁部幅1.86m、中央部幅2.50m、開口部幅1.98mを測る。断面形はドーム型で、天井が比較的高く、中央部で高さ1.90mを測る。主軸方位はN-64°-Wである。

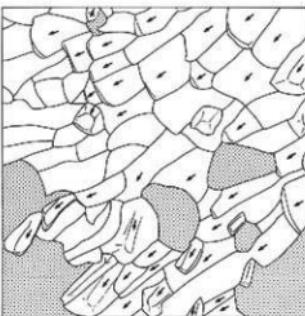
床面は斜行する岩盤層による細かい段々を除けばほぼ平坦で、奥壁から羨門に向かってわずかに傾斜している。傾斜角は5°である。駁溝等の特別な施設は存在しない。奥壁は左右両側壁・天井部との区別が不明瞭で、下部は比較的直線的であるが、上部は緩やかに内湾して天井に達する。

埋葬施設は残存しない。しかし周囲の岩盤層から切り出したと思われる板状の切り石が割れて床面上に散乱しており、これが本来はB-b-6号横穴に見られたような棺座として用いられていたと考えることができる。切り石は厚さ5~8cmで、中央部を避けるように玄門付近および側壁沿いに分布している。

③羨道部

全長2.02mと比較的長く、玄門部幅1.27m、中央部幅0.80m、羨門部幅0.77mを測り、羨門に向かって若干狭まる。断面形は側面の崩壊があつてはっきりはしないが、アーチ型であろう。高さは中央部で0.98mである。

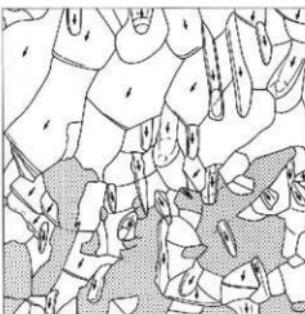
封鎖石は羨道部の長さ全体にわたって分布し、中央部で高さ40cm、3段分ほど残っている。羨門部および玄門部の石は崩れたものと考えられるが、中央部1.2mの範囲は石が密集し、本来の姿をほぼとどめていると思われる。石は径10~20cmほどの河原石を用い、形状は様々で比較的雑然と積み上げられている。残存した封鎖石の上部や前面にも土器が検出されており、封鎖石が現状のように崩壊し、遺物が持ち出された際にこぼれたものと考えられる。



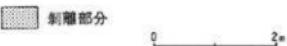
A. 右側壁 奥壁寄り



B. 右側壁 玄門寄り



C. 玄門上部



第32図 B-c-4号横穴実測図
工具複査測図

④ 削削方法・工具

壁面の工具痕が良好に残る横穴である。鑿状工具による刺突痕・削痕は玄門上部から右側壁にかけて特に残りがよく、調整工具痕は全体によく残っている。3ヶ所で壁面工具痕の実測をしている。

鑿状工具は幅1.6cmで、先端は弧状の刃部を持つ。壁面実測図A（右側壁奥壁寄り）では削痕の断面が方形のものが多いのに対して、壁面実測図C（玄門上部）では削痕断面は弧状を呈する。幅や先端部の形状には変わりなく、おそらくは断面形状が「かまぼこ」型を呈する同じ工具の表裏あるいは側面を用いたものと思われる。ほかに幅広の丸い刺突痕が見られるが、岩盤層間層の砂層部分に多く、同じ鑿痕が風化したものであろう。鑿状工具痕は天井部から放射状に、壁面では右上から左下へ打ちおされている。

調整工具は明確に幅の分かれる痕はないが、おそらくは幅5~6cmで、先端は弧状の刃部を持つ幅広の工具で、壁面実測図に示したように細かい運動で連続的に削り取り、「うろこ」状に仕上げている。壁面実測図AとB（右側壁玄門寄り）の箇所では、この調整工具痕1単位の中に細かくみれば5~6本の条痕があり、刃こぼれがあったことがうかがわれる。壁面実測図Cでは調整工具痕にはそのような条痕は見られず、Cの加工で刃こぼれをおこしB→Aへと向かっていったか、あるいは途中で工具を交換しているのであろうか。調整工具痕も天井部から放射状に、壁面では右上から左下へ打たれている。天頂部では2方向でより細かく丁寧に整形されている。

⑤ 墓前部

羨門から2.7mは比較的平坦に近い緩斜面で、B-c-5号横穴とは山の稜線によって明確に区別され、B-c-3号横穴との間にもわずかに稜線が認められる。この間幅2.5mほどが墓前域をなしていると考えられる。この部分には須恵器甕を中心とした破片が散乱していた。その前面は自然の岩盤層の急斜面となる。

⑥ 遺物

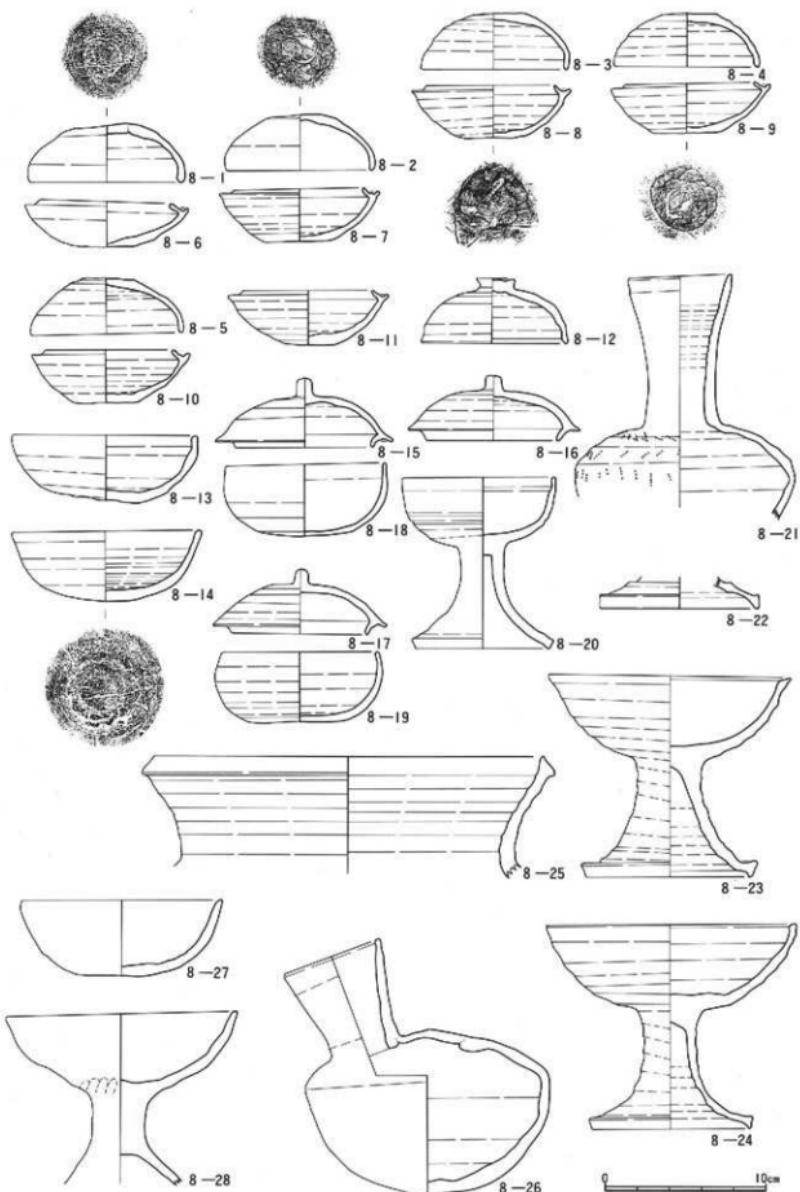
a) 出土状態

遺物は豊富に残存しているが、玉類などの装身具ではなく、須恵器と若干の土師器、それと鉄製品、特に鉄鎌が数多く出土している。土器は玄門付近から羨道部の封鎖石の上や間から多く検出され、羨門付近の封鎖石上にも数点乗っている。これらはいずれも原位置から動かされていると考えざるを得ない。鉄製品は玄室内床面左寄りを中心に散乱している。

b) 土器

第33図が当横穴の出土土器である。8-1~8-26は須恵器で、8-27~8-28は土師器である。8-1~8-5は口径8.9~9.4cmでほぼ同型の环蓋である。天井部が丸く、やや偏平な半球状を呈し、口縁部は内湾気味となる。8-1はやや大きく、器厚も厚く、胎土・色調も他の4点とは異なる。天井中央部外周をヘラ削りし、中央をなでつけて調整、ヘラ記号「-」を付けている。天井部内面中央は未調整である。8-3~8-5は天井部中央をヘラ削りによって平らにし、その周囲を同心円状にヘラ削りを1周させて調整している。天井部内面には仕上げナデを残している。8-2は天井部中央を手持ちヘラ削りで調整して平らにしている。

8-6~8-11は最大径9.9~10.2cmで、上記の蓋が付く身である。8-7~8-11はほぼ同型を示し、底部に丸味があり、偏平な半球形を呈する。立ち上がりは短く、著しく内傾し、端部は外反する。8-7・8-1は体部下端から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りを行い底部を平らにしている。8-9・8-10は底部中央をヘラ削りで平らにした後、その外周を手持ちヘラ削りでそぎ落としている。8-8は底部のほぼ全体を手持ちヘラ削りによって調整している。8-7・8-9・8-11の底部内面には仕上げナデが残る。8-6は他のものより器高が低く、より浅く偏平である。立ち上がりは短く著しく内傾するが、あまり外反しない。底部はヘラ切り未調整を軽くなでつけている。色調・胎土とも他と異なり、8-1と組み合せになると考えられる。



第33図 出出土器実測図(8) B-c-4

第33図出土土器実測図(8) 法量表

(単位: cm)

No.	遺構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	B-c-4号横穴	須恵器	环蓋	9.4	3.45		灰色	完形	22-12
2	B-c-4号横穴	須恵器	环蓋	9.0	3.5		青灰色	完形	23-1
3	B-c-4号横穴	須恵器	环蓋	9.0	3.5		青灰色	完形	23-2
4	B-c-4号横穴	須恵器	环蓋	8.9	3.5		灰色	2/3	23-3
5	B-c-4号横穴	須恵器	环蓋	9.2	3.5		灰色	ほぼ完形	23-4
6	B-c-4号横穴	須恵器	环身	8.1/10.2	2.8		青灰色	完形	27-1
7	B-c-4号横穴	須恵器	环身	8.1/10.0	3.2		灰色	完形	27-2
8	B-c-4号横穴	須恵器	环身	8.0/9.9	3.2		灰色	完形	27-3
9	B-c-4号横穴	須恵器	环身	8.1/10.0	3.2		灰色	ほぼ完形	27-4
10	B-c-4号横穴	須恵器	环身	7.8/9.9	3.3		灰色	1/2	27-5
11	B-c-4号横穴	須恵器	环身	8.1/10.0	3.2		灰色	1/2	27-6
12	B-c-4号横穴	須恵器	高环蓋	8.8	3.9		青灰色	ほぼ完形	32-2
13	B-c-4号横穴	須恵器	环身	11.2	4.2		灰白色	ほぼ完形	29-12
14	B-c-4号横穴	須恵器	环身	11.5	4.3		白灰色	完形	30-1
15	B-c-4号横穴	須恵器	环蓋	8.4/11.0	4.3		淡黄灰色	ほぼ完形	28-7
16	B-c-4号横穴	須恵器	环蓋	8.0/10.6	3.5		灰白色	完形	
17	B-c-4号横穴	須恵器	环蓋	8.4/10.8	4.0		灰白色	完形	28-9
18	B-c-4号横穴	須恵器	环身	10.0	4.5	5.9	灰白色	完形	30-2
19	B-c-4号横穴	須恵器	环身	9.6	4.3	5.7	白灰色	ほぼ完形	30-3
20	B-c-4号横穴	須恵器	高环	9.3	10.6	8.2	灰色	ほぼ完形	32-10
21	B-c-4号横穴	須恵器	長頸瓶	6.4			灰色	頸~体部	
22	B-c-4号横穴	須恵器	脚部			9.7	灰白色	底部3/4	
23	B-c-4号横穴	須恵器	高环	15.0	12.5	10.2	灰白色	ほぼ完形	33-4
24	B-c-4号横穴	須恵器	高环	15.4	12.6	9.8	灰白色	完形	33-5
25	B-c-4号横穴	須恵器	甕	24.0			灰白色	口縁1/6	
26	B-c-4号横穴	須恵器	平瓶	6.2	15.8		暗赤灰色	口縁2/3と体部	35-2
27	B-c-4号横穴	土師器	环身	12.2	4.7		浅黄色	ほぼ完形	37-5
28	B-c-4号横穴	土師器	高环	14.2			浅黄橙色	脚部底部欠	37-6

8-13・8-14はかえり付きの蓋が付く無台环身と思われる。底部が丸く、やや偏平な半球形を呈する。ともに器厚が厚い。8-13は口縁部が内湾し、端部内面に沈線が入る。8-14の口縁部は比較的直線的に外に開く。ともに体部下部から底部まで回転ヘラ削りし、底部中央の削り残しをなでつけている。8-14の底部にはヘラ記号「-」がある。

8-15~8-17は最大径10.6~11cmで、器高が高く、丸味のある天井部中央に乳頭状のつまみが付くかえり付き蓋である。天井部上半をラセン状に回転ヘラ削りする。口縁端部はやや外反する。かえりは長く、大きく外反しながら内傾する。8-18・8-19はこの蓋が付く环身であろう。体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾し、深く丸味がある。器厚が薄く、非常に丁寧なつくりで、銅鏡を忠実に模したものであろう。体部下端から底部中央まで丁寧に回転ヘラ削りを施している。

8-20の高环は小型で、口縁部はほぼ直立し、端部内面に段を付ける。体部中央に2条の沈線を施す。脚部は裾広がりで、端部は面取りしている。8-23は口縁部をやや外反させ、内傾面を面取りして断面三角形に仕上げる。脚部は裾広がりで、最後を水平に引き出し、端部を鋭く折り曲げて断面三角形とする。8-24の口縁部は外反させず、内傾面を面取りしている。脚部はやや直線的にさがってから大きく広がり、端部は断面三角形に仕上げる。

8-21・8-22は長頸瓶とその脚部と思われる。8-21は肩部から体部にかけて梅刺突文を3段施し、口頭

部は細長く、外反しながら伸び、口縁部はやや内傾する。8-22の脚部は屈曲するタイプで、端部は断面三角形に仕上げている。8-26は平瓶で、底部が丸く、半球形の体部に、肩部は偏平な円錐形を呈する。底部はなでつけて調整している。口縁部は比較的長く直線的に伸び、ハの字状に開く。口縁端部内面にわずかな段を持つ。8-25は甕の口縁部破片である。

8-27は土師器壺身である。口縁部が内湾せず、外に開くタイプである。8-28は土師器高壺で、脚部下半を欠く。脚部上半まで中実とする。ともに表面剝離が激しく、調整等の詳細は不明である。

c) 鉄製品

第39図3-2から3-44までがB-c-4号横穴の鉄製品で、43点図示した。次の5点を除いてあと38点は鐵錠である。3-2は直刀の刀身から茎の一部で、現存長20.8cm、刀身は平背平造で幅2.5cm、背幅4.2mmである。比較的明瞭な刃刃を経て茎に連続する。茎は幅19.2cm、厚さ5.8mmである。3-3は刀の鍔と考えられるが、長さ7.4cm、幅5.4cmほどの六角形を呈するものと推定される。厚さ2.3mmである。内径は長径2.4cm、短径1.7cmほどにならう。3-42-3-44は用途不明の金具片である。

鐵3-4～3-6はほぼ完形品である。3-4は後藤守一氏による分類で範被広鋒両丸造三角形式あるいは主頭式で、現存長9.1cm、鎌身長3.1cm、幅3.1cm、厚さ2.5mmを測る。範被は長さ3.2cm、断面方形で幅10.3mm、厚さ6mmとやや厚い。茎は現存長2.1cm、先端に向かって細くなる。3-5は範被と茎の間に突起があり、鎌身は細く、長い範被と区別がつき難い。端刃棘範被堅筒式というべきか。鎌身幅9.1mm、厚さ2.2mm、範被幅6.5mm、厚さ3.8mm、茎は端部に向かって細くなり、木質が付着している。3-6も範被と茎の間に棘状突起を持つもので、鎌身が小さく範被が長い。両丸造範被堅筒式である。鎌身長1.9cm、幅1.05cm、厚さ4mm、範被長8.2cm、断面方形で幅7mm、厚さ5.3mm。茎も断面方形で端部に向かって細くなる。3-7～3-12および3-14～3-21は鎌身の破片を含むものであるが、いずれも範被からわざかに幅を広めて小さな鎌身をつくるもので、後藤氏分類で堅筒式に含められるものである。これら以外は範被あるいは茎の破片である。このうち3-13・3-23・3-24・3-27は範被と茎の間に棘状の突起を持つものである。3-13の範被は現存長で8.5cmを測り、非常に長い。茎の破片は木質を付着させるものが多いが、3-40は特にその残りがよく、茎の先端部の周囲に木質が板状に貼り付いている。

この横穴では、他の横穴に比べて鉄製品、特に鎌の出土量が群を抜いている。被葬者の性格と何らかの関連があると考えられる。

⑦築造年代・追葬

出土した須恵器蓋は、当横穴の分類でE類とF-1類の1群とG-2類の2点に分けられる。8-20・8-23などの高壺、8-21/22の長頸壺などは前者に伴うと思われるが、8-24の高壺は口縁端部が丸くおさめられ、あるいは後者に伴うかもしれない。前者は造考研編年IV期前半、後者はIV期後半にあたる。したがって7世紀中葉に築造され、7世紀後葉に1回追葬が行なわれたと考えられる。

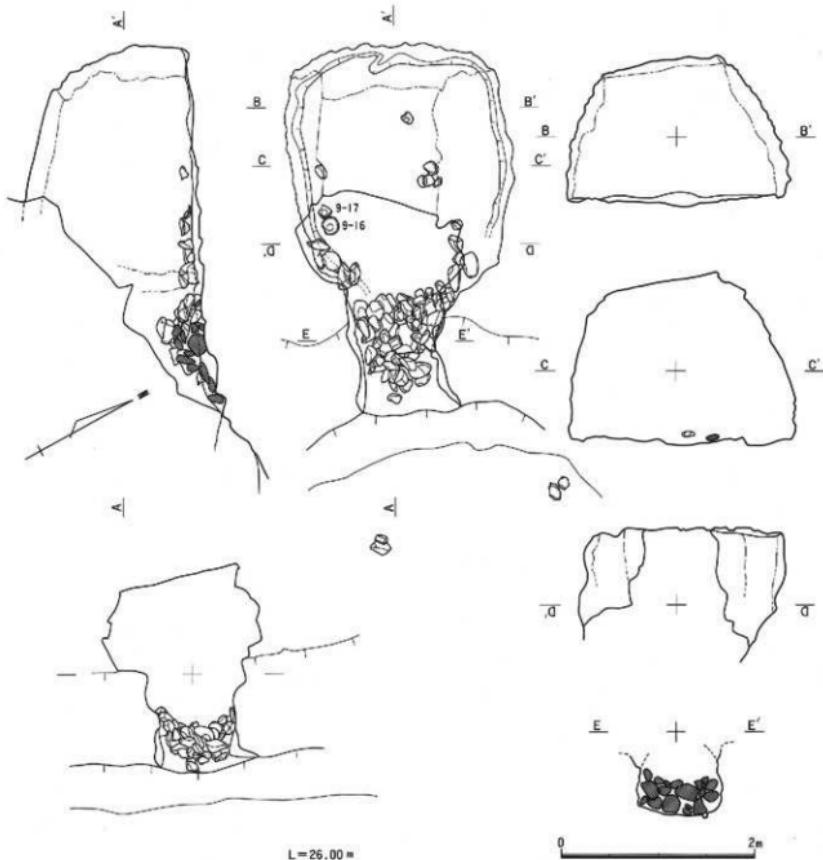
5) B-c-5号横穴（第34図 図版18）

①保存状態

調査開始前から開口し、事前調査によってその存在が知られた横穴である。羨道部上部から玄室天井部の1/3まで崩落によって失われている。封鎖石は比較的残っていたが、遺物の残りは悪く、墓前部に封鎖石や土器の破片が散乱していた。

②玄室

平面形は明確に隅丸方形を呈する。わずかに継長である。全長2.37m、奥壁部幅2.10m、中央部幅2.28m、開口部幅1.93mを測る。玄門左側は明瞭であるが、右側は湾曲しながら羨道部に連続するため玄門位置がやや不明瞭である。断面形は上辺が傾いた台形を呈するが、天井部が平らになっているのは造営時



第34図 B-c-5号横穴実測図

に斜行する岩盤層に規制されたかあるいは岩盤層に沿ってその後崩落したものと考えられるため、基本的にはドーム型を意識していると思われる。中央部の高さは1.71mである。主軸方位はN-62°-Wである。

床面は斜行岩盤層による段々を除けばほぼ平坦で、奥壁から羨道に向かってわずかに傾斜する。傾斜角は4°である。奥壁から左右両側壁にかけて壁溝状の小溝が存在する。ぼんやりとした窪みであり明確なものではないが、幅10~15cmで、深さは2~5cmほどである。埋葬施設は不明である。奥壁は比較的直線的で両側壁との境も明確であるが、上部は緩やかに内湾し、天井部との境はあまり明瞭ではない。

③羨道部

全長1.38m、玄門部幅1.14m、中央部幅0.80m、羨門部幅1.00mを測り、中央部がややくびれる。断面

形は不明である。封鎖石は羨道中央部1.0mの範囲に、高さ50cmで3段分ほど残存する。玄室内両側壁寄りに崩れた石が若干転がっており、墓前部にもその一部と思われる石が散乱していた。石は河原石を用い、径5~10cmほどのものと径15~25cmほどの大型のものとがあるが、積み方に明確な区別がつけられず、両者が混じり合って比較的難然と積み上げられている。

④ 削削方法・工具

壁面の風化が激しく、調整痕等の残りはあまりよくない。鑿状工具による刺突痕・削痕は左側壁に比較的形状が分かるものが残り、それによれば幅2cmで削痕断面が方形、先端が隅丸方形の刃部を持つ工具である。一方同様の幅で削痕断面が弧状を呈する鑿状工具痕が右側壁玄門付近に見られるが、この先端は「つるはし」状に丸く細くなっている。調整痕は右側壁と左側壁の羨道側にところどころ残っている。幅6cmほどで先端に弧状の刃部を持つ幅広の工具で連続的に削り取っている。

⑤ 墓前部

羨門に40cmほどの段差があり、その前面約2mは比較的急であるが緩傾斜となる。両側を山の稜線によって区切られており、墓前域をなすと考えることができる。ここに封鎖石の一部と須恵器破片が散乱していた。その前面は自然の岩盤層の急傾斜となる。

⑥ 遺物

a) 出土状態

出土遺物はすべて土器である。2点の山茶塊は玄室内左側壁に貼り付くように出土しているが、その他はすべて墓前部に疊と共に散乱していたものである。

b) 土器

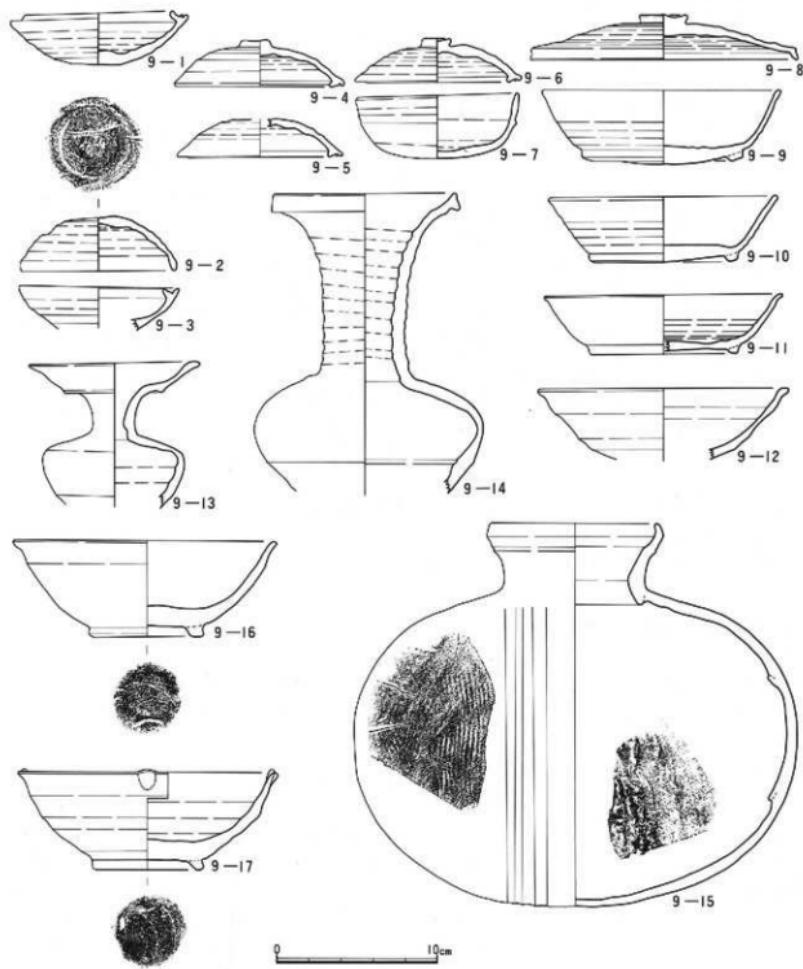
第35図に図示している。9-1~9-15は須恵器、9-16・9-17は山茶塊である。9-1は最大径11.1cm、9-3は9.9cmの环身である。器高が低く浅く偏平な器形を呈し、底部は回転ヘラ削りを施し、9-1は丸く仕上げられている。立ち上がりは短く外反しながら内傾する。9-3では受け部と同じくらいの高さにとどまる。9-2はこの身に付く蓋で、天井部が丸く、半球形を呈する。口縁端部でやや内湾する。天井部ヘラ切りの後、中央部をなでつけ、ヘラ記号「-」を施す。

9-4~9-6は最大径10.2~10.5cmでほぼ同型のかえり付き蓋である。弓張り状の天井部に偏平なボタン状のつまみが付く。かえりは退化してきわめて短く、断面三角形を呈する。天井部上半を回転ヘラ削りする。9-7はこれらを蓋とする身で、底部から体部にかけて丸味があり、口縁部はわずかに外傾する。底部に回転ヘラ削りを施す。

9-8はかえりが消失した环蓋で、口径16.5cm、器高が低く偏平である。天井部上半を回転ヘラ削りして中央に偏平な宝珠状つまみを付ける。口縁端部を折り曲げて受け部をつくり、受け部はやや外傾する。9-9・9-10は高台が付く有蓋环身である。9-9は底部が丸く高台より下に出るタイプで、高台は低く、断面四角形、体部はやや張り出し、口縁端部をわずかに外反させる。9-10の底部も丸いが、平底気味で高台の下には出ない。口縁部は直線的に外傾する。

9-11は口縁部を短く外反させ、無蓋の有台环身と考えられる。底部は平底につくり、高台は断面四角形だが底部に内傾面をつくり、外縁を接地面とする。9-12も口縁端部を外反させて引き出しており、無蓋の無台环身と考えられる。底部を欠くがおそらく丸底で、体部下端から回転ヘラ削りを施す。

9-13は延びて、底部と注口部を欠く。細い頸部から明瞭な稜線を持つ屈曲部を経て大きく開く口縁部につながる。口縁端部はやや外に引き出し、水平面をつくっている。9-14は長頸瓶で体部下半を欠く。頸部は長く直立し、口縁部で大きく開く。口縁端部は断面三角形形状となす。9-15は横瓶で、やや短い俵型の体部に短い口縁部が付く。口縁端部は大きく内傾させる。体部外面中央はカキ目調整され、一部に平行タタキ目痕が残る。



第35図 出土土器実測図 (9) B-c-5

9-16・9-17は山茶塊である。9-16は口縁端部をやや外反させ、9-17は4箇所をつまんで輪花塊としている。底部に回転糸切り痕が残る。高台は断面四角形である。12世紀後半代の湖西～渥美窯産と思われる。

⑦築造年代・追葬

出土した須恵器蓋環類は、当横穴群における分類でD-2類の1点、E-3a類とF-2類の1群、それにI類

第35回出土土器実測図(9) 法量表

(単位: cm)

No.	遺構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	B-c-5号横穴	須恵器	环身	9.0/11.1	3.4		灰色	底部2/3と口縁	27-7
2	B-c-5号横穴	須恵器	环蓋	9.4	3.4		灰色	1/2	23-5
3	B-c-5号横穴	須恵器	环身	8.3/9.9			灰色	口縁1/4	
4	B-c-5号横穴	須恵器	环蓋	8.8/10.5	2.9		淡青灰色	2/3	28-10
5	B-c-5号横穴	須恵器	环蓋	8.5/10.2			灰白色	1/2	28-11
6	B-c-5号横穴	須恵器	环蓋	8.8/10.3	2.7		灰白色	2/3	28-12
7	B-c-5号横穴	須恵器	环身	9.8	4.0		灰色	1/2	30-4
8	B-c-5号横穴	須恵器	环蓋	16.5	2.8		灰白色	1/3	30-7
9	B-c-5号横穴	須恵器	环身	14.6	4.6	10.0	灰白色	口縁2/3と底部	31-7
10	B-c-5号横穴	須恵器	环身	14.0	4.1	9.0	灰白色	2/3	31-8
11	B-c-5号横穴	須恵器	环身	14.8	3.7	9.0	灰色	1/4	31-9
12	B-c-5号横穴	須恵器	环身	15.4	4.4		灰色	口縁1/4	31-10
13	B-c-5号横穴	須恵器	瓶	10.4			灰白色	口縁1/2と体部	
14	B-c-5号横穴	須恵器	長頸瓶	11.2			灰白色	口縁1/2と体部	
15	B-c-5号横穴	須恵器	横瓶	10.1	23.8		灰白色	1/2	36-4
16	B-c-5号横穴	山茶壺	塊	16.2	6.0	6.7	灰白色	ほぼ完形	37-7
17	B-c-5号横穴	山茶壺	輪花壺	15.8	5.9	6.6	白灰色	3/4	37-4

の1群の3期に分かれる。遠考研編年で、それぞれIV期前半、IV期後半、V期前半に相当する。その他の須恵器もそのいずれかに伴うものであろう。したがって7世紀中葉に築造され、7世紀後葉と8世紀前葉に2回追葬が行なわれたと考えることができる。ただ全体に环蓋類の点数が少なく、断定は難しい。

6) B-c-6号横穴 (第36図、図版18・19)

①保存状態

調査開始後、表土除去の過程で新たに発見された横穴である。羨道部前面が斜面の崩壊によって若干失われている他は良好に保存されている。特に壁面の調整痕がよく残る。封鎖石・遺物の残りもよい。

②玄室

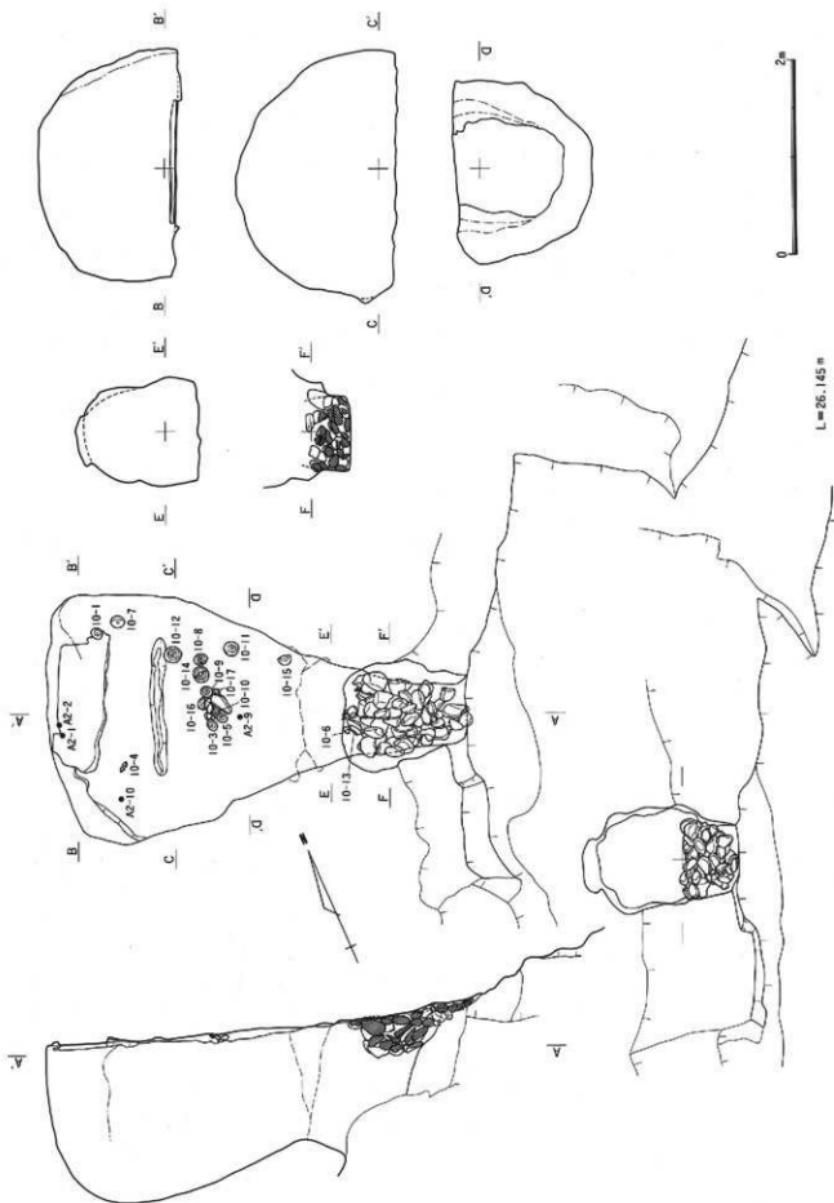
平面形は横長の隅丸方形の前面が開く形状を呈している。両側壁からわずかな屈曲を経て羨道部までだらだらと連続していくため羨道部との区別がつきにくく、平面では玄門位置が明確ではない。玄室天井部と羨道との境は明瞭なため、これを玄門位置として計測すると玄室全長2.55m、奥壁部幅2.32m、中央部幅2.50m、開口部幅1.85mを測る。断面形はドーム型で、中央部の高さは1.66mと比較的高い。主軸方位はN-66°-Wである。

床面は斜行する岩盤層に伴う細かい段はあるがほぼ平坦で、奥壁から羨道部に向かってわずかに傾斜している。傾斜角は5°である。壁溝は存在しないが、ほぼ中央部に主軸に直交して幅12cm、長さ1.42mの浅い小溝が掘られている。両側壁には達していないが、埋葬部分との境界の可能性もある。奥壁下部は比較的直線的で両側壁との区別もつきやすいが、上部では緩やかに内湾し、天井部・側壁との境は不明瞭となる。

奥壁寄りに長さ1.30m、幅40-50cm、厚さ4-5cmのほぼ長方形の板状石が主軸に直交する方向に置かれている。周囲の岩盤層の層序と比較すると、これは削り出したものではなく、岩盤層から切り出して置いたもので、B-b-6号横穴に見られたような棺座の一部ではないかと考えられる。

③羨道部

全長1.75m、玄門部幅1.26m、中央部幅0.82m、羨門部幅0.63mを測り、羨門に向かって狭まる。断面



第36図 B-c-6号横穴実測図

形はアーチ型、中央部で高さ1.26mである。封鎖石は羨門から1.3mの範囲に、高さ40cmで3段分ほど残存する。径8~20cmの河原石を用いて比較的雑然と積み上げている。

④掘削方法・工具

全体に壁面の保存状態がよいか、調整が非常に丁寧で細かく施されているため、鑿状工具による刺突痕・削痕はあまり明確に残されていない。の中でも残りのよいものを見ると、1.7cm×1.7cmの正方形で1辺が弧状となるいわゆる「かまぼこ」型の断面をもち先端が丸い刺突痕が認められる。他に幅1.7cmだが厚さ1.2cmの長方形断面の刺突痕、幅1.5cmで先端が弧状刃の削痕（奥壁および玄門付近）、幅1cmほどの細い削痕（天井部）などがあるが、これらは工具の違いによるものか、同じ工具の使用法の違いによるものか判断し難い。これ以外に幅2.5cmで先端が直線的な弧状刃を持つ工具の削痕が右側壁玄門付近にのみ認められる。これは別の工具であろう。

調整は幅6.5~7cmで先端に弧状の刃部を持つ幅広の工具を用いて壁面全体に行なっている。細かい運動で連続的に削り取り、「うろこ」状に仕上げているが、他の横穴におけるそれよりも運動が細かく丁寧に削られている。調整痕・鑿状工具痕とも天井部から放射状に、壁面では右上から左下へ打ちおろされている。

⑤墓前部

羨門左側に見られる小さなテラスは斜面の崩壊によるもので本来の施設ではないと思われる。羨門から40cmほどの段差を経て、その前面2mほどの間は緩斜面である。この緩斜面は両側に明瞭に山の稜線が迫り、斜面を掘り込んで横幅4mほどの区画を形成しており、これが墓前域をなすと考えられる。その前面は自然の岩盤の急傾斜となる。

⑥遺物

a) 出土状態

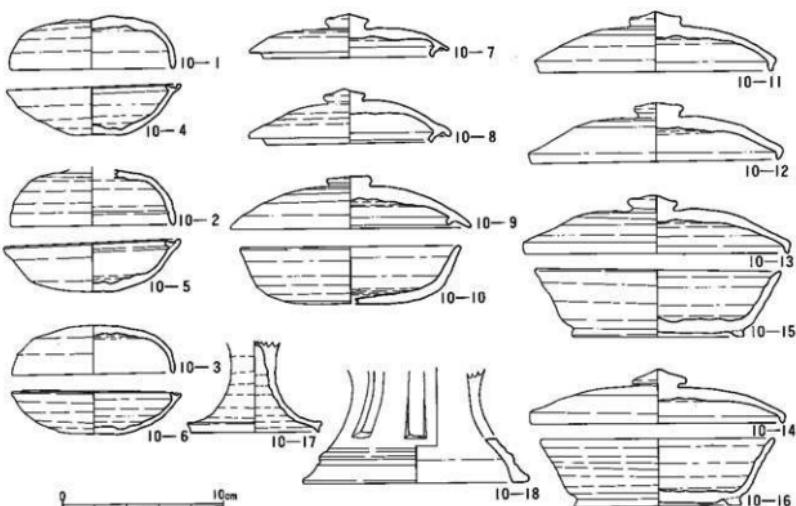
遺物の残りは比較的良好で、須恵器とともに玉類が豊富に残存する。鉄製品は小破片が1点のみ検出された。須恵器は玄室中央玄門寄りの床面に密集する部分があるが、遺物の年代には幅があり、後に集められたものと考えられる。勾玉2点は奥壁と棺座石の間に出土し、その他の玉類はほとんど排水土の洗浄から検出したものである。

b) 土器

第37図に図示した。すべて須恵器である。10-1~10-3の环蓋は口径10.0cmほどで、10-1・10-3は天井が広く器高が低い偏平な器形を呈する。天井部上部に回転ヘラ削りを行なう。10-2はやや器高が高く、口縁部が外へ開き、内面に沈線が施される。10-4~10-6は最大径10.6~11.0cmのほぼ同型で、上記の蓋と対をなすと思われる。底部は丸いが、偏平で浅い。底部はヘラ切りのまま中央部をなでつけて平らにしている。立ち上がりはきわめて短く、著しく内傾し、端部はわずかに外反して上を向く。受け部端と同じ高さにとどまる。

10-7・10-8は最大径12.5cm前後で、つまみとかえりが付く蓋である。10-7は天井部が平らで偏平な器形を呈する。天井部をラセン状に回転ヘラ削りし、中央に宝珠状のつまみが付く。かえりは比較的長く、端部は外反する。10-8は器高が高く、弓張り状を呈する。口縁部は端部をやや内湾させ、かえりは比較的長く、端部が外反する。

10-9もつまみとかえりが付く蓋であるが、最大径が15.0cmと大きく、かえりも退化して著しく短く断面三角形を呈する。天井部は丸く、比較的器高は高い。天井部上半をラセン状に回転ヘラ削りし、偏平なボタン状のつまみが付く。口縁端部はまっすぐ外に開く。10-10がこの蓋の身となろう。底部は回転ヘラ削りによって平らにし、浅く偏平な器形である。底部中央に削り残しがある。口縁端部はわずかに外反気味である。



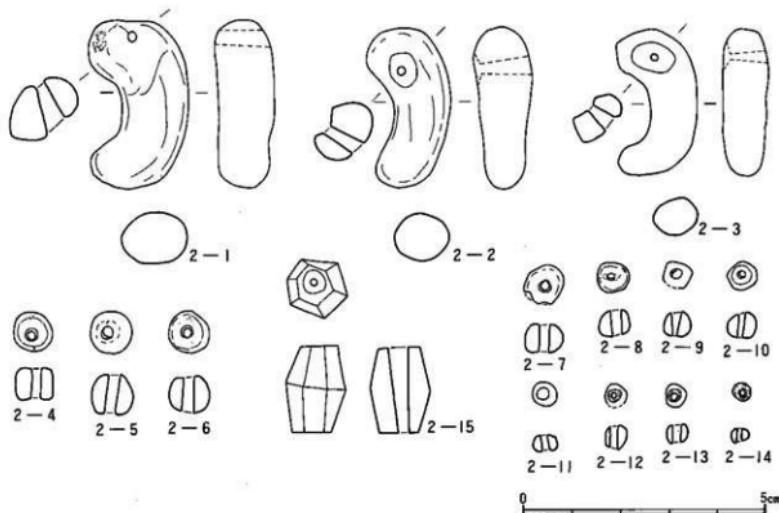
第37図 出土土器実測図 (10) B-c-6

第37図出土土器実測図 (10) 法量表

(単位: cm)

No.	遺構・層位	種別	器型・分類	口径最大径	器高	底径	色調	残存状態	写真
1	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	9.9	3.3		暗緑灰色	完形	23-6
2	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	10.0			灰色	1/3	23-7
3	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	10.0		3.1	暗青灰色	完形	23-8
4	B-c-6号横穴	須恵器	環身	9.2/10.9	3.1		灰色	完形	27-8
5	B-c-6号横穴	須恵器	環身	9.3/11.0	3.05		青灰色	完形	27-9
6	B-c-6号横穴	須恵器	環身	9.2/10.6	3.2		灰色	3/4	27-10
7	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	10.4/12.4	2.7		明緑灰色	完形	29-1
8	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	10.1/12.6	3.3		灰色	完形	29-9
9	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	12.4/15.0	3.3		灰白色	完形	29-3
10	B-c-6号横穴	須恵器	環身	13.6	3.5		灰白色	1/2	31-11
11	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	14.4/15.1	3.6		灰色	完形	30-8
12	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	15.4	3.7		灰色	完形	30-9
13	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	16.1	3.5		灰白色	1/2	21-10
14	B-c-6号横穴	須恵器	環蓋	15.5	3.4		灰色	ほぼ完形	30-11
15	B-c-6号横穴	須恵器	環身	15.1	4.3	10.6	灰白色	ほぼ完形	31-12
16	B-c-6号横穴	須恵器	環身	14.6	4.3	10.4	灰白色	ほぼ完形	32-1
17	B-c-6号横穴	須恵器	脚部			7.9	灰白色	脚部のみ	
18	B-c-6号横穴	須恵器	脚部			13.0	灰白色	脚部のみ	

10-11～10-14はかえりが消失し、宝珠状のつまみが付く蓋である。最大径16cm前後で、やや偏平な弓張り状を呈する。天井部上半を同心円状に回転ヘラ削りし、口縁部はわずかに外反気味で端部を下に折り曲げ受け部とする。10-11・10-12の受け部は内傾し、10-13・10-14はやや外傾する。10-15・10-16はこれらの蓋と組み合せとなる有台環身である。底部は回転ヘラ削りを施し平底に作り、箱型を呈する。高台は低く断面四角形だがやや外に開くように付く。口縁端部を外反気味とする。



第38図 出土装身具実測図(2) B-c-5

第38図出土装身具実測図(2) 法量表

(単位:mm)

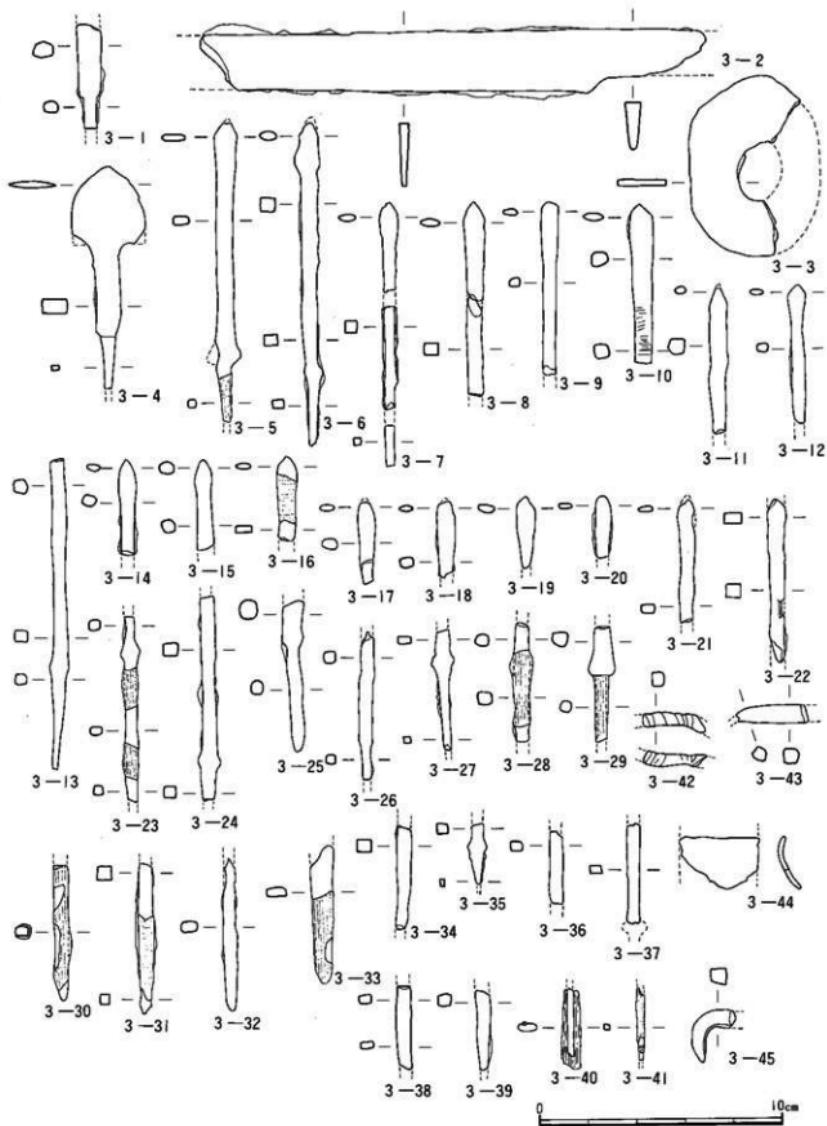
番号	造構	名称	外径	長さ	厚さ	断面径	穿孔径	重さ
1	B-c-5号横穴	勾玉		34.4	10.09			10.1g
2	B-c-6号横穴	勾玉		32.6	9.2			6.6g
3	B-c-6号横穴	勾玉		29.5	7.9			4.8g
4	B-c-6号横穴	丸玉	6.38×7.35		6.15		2.0	
5	B-c-6号横穴	丸玉	7.8×7.41		7.41		2.0	
6	B-c-6号横穴	丸玉	8.1×7.8		6.5		1.8	
7	B-c-6号横穴	ガラス玉	7.31		4.5		1.5	
8	B-c-6号横穴	ガラス玉	5.95×5.7		4.5		2.0	
9	B-c-6号横穴	ガラス小玉	4.4		3.4			
10	B-c-6号横穴	ガラス玉	5.51×6.0		3.92		1.0	
11	B-c-6号横穴	ガラス小玉	4.39×4.65		3.91		2.0	
12	B-c-6号横穴	ガラス小玉	4.12		3.9		1.1	
13	B-c-6号横穴	ガラス小玉	4.35×3.87		3.12		1.8	
14	B-c-6号横穴	ガラス小玉	3.3×3.25		2.2		0.8	
15	B-c-6号横穴	切子玉	11.9	17.3				3.3g

10-17は小型の脚部である。裾広がりで端部は強くなれて断面三角形につくる。10-18は9方向に透かしが入る脚部である。透かし下部で棱と沈線を伴って一端屈曲させ、端部は厚く、接地面を面取りしている。高盤の脚部と考えられる。

c) 装身具

出土した装身具は第38図に図示した。勾玉3、丸玉3、ガラス小玉8、切子玉1の計15点が出土している。このうち2-1・2-2は玄室内の棺座と思われる切り石と奥壁の間から検出され、2-9が玄室内ほぼ中央の床面、2-10が玄室内北西の壁ぎわ床面からそれぞれ検出された。

2-1は白い半透明で硬さのある材質の勾玉である。蛍光X線による成分分析の結果、炭素70%、硅素25%、



第39図 出土鉄製品実測図 (3) B-c-3 B-c-4 B-c-8

その他5%とほとんどが炭素成分であるという結果が出ている。これを信じれば、この勾玉の材質は水晶でもガラスでもないということになるが、国立東京文化財研究所によれば、この分析値には問題があり、比重等を調べてみると、おそらくガラスであろうと判断される。2-2・2-3は瑪瑙製の勾玉である。2-2は頭部を大きく残し、尾端に向かって細く尖っていく。2-3は「コ」字形を呈する。細身で全面丁寧に磨き込んでいる。2-1・2-2・2-3とも穿孔は前述したように片側から穿ち、貫通間際で他面側に抉りを入れる孔である。2-4~2-6の丸玉は3点とも同石材で作られている。形態も2-4の穿孔面がやや広いが、同一に製作されたものであろう。2-7・2-8・2-10はガラス玉、2-9・2-11~2-14はガラス小玉に分類した。2-7は径7.3mm、水色のガラス玉である。やや粗雑なつくりで表面には気泡で空洞があちこちにできている。孔は円形でなく角をもった菱形に近い。2-8・2-10は気泡の方向から、管切法で作られていることが分かる。これ以外のガラス小玉は製作技法が定かでない。2-14は透明度の高いスカイブルーのガラス小玉である。径3.3mmの微小な玉であるが、かなり精巧なつくりをしている。同じ横穴内から出土したものであるが、ガラスの質や色調、つくりが異なることから、複数の製作地が考えられる。2-15は水晶製の切子玉である。縦横六角形の14面体を呈する。稜も比較的はっきりしている。中心孔は片側穿孔し、貫通面で抉りを入れている。B-a-1号横穴出土の切子玉に比べ、2-15はやや小型品である。

d) 鉄製品

第39図3-45の小破片が排土の洗浄から検出された。かすがい状の金具片である。

⑦築造年代・追葬

出土した須恵器蓋環類は、当横穴群の分類でE-4類・G-2類の1群とH類・I類の1群に分けられる。10-18の高盤脚部はI類に固有のものである。遠考研究年ではそれぞれIV期後半、IV期後半~V期にあたる。したがって7世紀後葉に築造され、8世紀前葉に1回追葬が行なわれたと考えられる。

第4章 まとめ

第1節 出出土器の分類と年代観

今回の平尾野添横穴群17基の調査により出土した土器は、図示し得たものとして須恵器184点、土師器5点を数える。大半は須恵器であり、横穴の副葬品の主体は須恵器であったことを示している。これらの須恵器のうち、蓋環類は131点を数え、各横穴に最も普遍的に存在し、なおかつ器形変化が比較的激しく連続的で、從来の須恵器研究において年代観決定の根拠とされてきていることから、ここでも今回出土した須恵器蓋環について分類を行ない、各横穴の築造年代・追葬の時期について考える材料としたい。

1. 蓋環の分類

分類の根拠にはさまざまな要素を盛り込むことが可能であり、したがってどのような細かい分類法も可能である。ここでは器径・器高・器形の3要素を中心とし、それに調整法を考慮し、次頁分類表のように分類した。第40図は各横穴出土の蓋環を分類表にしたがって配列したものである。分類はまず蓋の形態（合子型・かえり付き・かえり消滅）で3分し、ついで原則的に器径を基準としてA類からI類まで9類に大別し、その中を他の要素により細分した。器径については、合子型の場合、蓋は口径、身は最大径で示し、かえり付き蓋を伴う場合蓋は最大径、身は口径で示す。かえりが消滅した段階では蓋・身とも口径をとった。分類の境界は、原則的には器径順に並べた時に数mm以上の間隔が認められる部分に設定した（C類・D類・E類の境界は微妙だが、器形等の要素を考慮して設定した）。なお分類表中の個別の土器の番号は実測図版の番号に対応している。

2. 蓋環の相対的編年

ここで試みる分類と編年は、17基の横穴群という非常に限定された範囲での資料操作であり、普遍的な編年を構築しようとするものではなく、あくまで各横穴の築造年代と追葬時期を決定するためのものである。また横穴に副葬された須恵器は、生産段階から需要段階、蓄積段階をへて副葬段階へとたどってきたものであり、共伴關係が必ずしも同時期の生産を示すものではないことはもちろん、逆に異なる分類型式がすなわち別時期の副葬（追葬）を示すものでもない。このような危険性を考慮し、当横穴群における出土状態と從来の須恵器研究における編年案を対照しながら考察を進めたい。

A類～E類が合子型の蓋環、F類～H類がかえり付きつまみ付き蓋を伴うもの、I類がかえりが消滅した蓋を伴うものである。この3者が多少の重なりを持つとしても、同順で年代的形態変化を示していることは、從来の研究により明らかである。また合子型蓋環は器径の大きなA類からE類まで配列し、かえり付き蓋を伴うものは器径の小さなほうからF類からH類まで配列した。これらの配列も同順で大陸年代的変化を示していることが広く認められている。

各分類における細分は必ずしも時期的な前後関係を示すとは限らず、多くは窯毎の差異あるいは工人の個人差に帰することも可能であるが、若干前後関係を想定し得るものもある。例えば、A類の身A-2類（1-7）は器径はA類に属するものの器形的には身B-1類に近く、胎土や焼成の具合もB-1類の1-9に似通っている。したがって身A-1>身A-2という前後関係が考えられる（>は左辺が古く、右辺が新しいことを示す）。B類では、身B-3類は器形的には身A-1類と近く、また身B-2類は器形的にはC類に近い。蓋B-2類は天井部の調整法に新しい要素が見られる。これから身B-3>B-1>B-2と想定される。C類では、細分は微妙な器形差によるもので、あまり大差なく、前後関係を想定しにくい。ただ、身C-3aとC-3bとの間

〈出土須恵器蓋坏分類表〉

分類	種	縦分	横径	高さ	基盤の特徴	天井部・底部の調整	該当土器	備考
A類	蓋		13.2cm	4.6cm	天井部が丸く深みがあり、半球形を呈する。口縁部と天井部の境には沈線を施す。	天井部大半を同心円状に4回転へク割りを施す。	1-3	
	身	A-1	13.7cm ~ 13.9cm	4.0cm	底盤を平らにし、焼く偏平な器形を呈する。	底盤下半から底部中央まで丁寧に同心円状削除へク割りを施す。	1-6	
		A-2		4.8cm	底盤が丸く深みがあり、半球形を呈する。	底盤下半から底部中央まで丁寧に同心円状削除へク割りを施す。	1-7	器形的には身B-1類に近い様相を示す。
B類	蓋	B-1	12.6cm ~ 12.8cm	5cm前後	天井部が丸く深みがあり、半球形を呈する。口縁部は頸く、天井部の頂に沈線を施す。	天井部上半を同心円状に数回転へク割りを行う。	1-4 ~ 1-5	
		B-2		4.2cm	天井部の平坦面が広くやや偏平な器形。口縁部はやや長く、内窓気味であり、天井部との間に沈線を施す。	天井部中央を広く1回転して平らにし、その後縁へク割りを行う。	1-6	器形の仕方は蓋C類に近い。
身	B-1	12.8cm ~ 13.6cm	5cm前後	全体に丸みがあり、半球形を呈する。	底部中央を1回転して平らにしその外周を同心円状に2 ~ 3回転へク割りする。	1-1 ~ 1-9		
	B-2		4.5cm	B-1と同様の器形だが、やや偏平である。		5-21	器形的にはC類に近い様相を示す。	
	B-3		4cm前後	底盤に丸みはあるが、偏平な器形である。		1-2 ~ 3-19 ~ 4-1 ~ 4-2	器形的には身A-1類に近い様相を示す。	
C類	蓋		11.8cm	4.7cm	天井部が丸く深みがあり、半球形を呈する。口縁部と天井部の境には沈線が施される。	天井部中央を1回転へク割りして平らにし、その後縁へク割りする。	5-20	
	身	C-1	11.9cm ~ 12.4cm	4.5cm 前 後	身B-1類と同様の器形を呈する。	底部中央を1回転へク割りして平らにし、その後縁へク割りする。	4-4 ~ 5-22	
	C-2			4.6cm 前 後	深みがあるが、体部の弯曲が弱く、底盤が平らで全体に台形を呈する。		4-3 ~ 5-5	
	C-3a				やや偏平で底盤は丸く、弓張り状を呈する。		5-23 ~ 5-24	
	C-3b				底盤はナゲ調整である。		4-5	
D類	蓋	D-1	10.6cm ~ 10.7cm	4.5cm	天井部が丸く深みがあり、半球状を呈する。口縁部と天井部の境には沈線が施される。	天井部中央を1回転へク割りして平らにし、その後縁へク割りする。	5-1 ~ 5-2	
		D-2		3.8cm	蓋D-1類と同様だがやや高さが低い。		4-13	器形的には蓋E類に近い様相を呈する。
身	D-1a	11.3cm ~ 11.6cm	4.0cm 前 後	4.0cm	底盤が丸く深みがあり、体部の弯曲は強く、全体に円錐状を呈する。	底部中央を1回転へク割りして平らにし、その後縁へク割りする。	5-3 ~ 5-4 ~ 5-26	蓋D-1類と対をなす。
	D-1b			4.9cm	非常に深みがある器形である。		4-6	
D-2a	10.9cm ~ 11.1cm		3.7cm	やや高さが低く偏平な器形である。	底部中央を1回転へク割りして平らにし、その後縁へクセイ状へク割りを行う。	4-19	器形的には身E類に近い様相を呈する。蓋D-2類と対をなす。	
	D-2b				ハラ切り後の中央をなでつけて調整している。	9-1		
D-3	11.7cm ~ 12.0cm		4.5cm	底盤の平坦面が広く、体部には丸みがある。たちあがりが差しく透かし感がある。	底部中央を1回転へク割りして平らにし、その後縁へクセイ状へク割りを行う。	6-1 ~ 6-2		
				口縁に対して器高が低く、偏平な器形である。	天井部中央へク割りにより調整する。	10-1 ~ 10-3		
E類	蓋	E-1	8.9cm ~ 10.6cm	3.1cm ~ 3.6cm	天井部は丸みがあり、やや偏平な半球状を呈する。口縁部は内窓気味のものが多い。	天井部中央を1回転へク割りして平らにし、その後縁へクセイ状へク割りする。	4-9 ~ 12-4 ~ 14-8-3 ~ 5	
	E-2				天井部内縁を手持ちへク割りによつて平らに調節する。	8-2		
	E-3a				ナゲ調整を行つて、天井部中央に平行グタキ目状の底を残す。水調整のものもある。	3-1 ~ 8		
	E-3b				ハラ切り後ナゲ調整を行つて天井部中央を平らにする。	7-3 ~ 7-8-1 ~ 9-2		
	E-4				天井部中央へク割りにより調整する。	7-3 ~ 7-8-1 ~ 9-2		
身	E-1	9.9cm ~ 10.6cm	2.8cm ~ 3.7cm	3.1cm ~ 3.6cm	体部に丸みがあり、偏平な半球状を呈する。たちあがりは透く内傾し、底盤が外反するものが少ない。	底部中央を1回転へク割りして平らにし、その後縁へクセイ状へク割りする。	2-6 ~ 4-15 ~ 18-4 ~ 20-4-21 ~ 8-7 ~ 8-11	蓋E-1類と対をなす。
	E-2				同様の器形であるが、たちあがりがカウメで底く審しく内傾する。	底部はナゲ調整し、中央部に平行グタキ目状の底を残す。水調整のものもある。	3-7 ~ 11	蓋E-3a類と対をなす。
	E-3a				身E-1類と同様の器形である。	底部はヘタ切り後ナゲ調整を行う。	7-8 ~ 12-8-6	蓋E-3b類と対をなす。
	E-4	10.8cm ~ 11.9cm	3.1cm ~ 3.2cm		口縁に対して器高が低く、より偏平な器形である。たわみが少なく、底盤へクセイ状へク割りを施して受け部端と同じ高さにとどまる。		10-4 ~ 6	蓋E-4と対をなす。

分類	種	細分	腰径	器高	器形の特徴	天井部・底部の難易度	該当土器	備考
F種	腹	F-1	10.6cm ~ 11.0cm	3.5cm ~ 4.9cm	天井部が丸みがあり、腰高が高い。口縁部をやや内反させ、かえりは浅く、外反しながら内傾する。	乳頭状のつまみを有する。天井部上半を圓心円弧にへく削りを施す。	8-15 ~ 17	
		F-2	10.2cm ~ 10.6cm	2.7cm ~ 3.2cm	天井部が丸みがあり、腰高が高い。口縁部をやや内反させ、かえりは浅く、外反しながら内傾する。		3-12 ~ 14 ~ 9-4 ~ 6	
		F-3	11.4cm	3.5cm	天井部が丸みがあり、比較的深い。かえりは深く、腰高を高く追加し断面三角形状を呈する。	断面三角形状だが、底盤状つまみを有する。天井部上半を圓心円弧にへく削りを施す。	3-20	
		F-4	12.0cm	2.7cm	腰高が低く、腰平な器形である。かえりは深く、口縁部からわざりに出る程度である。	腰平な宝達つまみを有する。天井部を圓心円弧にへく削りとする。	5-12	
	身	F-1	9.6cm ~ 10.2cm	3.8cm ~ 4.9cm	体部から口縁部にかけて腰やかに内傾し、深く丸みのある形状を呈する。	容頬をやや広めに1回転へく削りして平らにし、その外周を同心円状にもう1回転するものもある。完全に輪郭が確く、非常に丁寧なつくりである。	8-18 ~ 8-19	蓋F-1類と対をなす。
		F-2			底部が丸く、半球形を呈する。口縁部は比較的直線的に外に向く。		3-15 ~ 18 ~ 9-7	蓋F-2類と対をなす。
		F-3	10.3cm	5.0cm位	底部が丸く深い腰高である。口縁部は比較的直線的にやや外傾する。	容頬をやや広めに1回転へく削りして平らにし、その外周を同心円状にもう1回転するものが多い。輪郭が厚い。	5-15	
		F-4	10.5cm	3.5cm	腰高が低くやや浅く、腰形である。口縁部はわざりによじて外反する。	底盤を幅広にして、底部中央に平行丁目を置くのが既成。	4-22	
G種	腹	G-1	12.4cm ~ 13.1cm	3.2cm ~ 3.3cm	天井部が丸みがあり、比較的深い。かえりは深く、腰高を追加して口縁部を呈する。	中央がぼくほく偏平なボタン状つまみが付く。	5-11 ~ 5-27	
		G-2a				容頬をやや広めに1回転へく削りして平らにし、その外周を同心円状にもう1回転するものもある。	10-8	
		G-2b		2.7cm	天井部が丸みがあり、口縁部をやや外反させ、腰高は内傾する。かえりは比較的深く、外反しながら内傾する。		10-7	
	身	G-1	12.0cm ~ 12.2cm	4cm前後	天井部が丸みがあり、口縁部は比較的直線的に開き、腰形に近い。	底部を幅広のへく削りを1回転させ平らにしている。	5-13 ~ 5-14 ~ 6-3	蓋G-1類と対をなす。
		G-2	11.2cm ~ 11.5cm		底部が丸く、半球形を呈する。	底部をへく削り後、中央部をなでつけて平らにしている。	8-13 ~ 8-14	
H種	腹		15.0cm	3.3cm	天井部は丸く、凹凸り状を呈する。口縁部を引いて受け窪をつくす。	天井部上半を圓心円弧にへく削りし、腰平なボタン状つまみを行け。	10-9	
	身		13.6cm	3.5cm	底部の平面部がなく、浅く、腰平な腰形を呈する。口縁部はわざりによじて外反気味である。	底部はへく削りして平らにするが、中央部は削り残す。	10-10	上記蓋と対をなす。
I種	腹	I-1	14.4cm ~ 16.1cm	3.4cm ~ 3.7cm	腰平な分張り状を呈する。口縁部を引いて受け窪をつくす。	天井部上半を圓心円弧に回転へく削りして中央に宝達つまみを付ける。	10-11 ~ 14	
		I-2	15.9cm ~ 16.5cm	2.8cm ~ 3.5cm	口縁部のわりに腰高が低く、腰平な腰形を呈する。腰部をへく削りし、腰高を引いて窪みを引いて受け窪とする。		5-29 ~ 9-8	
		I-3	14.6cm ~ 14.7cm	3.5cm ~ 3.7cm	口縁部のわりに比較的腰高が高い。腰部をへく削りし、腰高を引いて窪みを引いて受け窪とする。		5-16 ~ 7-1	
	身	I-1a	13.5cm ~ 15.4cm	4.1cm ~ 5.5cm	底部が丸底で、高台より大きく下に出るタイプである。	高台は断面四角形で低い。	2-8 ~ 2-9	
		I-1b			底部は丸底であるが、高台からの突出はわずかである。		9-9 ~ 9-10	
		I-2			底部は丸底気味であるが、高台から下に出ない。		5-17 ~ 5-30	
		I-3			底部は平底につくり、口縁部は直線的に開く。		10-15 ~ 10-18	
		I-4			底部は平底につくり、口縁部はやや外反させる。		5-18	

には底部の調整法からC-3a>C-3bと考えることも可能である。D類では、D-2類の蓋・身はE類に近い器形を示し、D-1>D-2と考えられる。身D-3類はやや特殊で、器径的にはむしろC類に近いが、立ち上がりがきわめて低く、新しい要素も持つており問題がある（後述）。E類ではおもに調整法の差により前後関係が想定される。E-1類が回転ヘラ削り、E-2類が手持ちヘラ削りと比較的丁寧な調整を施しているのに対して、E-3類・E-4類ではナデ調整が主体で、E-1/E-2>E-3と考えられる（/は並存を示す）。ただしE-4類は器径がやや大きく、問題がある（後述）。またE-3類では立ち上がりの退化傾向からE-3b>E-3aの関係が導かれる。

F類ではF-1類が非常に丁寧なつくりを示すのに対し、F-2類は厚めでぼってりとしている。また蓋F-4は器径がやや大きく、身F-4はより浅くなっていることから、F-1>F-2>蓋F-3/身F-4と考えられるであろう。身F-3は深い器形で身F-1に近いかもしれない。蓋F-3は宝珠状つまみの初現の形態とみるべきで、蓋F-4よりは先行するであろう。G類では身G-1類の器形に対して身G-2類はF-1・F-2類の流れを残しておらず、また蓋G-2類はかえりが長いことから、G-2>G-1と想定されよう。I類では、蓋はI-1類からI-2・I-3類へ推移すると思われる。身では高台の高いI-2類と底部が丸底で高台より下に出るI-1類が古く、高台が低く平底のI-3・I-4類にやや先行するものと考えられるが、これまでの研究により、必ずしもこれを時期差と断定することはできないようである。

このような細分から生じた身A-2類、身B-3類、B-2類、D-2類、蓋F-3類・F-4類などは、あるいはそれぞれ先行あるいは後続する分類に包含されるべきかもしれない。これらは各分類間の過渡的な状況を示すものと考えられ、各分類の推移がある時期を境にした急激なものではなく、漸進的であったことを推測させる。

したがって、基本的な推移としては、過渡的細分を除けば以下のように考えられる。

合子型蓋坏 A (A-I) > B (B-I) > C > D (D-I) > E (E-I/E-2>E-3b>E-3a)

かえり付蓋坏 F (F-I) > F (F-2) > G (G-2>G-I) > H > かえり無し蓋坏

ここで問題となるのはE類とF類の関係である。従来この2者は、例えば遠考研編年によれば前者をⅣ期前半、後者をⅣ期後半と位置づけ、年代差と考えられていた。しかし近年の発掘資料の増加に伴い、これらが共伴して出土する例が多く報告され、『半田山古墳群A小支群 半田山III遺跡』（1984）における鈴木敏則氏の編年、湖西窯における後藤建一氏の編年（1989）でもE類とF類を時間的に平行する型式としてとらえている。特に鈴木氏はG類あるいはH類までE類と平行するものとして考えていることに特色がある。（鈴木氏の蓋坏A類が筆者のいうE類に主に該当し、鈴木氏のB類がF類～H類に該当する。また後藤氏の合子状蓋坏D2～D3がE類に、かえり付坏蓋および蓋付無台坏身がF類～H類に該当する。ただし、これは報告書等の記述と実測図をもとにした比較であって、実物を比較検討したものではない。）

そこで当横穴群におけるE類～H類の出土状況からその関係を検討してみよう。繰り返すようであるが、ここで問題となるのはあくまで埋葬時点における時間的差異である。まずG類であるが、B-b-4号・B-b-5号・B-c-4号・B-c-6号横穴から出土している。この内E類とともに出土している例がB-c-4号とB-c-6号の2例で、F類とともに出土した例はB-b-4号とB-c-4号の2例である。B-b-4号横穴ではE類を含まず、F類の中でもF-2類より後出的な蓋F-4類が含まれることから、このF類とG類は少なくとも埋葬時点では共伴関係にあったと考えられる。またB-c-6号横穴ではF類がみられないが、E-4類は後述のようにE-1～E-3のE類に対して後出するものと考えられるため、むしろG類に共伴するものと考えるほうがよからう。B-c-4号横穴ではE-1・E-2・E-3bおよびF-1類とともにG-2類の坏身が出土しているが、後述のようにF-1類はかえり付き蓋坏としては非常に古い形態を示し、E類のE-1/E-2類との共伴関係が推定され、とすればG類との間にはやや時間

	A-2	A-3	B-a-2	B-b-1	B-b-2	B-b-3	B-b-4	B-b-5	B-c-1	B-c-3	B-c-4	B-c-5	B-c-6
A													
B													
C													
D													
E													
F													
G													
H													
I													

第40図 各横穴出土須恵器蓋環の分類

的空白が生ずると考えられる。したがってG類はF類の後出部分（蓋F-4類）と埋葬時点で共伴する可能性があるが、E類（E-4類を除く）とは共伴せず、埋葬時点でも時間差があると考えられるのである。

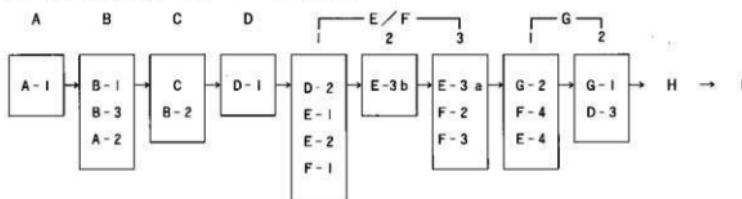
次にF類であるが、問題になるのはF-1類とF-2類の関係である。F-1類は前述のように非常につくりが丁寧で、やや他の蓋環類と様相が異なる。特に身の形態は口縁部が内湾し、器厚も薄くつくられ、环身というよりは銅鏡の忠実な模倣と考えられる。他の蓋環との共通点は少なく、別系統・別機能の器型と考えたほうがよいであろう。後藤氏はこのような身を持つ乳頭状つまみ付きかえり付き蓋（後藤氏はかえり付蓋A類とする）を最大径13cm前後の合子状环身と同時期に出現し、合子状蓋環の器径縮小傾向に伴って同様に最大径が縮小したとされた。これにしたがえば、F-1類は器径の共通するE類と共伴するものと考えられる。これに対してF-2類は器形的にE類の蓋・身を逆転してつまみを受けたような形態を呈しており、おそらく先行するF-1類の影響を受けつつ、機能的には伝統的なE類の機能を果たすものとして成立したものと考えられる。しかし、F-2類は2例いずれもE類の蓋環とともに出土しており、しかもその共伴内容にF-1類の共伴するE類がE-1類・E-2類を中心とし、F-2類と共伴するE類がいざれもE-3a類であるという時間的差異がすでに表現されていることから、F-1類>F-2類の推移（不連続の可能性が高いが）はE-1/E-2類>E-3類の推移と平行しておこったものと考えられる。したがってF-2類はE-3a類と時間的に大きく分離されるものではないであろう。結局E類（E-4類を除く）とF類（F-1/F-2類）とは平行して推移したと考えられる。

H類についてはB-c-6号横穴のみの出土で数も少なく、他の分類との関係を把握し難いが、I類の蓋でもやや先行するI-1類と埋葬時点で共伴し、ほかのI類とは共伴しないことから、少なくともI類に先行する型式と考えてよからう。最大径やかえりの退化などからみても明らかにG類より後出的で、したがってE類・F類と平行するものではなかろう。

以上をまとめると、当横穴群出土の蓋環は以下のような推移をたどっていると考えられる。

A (A-1) > B (B-1) > C > D (D-1) > E / F (E-1/E-2/F-1) > E-3b > E-3a / F-2) > G (G-2) > G-1) > H > I

次に、先に過渡的とした細分を、先行あるいは後続の分類との親近性を考慮しつつ、この推移の各段階に含めると、以下のようにまとめられよう。



D-3類とE-4類については説明の必要があろう。これらは器径からみればそれぞれD類およびE類（やや大きめのD類に近い）に属する。しかし、いざれも身の立ち上がりがきわめて短く、やや異質な器型で、器径によるそれぞれの分類と同類とするには躊躇される。湖西窯における後藤氏もこのような器型に触れ、これを器径が縮小傾向を示す合子状蓋環類ではなく、拡大傾向となるかえり付環蓋と伴出し、同一法量値で共伴関係となるものとされている。これにしたがえば、例えばB-b-5号横穴のD-3類、6-1と6-2は、G-1類の环身に分類した6-3と法量・器形もほぼ同一であり、出土状態をみても共伴するものと考えて無理がない。またB-c-6号横穴のE-4類はE-3a類よりやや器径が拡大しており、次の段階に属するものとされよう。

3. 蓋環の年代観

遠考研編年およびそれを修正した川江秀孝氏の編年(『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器－古代陶質土器－の編年』1979年所収)に対応させると、A類～C類がⅢ期後葉にあたり、D類～E類／F類～H類がⅣ期(川江氏編年ではD類はⅢ期末葉となろうか)、I類がⅤ期前葉に相当する。さらにE類までをⅣ期前半、F～H類を後半としているが、前述の通り、E類とF類は平行すると思われる所以、時期区分はやや異ならざるを得ない。ただF類のうち、完全にE類と平行するのはやや異質で別機能も考えられるF-1類で、F-2類に関してはE類の後半段階と共伴する可能性はあるものの、流れとしてはE類にF類がとてかわることを示しており、その意味ではやはりF-2類の出現をもってひとつの画期とすべきであろう。そこでF-2類が出現するE／F類の第3段階を境としてそれ以前をⅣ期前半、それ以後をⅣ期後半に対応させ得る。

実年代については、当横穴群の資料にそれを決定する材料はなく、他の編年案との比較から推定する他はない。Ⅳ期の始まりを7世紀末～8世紀初頭に置くことは異論がないところであろう。しかし、Ⅳ期の開始についてはさまざまな推定がなされており、未だ一定していない。例えば、前述の『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器－古代陶質土器－の編年』の中で向坂鋼二氏は、Ⅳ期については明記していないが、Ⅲ期について6世紀中葉から7世紀前葉までとし、暗にⅣ期の開始を7世紀中葉頃としている。また鈴木敏則氏は、Ⅳ期を4分して、そのⅣ-1型式を7世紀第2四半期とし、また後藤建一氏は湖西窯の資料と畿内資料との比較から、遠考研編年Ⅳ期前葉(湖西II期第4～6小期)の年代を6世紀末～7世紀第2四半期としている。

最近袋井市坂尻遺跡の報告書の中でも、篠原修二氏によって古墳時代後期の須恵器・土師器の編年が試みられている。その須恵器の分類に当横穴群の分類を当てはめてみると、以下のようなになる。

坂尻遺跡須恵器分類との対応表

坂 尻	d	e	f	g	h	i	j
平尾野添横穴群	A	B	C/D	E	F	G	H

篠原氏はd類とe類の境界を、器径値に加えて天井部および底部の回転ヘラ削りが同心円状であるか、ラセン状であるかによって分けている(後藤氏の合子状蓋環C類・D類の境界も同様である)。ところが当横穴群のA類(A-1)は器径および器形的には篠原氏のいうd類に近いものの、ヘラ削りが同心円状で、篠原氏のd類・e類の狭間に位置する。また遠考研編年との対応では、d類をⅢ期中葉～後葉、e類をⅢ期後葉、f類をⅢ期後葉～Ⅳ期前半、g類をⅣ期前半、h～j類をⅣ期後半と比定している。さらに年代観は、d類の時期を6世紀末葉、e類を7世紀前葉、f類を7世紀前葉から中葉、g～j類を7世紀中葉から後葉と推定している。

これらの諸研究は、遠考研編年Ⅳ期のはじまりをほぼ7世紀第2四半期～中葉頃としていることで一致している。ここでもほぼそれにしたがい、D類とE類の間に7世紀の前後半の境をおくくらいと考えておく。それぞれの細分の年代観についてはそれを決める能力を持たない。またA類の時期であるが、坂尻遺跡のd類・e類および湖西窯合子状蓋環C類・D類の間の過渡的状況を示すことから、6世紀末ないしは7世紀初頭の年代を与える。したがってA類～H類までの10段階を1世紀に割り当てるため、便宜的に1段階約10年ほどのスパンが考えられる。I類の蓋環はすべて7世紀末～8世紀前葉までに含まれるものと考えられる。

第2節 横穴の築造年代と追葬

1. 蓋坏の出土状況と横穴の築造年代

前節のような須恵器蓋坏類の分類と編年したがい、各横穴から出土した蓋坏類を整理してみると以下のとおりである。

須恵器蓋坏からみた各横穴の築造年代と追葬

分類 細分	A	B	C	D	E/F			G	H	I
	A-1 B-3 A-2	B-1 C B-2		D-1	D-2 E-1 E-2 F-1	E-3b F-2 F-3	E-3a F-4 G-2 E-4	F-4 G-2 D-3		
横穴										
A-2		●	→							
A-3	●	●	●	→						
B-a-2					●	→				●
B-b-1							●	→		
B-b-2		●	●	●	→					
B-b-3					●	→		●		
B-b-4		●	●	→			●	●	●	●
B-b-5							●	●	→	
B-c-1										●
B-c-3						●	→			
B-c-4					●	●	→	●		
B-c-5					●	→	●			●
B-c-6							●		●	●

横穴の築造年代を考えるにあたっては、単純にその横穴のいちばん古い須恵器の年代をもって決定することはできない。横穴に示された土器は最終的な埋葬段階の土器のありかたであり、当然生前の蓄積というものを考慮しなくてはならないであろう。また前述のように、細分したひとつの段階に10年ほどのスパンが与えられるしたら、隣合った段階の須恵器が出土した場合、その10年ほどの間隔を果たして追葬を見るべきか、蓄積されたものを見るべきか判断に苦しむ。それによって横穴に葬られた人間の数の推定にも変動が生ずる。このような横穴に葬られた人間と間隔の問題は、横穴の被葬者をどのような政治的・社会的地位に考えるかという問題と密接に関連する。ここでは原則的に、連続した段階の蓋坏を含む場合はその連続を蓄積と認めて1群とし、1群の最後の段階をその埋葬の時点と考え、1段階以上の間隔が生じたときに、その次の1群が終了した段階をその次の追葬の時点と判断することとする。そうすると、上の表の矢印が付された各段階を横穴が築造された時期と認定することができる。

ところでB-b-1号横穴について補足しておくと、第15図3-19の須恵器坏身はB-3類に属し、これをB-b-1号横穴のものと認めるならば、築造年代はより遅る。しかし、B-b-1号横穴のありかたをみると、B-b-2号横穴を避けるように羨道と玄室主軸がずれて掘削されており、明らかにB-b-2号横穴がB-b-1号横穴より古い。しかもB-b-2号横穴とB-b-1号横穴の間の側壁は崩落により失われており、3-19は3-24の平瓶などとともに床面より浮いた位置で検出されていること、3-19とB-b-2号横穴出土の4-1・4-2はほぼ同型であることなどをみると、これらの須恵器は本来B-b-2号横穴のもので、側壁崩壊により、B-b-1号横穴に落ち込んでしまったものと考えられるのである。

概観すると、まずA地区のA-2号横穴が最初につくられ、A-3号横穴がそれに続く。いずれも7世紀前葉と考えられる。その後A地区では追葬が行なわれた形跡は明確には見い出せない。B地区a・b群ではA地区にやや遅れてまずB-b-2号およびB-b-4号横穴が築造され、ついでB-a-1号・B-b-3号が7世紀中葉までにつくられる。あとは7世紀後葉まで築造が続き、8世紀前葉まで追葬が行われる。B地区c群では7世紀中葉以降、B-c-5号横穴から築造が始まり、B-c-3号・B-c-4号・B-c-6号が続き、B-c-1号横穴の築造は8世紀前葉まで降る。

横穴の築造に関する法則性を推定すれば、まず当横穴群全体でみると谷の奥部から行なう（A地区→B地区a・b群→c群）ことを原則とし、ひとつの単位群内部では、群の中央部からつくりはじめ、その両側に高度を下げながら（B地区c群ではあまり高度はかわらない）広げていく様子がうかがわれる。

2. 罩坏以外からの推定

それでは、須恵器坏蓋を出土していない4つの横穴について、その築造・追葬の年代を知る手がかりはないだろうか。まず坏蓋以外の器型の須恵器から推定してみよう。まずA-1号横穴であるが、遺物がほとんどなく、遺物から築造年代を推定することは不可能である。ただ、玄室の平面形がA-2号横穴と同じく方形で、狭部と玄室の区別も明瞭であること、玄室規模も比較的大型であること、石棺を有することなどから、A地区的他の2横穴と同じく当横穴群としては古い要素を持つと思われるため、築造年代はA-2号・A-3号と同様、須恵器罩坏A類・B類の時期で、遠考研編年III期後半、7世紀前半に求めることができよう。またその位置はA-2号に近接してそれよりやや低く、A-3号よりやや高い位置にあることを考慮すると、A-2号横穴に統いてA-3号横穴よりやや早くつくられたのではないだろうか。

B-a-1号横穴は、須恵器平瓶（2-2・2-3）と長頸瓶（2-4）を出土している。2-4の長頸瓶は、体部のみだが、底部の様子からみると、高台ではなく脚付きであると思われ、少なくとも遠考研編年IV期に属するものであろう。平瓶も同様である。

B-b-6号横穴は高环（6-10）、足（6-11）を含む。6-10の高环はB-b-1号横穴（3-26）、B-c-4号横穴（8-23）に出土したものとほとんど同型であり、須恵器罩坏E類に伴い、遠考研編年IV期前半を中心とする時期と考えられる。6-11の足は注口部が突出し高台を持たないタイプでB-b-1号出土の3-25と同様である。やはりIV期前半に属するものであろうが、頭部と口縁部の境に明確な稜を持たない3-25に対して6-11は屈曲を見せていることから、ややB-b-1号横穴より先行すると考えられる。

B-c-2号横穴は、その規模・形態がB-c-1号横穴と同様であり、おそらく同時期に成立したものであろう。出土した短頸壺（7-2）は浜松市の半田山古墳群A小支群A4号墳に同型が見られるが、この古墳は当分類のE類～G類とI類の蓋坏を含み、おそらくI類に伴うものと考えられる。

ところで、B-b-5号横穴は、蓋坏の分類ではD-3類（6-1・6-2）を出土し、これをG-1類（6-3）に共伴するものと考えて築造年代を判断したが、出土状態をみるとこれらの环身と長頸瓶（6-5）の一群から離れて右側壁玄門寄りに平瓶3点（6-6・6-7・6-8）、ミニチュアの提瓶（6-4）・足（6-9）が片づけられたように集積していた。平瓶の3点はそれぞれ三様の形態を呈し、時期認定は困難だが、ミニチュアの足は口部の開き方、球形の胴部、単純に先行する注口部などに古い要素が見え、提瓶もA-3号横穴出土の1-11とよく似ていることから、少なくともD-3類・G-1類の段階よりは以前の副葬品と考えられる。B-b-5号横穴の築造年代はやや遅ることになろうが、なにぶんミニチュアであるため通常の製品と同等に扱ってよいか問題があるため、明確にはできない。

3. 横穴の平面形との対応

以上のような遺物による築造年代の推定と、横穴の形態の特徴に関連性は見られるであろうか。築造年代の推定から、当横穴群において最も古い時期に属する横穴は、A地区の3横穴で、それについてB地区b-2号・b-4号である。A地区的3つの横穴は、A-3号横穴がやや丸味を帯びているとしてもほぼ玄室が方形のプランを有し、B地区b-2号・b-4号横穴は玄室形態が隅丸方形を意識しているようだが円形に近い。B-b-2号横穴は羨道部・玄室右側壁に平行するラインを主軸とすれば、片袖型の可能性もある。このようにこれらの横穴の形態は一見ばらばらだが、ほぼ共通する要素としては、玄室と羨道部の区別が平面的に明確であるということであろう。B-b-2号横穴は崩壊が激しく明瞭でないように見えるが、片袖型と考えると左側壁と羨道部の区別は明瞭につけられていると判断できる。

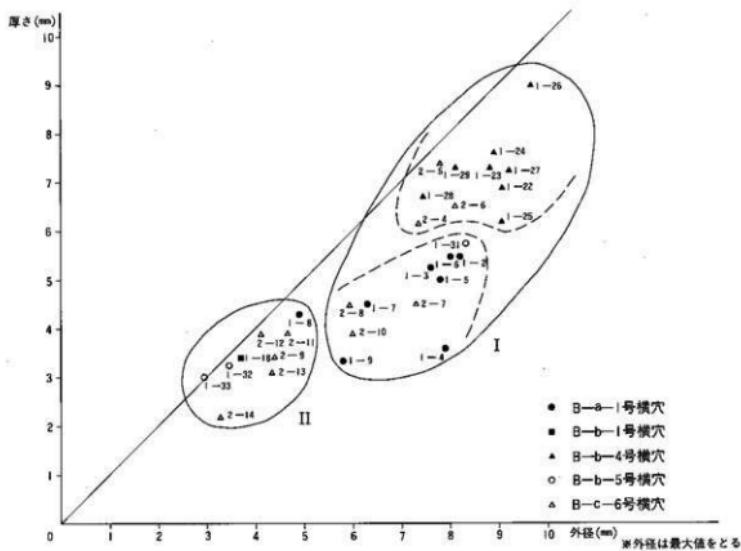
これらの横穴以外に玄室と羨道部の区別が明瞭な横穴は、B地区c-4号横穴とc-5号横穴である。c-4号横穴は玄室平面形がほぼ円形に近く、羨道部との区別もやや不明瞭となりつつある。c-5号横穴は玄室平面形が方形であるが、やはり羨道部との区別は若干不明瞭に近づいていく。この2つの横穴は築造年代の推定からすると、B地区c群では最も早く築造されたものと考えられるが、B地区a・b群よりはやや新しい。

この他の横穴はすべて羨道部と玄室の区別が平面的にも断面的にも不明瞭で、最終的にはB-c-1号・B-c-2号のような小型横穴の袋状に近づいていくのである。したがって横穴の平面形における羨道部の明瞭→不明瞭という要素は、遺物による築造年代推定とよく対応し、横穴の新旧を判断するひとつのがんばり得よう。

4. 横穴の被葬者をめぐる社会的背景

須恵器蓋坏出土状況の表をみると、築造されてから1回ないし2回の追葬があるものが多い。各横穴単位で、ある埋葬時点から次の追葬までの間隔は蓋坏の型式段階にして2段階から5段階で、時間的間隔に直すと20年から50年ほどとなり、ひとつの「家族」における世代交代の間隔としては、50年はやや長い。しかしA地区、B地区a・b群、B地区c群という3つの群単位に見ると、H類にやや断絶があるが、それぞれの群内部で横穴が交代しながらほぼ1段階ないし2段階、10~20年毎の間隔で1人ないし2人の埋葬あるいは追葬が行なわれていることが分かる。以下はまったくの想像にすぎないが、このような状況は、それぞれの群を営んだある「集団」内部でのある「家族」の長が占めていた「地位」によって横穴への埋葬が認められたことを示すものではないだろうか。

B地区a・b群およびc群は、それぞれ8基、6基で構成され、吉岡伸夫氏が『遠江の横穴群』(1983)のなかで長者平古墳群・宇刈横穴群の群構成を考察した方法にしたがえば、第3次単位に相当しよう。B地区全体が第4次単位、各横穴が最小単位にあたる(第2次単位はあまり明確ではない)。吉岡氏はこれら群集墳・横穴群を構成する単位について、最小単位を1つの住居、第4次単位をひとつの集落(農繁期の協業単位)と位置づけ、B地区a・b群とc群のような第3次単位を「家父長の世帯共同体」を表現するとされ、令制下の「郷戸」に対応するものと考えられた。いま仮にこの「家父長の世帯共同体」を、同祖あるいは祖先伝承を共有する「家族」の集合体(これを「同族」する)と考えるならば、その様な「同族」内部に存在した「長」としての地位は、「同族」内のある一定の「家族」に世襲されていたのではなく、「同族」の一員たる「家族」の誰かが、その時点での状況に応じて合議の上就くような方式をとっていたのではないか。「同族」の「長」となった者のみが、死亡すると横穴に副葬品と共に手厚く葬られることが認められたが、葬られる横穴はその人物が本来属した「家族」に帰するものとなっていたのである。このように考えれば、群単位で10年ないし20年毎に埋葬あるいは追葬が行なわれる現象を理解することができると思われる。このような共同体内部における「長」の継承は、令制に組み込ま



第41図 平尾野添横穴群出土丸玉・ガラス玉・ガラス小玉計測値の分布

れるにしたがい、変質を余儀なくされたものと考えられる。それと同時に横穴への埋葬自体がその本来持っていた意味を失っていったであろう。須恵器蓋壙のH類の時期に横穴埋葬の断絶があること、8世紀前半で横穴への追葬が終了することは、このような社会的背景を持つものであったと考えられる。

第3節 出土装身具について

1. 出土装身具の分類

当横穴から出土した装身具は、「耳環」と「玉」類に分けられる。特に玉類にはいくつかの種類があり、なかでも勾玉・管玉・切子玉以外の小さな玉（以下単に「玉」と称する）については法量や形態、材質の異なるものが見られる。この様な玉と耳環については、以下のように分類している。

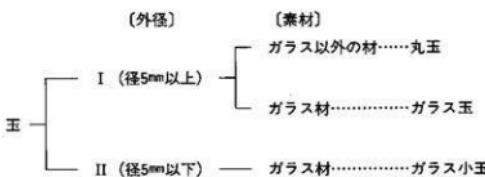
①玉の分類

出土点数の多かった玉を呼称する前に、法量の計測値の分布を第41図のグラフに示した。グラフの横軸は玉の外径、縦軸に厚さをとった。

計測の結果、外径5mm以下の玉を「II群」、外径5mm以上の玉を「I群」として2グループに分けた。I群は外径5.8~9.65mm、厚さ3.35~9.0mmと計量的にかなり開きを持つが、このなかでも「ガラス材」と「ガラス以外の材」と素材で2つに分けられる。ガラス材の玉は外径5.8~9.05mm、厚さ3.35~6.21mmの範囲、ガラス以外の材では外径7.35~9.65mm、厚さ6.15~9.0mmの間に含まれる。ちょうどB-b-4号横穴とB-a-1号・B-b-5号横穴との境界になるライン（破線で示した）で分けられる（例外として、1-25

はB-b-4号横穴の出土で破線の上のガラス以外のグループに計量的には入っているが、これはガラス材であり、ガラス玉と分類している)。

以上のことから、玉については次のように分類できる。



つまりここでは外径5mm以上(I群)でガラス材のものを「ガラス玉」、ガラス以外の材のものを「丸玉」とし(丸玉とはい、穿孔面はわずかに平坦につくられており、完全な球状を呈している玉はほとんどない)、外径5mm以下(II群)のガラス材の玉を「ガラス小玉」と称する。

②耳環の分類

耳環は、その法量から3段階に分類した。外径30mmを越えるものを「大型」とし、外径が22mm未満のものを「小型」、その中間に属するもの(22~29mm)を「中型」とした。

2. 平尾野添横穴群の装身具

今回の調査で出土した各横穴ごとの装身具を概観して、まずその出土量が全体的に少ないことが目につく。また1つの横穴について例えばB-a-1号横穴のように5種類15点の玉類を出土するものもあるのに対して、装身具類をまったく持たない横穴や、耳環1点やガラス小玉1点しか出土しない横穴もあり、横穴によってかなり開きがある。ここに被葬者の地位・性格が反映していないであろうか。

耳環については、本調査で見る限り、玉類を伴わず単独で出土しているものが多い。耳環と玉類が共伴するのはB-b-5号横穴のみである。築造年代が新しいB地区c群には耳環は出土せず、耳環が横穴に副葬される時期は比較的下限を限定できるかもしれない。またB-b-6号横穴で出土した耳環は法量・形態・残存状態からみてもセット関係になる可能性が高く興味深い。

玉類については、各横穴ごとに持っている玉にそれぞれ特徴がある。例えばB-a-1号・B-b-1号・B-b-5号横穴では、ガラス製の玉・小玉だけを持つのに対して、B-b-4号横穴では、ガラス玉が1点ある以外はすべてガラス以外の材質の丸玉で、径7.35mm以上の玉しか持たない。B-c-6号横穴では丸玉とガラス玉・ガラス小玉をすべて持ち合せている。これらも横穴の時期差、被葬者の地位等が反映している可能性があろう。

玉類あるいは耳環の出現～盛行～消滅の時期はそれに異なっていると思われ、持ち合せる装身具の種類が横穴の時期を反映していることも考えられる。しかし、各横穴ごとに出土している耳環・玉類が量的に少ないこともあり、現段階でこれらを総括して横穴の時期をとらえることは非常に困難である。周辺の横穴出土資料を含め、今後検討する必要があろう。

3. 耳環の成分分析

今回出土した耳環について、静岡県工業技術センターに依頼して、蛍光X線分析法による成分金属の同定を試みている。蛍光X線分析法は、試料にX線を照射し、その時に出る、試料に含まれる元素特有

の蛍光X線の波長、強度を測定することによって、試料の元素分析を行なうものである。その結果は、以下のとおりである。

分析は1つの試料に対して物体内部まで含めた（X線が到達する限度まで）元素分析と、物質表面薄膜に限定した元素分析を合せて行ない、その2つの結果を合せて地金と貼金の成分を推定することとした。ただ、本来蛍光X線分析を行なう際は照射する面が均一な平滑水平面であることが条件であるにもかかわらず、遺物そのままの面に照射しているため、表面の凹凸は避けられず、若干正確さが損なわれていることは否めない。遺物表面に残る土の影響も見逃せない（分析結果からFeなど土の成分の可能性が強いと考えられる元素は除外して考えている）。また分析結果は含まれると思われる元素のwt%によって示されるが、この数値がそのまま正確な成分比率を示しているのではなく、ある程度の傾向を示すものと考えておく必要がある。

①A-2号横穴出土耳環（1-1）

外見：金箔は剥落して、地金が露出し腐食している。

分析結果：表面+内部 Cu (98%) が顕著。

表面薄膜 Cu (96%) が顕著。

同定：地金はほとんど純銅と考えられる。表面はまったく剥落しているため、同定できなかった。

②B-b-2号横穴出土耳環（1-17）

外見：金箔は剥落して、地金が露出し腐食している。

分析結果：表面+内部 Cu (81%), Sn (11%) が顕著。Ag (1.6%) も認められる。

表面薄膜 Cu (86%) が顕著であるが、Ag (7.3%) が表面にやや多いことが注目される。同定：地金は銅にスズが混じるものか。表面は剥落のため明らかではないが、銀が含まれていた可能性がある。

③B-b-2号横穴出土耳環（1-19）

外見：金箔は剥落して、地金が露出し腐食が激しい。

分析結果：表面+内部 Cu (76%) が顕著であり、Sn (8.9%), Pb (6.1%) も目立つ。

表面薄膜 Cu (51%) とSn (30%) が顕著である。Pb (4.6%) が含まれる。Ag (2.1%) が表面でやや多く検出されることは注目される。

同定：地金は銅とスズの合金で、鉛が含まれるか。表面は剥落のため明らかではないが、銀が含まれていた可能性がある。

④B-b-5号横穴出土耳環（1-30）

外見：金箔は剥落して、地金が露出し腐食が激しい。

分析結果：表面+内部 Cu (86%) が顕著である。Ag (3.3%) とAu (1.6%) が認められる。

表面薄膜 Cu (75%) が顕著だが、Ag (13%) も高い値を示している。

同定：地金はほぼ純銅と思われる。表面の貼金は剥離しているため明らかではないが、銀が主体で金が含まれるものであった可能性が強い。

⑤B-b-6号横穴出土耳環（1-35）

外見：金箔の保存状態が良く、ほぼ完形。一部剥離して地金が見えている部分もある。

分析結果：表面+内部 Ag (51%) とAu (40%) が顕著。Cu (8.6%) も認められる。

表面薄膜 Ag (77%) が顕著で、Au (19%) が含まれる。

内部 * Cu (89%) が顕著で、Ag (11%) が含まれる（第42図参照）。

*貼金が剥離した部分だけにX線を照射。

*** 定性分析 ***

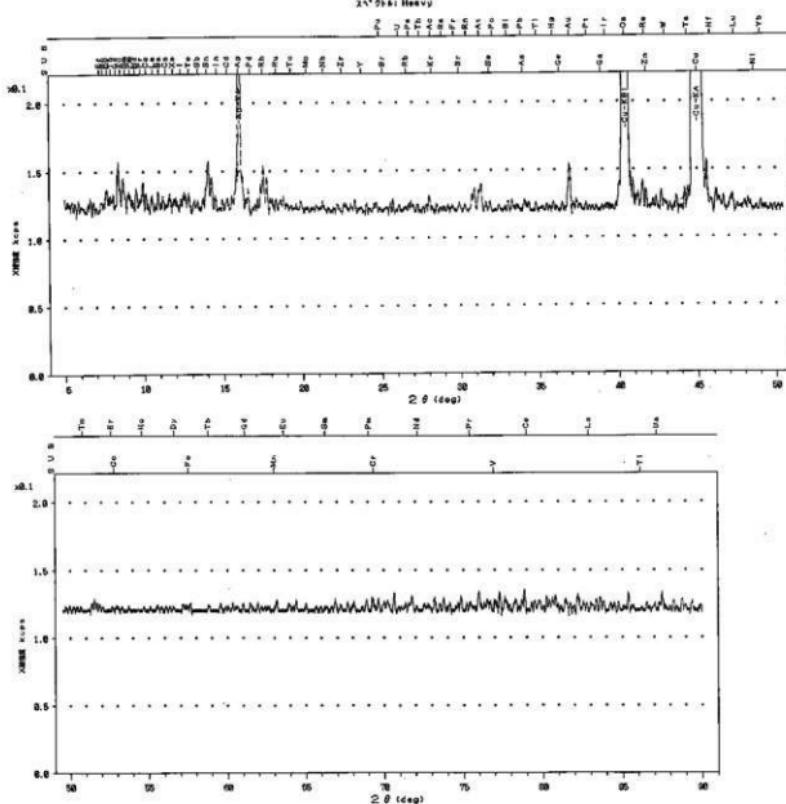
試料名 : sm12_yubiw05_naiyu

92-02-18 16:44

JOB #: yuB5inse

試料位置 : 1

XRD Data Heavy



*** 固定解析結果 ***

92-02-18 16:44

PE JOB CODE SAMPLE NAME
1 815CN sm12_yubiw05_naiyu

LOT # ファイル
yuB5inse

測定条件 No. ピーク角度 X線強度 スペクトル

(degE) (cpsE)
Hv09 1 18.08 0.150 Ag-KA
2 40.475 0.555 Cu-KR1
3 45.045 3.472 Cu-KA

*** オーダー成分結果 ***

92-02-18 16:44

PE JOB CODE SAMPLE NAME
1 815CN sm12_yubiw05_naiyu

LOT # ファイル
yuB5inse

分析手段 : F P バルク
バランス成分 :

試料形態 : 全素
フラックス成分 :

希釈率 :

成分名	固定条件	スヤクル	X線強度	分析結果	風格化値
Cu	Hv09	Cu-KA	3.4718	89.	66.
Ag	Hv09	Ag-KA	0.2397	11.	8.4

第42回 耳環の蛍光X線分析（日-b-6号横穴出土I-35の内部分析）

同定：内部のみの分析結果から銅が地金の主体である。表面の貼金は外見では金が主体となるように見えるが、実際は銀と金の合金で、しかも銀が主体となるものようである。

⑥B-b-6号横穴出土耳環（1-34）

外見：金箔の保存が良く、ほぼ完形。剥離する部分もほとんどない。

分析結果：表面+内部 Ag (60%) と Au (27%) が顕著。Cu (12%) も認められる。

表面薄膜 Ag (67%) と Au (28%) が顕著。

同定：上記⑤の「表面+内部」と「内部 ※」の結果からみて貼金が残っている場合X線があり内部まで入っていないようで、地金の成分はここではあまり明らかではない。⑤の結果と同様銅が主体であると予想される。表面の貼金は銀と金の合金だが、外見とは異なり銀が主体となるものである。

以上、当横穴群から出土した6つの耳環について、成分元素分析の結果をまとめると、地金はいずれも純銅あるいは銅を主体とするもので、ほぼ同一である。貼金については、⑤・⑥の結果では、外見の金色の輝きとは異なり、銀を主体として、おそらく色付けと延展のために金を含めるものであった。⑤・⑥以外の貼金が剥落したものでも、表面薄膜の分析ではわずかながら銀の残存が認められるものが多く、おそらくこれらも⑤・⑥と同様であったと推定される。

4. B-c-6号横穴出土の勾玉（第38図2-1）について

この勾玉は、今回出土した勾玉の中で唯一瑪瑙製ではなく、白色の半透明であり、当初水晶製あるいはガラス製と考えられていた。このどちらであるかを判断する方法として、上述の蛍光X線分析を使う方法がある。水晶でもガラスでも成分の主体をなすのは硅素(Si)であるが、水晶では硅素の成分比が95%以上の純度を示すのに対して、ガラスでは80%程度の硅素にナトリウムなどの不純物が混じるため、蛍光X線による元素分析である程度の予測が可能である。

分析の結果は以下のようなものであった。

C	70%
Si	25%
Al	3.8%
Na	0.27%
Mg	0.24% (wt%)

この結果を信じれば、この勾玉の成分の主体は炭素であり、それに硅素が含まれて硬く半透明になつた物質ということになる。その分析の際、X線の照射により、勾玉は黒色に変色してしまった。痛恨の極みである。しかし、その後国立東京文化財調査研究所に依頼して再度調べていただいたところ、この分析値には問題があるようで、東文研の見解によれば、比重2.53で、水晶（比重2.65）とは異なり、おそらくガラスであろうということである。

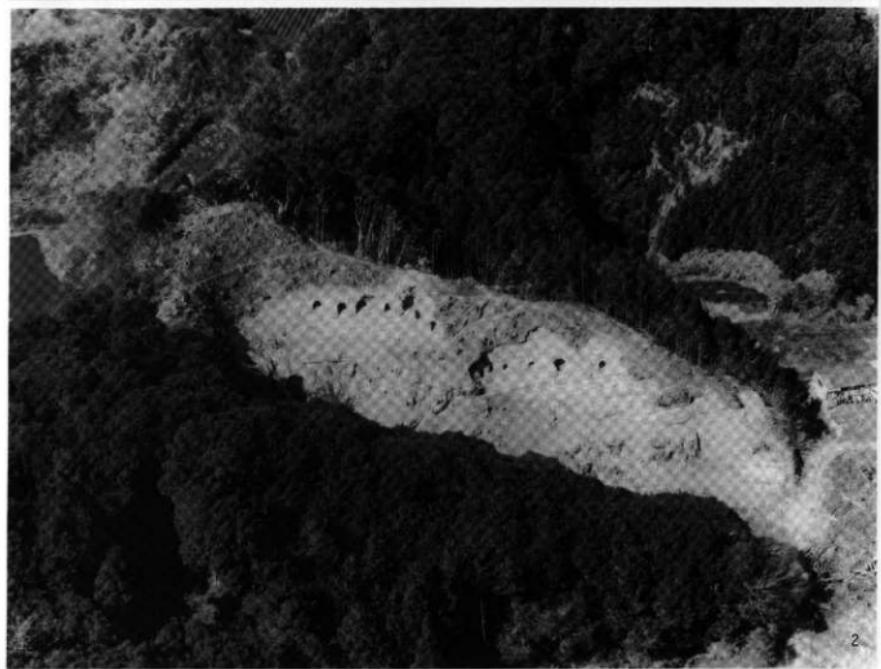
参考文献

- 静岡県教育委員会（1983）『遠江の横穴群』（静岡県内横穴群分布調査報告書Ⅰ）
- 静岡県教育委員会（1989）『静岡県の窯業遺跡』（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）
- 静岡県教育委員会（1989）『静岡県文化財地図Ⅱ』
- 静岡県（1990）『静岡県史 資料編2 考古二』
- 静岡県考古学会（1979）『静岡県考古学会シンポジューム2 須恵器—古代陶質土器—の編年』
- 静岡県考古学会（1981）『静岡県考古学会シンポジューム3 群集墳と横穴』
- 後藤守一（1939）『上古時代鉄鎌の年代的研究』『人類学雑誌』54巻4号
- 末永雅雄（1941）『増補 日本上代の武器』 木耳社
- 平野吾郎（1980）『原野谷川流域の古墳群について』『古代探査—滝口宏先生古希記念考古学論文集』
- 斎藤 忠他（1981）『大北横穴群 本文編』 伊豆長岡町教育委員会
- 石川和明 他（1983）『大淵ヶ谷・篠ヶ谷・西宮浦—静岡県菊川流域の横穴墓群調査報告』 菊川町教育委員会
- 鈴木敏則 他（1984）『半田山古墳群A小支群・半田山III遺跡』 浜松市遺跡調査会
- 平野吾郎 他（1984）『伊庄谷横穴群 上 遺構編』 静岡県教育委員会
- 渡辺康弘（1984）『池ヶ谷横穴群 発掘調査報告書』 小笠町教育委員会
- 渡辺康弘 他（1988）『岩滑清水ヶ谷横穴群・岩滑松ヶ谷横穴発掘調査報告書』 大東町教育委員会
- 大庭正八（不明）『菊川町の生い立ち…その地形と地質について…』 菊川町文化財保護委員会
- 鈴木敏則（1988）『半田山古墳群（IV中支群—浜松医科大学内—）』 浜松市教育委員会
- 及川 司 他（1990）『大ヶ谷横穴群詳細分布調査報告書』 棚原町教育委員会
- 鈴木敏則 他（1991）『瓦屋西古墳群』 浜松市教育委員会
- 小柴秀樹 他（1992）『坂戻遺跡 本文編』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小田幸子（1980）『ガラス工』『新版考古学講座 第9巻 特論（中）』 雄山閣
- 寺村光晴（1980）『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館

本書の作成にあたっては、多くの人々の御援助・御協力を得ている。まずは現地の発掘作業および整理作業にあたっていただいた皆様に深く御礼申し上げたい。また、菊川町教育委員会塚本和弘氏には、現地調査の段階から多くの示唆をいただいた。耳環の蛍光X線分析に関しては静岡県工業技術センター材料技術部の杉山 治の御協力を得た。この場を借りてこれらの方々に感謝の意を表したい。

写真図版

図版 I 1. B 地区調査前全景
2. B 地区全景



- 图版 2 1. A - I 号横穴正面
 2. A - I 号横穴墓前部
 3. A - I 号横穴石棺



2



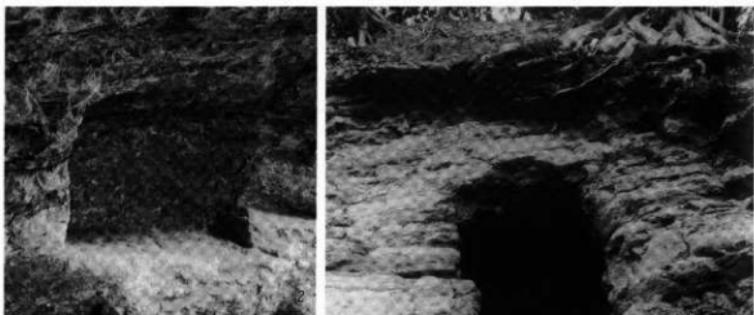
2



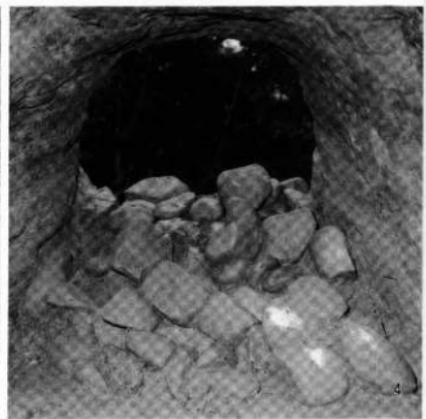
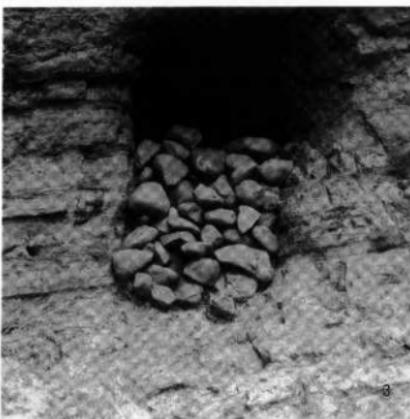
3

図版 3

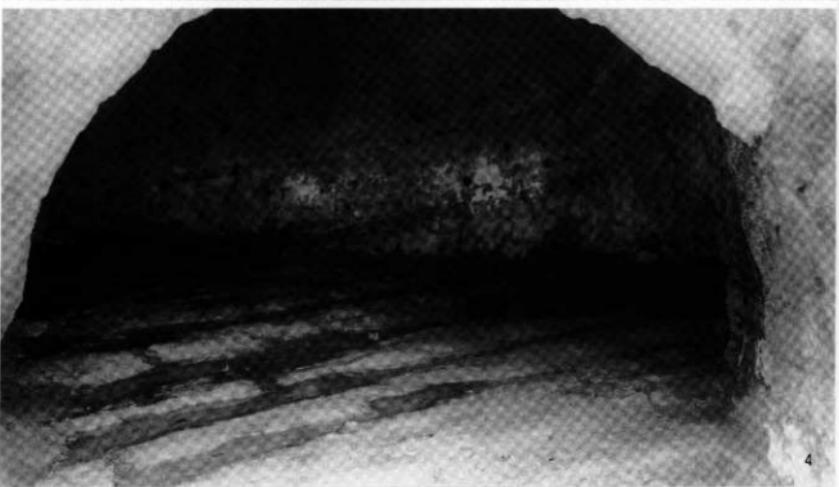
1. A - 2 号横穴正面
2. A - 1 号横穴右側壁窓状掘り込み
3. A - 2 号横穴左側壁窓状掘り込み
4. A - 2 号横穴墓前部
5. A - 2 号横穴玄室床面



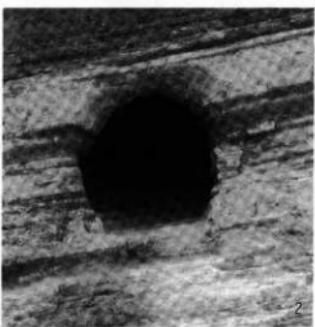
- 図版 4
1. A - 3号横穴正面
 2. A - 3号横穴墓前部
 3. A - 3号横穴封鎖石（正面）
 4. A - 3号横穴封鎖石（内部から）



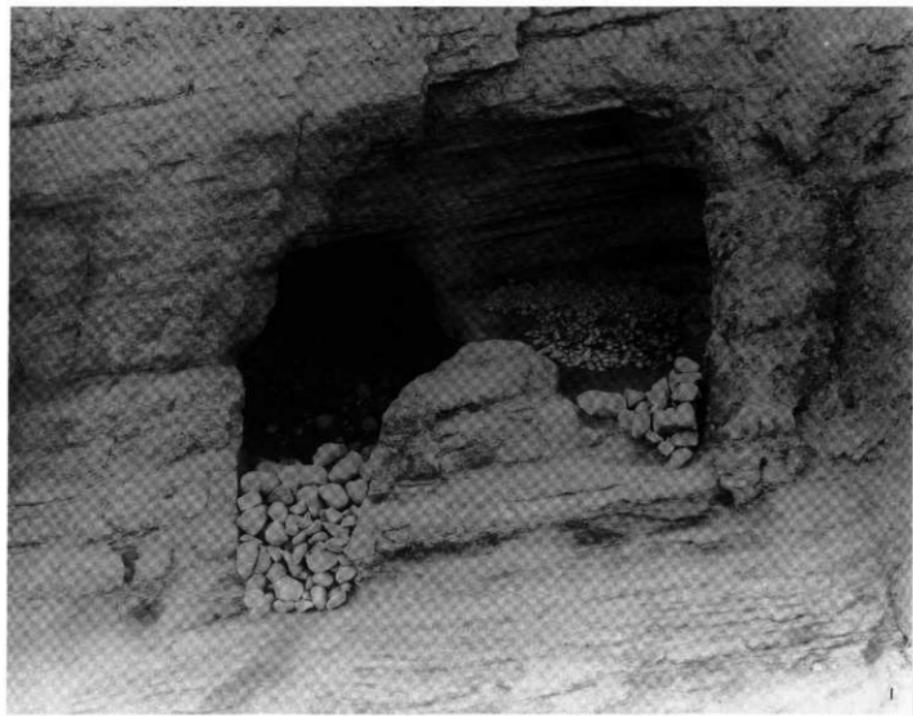
- 図版 5
1. A - 3 号横穴右側壁玄門付近の壁面
 2. A - 3 号横穴土器出土状況
 3. B - a - I 号横穴正面
 4. B - a - I 号横穴玄室内



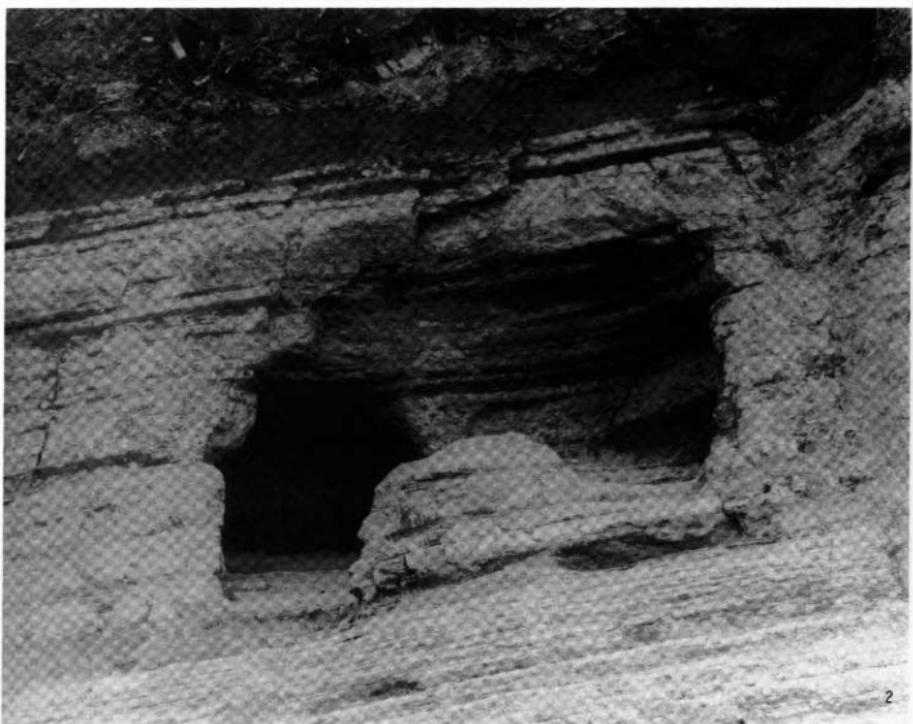
- 図版 6
1. B - a - 1 号横穴天井部の稜線
 2. B - a - 1 号横穴完掘正面
 3. B - a - 2 号横穴完掘正面
 4. B - a - 2 号横穴正面
 5. B - a - 2 号横穴封鎖石（内部より）



図版 7 1. B - b - 1 号横穴と B - b - 2 号横穴
 2. B - b - 1 号横穴と B - b - 2 号横穴
 完掘状況



1



2

- 圖版 8
1. B - b - 1 号横穴封鎖石 (2 次)
 2. B - b - 1 号横穴封鎖石 (1 次)
 3. B - b - 1 号横穴床面
 4. B - b - 1 号橫穴土器出土狀況
 5. B - b - 1 号橫穴土器出土狀況
 6. B - b - 2 号横穴床面礫床
 7. B - b - 2 号横穴鐵製品出土狀況
 8. B - b - 2 号横穴封鎖石



1



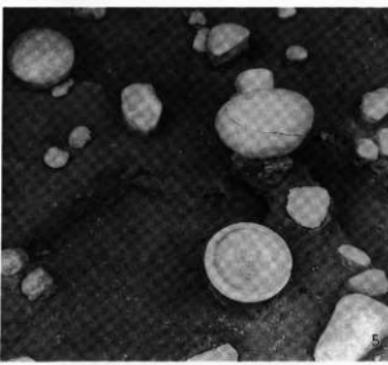
2



3



4



5



6



7



8

図版 9

1. B - b - 3 号横穴正面
2. B - b - 3 号横穴玄室床面
3. B - b - 3 号横穴封鎖石（正面）
4. B - b - 3 号横穴封鎖石（内部より）



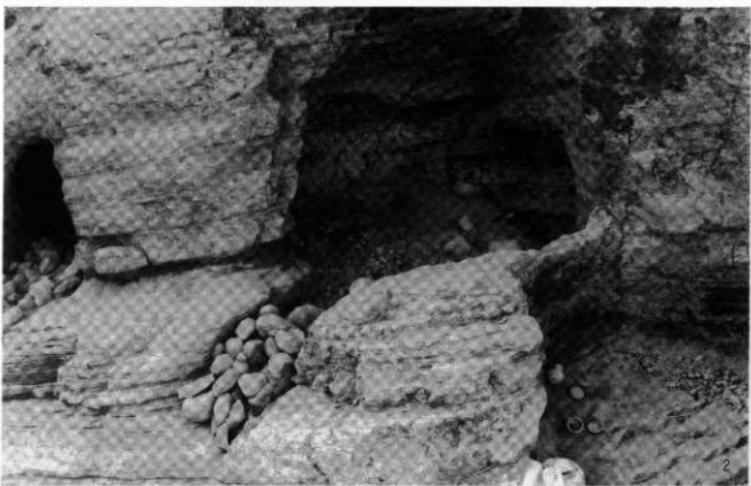
2



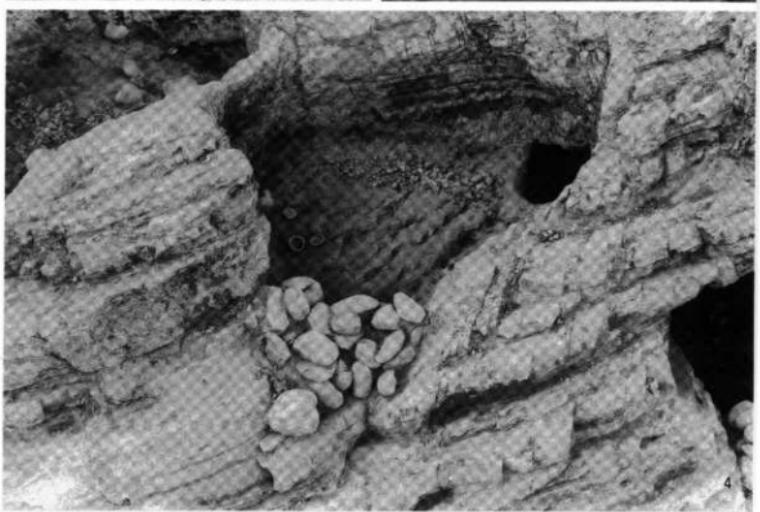
3



- 图版10 1. B-b-3号横穴右侧壁立面
2. B-b-4号横穴全景
3. B-b-4号横穴正面



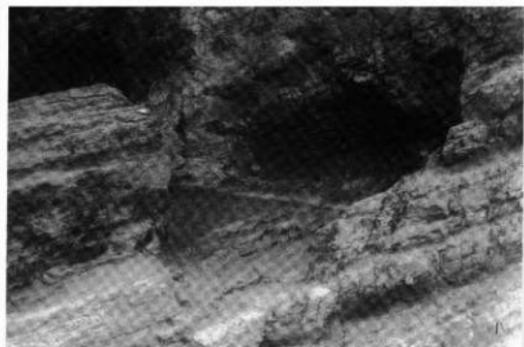
- 図版II 1. B-b-4号横穴床面
2. B-b-4号横穴壁溝
3. B-b-4号横穴完掘状況
4. B-b-5号横穴全景



- 図版12 1. B - b - 5 号横穴完掘状況
2. B - b - 5 号横穴礫床
3. B - b - 5 号横穴封鎖石（正面）
4. B - b - 5 号横穴封鎖石（内部より）
5. B - b - 5 号横穴土器出土状況
6. B - b - 5 号横穴土器出土状況
7. B - b - 5 号横穴耳環・鉄製品出土状況
8. B - b - 5 号横穴鉄製品出土状況



5



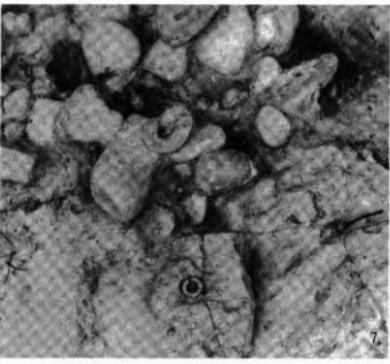
6



6



2



7



3

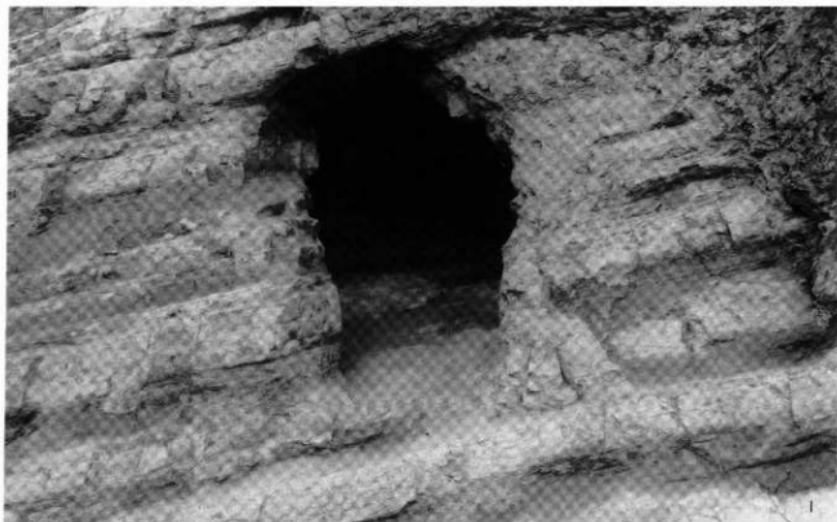


8

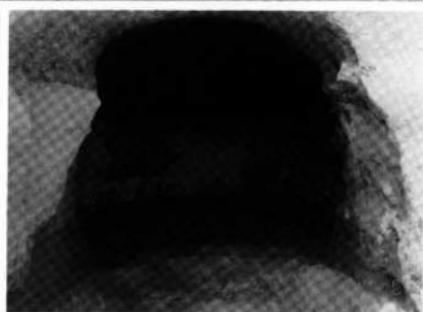
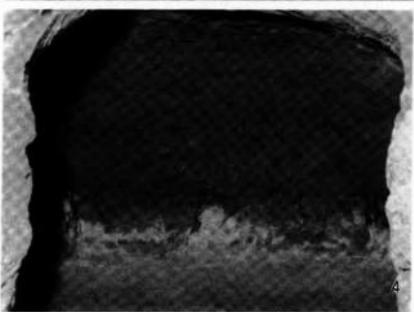


4

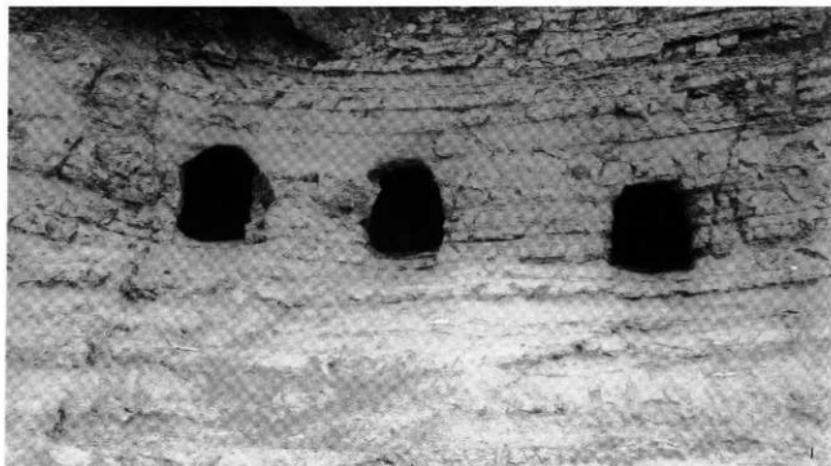
- 図版13 1. B - b - 6号横穴正面
2. B - b - 6号横穴棺座
3. B - b - 6号横穴封鎮石（内部より）
4. B - b - 6号横穴封鎮石（正面）



- 図版14
1. B-b-6号横穴耳環出土状況
 2. B-b-6号横穴土器出土状況
 3. B-c-1号横穴とB-c-2号横穴
 4. B-c-1号横穴内部
 5. B-c-2号横穴内部



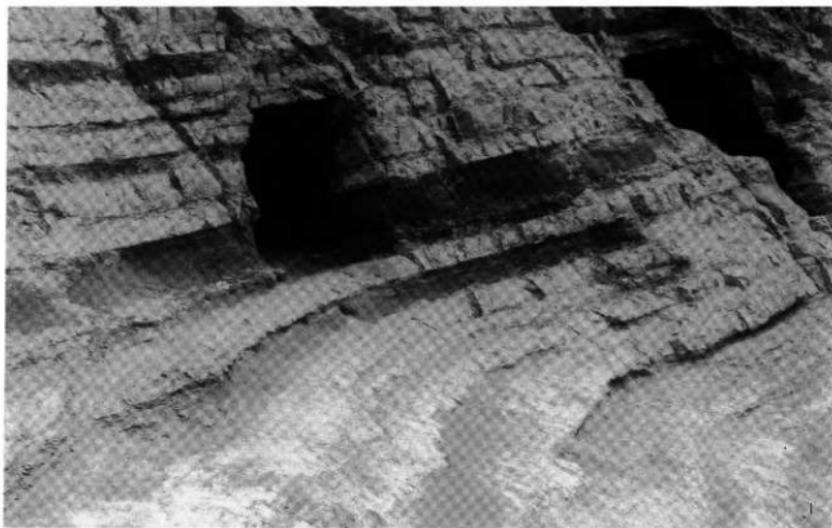
- 図版15 1. B-c-1号横穴・B-c-2号横穴とB-c-3号横穴
2. B-c-3号横穴正面
3. B-c-3号横穴内部礫床



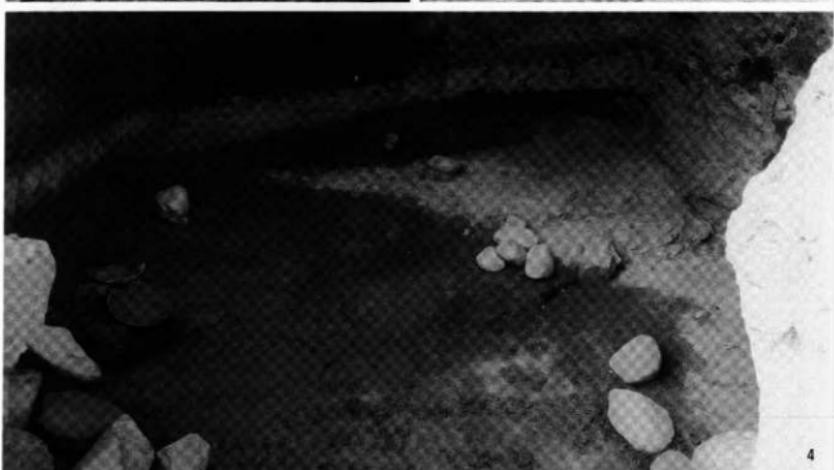
- 図版16 1. B-c-3号横穴土器出土状況
2. B-c-3号横穴土器出土状況
3. B-c-4号横穴正面
4. B-c-4号横穴封鎖石（正面）



- 図版17
- 1. B-c-4号横穴墓前部
 - 2. B-c-4号横穴封鎖石（内部より）
 - 3. B-c-4号横穴玄室内切り石散乱状況
 - 4. B-c-4号横穴玄門上部の壁面



- 図版18
1. B-c-5号横穴正面
 2. B-c-5号横穴封鎖石（正面）
 3. B-c-5号横穴封鎖石（内部より）
 4. B-c-5号横穴床面
 5. B-c-6号横穴正面



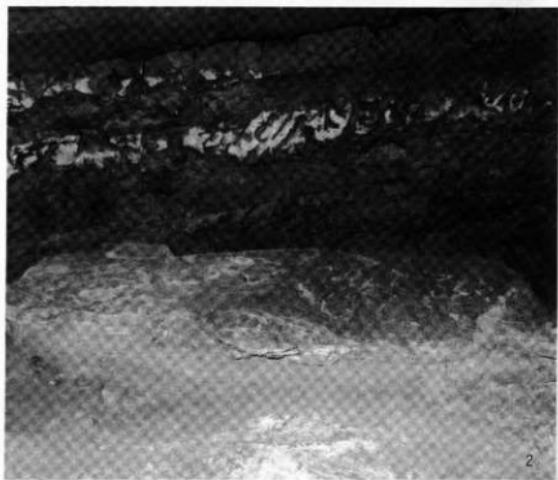
- 図版19
1. B-c-6号横穴土器出土状況
 2. B-c-6号横穴棺底石
 3. B-c-6号横穴封鎖石（正面）
 4. B-c-6号横穴封鎖石（内部より）
 5. B-c-6号横穴天井部
 6. B-c-6号横穴右側壁壁面



3



4



2

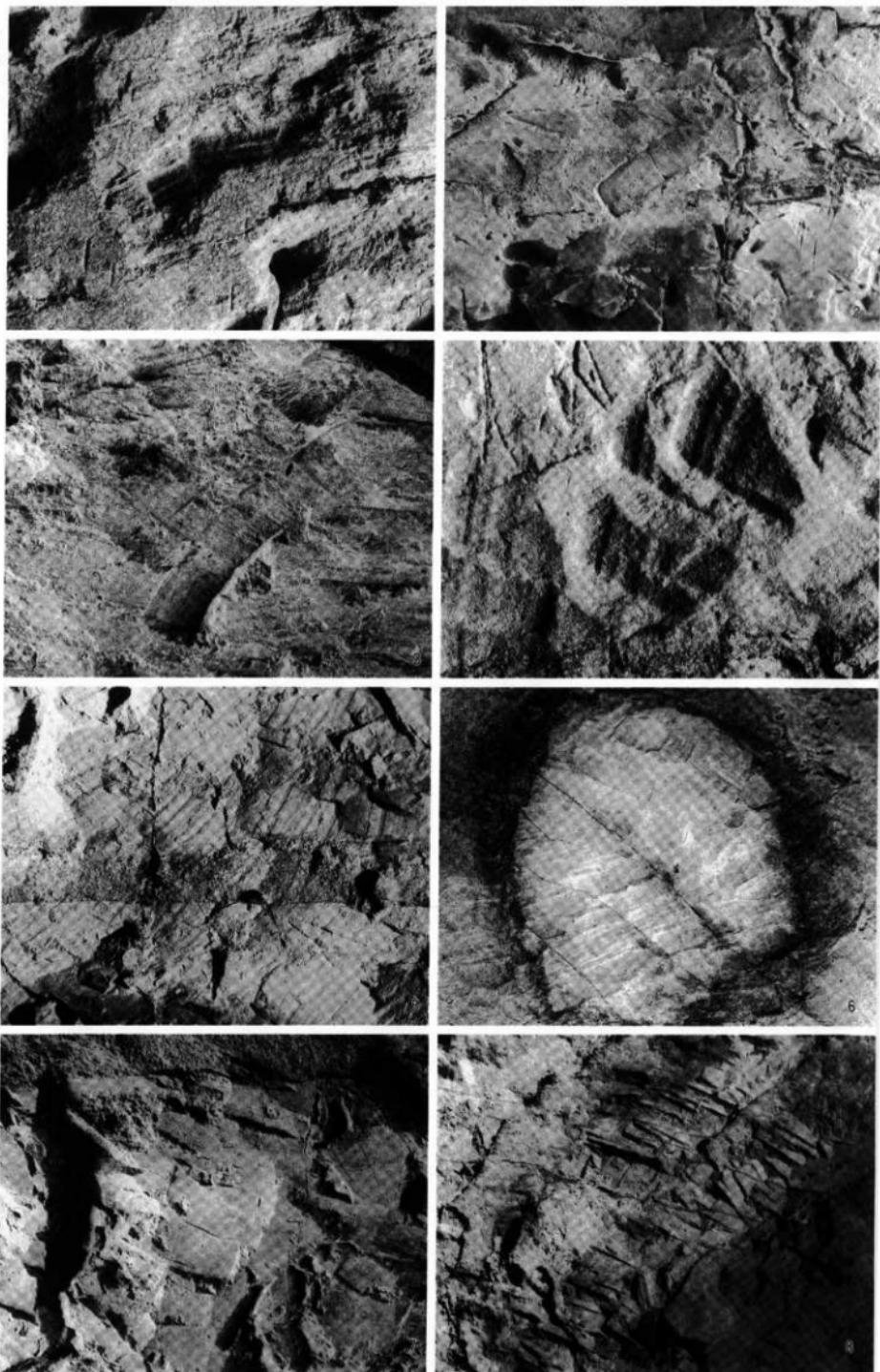


5



6

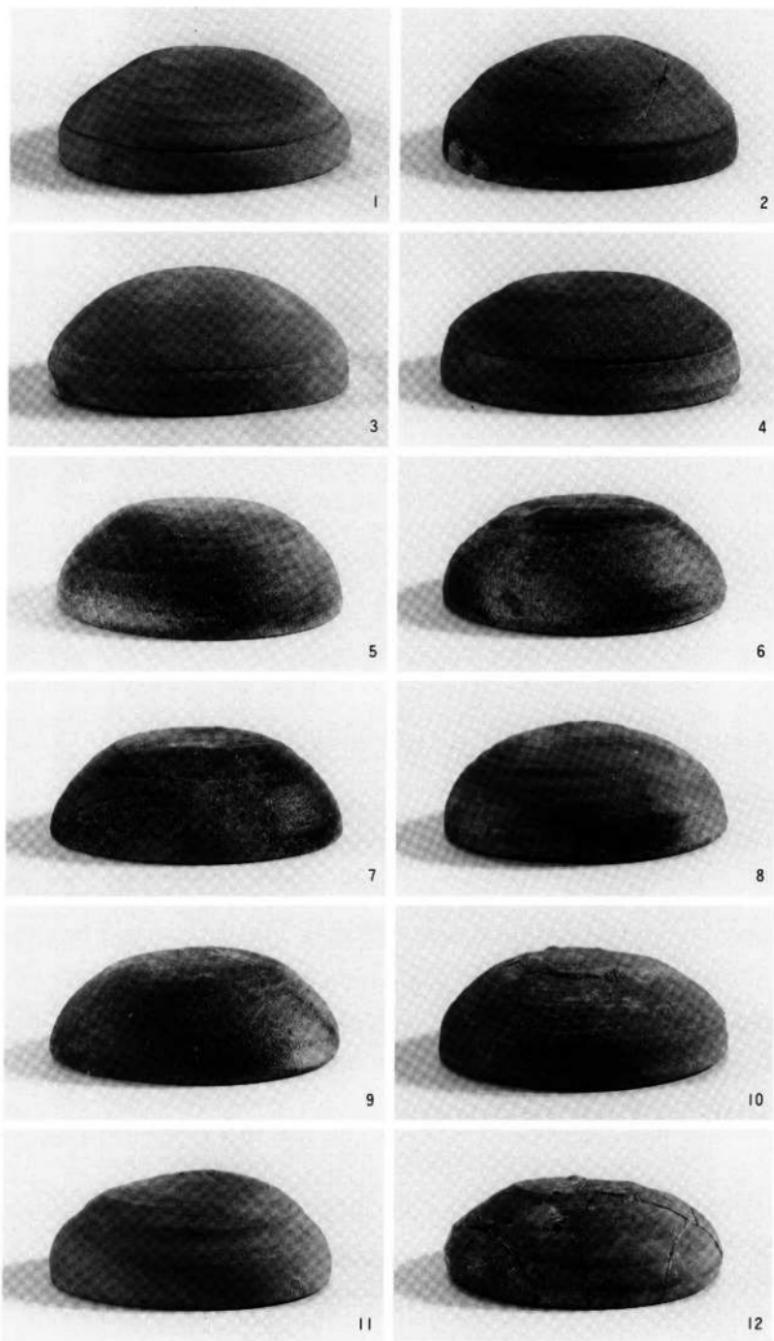
- 图版20
- 1. B - b - 3号横穴右侧壁工具痕
 - 2. B - c - 6号横穴右侧壁工具痕
 - 3. B - c - 6号横穴右侧壁工具痕
 - 4. B - a - 1号横穴右侧壁工具痕
 - 5. B - c - 4号横穴右侧壁工具痕
 - 6. B - c - 4号横穴天井部工具痕
 - 7. B - c - 6号横穴右侧壁工具痕
 - 8. B - c - 6号横穴天井部工具痕



図版21 出土土器 (I) 須恵器合子状坏蓋

図版21

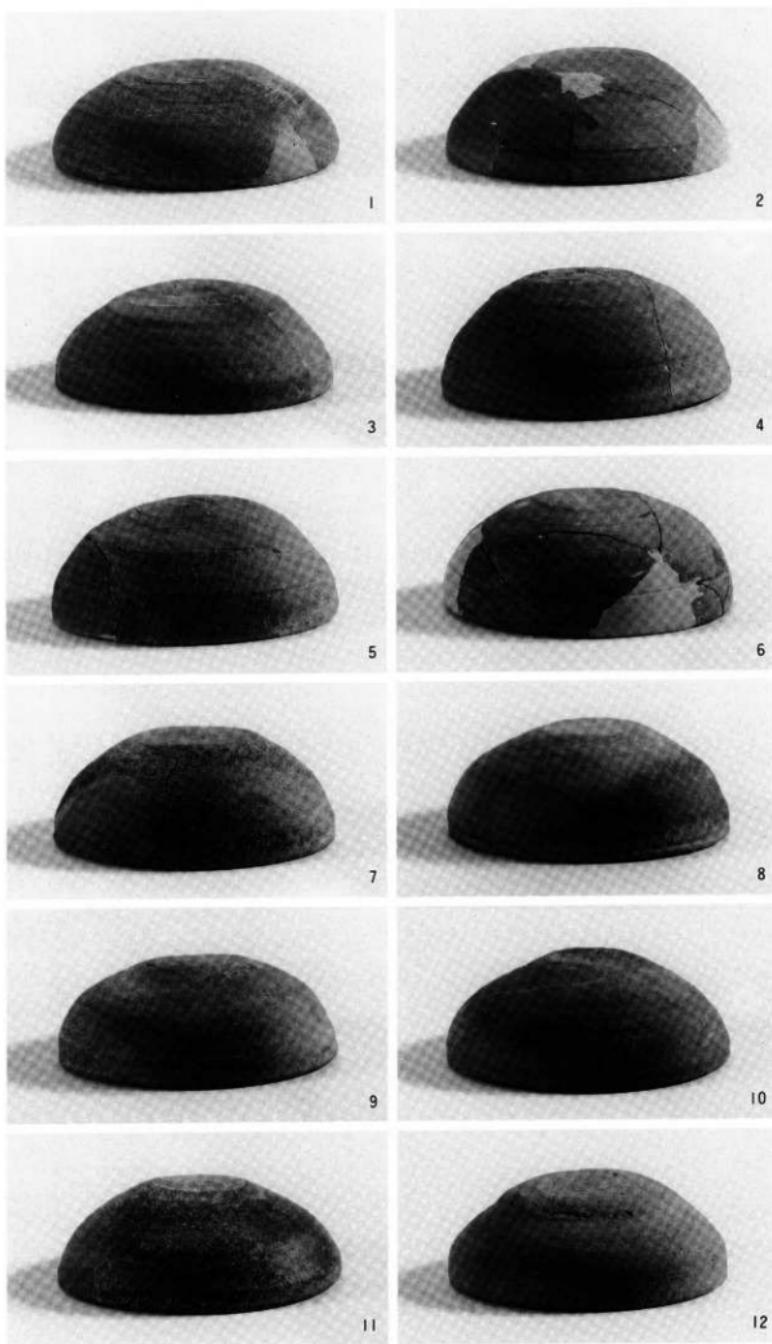
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	A-3号横穴	須恵器	坏蓋	I-3
2	A-3号横穴	須恵器	坏蓋	I-4
3	A-3号横穴	須恵器	坏蓋	I-5
4	A-3号横穴	須恵器	坏蓋	I-6
5	B-b 1号横穴	須恵器	坏蓋	3-1
6	B-b-1号横穴	須恵器	坏蓋	3-2
7	B-b 1号横穴	須恵器	坏蓋	3-3
8	B-b 1号横穴	須恵器	坏蓋	3-4
9	B-b 1号横穴	須恵器	坏蓋	3-5
10	B-b 1号横穴	須恵器	坏蓋	3-6
11	B-b 3号横穴	須恵器	坏蓋	4-10
12	B-b 3号横穴	須恵器	坏蓋	4-11



図版22 出土土器(2) 須恵器合子状坏蓋

図版22

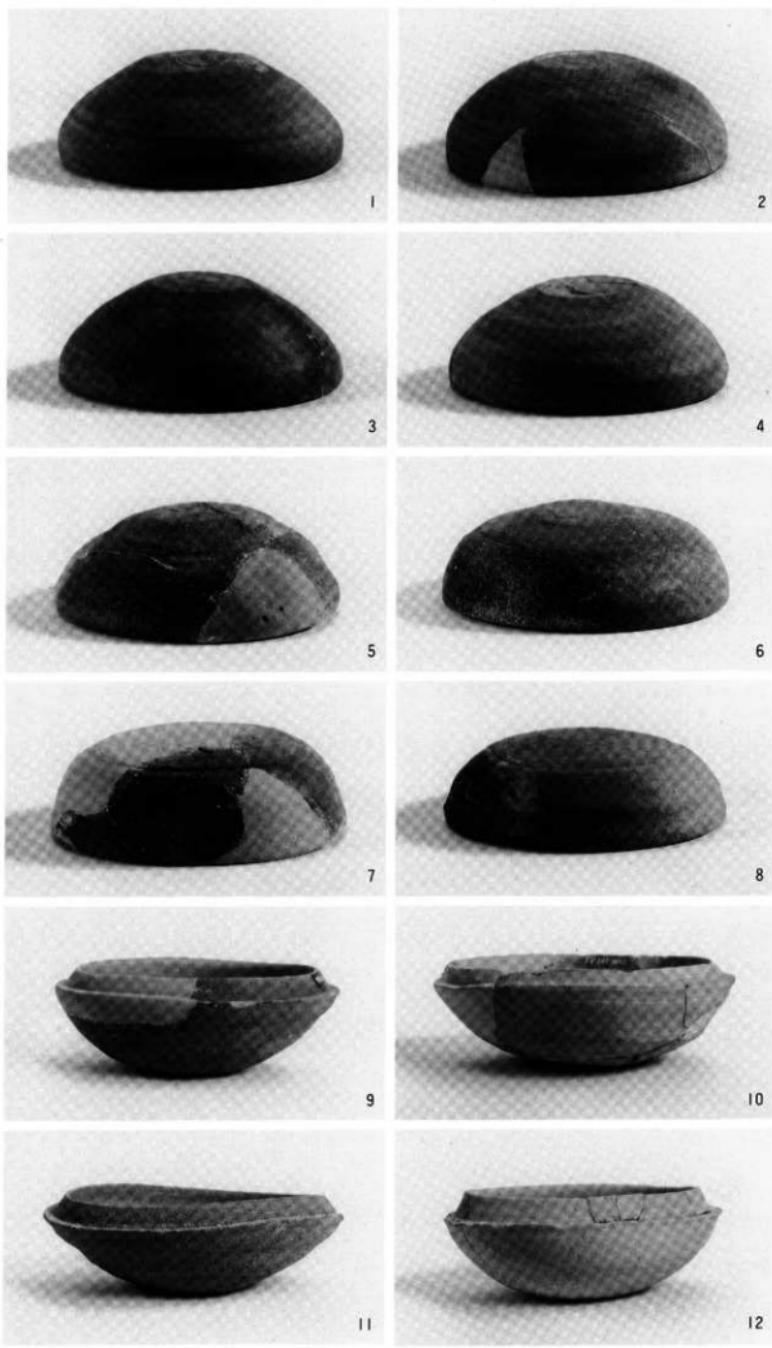
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-b 3号横穴	須恵器	坏蓋	4-12
2	B-b 3号横穴	須恵器	坏蓋	4-13
3	B-b-3号横穴	須恵器	坏蓋	4-14
4	B-b-4号横穴	須恵器	坏蓋	5-1
5	B-b-4号横穴	須恵器	坏蓋	5-2
6	B-b-4号横穴	須恵器	坏蓋	5-20
7	B-c-3号横穴	須恵器	坏蓋	7-3
8	B-c-3号横穴	須恵器	坏蓋	7-4
9	B-c-3号横穴	須恵器	坏蓋	7-5
10	B-c-3号横穴	須恵器	坏蓋	7-6
11	B-c 3号横穴	須恵器	坏蓋	7-7
12	B-c 4号横穴	須恵器	坏蓋	8-1



図版23 出土土器 (3) 須恵器合子状坏蓋・坏身

図版23

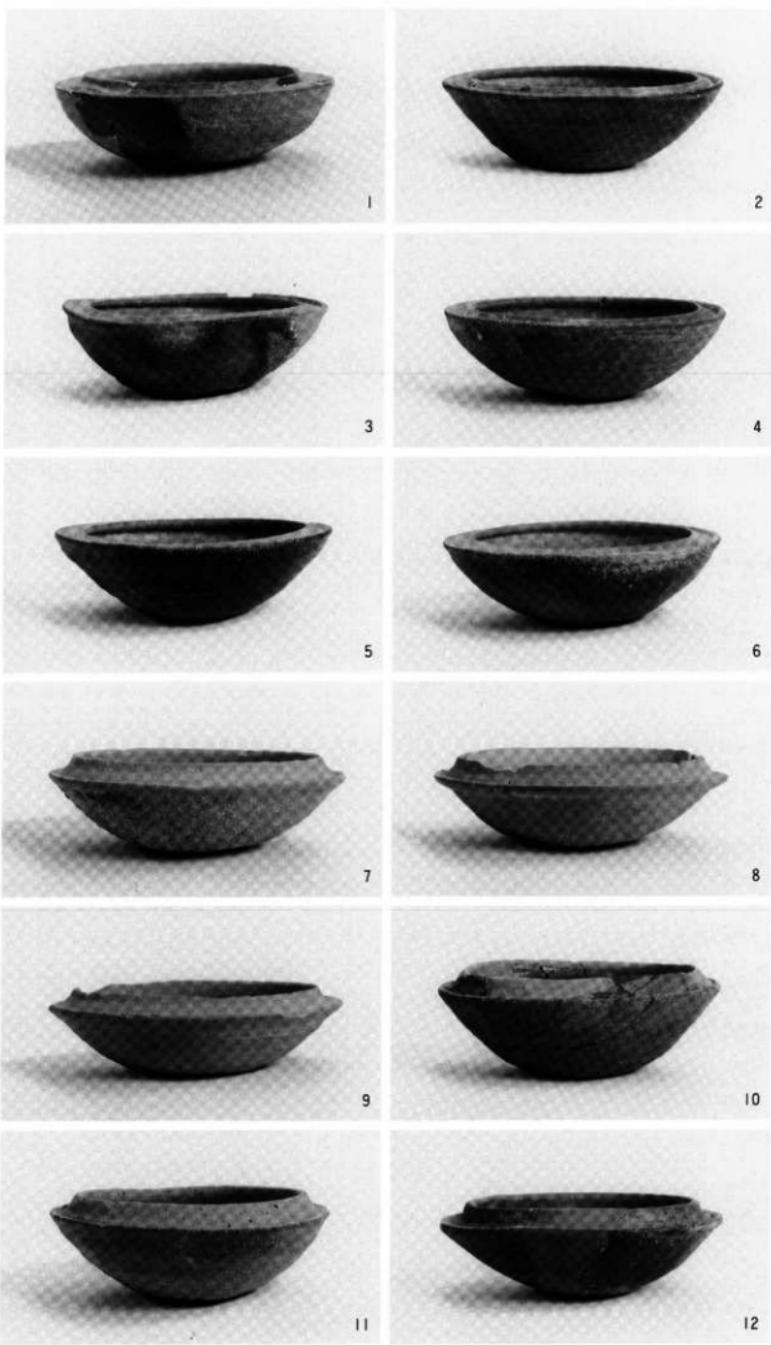
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B c 4号横穴	須恵器	坏蓋	8-2
2	B-c-4号横穴	須恵器	坏蓋	8-3
3	B-c-4号横穴	須恵器	坏蓋	8-4
4	B c-4号横穴	須恵器	坏蓋	8-5
5	B-c-5号横穴	須恵器	坏蓋	9-2
6	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-1
7	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-2
8	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-3
9	A 2号横穴	須恵器	坏身	1-1
10	A-3号横穴	須恵器	坏身	1-7
11	A-3号横穴	須恵器	坏身	1-8
12	A-3号横穴	須恵器	坏身	1-9



図版24 出土土器 (4) 須恵器合子状坏身

図版24

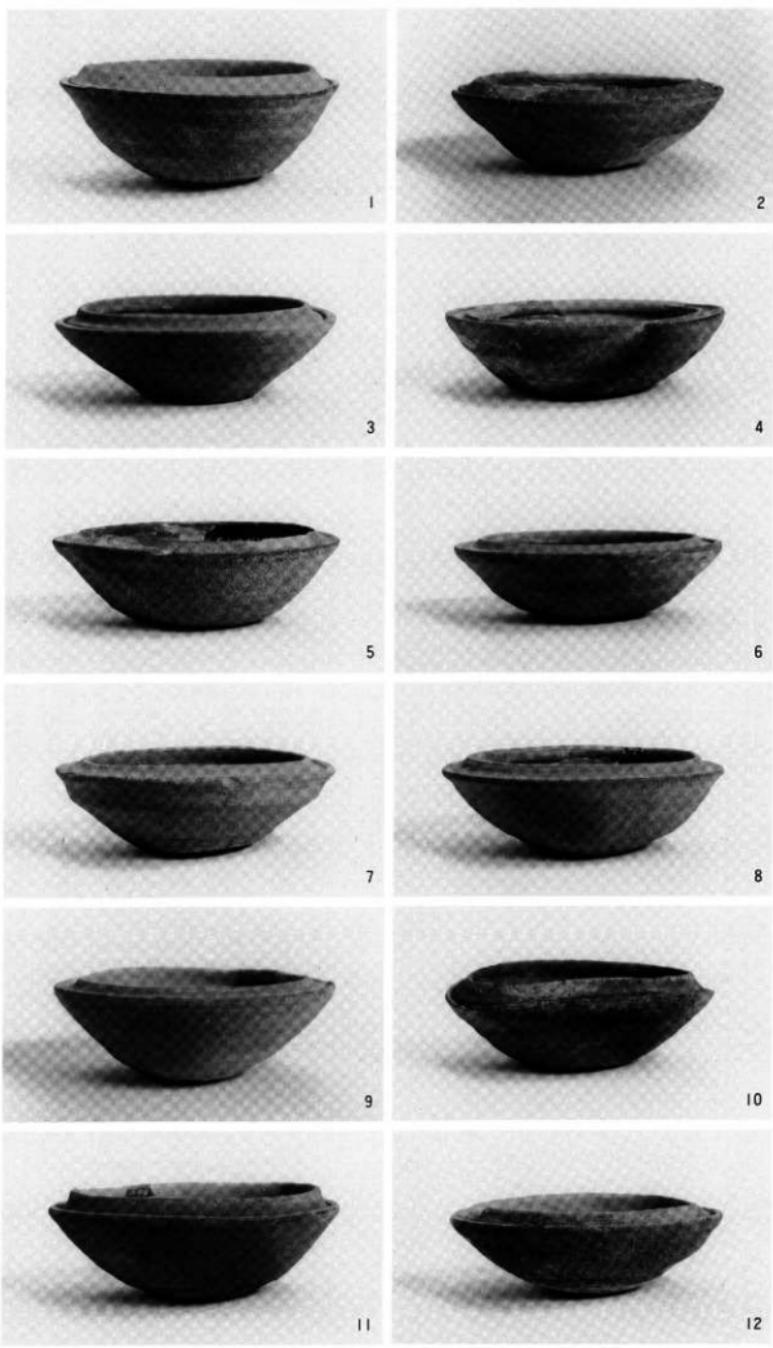
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-a-2号横穴	須恵器	环身	2-6
2	B-b-1号横穴	須恵器	环身	3-7
3	B-b-1号横穴	須恵器	环身	3-8
4	B-b-1号横穴	須恵器	环身	3-9
5	B-b-1号横穴	須恵器	环身	3-10
6	B-b-1号横穴	須恵器	环身	3-11
7	B-b-1号横穴	須恵器	环身	3-19
8	B-b-2号横穴	須恵器	环身	4-1
9	B-b-2号横穴	須恵器	环身	4-2
10	B-b-2号横穴	須恵器	环身	4-3
11	B-b-2号横穴	須恵器	环身	4-4
12	B-b-2号横穴	須恵器	环身	4-5



圖版25 出土土器 (5) 須惠器合子状坏身

圖版25

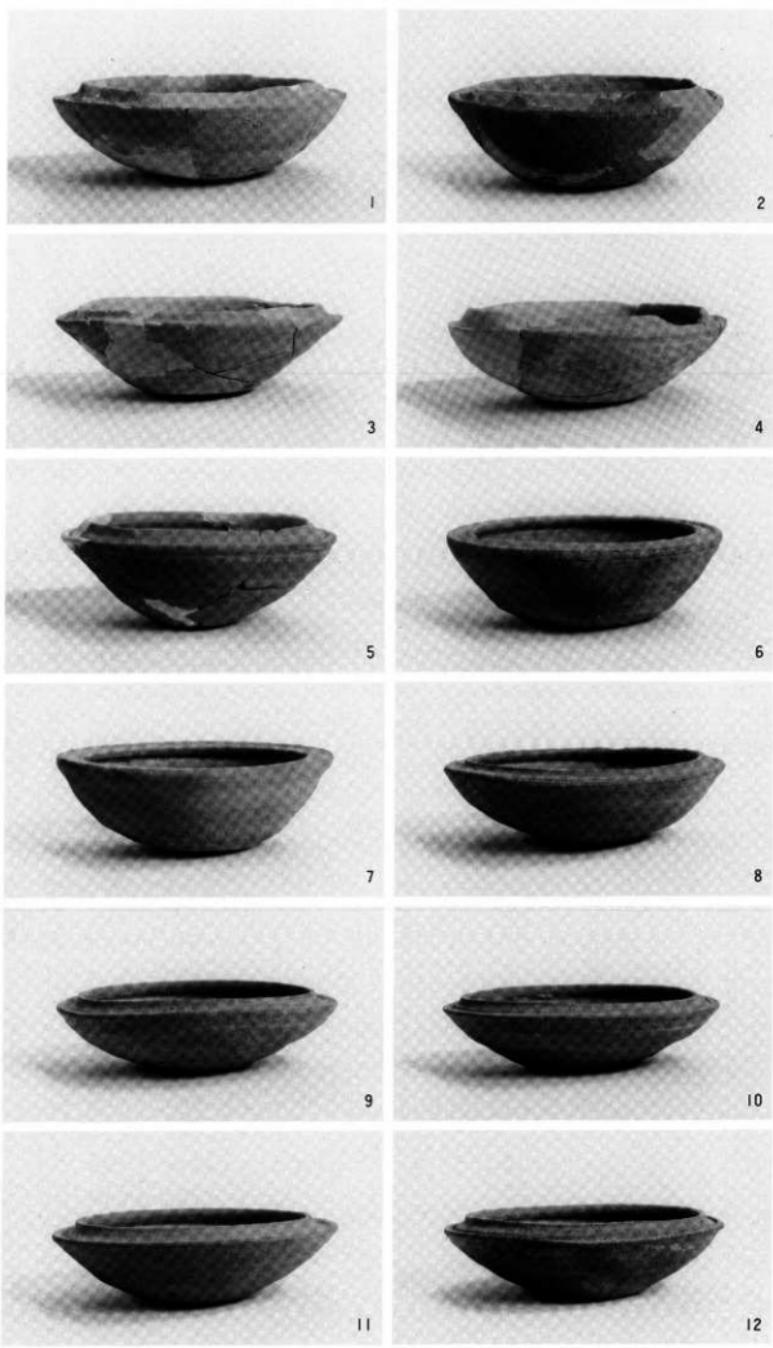
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-b-2号横穴	須恵器	坏身	4-6
2	B-b-3号横穴	須恵器	坏身	4-15
3	B b 3号横穴	須恵器	坏身	4-16
4	B-b-3号横穴	須恵器	坏身	4-17
5	B-b-3号横穴	須恵器	坏身	4-18
6	B-b-3号横穴	須恵器	坏身	4-19
7	B-b-3号横穴	須恵器	坏身	4-20
8	B b 3号横穴	須恵器	坏身	4-21
9	B b 4号横穴	須恵器	坏身	5-3
10	B b 4号横穴	須恵器	坏身	5-4
11	B b 4号横穴	須恵器	坏身	5-5
12	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-6



圖版26 出土土器 (6) 須恵器合子状坏身

圖版26

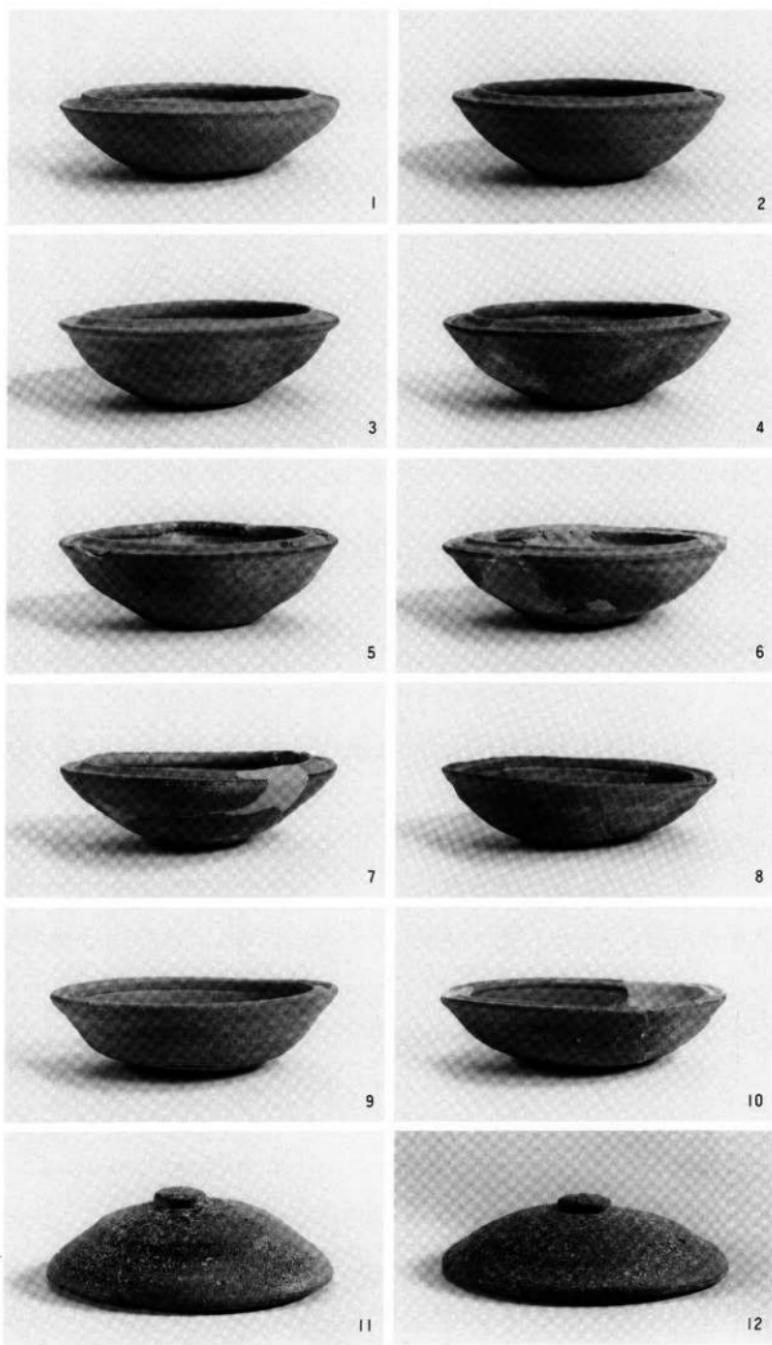
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-21
2	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-22
3	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-23
4	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-24
5	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-26
6	B-b-5号横穴	須恵器	坏身	6-1
7	B-b-5号横穴	須恵器	坏身	6-2
8	B-c-3号横穴	須恵器	坏身	7-8
9	B-c-3号横穴	須恵器	坏身	7-9
10	B-c-3号横穴	須恵器	坏身	7-10
11	B-c-3号横穴	須恵器	坏身	7-11
12	B-c-3号横穴	須恵器	坏身	7-12



図版27 出土土器 (7) 須恵器合子状坏身・つまみ付坏蓋 (かえり付)

図版27

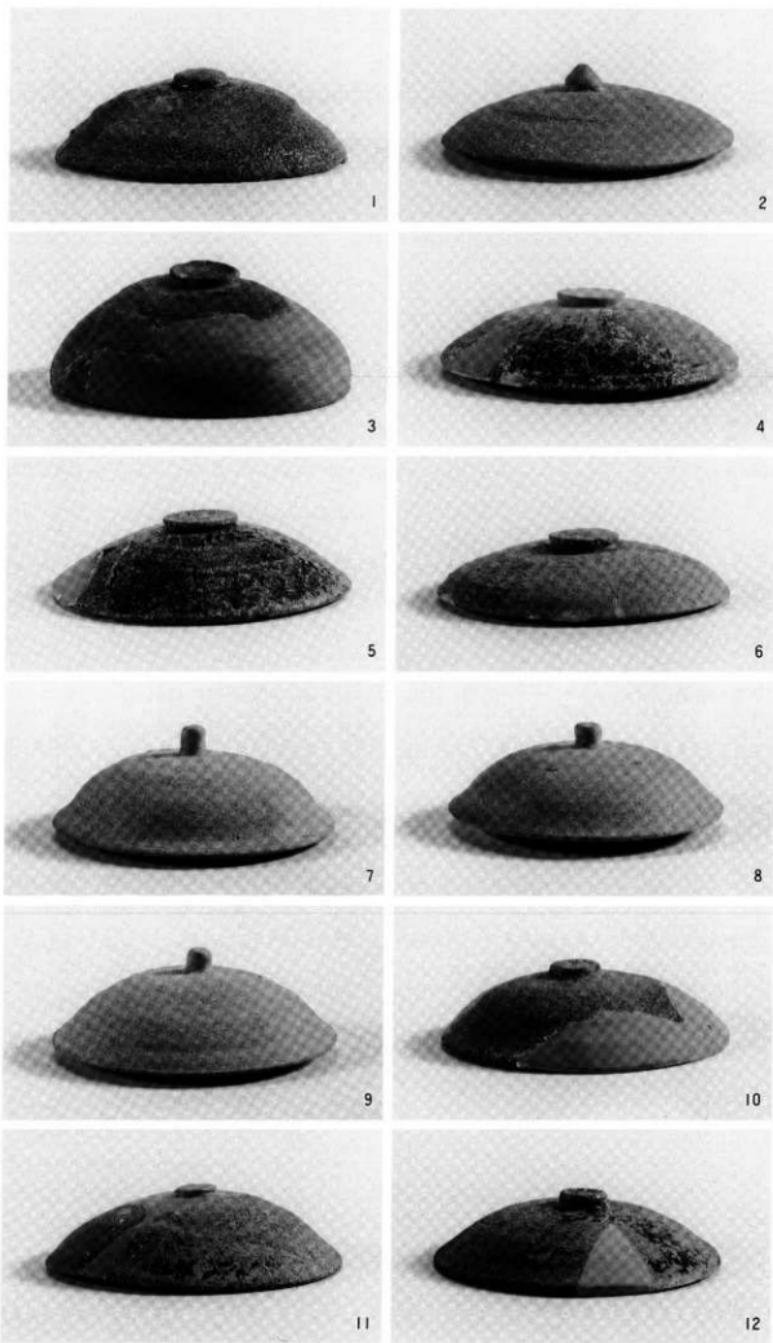
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-c-4号横穴	須恵器	坏身	8-6
2	B c 4号横穴	須恵器	坏身	8-7
3	B-c-4号横穴	須恵器	坏身	8-8
4	B-c-4号横穴	須恵器	坏身	8-9
5	B-c-4号横穴	須恵器	坏身	8-10
6	B c 4号横穴	須恵器	坏身	8-11
7	B-c-5号横穴	須恵器	坏身	9-1
8	B-c-6号横穴	須恵器	坏身	10-4
9	B-c-6号横穴	須恵器	坏身	10-5
10	B-c-6号横穴	須恵器	坏身	10-6
11	B-b-1号横穴	須恵器	坏蓋	3-12
12	B-b-1号横穴	須恵器	坏蓋	3-13



図版28 出土土器 (8) 須恵器つまみ付坏蓋 (かえり付)

図版28

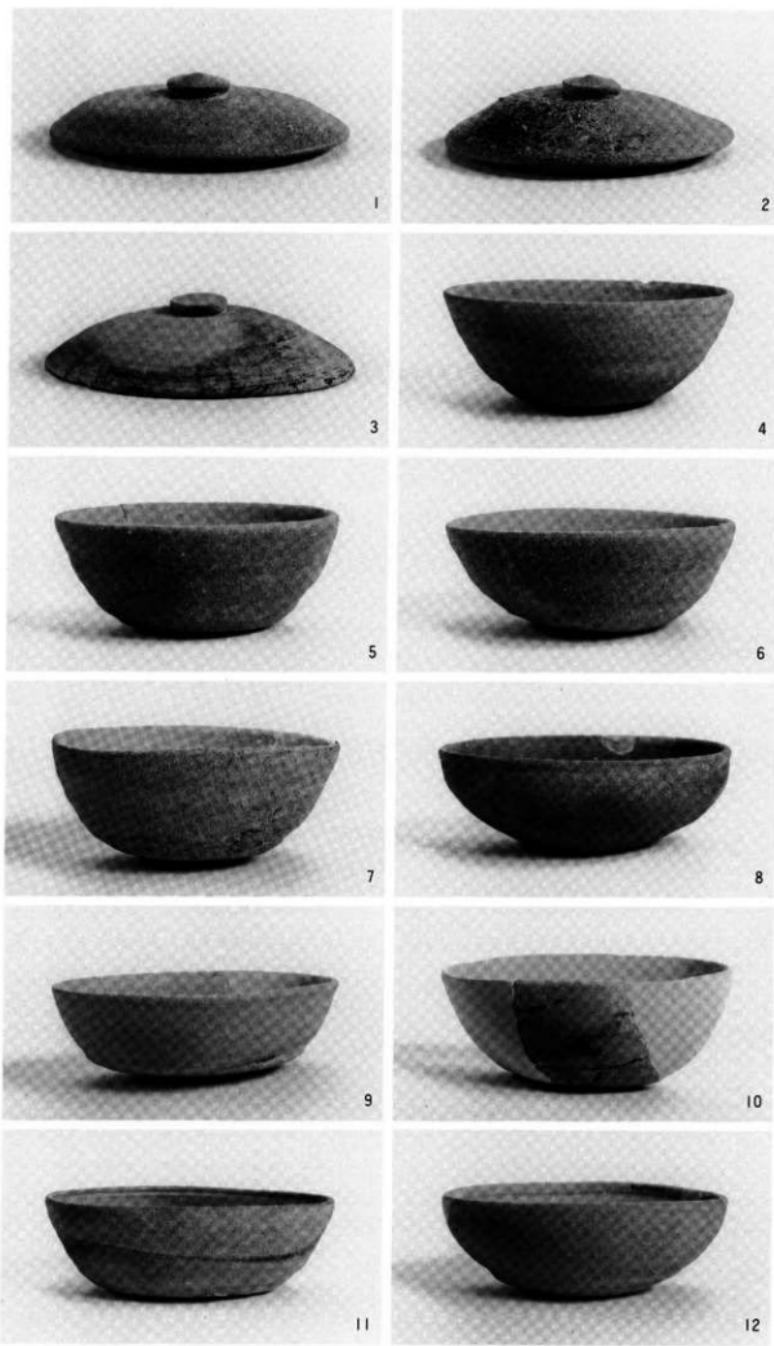
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-b-1号横穴	須恵器	坏蓋	3-14
2	B-b-1号横穴	須恵器	坏蓋	3-20
3	B-b-4号横穴	須恵器	坏蓋	5-7
4	B-b-4号横穴	須恵器	坏蓋	5-10
5	B-b-4号横穴	須恵器	坏蓋	5-11
6	B-c-4号横穴	須恵器	坏蓋	8-12
7	B-c-4号横穴	須恵器	坏蓋	8-15
8	B-c-4号横穴	須恵器	坏蓋	8-16
9	B-c-4号横穴	須恵器	坏蓋	8-17
10	B-c-5号横穴	須恵器	坏蓋	9-4
11	B-c-5号横穴	須恵器	坏蓋	9-5
12	B-c-5号横穴	須恵器	坏蓋	9-6



図版29 出土土器 (9) 須恵器つまみ付坏蓋（かえり付）・有蓋無台坏身

図版29

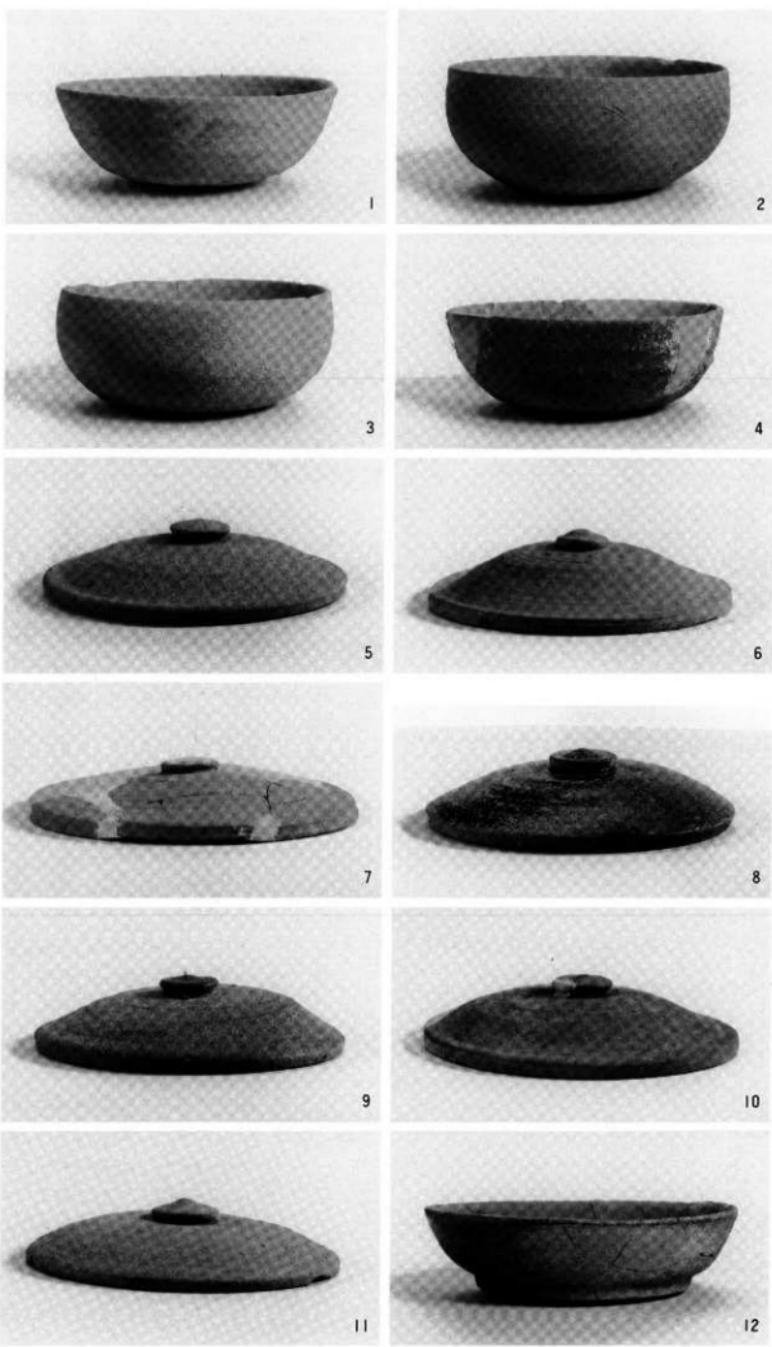
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-7
2	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-8
3	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-9
4	B-b-1号横穴	須恵器	坏身	3-15
5	B-b-1号横穴	須恵器	坏身	3-16
6	B-b-1号横穴	須恵器	坏身	3-17
7	B-b-1号横穴	須恵器	坏身	3-18
8	B-b-3号横穴	須恵器	坏身	4-9
9	B-b-3号横穴	須恵器	坏身	4-22
10	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-15
11	B-b-5号横穴	須恵器	坏身	6-3
12	B-c-4号横穴	須恵器	坏身	8-13



図版30 出土土器 (10) 須恵器有蓋無台坏身・つまみ付坏蓋・高台付坏身

図版30

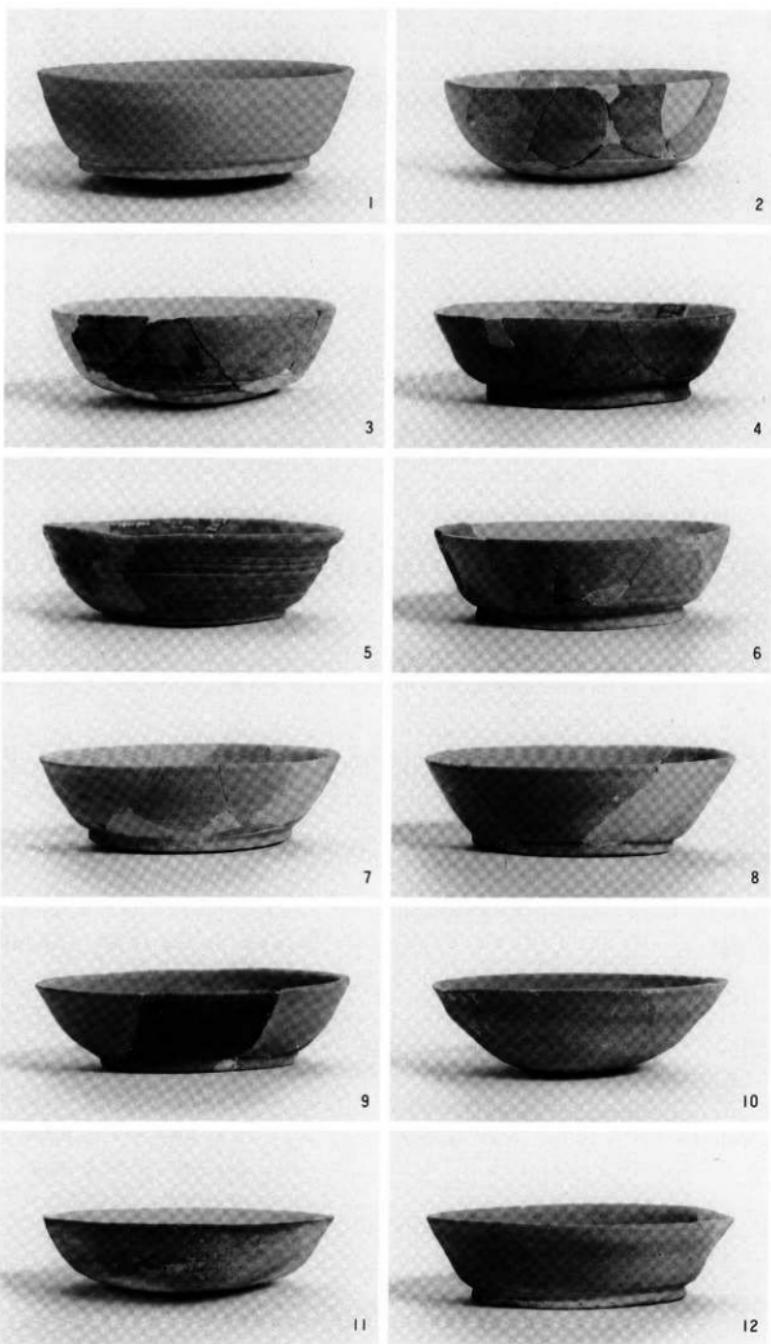
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-c-4号横穴	須恵器	坏身	8-14
2	B-c-4号横穴	須恵器	坏身	8-18
3	B-c-4号横穴	須恵器	坏身	8-19
4	B-c-5号横穴	須恵器	坏身	9-7
5	B-b-4号横穴	須恵器	坏蓋	5-16
6	B-c-1号横穴	須恵器	坏蓋	7-1
7	B-c-5号横穴	須恵器	坏蓋	9-8
8	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-11
9	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-12
10	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-13
11	B-c-6号横穴	須恵器	坏蓋	10-14
12	B-a-1号横穴	須恵器	坏身	2-8



圖版31 出土土器 (II) 須恵器高台付坏身

圖版31

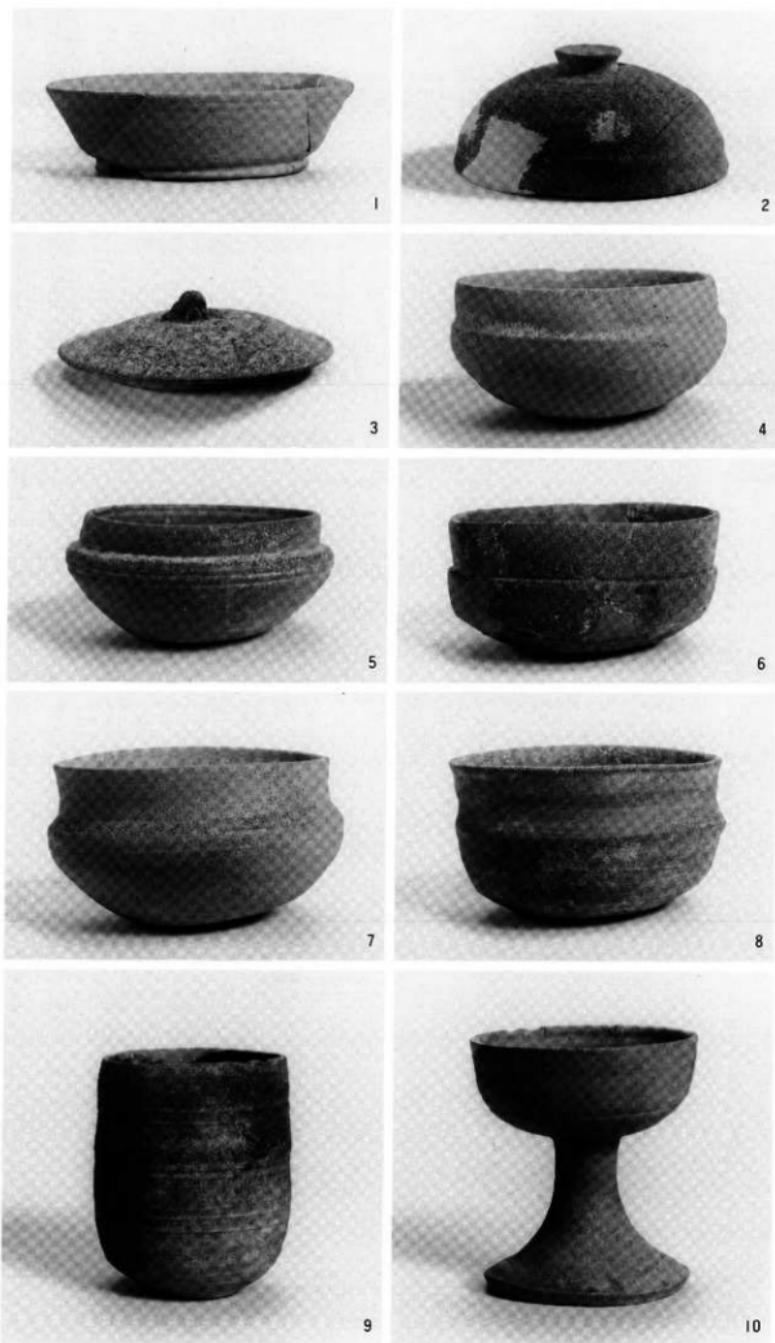
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B a 2号横穴	須恵器	坏身	2-9
2	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-13
3	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-14
4	B b 4号横穴	須恵器	坏身	5-17
5	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-18
6	B-b-4号横穴	須恵器	坏身	5-30
7	B-c-5号横穴	須恵器	坏身	9-9
8	B c 5号横穴	須恵器	坏身	9-10
9	B c 5号横穴	須恵器	坏身	9-11
10	B-c-5号横穴	須恵器	坏身	9-12
11	B c 6号横穴	須恵器	坏身	10-10
12	B c 6号横穴	須恵器	坏身	10-15



圖版32 出土土器 (12) 須惠器高台付坏身・蓋・短頸壇・短頸壺・盤・高坏

圖版32

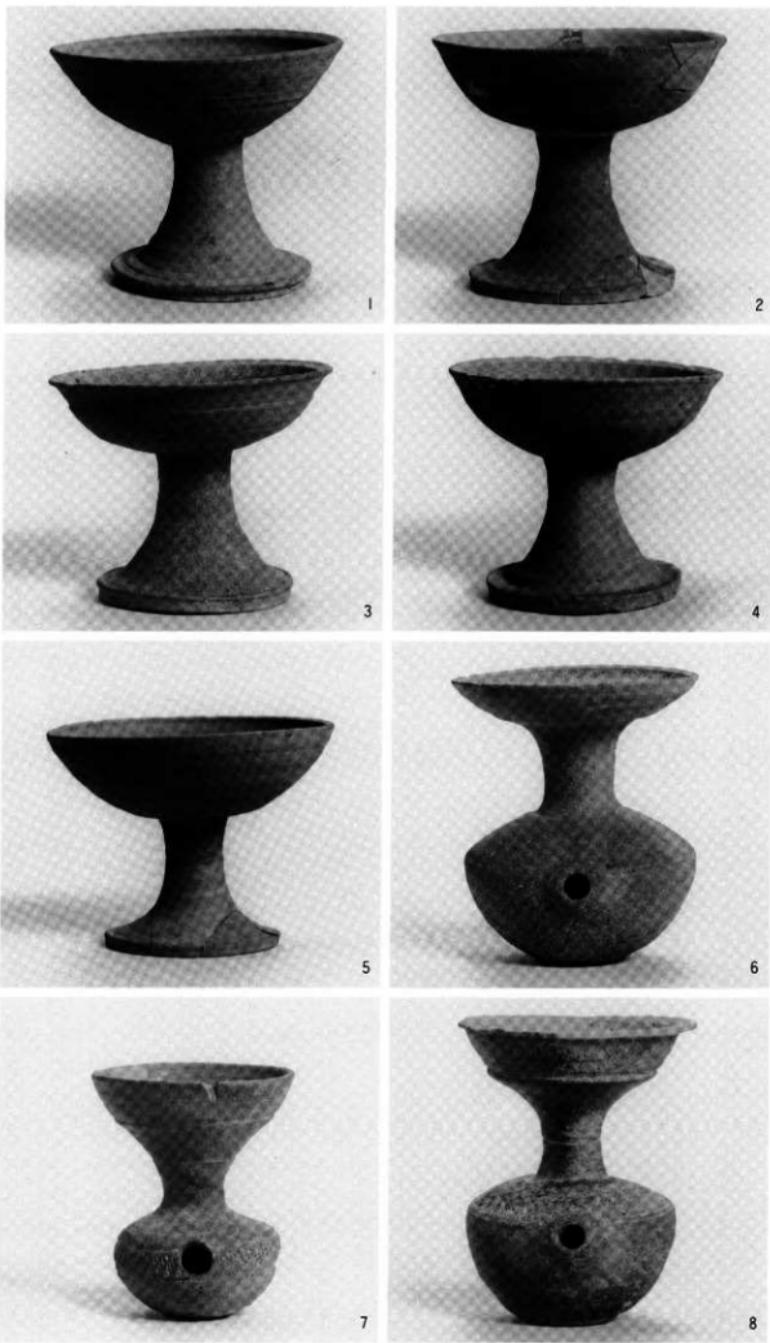
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-c-6号横穴	須恵器	坏身	10-16
2	B-c-4号横穴	須恵器	高坏蓋	8-12
3	B-b 2号横穴	須恵器	蓋	4-7
4	B-b-4号横穴	須恵器	短頸壇	5-9
5	B-b-1号横穴	須恵器	短頸壺	3-21
6	B-b 1号横穴	須恵器	短頸壇	3-22
7	B-b 2号横穴	須恵器	短頸壺	4-8
8	B-b-4号横穴	須恵器	短頸壇	5-8
9	B-b-6号横穴	須恵器	盤	6-12
10	B-c-4号横穴	須恵器	高坏	8-20



図版33 出土土器 (13) 須恵器高坏・翫

図版33

番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-b-1号横穴	須恵器	高坏	3-26
2	B-b-4号横穴	須恵器	高坏	5-19
3	B-b-6号横穴	須恵器	高坏	6-10
4	B-c-4号横穴	須恵器	高坏	8-23
5	B-c-4号横穴	須恵器	高坏	8-24
6	B-b-1号横穴	須恵器	翫	3-25
7	B-b-5号横穴	須恵器	翫	6-9
8	B-b-6号横穴	須恵器	翫	6-11



図版34 出土土器 (14) 須恵器平瓶

図版34

番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-a 1号横穴	須恵器	平瓶	2-2
2	B-b 1号横穴	須恵器	平瓶	3-23
3	B-b-1号横穴	須恵器	平瓶	3-24
4	B-b-3号横穴	須恵器	平瓶	4-23
5	B-b-5号横穴	須恵器	平瓶	6-6
6	B-b 5号横穴	須恵器	平瓶	6-7



1



2



3



4



5



6

図版35 出土土器 (15) 須恵器平瓶・提瓶

図版35

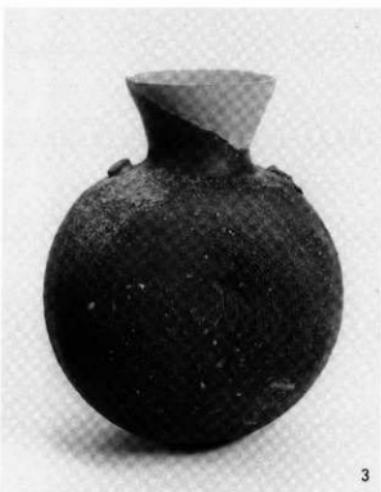
番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-b-5号横穴	須恵器	平瓶	6-8
2	B-c-4号横穴	須恵器	平瓶	8 26
3-4	A 3号横穴	須恵器	提瓶	1-11
5-6	B b 5号横穴	須恵器	提瓶	6-4



1



2



3



4



5



6

図版36 出土土器 (16) 須恵器短頸壺・長頸壺・横瓶

図版36

番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	A-3号横穴	須恵器	広口壺	1-10
2	B-c-2号横穴	須恵器	短頸壺	7-2
3	B-b-5号横穴	須恵器	長頸壺	6-5
4	B-c-5号横穴	須恵器	横瓶	9-15
5	B-c-3号横穴	須恵器	蓋	7-15
6	B-c-3号横穴	須恵器	長頸壺	7-16



1



2



3



4



5

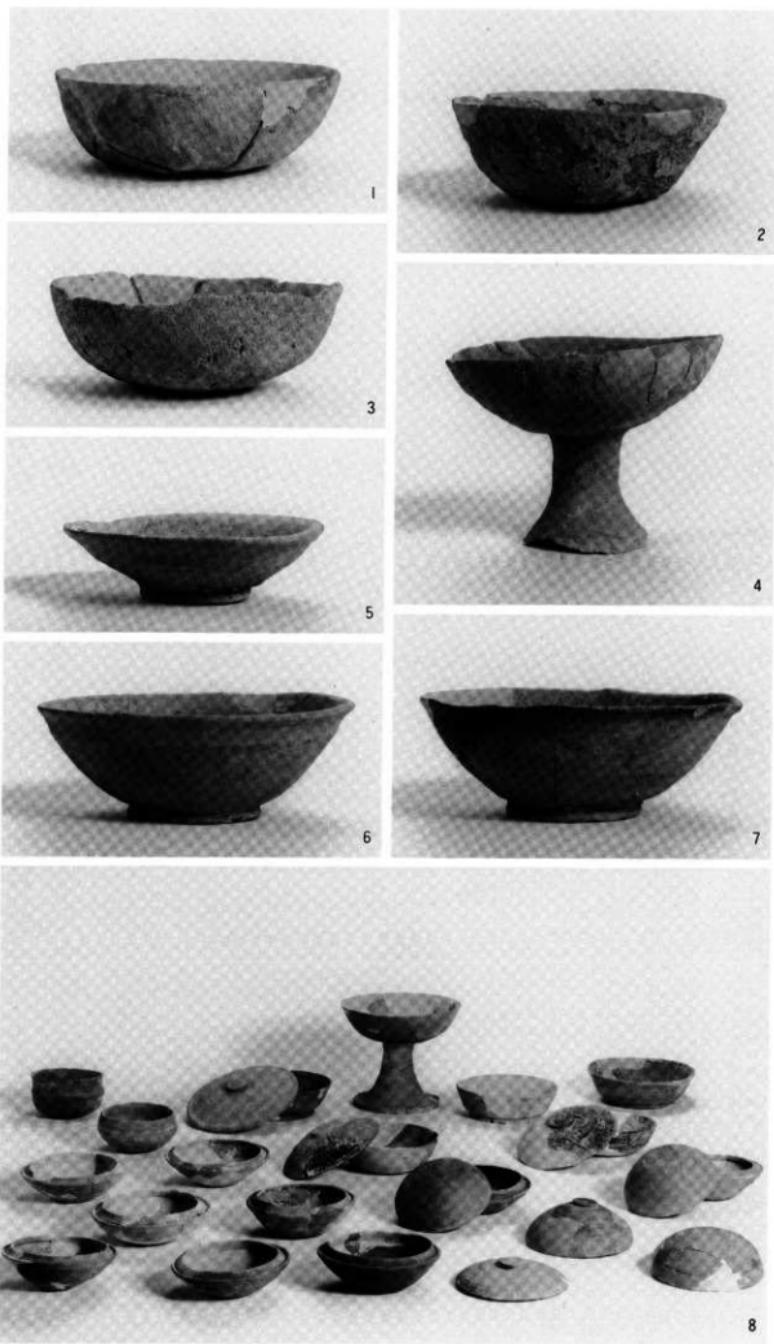


6

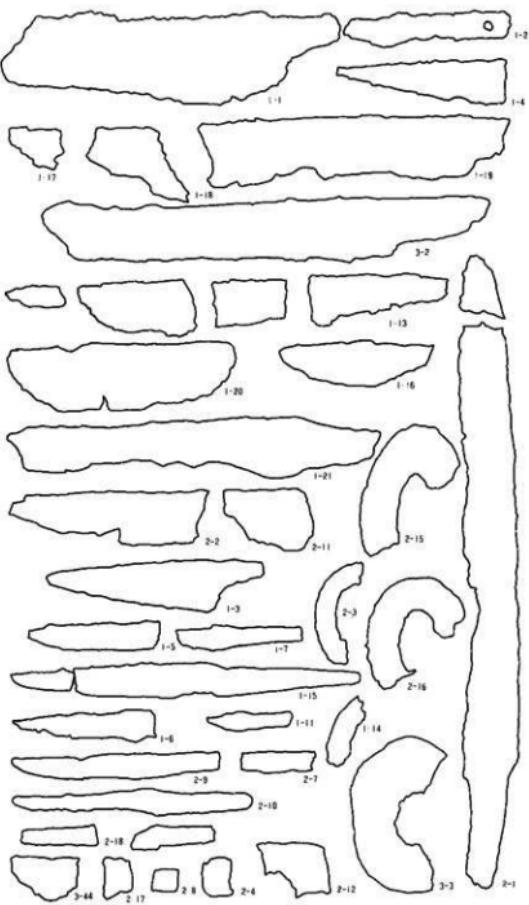
図版37 出土土器 (17) 土師器・山茶塊・B-b-4号横穴出土土器

図版37

番号	出土遺構	種別	器型	実測図
1	B-c 3号横穴	土師器	壺身	7-14
2	B-c 3号横穴	土師器	壺身	7-13
3	B-c 4号横穴	土師器	壺身	8-27
4	B-c 4号横穴	土師器	高壺	8-28
5	B-a 2号横穴	山茶塊	小塊	2-7
6	B-c 5号横穴	山茶塊	塊	9-16
7	B-c 5号横穴	山茶塊	輪花塊	9-17
8	B-b-4号横穴	集合写真		

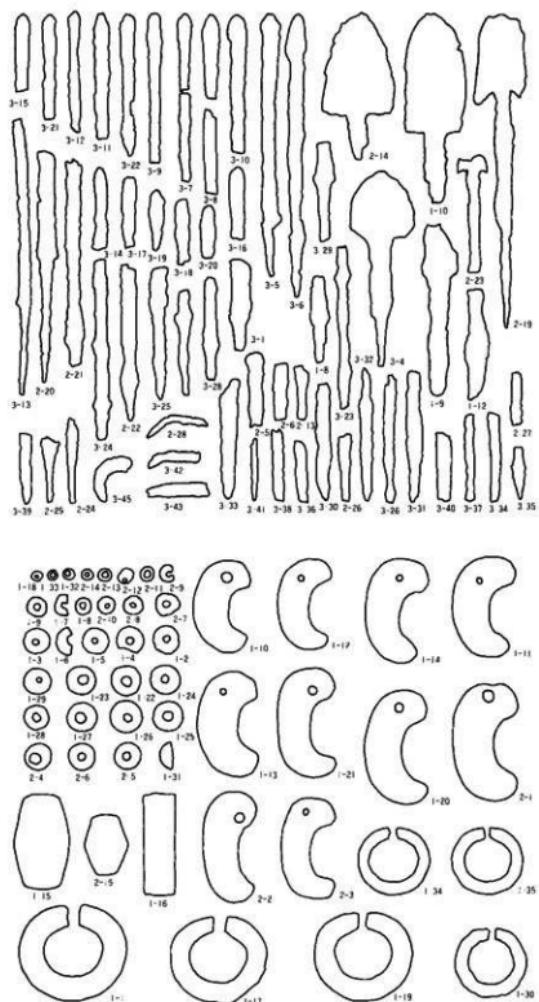


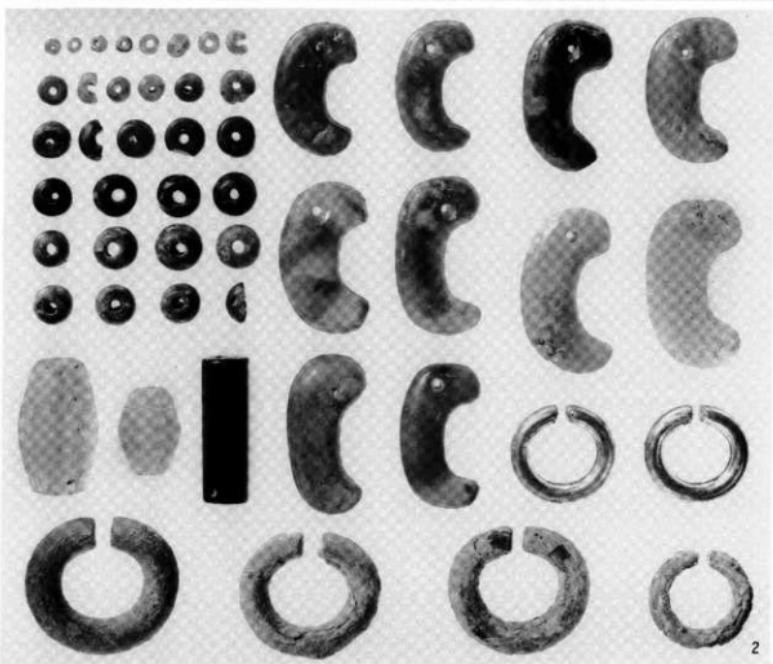
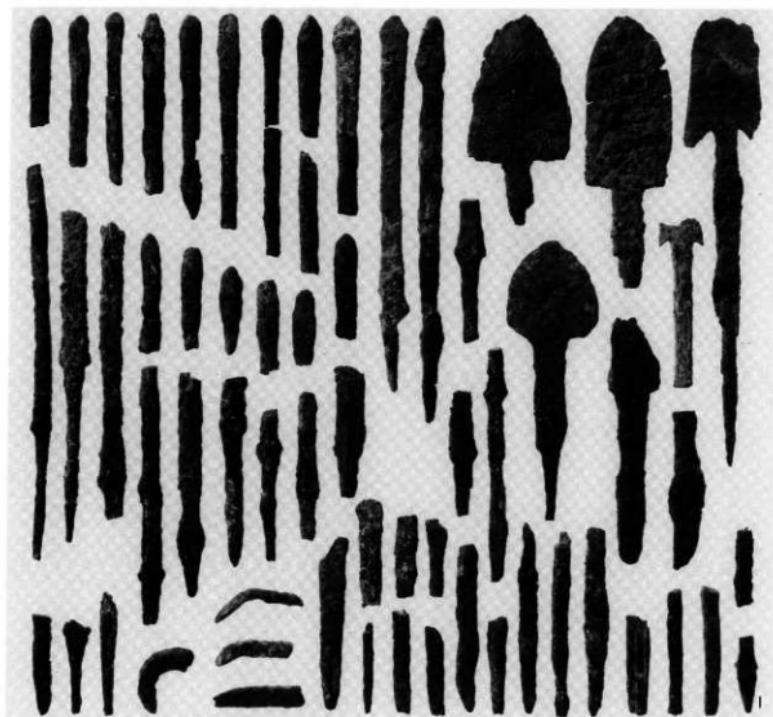
図版38 出土鉄製品 (I) 刀・刀子等





図版39 1. 出土鉄製品 (2) 鉄鎌
2. 出土装身具





平尾野添横穴群

平成2・3年度菊川内田住宅団地造成事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1992年3月31日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 三創
静岡市中村町166番地の1
TEL (054) 282-4031